

仮面ライダー01&lt;ゼロワン&gt; × 新サクラ大戦 -新たなるはじ  
まり-

ジュンチェ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

令和・フアーストジェネレーション後、滅亡迅雷 net 壊滅直後。ネタバレ注意、作者の突然の思いつき、作者は新サクラ大戦から入ったニワカ。サクラ大戦側のキャラクター一部強化（味方サイドとは言っていない）。ジオウ成分もそれなりに入ってる。ガバガバ設定。事實上、スーパード元号大戦。頭に平成キメてますねこいつはあ  
それでもよければ↓↓（最初からはじめる）

ゼロワンの世界で起きたタイムジャッカーの時間改変事件。父を超えたゼロワン、次代へ歴史のバトンを渡したジオウにより事件は終わったはずだった。

滅亡迅雷 net 壊滅後、再び現れたアナザーゼロワンと降魔と名乗る異形の勢力。『令和』と『太正』…その歴史が交わる時、『昭和』『平成』すら揺るがす危機が起こる…。

全てを解決する方法はただひとつ…『太正の1号』と呼ばれる仮面ライダーを見つけるしかない。

さあ、仮面ライダーたちよ、乙女と共に戦場を駆けよッ！

太正浪漫を駆け抜けろ、令和の風ッ!!

# 目次

番外編	RIDER TIME		KAMEN RIDER	
／	THE ALTERNATIVE		I	1
クリスマス番外編	2020			8
クラリスのバースデー	2021			14
体験版	序章／アナザーゼロワン			
令和と太正	壱			21
令和と太正	弐			30
令和と太正	参			41
交わる新時代	序			53
ライダー・イン・太正	／001			
交わる新時代	壱			65
交わる新時代	弐			72
交わる新時代	参			81
交わる新時代	肆			91
太正の輝き	壱			103
太正の輝き	弐			110
太正の輝き	参			119
太正の輝き	肆			130
帝都篇				
再起の鼓動	I			139
再起の鼓動	II			149
再起の鼓動	III			158
再起の鼓動	IV			169

再起の鼓動	V	179
夢見た幸せ／手離す夢	I	188
夢見た幸せ／手離す夢	II	200
夢見た幸せ／手離す夢	III	208
夢見た幸せ／手離す夢	IV	216
夢見た幸せ／手離す夢	V	226
夢見た幸せ／手離す夢	VI	237
夢見た幸せ／怪物の少女	I	247
夢見た幸せ／怪物の少女	II	259
夢見た幸せ／Nobody's Perfect.		269
鬼の涙	I	288
鬼の涙	II	295
鬼の涙	III	306
鬼の涙	IV	315
鬼の涙	V／もうひとりのALTERNATIVE	324
鬼の涙	VI／人は何故、鬼になるのか	332
鬼の涙	VI／星は翳り	340
鬼の涙	VI／果たされた約束	348
鬼の涙	VI／シグナルが変わる時…	361
華撃団大戦篇 — 誠を受け継ぐ者 —		
そして、星は輝くべき場所へ。	I	368
そして、星は輝くべき場所へ。	II	378
そして、星は輝くべき場所へ。	III	384
そして、星は輝くべき場所へ。	IV	393
そして、星は輝くべき場所へ。	V	401

そして、星は輝くべき場所へ。	VI	408
そして、星は輝くべき場所へ。	VI	417
そして、星は輝くべき場所へ。	VII	424
そして、星は輝くべき場所へ。	VIII	432
燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！	I	439
燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！	II	447
燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！	III	454
燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！	IV	463
燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！	V	471
燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！	VI	481
燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！	VII	490
語られる過去。夜鷹の翼。	I	499
語られる過去。夜鷹の翼。	II	508
語られる過去。夜鷹の翼。	III	516
天才物理学者からのおくりもの。		523
誠を受け継ぐ者	I	532
誠を受け継ぐ者	II	541
誠を受け継ぐ者	III	550
誠を受け継ぐ者	IV	559
誠を受け継ぐ者	V	566
誠を受け継ぐ者	VI	574
君の帰る場所。		582
幕間 私さくら		588
正しき力 刃の心 編		595
乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！	I	595

乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！

II



604

乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！

III



613

乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！！

IV



621

乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！！

V



631

乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！

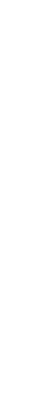
VI



639

乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！

VII



649

番外編 RIDER TIME | KAMEN  
RIDER / THE ALTERNATIVE

— I

それは星児が正気を取り戻してすぐ後のこと…

クラリスは神山をさがして、帝劇の中を歩きまわっていた。舞台の公演日も間近に迫り、いよいよ大詰めになってきた今日…の最終確認のため、隊長である彼にも添削・修正した脚本に目を通してもらはなくては…

そして、食堂にて求めていた後ろ姿を見つける。

「あ、いた…！ 神山隊…ちよ…？ あれは…」

呼びかけるクラリス…だが、その声は途中で詰まる。神山は誰かと話している様子…。相手は見覚えがある…自分が世話にもなった青年で仮面ライダー1号オルタⅡ本郷タケシだ。彼自身は何処か特定の華撃団に所属することなく、独自に活動している仮面ライダーだ。ここ最近、帝劇にも顔を見せるようになったので花組とも度々会話する機会があったものの、改めて何を話しているのだろうか？ …ちよつとした興味本位で聞き耳をたてることにした。

—— やっぱり、それは俺じゃないなあ。そんな記憶無いし。多分、仮面ライダー違いじゃないかな。

—— …そうですねか…わかりました。すみません、タケシさん。俺の勘違いで…

—— 良いよ、むしろ俺もなんかゴメン。

(…隊長が謝ってる？ 何の話…？)

神山は一体なにを？

すると、会話が終わって神山がタケシと別れてこちらへ歩いてくる。慌て、聞き耳をバレないように平静を装ったクラリスに彼は少し哀しげな顔をしながら話しかけてきた。

「やあ、クラリス。俺に用かな？」

「あ、はい。脚本のチェックを…」

脚本を手渡すと『確認しておくよ。』と神山はその場を後にしようとする…少し小さくなったと感じる背中と妙に込み上げる好奇心について訊いてしまった。

「あの、タケシさんとどんな話を…？」

「ん？ああ…そのことか。大したことじゃないよ。俺の個人的なことさ。」

……………まさか、これが厄介な事件のはじまりになるとも知らず

★ ★ ★ ★ ★

その日の夜、自室で台詞の確認を行うクラリス…自分で描いて演じる物語だが台詞まわし等は改めて確認しておかなくては。と言っても、あんまり集中出来てはいないのだが…

(隊長、元気なかったなあ。)



思い起こす昼間のやりとり…。神山は少し哀しげな声で語った。

——艦長時代に俺を助けた仮面ライダーがあの人じゃないかと思つて確かめてみたんだ。でも、知らないって言われちゃつてね…。あーあ、折角お礼を言うチャンスだと思つたのに。

かつて、彼は（恐らく）本郷猛に命を救われているという話はクラリスは知っている。ただ、彼：本郷タケシとは違つたらしい。同姓同名でありながらも、かつて昭和ライダーと行動を共にしたすみれもタケシ：並びにガヴェインことハヤトも全くの別人だという。

彼等が何者かは気になるところだが、今は神山に元気を出してもらいたい。舞台も近いからこそ、空元気でも出すだろうがそれはそれであって、幼馴染らしいですし…)

（こういう時はさくらさんと星児さんに聞いてみましょう。ふたりとも、幼馴染らしいですし…)

まずは相談。幼馴染のふたりなら或いは…。

さくらは前々から知っていたが、星児まで縁かあるとは思わなんだ。改心以降は神山のことを『誠兄さん』、さくらのことを『おねえちゃん』と呼んでいる…：さくら本人は死ぬほど嫌がっているが。

彼・彼女なら何か良いアイデアを出してくれるかも？

というわけで顔を出したサロンで、目的のさくらと星児：あと、初穂がいる。こっちも何か話しているようで？

「まつさか、星児がさくらや隊長と幼馴染だったなんてな。世間って存外狭いもんだなあ。てかお前、あたしより年下だったんだな。」  
「誠兄さんが兄貴分で続いてさくらおねえちゃん、で：最後に俺。まあ、幼馴染とはいっても天宮の家に厄介になつてのは短かつたから

なあ。でも、あの日々は楽しかった、なんだかんだで…」

「…(誠兄さんのことは覚えてるけど、星児さんのことはあんまり思い出せない…なんでだろ?)」

…ちよつとタイミングが悪かった？出直そうかと思つた矢先、さくらが気がついて話しかける。

「あれ、クラリス？ どうしたの？」

「さくらさん。あの実は…」

こう、かくかく云々で…。事情の説明を終えると、彼女たちも頭を悩ませる。

「誠兄さんを助けた仮面ライダー…タケシさんじゃなかったんだ。1号ライダーにやつとお礼が言えるつて喜んでたのに。」

「社長もバッタのライダーだし、存外あの界限でバッタは多いのかもな。しかし、神山を元気づけるものか…わかんねえな。特別、何か好きってわけじゃねえし。見かける時は何かしら仕事してるし…」

「公演の準備だなんだつて張り切つてたけど、無理してるみたいだから、事情は抜きにして取りあえず休んでもらいたいです。」

神山の落ち込んだ原因は、タケシがかつて彼を命の危機から救つた仮面ライダーではなかったということ。多分、悲しいというより残念にあたる感情な分、いずれ時間が解決してくれそうな気はするが。ここから、舞台公演と本腰を入れなくちゃならないのも事実。せめて、軽く励ましになるものでも…

「…俺に良い考えがある（提案）」

突然の星児。何処からともなく、リボンを取り出すとクラリスを  
あつという間にホイホイとラッピングして頭に大きく蝶々結び。手  
際はものの数秒と大したものだが、彼の意図は…

「星児さん、これは？」

「クラリスちゃん、実に簡単だよ。」

…君がプレゼントだ☆（良案）」

「…」

ゴツ（本の角が頭に振り下ろされた音）

★  
★  
★  
★  
★

…聞く相手を間違えました。

根は素直な人だと思っていたが、星児の評価を改めなくてはならな  
い。取りあえず、さくらと初穂に引き渡して締め上げるのもう心

配はいらないだろうし…本題に戻ろう。あのあと、アナスタシアに訊いてみたらデートに誘ってみたらと提案。ぶらぶらとするだけでも案外、気は紛れるものだと彼女…普段の精錬とした雰囲気からは想像出来ないが人は見かけによらないものだ。

(そういうえば、私に相談に乗ってくれた時も隊長はデートしてくれた。なら、今度は私が誘っても…)

「ぎやにやあああああ?!?!?!」

「!?!」

悲鳴!?! これは、或人の? 尋常ではない叫びは正面玄関から…走っていけば、イズに抱き止められた彼と…?

「た、タケシさん!?!」

鬼のような形相で…そして、何故か黒帯柔道着で迫るタケシだ。いや何事? 戸惑っていると、続けてウオズが慌て飛び込んでくる。

「皆、逃げるんだ! もう彼は…仮面ライダーじゃない!!」

仮面ライダーじゃない? 一体、何を言っているんだ…すると、タケシが口を開く。

「せ、…」

……せ？

「セガ、サタアアーン!! シロオオオオオオオオオ  
!!!!」

っづく?

## クリスマス番外編2020

「や……やぶい……（※寒い）」

世間はクリスマス：勿論、帝国歌劇団もそれに応じて公演を行い大反響で幕を閉じた。：まあ、そのあと後片付けが終わればそれなりに暇になるわけで、……暇人になってしまった天宮さくらはぶるぶると食堂で震えていた。よりにもよって、このタイミングで暖房が不調を起こして大帝国劇場全体が微妙に肌寒く、今のところ作業中の地下ドッグくらいしか暖かい場所は無。仕方ない、取り敢えず厚着するかなんて思ってた矢先にクララがやってきて心配そうにこちらの様子を窺う。

「大丈夫、さくら？」

「大丈夫だよ、クララは平気なの？」

「私はこれくらいが丁度良い。」

：流石、ロシア人。暑さには滅法弱いが寒さへの耐性は凄まじい。日本の寒さなど屁でもないということか。

「元氣ないの、良くない…… ウオツカ飲む？」

「大丈夫、ウオツカ飲まない。……いや、待って。それ何処から出したの？」

「星児からもらった。（クリスマスプレゼント）」

突然、ウオツカを取り出したクララ： 星児から『祖国の味（アルコール）だろ？』と提供されたらしい。

——後でシメるか。

「じゃあ、真宮寺パワー（限定プロマイド）で元気になって。」  
「興味あるね。（Party Party）……じゃなくて、それ何処でもらったの？」

「星児からもらった。（お年玉）」

——……後でシメるか。

いや、なんでさ（星児）。取り敢えず、未成年飲酒は日本だとアウトなのでクラーラからウオツカを没収。あとで、神山が令士あたりに処分してもらおう。そして、仮にもヒロインがしてはいけない顔をしていた気がするのはいけいだ……

「はあ……。それにしても、神山隊長は何処に……社長さんたちもいないし……」

「私、知ってるよいる場所。こっち。」

「へ？　ちよ、クラーラ!?!」

クラーラに引つ張られるまま昇降機へ。出撃と入浴以外は特に用もないこれだが、クラーラはさくらの知らないスイッチの入力をする。とガコンガコン！と不可思議な駆動をした後、今のまで止まろうとすら思わなかった階へと止まる。そして、扉が開くと……

「これって……BAR……？」

小洒落た薄暗さの雰囲気の一室の奥にカウンターとその後ろにずらりと並ぶ酒のボトルやグラス……うん、BARだ。空気だけならネオンの装飾やらテーブルに至るまで普通に店舗として遜色ないし、客も見覚えがある顔ぶれで或人に花組からロンドン華撃団に加えてモ

スクワ華撃団までいる。極めつけにカウンターに立っているのは  
……

「縦・横・無・尽シエイクツ!! シヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤ  
カシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤ  
カシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤ  
カシヤカシヤカ……!!!」

「せ、誠兄さん!? なにしてるんですかこんなところで!」

「…ん? さくら?」



「え、さくらちゃん知らなかったの?」

「はい。…誰も教えてくれませんでした。」

或人もこのBARの存在を知らないというさくらにとても驚いて  
いた。実際、このBARは基本的に一般人は立ち入らない上に、基本  
的に関係者の言伝で知られるので本当に縁が無かったのか、或いは意  
図的に避けられていたか… 正直、凹む。

そんな落ち込むさくらにグラスを苦笑しながらスツと差し出す神



山。

「ああ…まあ、あとすみれさんとかは知らないんじゃないかな。酒保のスペースを一部を改装して飲食スペースにするって話で通してるだけだし。」

「まさか、ここまで本格的だなんて思わないでしょうね。このお店は神山隊長が運営してるんですか?」

「…えと、建前はな。」

建前? 何か端切れが悪い… 神山がバーテンダーをしているのに運営は別? いや、待って…そもそも華撃団の隊長ってバーテンダーと兼任なんて出来る?

すると、疑問の答えから自らノコノコやってくる。

「兄さん、戻ったぜ… げ。」

「…」

現れたもうひとりこのバーテンダー…星児だった。さくらの顔を見るなり逃げ出そうとするがあつという間に捕まってしまう。これには或人や神山も『あちゃあ…』と顔を手で覆った。

『げ』ってなんですか? 何かやましいことでも…」

「あ、いやあ…その…」

「星児、観念しろよ。いずれバレることはわかってたろ?」

それから、首根っこつかまれて渋々と喋りだす星児…

「この店はな…俺が始めたんだよ。何もしないで帝劇にダラダラするのも難だし、酒保を改装するって名目でこまちさんと手を組んでおふくろとカオルさんをうまく抱きこんでな。ロンドンで師匠に仕込まれたバーテンダー紛いの技術とかで、帝劇の皆の気晴らしくらいにな

ればと思つてやつてみたら…意外と人気が出て言伝でそこそこ繁盛。売上げも悪くないし、小遣い稼ぎにや丁度良いつてわけ。こまちさんもニツコリでカオルさんも文句言えないわけ。」

「ふうん。いや、それならさっきの『げ。』は何？ 別にやましいことないし…」

星児の師匠、騎士ガヴェインことハヤト…彼の素性や仮面ライダーとしての物語は同じロンドン華撃団はおろか、星児すら知らない。キレたら手が早く、力技や独自の価値観等々と付き合える人間は選ばれたタイプの人間だが時に意外な一面を見せることもある。バーテンダー紛いという技術も『昔、女を靡かせるつもりで触ったことがあるくらい』とのこと。

星児がロンドンにいた間、学んだ技術のひとつでこれを活かしているならこのBARが彼の帝劇の居場所となることでさくらとしても喜ばしい。むしろ、何故自分に教えてくれなかったのか…

…いや、待てよ？

「星児さん、…自分の作ったカクテルとか飲んでます？」

「(ギクツ)」

「…もしかして、あなたが自分で作ったお酒出してること…すみれさん知らない？」

「(ギクツ)」

「………そして、私が知ったらチクると思つて避けてた？」

「(目逸し)」

あ、コイツ凶星か。

「ナ、ナメツタダケダヨー…」

「やかましい、汝に罪ありき。お白洲裁きの時間ですね。」

「待って!? 待って!!! バレたらおふくろに殺される!? それに、今は兄さんとか令士に味見してもらってるんだよ!! だから許してお姉ちゃん。」

「駄目だよ、お姉ちゃん許さないヨ。」

……一時間後、帝劇のクリスマスツリーに逆さ十字で吊られた星児にクリスマスプレゼントをたかりにきたランスロットが悲鳴をあげたという。

「あーあ、言わんこつちやない。」

もつとはやく申告してりや、こんなことにはなかつたろうにと呆れる神山。すると、何かを覚った顔をして星児は眩きはじめる。

「ワタシハ、クリスマスノ妖精。サンタへ贈り物ノ注文ヲ受ケタワリマス。」

「お? なんか、言いだしたぞ? 頭に血昇って気でも狂ったか?」

「1. 神龍軒食べ放題、2. 一週間の有休、3. クラリス。どする?」

「クラリス (即答)」

「G o t o h e l l . 地獄に堕ちてください。」

……このあと、神山も吊るされた。

## クラリスのバースデー2021

…華撃団大戦も終わって、気がつけばもう2月。

帝国歌劇団の再出発からの躍進は止まらず、特にクラリスの脚本は絶好調。前回公演した『狩人と人形姫』はホラーチックながらも、獣を駆る狩人と心を持ってしまった美しい人形の姫との儂い恋愛を描きながら物語の壮大な謎に迫っていくという話で、狩人役をアナスタシアが、人形役をクラリス本人が務めた。

アナスタシアのアクションシーンやクラリスの儂い演技…そして、ステージに創られる不気味ながらも独特の世界観が熱狂を呼び、公演は大成功だった。

——ここまではよかった。

公演中、ファンから持ち込まれた見慣れない本にサインを求められたクラリス…タイトルは『大考察！狩人と人形姫！』で、一応は帝国歌劇団の名前は入っているが花組も誰も身に覚えが無い。で、帯を見ると

『花組のアドバイザーにして（※大嘘）、トップスターの神崎すみれ女史の息子、神崎星児氏がズバリ迫るクラリッサ・スノーフレイクの世界。』……うん、犯人特定。

「どの口が言ってるんですか！（だ！）」

ドゴツ（怒りのWラリアット）

「ぐえっ」

即刻、確保からさくらと初穂により折檻。話を聞くに、脚本制作の資料提供などをしていた彼はクラリスの世界観の構想など等、聞きか

じる機会があつたらしい。そこに、自分の独自の解釈や考察を入れればソコソコ面白い考察本紛いみたいなのが出来るのではとコツソリと花組に内緒で原稿を出版社に持ちかけたらしく、時の花組が話題となれば出版社も2つ返事。役者本人らが知らないところで公式展開という建前の便乗のソレは中々、売上が良かったらしい。

：尚、神山が目を通したところ、その目は小宇宙に吞まれていた（S AN値減少）

結局、売上自体は帝国歌劇団のほうに還元されるとのことでお咎め無しになったのだ。

「そして、早2月1日…そして、今日はクラリスちゃんの誕生日。」

「は、はあ…そうなんです。何か御用ですか星児さん？」

自室にて執筆作業中に突如として雪崩れてきた星児。正直、この流れは大抵は面倒事だと薄々勘付いていたので微妙に距離を置く…まあ、向こうからグイグイくるから無意味なのだが。

「はい、誕生日プレゼント。…神山のプロマイド『美しい尻（非売品）』。」

「こ、これは…！ ありがとうございます…い、色っばいですね（赤面）」

誕生日プレゼントとあげたのは風呂場で全裸で気絶し、濡れたままザンキさんしている神山…無論、星児が仕掛けて撮影したもの。普通、神山のプロマイドは花組隊長でありながら売店でも他メンバーのものが売り切れても、彼のものだけ山盛り残っていたりしてモデル本人が『何の嫌がらせですか！』『昔の海軍仲間から、からかわれるんで

すよ!』とか苦情申立しているが、何故か消えない。理由は簡単、花組メンバー女子らでプレミア価格で取引されているからだ。地産地消、良いのかそれ。

星児もそこらは把握しており、他にも初穂やアナスタシアにも非売品神山プロマイドを流している……さくらやすみれにバレたら間違いないで殺されるが。

「一生の宝ものだねええ?」

「…は、ハイ 携ります (照)」

「し、執筆作業…だよな? (戸惑い)」

この娘、むつつりなのでは…  
そんな心配をしていた時だった。

「クラリスいるか… って、星児もいるのか。」

「…あ!?!」

最悪のタイミングでやってきた神山。思わず素っ頓狂な悲鳴をあげてしまった拍子にプロマイドを落としてしまい、モデルの元へヒラヒラと…。

回収しようと手を伸ばすももう遅い。拾い上げたそれに、いくら温厚でお人好しな神山でも尻丸出しの無断写真なんて見たら流石に、目を吊り上げる。

「星児!クラリスに悪戯しようとしてたのか? 全く、何かこの間、一緒に風呂入った時におかしいと思ったら!」

「あ、いや、ちが…っ」

神山は星児の悪戯だと判断。写真をビリビリに破り捨て、『ああ…!』と叫ぶクラリスに気が付かずに悪戯坊主の首根っこを掴んで連行していく。しかし、これで終わる星児じゃない。

「その写真はクラリスちゃんが……！」

「ちょよ!?」

地獄の道連れにクラリスの片足をなんとか掴む。しかし、

「クラリスがそんなことするわけないだろ！」

「……そ、そうですね（目逸し）」

「見捨てられた!?」

掴んだ片足に容易く蹴つとばされる。このままだと、さくらとすみれから折檻フルコース……それだけは避けたい。神山の腕から抵抗しつつ、状況の打開を目論む……ん？本棚の上に缶の箱？ 几帳面なクラリスにしては珍しい。まるで、慌てて隠したようじゃあないか？

（イチバチ！）

—ガンッ

「あつ!?」

本棚を蹴って、その缶の箱を落としてやればあつという間に落ちた衝撃で中身がぶちまけられる。非売品のプロマイドやらボツ案原稿（黒歴史ノート）で軽い池みたいな有様……しかし、星児がある違和感気がついた。

「あれ、俺が渡した覚えがないプロマイドが……」

非売品の神山プロマイド、確かに渡したのは1枚や2枚じゃないがそれにしたって数が多い。しかも、大半が物陰からなどアングルのに盗撮地味ているような…

……これには、神山も凍りつく

「クラ…リス…？」

「……………ふふふふ。」

あ、急に暗くなってきた(唐突)

クラリス女史も追い詰められたせいか、おかしな笑いをしだしたよ？

「神山さん、パンドラの箱って知ってます？ 開けちゃいけない箱…

アナタと星児さんはその中身を見てしまった。フフフフ…」

「ヒッ (怖気)」

あ、やべ。魔導書を構えてゆらゆらと近づいてくる…

「G o t o h e l l . 仲良く地獄に堕ちて下さい。」

——ゴッ!!



★  
★  
★  
★  
★

—— ちよ…！ —— 神山隊長！

「——ハッ!？」

呼びかけに目を覚ます神山。…ここは、食堂か？ 覗き込むさくらの顔と辺りの光景に戸惑う…確か、自分は■■■■の部屋に…ん？

(俺は…誰の部屋に？ いや、そもそも俺は何を?)

「もう、いつまで寝ぼけてるんですか神山隊長。もうパーティーが始まりますよ。」

パーティー？ あ、そうだ、今日はクラリスの誕生日じゃないか。誕生日プレゼントを渡さなくて…は…？

(あれ？ 無い?)

渡そうと思っていたプレゼントが無い。あれ？あれあれ？

「神山隊長、素敵なプレゼントありがとうございます。」  
「え?。」

ん？ もう渡したっけ？ おつかしいなあ…

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

クラリスの部屋…

神山とクラリスが密着したツーショット写真が彼女のコレクションに連なっていた。こちらは神山が気絶しているうちに撮影したもので、缶ケースにしつかりと保管されることに。

——そして

「ンッーー!!!? (誰か助けてーーツ!?)」

縄で縛りあげられた星児が監禁されている。

その傍らの魔導書からは謎のヌルヌルした触手が伸びはじめており…

「(;O M O) ? ウワアアアアアア…!!」

虚しい断末魔が暗闇の中に吞まれていった。

体験版 序章／アナザーゼロワン  
令和と太正 壺

これまでの、仮面ライダーゼロワン

タイムジャッカーにより引き起こされた時間改変事件。父親・飛電其雄Ⅱ仮面ライダー一型より想いを受け取り、令和の1号として覚悟した或人。そして、ジオウと協力して元凶であるアナザー1号を撃破、元の時間を取り戻す。……だが

「ううん…… ううん……」

痛い…… 砂利の地面に寝そべったみたいなのゴツゴツとちくちくが交じった感触、寝覚めとしてはおぞましく不快。飛電或人は寝ぼけた意識が世界にピントをあわせていくのと同時に気がついた。本当に自分は砂利の上で寝ていたこと……

「うええ!? へん何処?!?!」

自分が見知らぬ荒野に放り出されていたことに。

いやいや、待て待て。確か昨日は滅亡迅雷netの壊滅の会見を開いて、時間改変事件からオーバーワークそのものだったために早めに業務を切り上げたはず。で、確か最後は社長室のラボにいて……そこから、記憶が途絶えている……。

何があったのだろうか。赤く淀んだ空に息詰まるような砂塵……こんな場所は一体……

「やっと来たか。令和の1号……仮面ライダーゼロワン。」

「!」

不意にかけられた背後からの声。深い響く男のそれに振り向くと金色と黒の仮面ライダーが佇んでいる。右肩から下がる腕時計のような帯や他の豪華絢爛な装飾……潰されるような威圧感こそあれど、見覚えがあった。眼の『ライダー』の文字は……確か……

「……ジオウ?」

時間改変の時に共に戦った仮面ライダージオウ。彼ととそっくりである……。

しかし、その存在の名はただのジオウではない。

「我が名は平成の行き着く先、最高最善の魔王・オーマジオウ。お前があったのは若き日の私のある可能性……いや最早、私のほうが可能性か……」

……? どういうこと? ジオウではないのか、どうなのかハッキリ

しない。どうも初対面みたいな雰囲気だ。

まあ、戸惑うのは無理もない。或人が出会ったジオウではない平成ライダーの力を全て継承した末に、世界を滅ぼしたジオウの行き着く姿こそ彼、『オーマジオウ』。それこそジオウの物語に携わった当事者しか知り得ぬこと。

……そんな存在が何用だろうか？

「さて本題だ。ゼロワン、これからお前の世界は再び危機を迎える。令和だけではない、平成も…そして、昭和すらも揺るがす災厄が起ころだろう。この危機を打ち破るには『太正の1号』を見つけ出し、『悪の1号』を討て。これはお前の為すべきこと、お前の不始末のツケだ。」

「え？…ちょっと待って!?! 大正の1号って何iiiiiiiiii!?!?!」

唐突な世界の危機宣告。質問の機会は与えられず、問答無用で意識は刈り取られ世界はぐにやぐにやと掻き消えていく……

『社長! 或人社長!!』

「ふああい!?!」

飛び起きたら、荒野ではなく見慣れた社長室。椅子に腰掛けたまま眠っていたのか？

…そして、自分を心配そうに覗きこむ社長秘書イズ。

「ああ、イズ。あれ、オーマジオウは…？」

『…？ おっしやつてる意味がわかりません。』

「気にしないで。ありや夢か…」

『社長室で熟睡なされていたので、あえて起こさずにいたのですが…やはり、健康に問題が起きている可能性もあったようですね。一度、メデイカルチェックを…』

メデイカルチェックの打診をされたが、残念ながらそんな暇はない。今日も飛電インテリジェンス、ヒューマギアとそれと共に生きる人間たちのために頑張らなくてはならないのだから。滅亡迅雷net無き今であっても、社長は忙しい。

椅子から立ち上がり、うぐんと背伸びをすると街を一望できる窓を眺める。

「…これからお前の世界は、再び危機を迎える。…これはお前の為すべきこと、お前の不始末のツケだ。」

「…世界の危機。もう起こるわけがないよな…」

展望する世界は平和そのもの。しかし、夢のオーマジオウの言葉が引つ掛かるのは何故だろうか…。もう、人類の滅亡もヒューマギアの悪用する者もない筈。そう不安を呑み込もうとするが、胸騒ぎがそれを許さない…確実に何かが起こると警告しているのだ。

『…………或人社長?』

「ん? ああ、大丈夫。それじゃ、時間もまだ余裕あるし…家に一度帰ってシャワーでも……………」

ドオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!

そして、胸騒ぎは現実になる。

★  
★  
★  
★  
★

飛電インテリジェンスの前に突然、降ってきた『何か』。一言で表すなら桜色の奇妙な頭でつかちなロボット。ブレイキングマンモスよりも小さく、手足の長さや何やらに大して頭のウエイトが大半を占める頭。2本のレールを単眼が行き来しているのが印象的な顔である。少し離れたところにはロボットのものとおぼしき刀まで刺さっていた…。

飛び出してきた或人は『何これえええええ!?!』と腰を抜かし、イズは冷静にロボットを分析する。

『或人社長、このロボットは既存の科学技術どれにも当てはまりません。そして、中から人間とおぼしき生命反応を確認できます。』

「中に人が…?」

この謎ロボット、中に人がいるらしい。すると、頭部分が上部に展開して操縦席とおぼしき部位が露出。そこには、或人と同世代か少し下くらいの黒髪の少女の姿があった…。片側のリボンに大正の空気を感ずるハイカラ和服と随分と変わった出で立ちをしており、機体の中にたまっていた煙にゲホツゲホツと咳き込んでいた。

「……ああ、もう。 ……(こ)は?」

少女は痛む頭を抑えながら、辺りを見渡す。そして、飛電インテリジェンスを見るや『うわあ…大きい建物…』と感嘆。確かに飛電インテリジェンスは都市の高層ビルのひとつだが、わざわざその大きさを口にしてまで感動するのは珍しい。

「ねえ、ちよつとその人お!」

「え…私?」

取り敢えず、コンタクトをとる或人。とにかく、日本人みたいなので話は通じる様子…。とにかく、素性を確かめなくては



「うちの会社の前でなにしてるの!? そのロボットはなに!？」

「え…ああ、すみません! あの、大帝国劇場はどっちですか?」

「は…?」

「へ?」

劇場? 何でそんなところに? イズもデータベースから検索をかけるが『大帝国劇場:該当する場所はありません。』と一蹴。対し、少女も酷く驚いた様子であった。

「……、帝都じゃないんですか!？」

『ここは、飛電インテリジエンス前です。そして、貴女は無断で我が社の私有地に侵入しただけでなく、正体不明の機械を持ち込んでいます。然るべき、法による措置を視野に入れるべきかと。』

「正体不明って…『靈子甲冑』ですよ! いや、今はまあ戦闘機のほうが主流ですけど……。それに私は帝国華撃団の『天宮さくら』です!! ちゃんと、すみれ支配人に問い合わせればわかりますから!」

『…?』

何だろう、このさくらちゃんなる娘は大真面目そのものな勢いだが…ほぼ言っていることが意味不明である。基本的に大抵のことは動じないイズも首を傾げるばかりの始末で、或人も頭を抱える。帝国華撃団やら、なんちゃら甲冑やら…多分、このままだとエイムズが来るか、警察が来るか。

…不破さんなら、また飛電が何かやったのかア!!と突撃してくるだろうし、唯阿さんならネチネチ文句を言われるだろう。朝から勘弁してほしい……

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~ (非情なエイムズからの着メロ)

「はあ、早速か…。」

仕事早すぎイ（白眼）。着信を伝える端末を取り出すと通話を起動…どうやら、相手は唯阿からのようだ。成る程、後者か…腹をくくる或人。

「はい、もしもし。社長の携帯です。」

【社長さん、すまないが…】

「はいはい、わかってますよ。こつちだつて事情は…」

【話しこんでいる暇はない!! すぐに、この座標にきてくれ! まず  
いことに… くつ!】

あれ? …何か様子がおかしい。会話中になにか雑音も入っていたし、とても焦っていたような…

『或人社長!!』

おかしいのは通話先だけではない。イズの声に振り向けば、ロボットの頭部が閉まり単眼を輝かせて起動してゐるではないか!?

「え、ちよつと待つて!? 何してんの!？」

「降魔の反応があります! …ここが何処であろうと、降魔を討つのは私達、華撃団の務め!!」

お願い落ち着いて! …という或人の叫び虚しく、ロボットはアスファルトを砕いて跳躍していき街角の彼方へ消えた。

ああもう滅茶苦茶だよ。もう勘弁してほしいのは山々だが、現実は無慈悲…せめてもの救いは優秀な社長秘書ヒューマギアがいることぐらいか。

『或人社長、天宮さくらと名乗る彼女が駆る機体はエイムズより送られてきた座標に向かって移動しています。エイムズとの合流が同時に彼女の確保に繋がるかもしれません。』

「よりにもよってか…。それにしても、唯阿さんたち何があったんだろう。」

エイムズの送ってきた座標の位置に向かうさくらなる謎の少女。果たして偶然か……

思考にふけるより先に、或人はバイクが停めてある駐車場に向かうとしていた。

## 令和と太正 弐

デイベレイクタウン……かつて、2007年のヒューマギアの大反乱が起きたこの場所はサイバーテロリスト・滅亡迅雷netのアジトでもあった。最終決戦を終えた今でも、起動していない旧型ヒューマギアや他、ヒューマギアの計画に参加した企業のテクノロジ…そして、滅亡迅雷netの母体である人工知能アークやゼツメライズキーといった負の遺産もまだ眠る。

無論、これらをエイムズが放っておくわけがない。証拠品として、その大半を押収してトラックで輸送していた。 ……のだが

『『Giiiiiiiiiii!!!』』

「何なんだよコイツらあ!?!」

今、デイベレイクタウンの外れにてトラックは襲撃を受けていた。しかし、それはマギアではないピンポン玉みたいなボディに手足をとってつけたような不気味なロボットの軍団である。バルカンはショットライザーで応戦し、バルキリーもギーガーを呼び出して一般隊員たちと迎撃するが如何せん敵の数が多く苦戦を強いられていた。その様子をビルの上から眺める黒フードの青年がひとり。ゴーグルに裂けたような口元の笑みをニヤニヤ浮かべ、戦いの行く末を観ていた。

「おうおうやるじゃねえか人間! 『魔操機兵』を相手にそこまでなるなんてよお???」

「貴様、滅亡迅雷の生き残りか!!」

「めつばー……? なんだそりゃ。俺様は上級降魔『隴』だ。ま、どうでも良いから、さっさとその中身を渡してくれねえかなあ? ええ??」

滅亡迅雷ではない？ なら、ゼツメライズキーや滅亡迅雷の遺産を狙う理由は何なのか？

その理由はバルカンにとっては、とっ捕まえてブタ箱にぶちこんでからでも良い。

「何だろうと、テメエをぶっ潰す!! お前も滅亡迅雷と同じ人類の敵だ!!」

【アサルトウルフ!!】

アサルトウルフプログライズキーを取り出すと、呼吸をするようにロツクを片手で挟み開けショットライザーに装填。そのまま、銃口を臙へ向けトリガーを引く!

【Ready Go!! アサルトウルフ!!】

「うおっ!?!」

…放たれた狼のライダーモデルは臙に寸前でかわされながらも、跳躍して主の元へ。そして、バルカンは拳を掲げてライダーモデルを粉碎して装甲として纏い、アサルトウルフへとフォームチェンジ。立ちはだかる魔操機兵をジャンプの踏み台にして、異形のカラクリを操る臙の前へ立つ。

「オラア!!」

「へッ!」

ショットライザーでの射撃からの突進。しかし、ヒラリヒラリと軽くステップをふみながらかわす臙…バルカンの弾丸は全て獲物をすり抜け、怒れる狼の仮面のすぐ横をせせら笑いが大手を振る。まるで、お前の動きなど手にとるようと耳許で囁かれているように…

「不破!! …うっ!？」

バルキリーも援護しようとするが、魔操機兵に倒されたギーガーが煙をあげて彼女に向かって横たわる。間一髪かわしたが、既にギーガーの残骸を踏み締める自分へと狙いを変えた魔操機兵が迫っていた。

他の隊員たちも、銃火器で応戦しているがこちらはライダーシステムより対応が利かず、蹴散らされたりなど酷い有り様。怪我人もあちこちで動かずぐったりしている者までいる。

「ゼロワンはまだか……!!」

最早、頼みの綱はゼロワンのみ。あの高い戦闘能力なら、正体不明の敵相手にこの状況を打破できるかもしれないという自らの不甲斐なさを実感しながらも唯一の望みだった。

今はこれ以上、犠牲を出さないことが……

――斬ッ!!!

「!」

その時、魔の装甲を背後から一閃。そこから爆発四散する魔操機兵…!!

ゼロワンが来たのか! …期待を胸に顔を上げたバルキリーが爆煙の先に見たのは……

「帝国華撃団・花組 天宮さくら、見参!! 三式光武推して参るツ!!」

…は？

突然、現れたのはギーガーとも違うピンク色のロボット。ゼロワンを期待していた視線を飛び越え、握る刀を煌めかせ鮮やかな一撃。二撃。左右を踊るように空を滑る刃を魔操機兵を瞬く間に捌いていき、あつという間に爆発と鉄屑の山々が出来上がる。

「凄まじいな、まさか飛電の新兵器か？」

「クソツ 華撃団の奴め、ついてきてたのか!! 烈喰くレクス>の奴め、何してやがった!？」

驚嘆するバルキリーと対照的に、齒軋りするまで苛立ちを剥き出しにする隴。そこへ、『余所見してんじゃねえ!!』とバルカンの拳が飛んで来るがこれを片手で受け止めると、文字通りビル下へ蹴落とす。

陽動だけならと、遊んでいたが自分たちに攻撃が通る存在が来たのなら話は別。頭上に手を掲げ魔方阵を出現させると新たに魔操機兵を召喚させる。

「…いけ!!」

『『Giiiiiiiiii』』』

数は多い……しかし、三式光武は…天宮さくらは焦らない。刀を構え、桜色の靈力を刀身に走らせる…。放つは必殺の咲き誇る一輪

「蒼天に咲く花よ……敵を討て!!」

……「桜・吹雪」iiiiiiiiii!!!」

振り抜けば、正に迸る桜色の嵐。美しくも悪を許さぬ正義の風が瞬きすら与えずに魔操機兵を問答無用と一瞬で葬り去る。その圧倒的な戦力にバルカンもバルキリーも驚かすにはいられなかった。

「すげえ。何なんだありや。」

「…未知の技術にエネルギー。何者なんだ……」

「ちっ!!」

この展開に舌打ちする臃。今、この世界では自分の全力を出すのは時間がかかる…。いくら相手は『旧式』とはいえ骨が折れるだろう。

さあ、追い詰めた。三式光武は切っ先を臃に向ける。

「さあ、逃がしませんよ！ここは何処ですか!? 元の世界に戻る方法は……」



『ハアアアアッ  
!!!!!!』

「きゃああああああああああああああああああ  
!!!!!!」

突然、横から金色の必殺カッツトイン。稲妻の塊が、三式光武を強襲し先程の無双が嘘のように呆気なく弾きとばす。それは、ライダーキックだった。

ただ、放ったのは仮面ライダーではなく、それを歪めたような異形。ゼロワンに酷似した…しかし、機械ではなく有機的な飛蝗の怪物は正史に戻った世界では存在してはいけない存在

『これが、令和の1号の力…！ 素晴らしいわア…』

…『アナザーゼロワン』。

タイムジャッカーにより産み出された令和のアナザーライダーであり、時間改変事件の元凶。ガラガラとねつとりした声で、恍惚と掌を太陽に翳す。そして、彼は臙へと視線を移す。

『臙、いつまで遊んでいるの？ さっさと、ブツを確保しろと言ったでしよ。』

「うるせえよ！ だったらテメエ1人でやりや良かったじゃねえかよ烈喰!!」

『相変わらず口が悪いわねえ…。』

臙に溜め息をつくアナザーゼロワン。まあ、良いと横転したトラックへ歩を向ける…。だが、これをバルカンとバルキリーが見逃すわけもない。

「止まれ、化け物!!」

「止まらなければ射つぞ!!」

『お好きにどうぞ。当てられるならね?』

「!?!」

その瞬間、ヒュン!と異形の姿が消え、1秒満たぬうちにバルカンとバルキリーを凄まじい衝撃が襲い変身が解除された。そして、地面に投げ出された不破を踏みつけながらアナザーゼロワンはトラックを悠々と目指す。

『さ、頂くわよ。フィーニスと滅亡迅雷の遺産…』

「させません!!」

が、まだと立ちはだかる三式光武。蹴り破られた装甲が痛々しいが、火花を散らしながらも尚立ちはだかる。これに対し、アナザーゼロワンはまたやれやれと、溜め息…

『あら、帝都から来た勇ましいお嬢さん。勇氣と無謀を履き違えると…』

『……こうなるのよ。』

「【ギャアアアアア!!】」

「!」

アナザーゼロワンの腹部から飛び出す、カマキリ・コウモリ・ドー

ドーの全てゼツメライズキー由来であるライダーモデル。降魔と同じ怨念を発しながら、ドードーが馬乗りにも三式光武を押し倒し、カマキリが鎌で装甲を傷つけ、コウモリが剥げた装甲に噛みつく。まさに鳥葬

の勢いで飢餓する獣のように三式光武へ喰らいつき、搭乗者のさくらが悲鳴が上がろうと止まることはない。

「きゃあああああつ!! くっ、動いてよ! 光武!!」

操縦幹を前後するさくら…しかし、愛機は応えることなく計器は警告アラートを鳴らし、モニターには砂嵐がかかり景色が消えた。直後、メリメリと音をたてながら光武の頭のハッチがドードーライダーモデルの嘴に剥ぎ取られ、コウモリライダーモデルが唸りをあげて野晒しになった少女を覗きこむ。

『Giiiiiiiiii』

「まだ…だ! まだ…何もはじまってない!!!!!!」

【ウイング!! オーソライズ!!】

邪悪な牙が少女に喰らいつこうとしたその時、弾丸がごとき勢いの影が群がる3体を蹴散らした。そして、ドンツ…ドンツ…と三式光武の周囲を牽制するように巨大な物体が跳ね回っている…。

それは『飛蝗』と『ハヤブサ』のライダーモデル。異形が産み出したものではなく、正しき者が召喚した獣。

「な、何…?」

「大丈夫?」

戸惑うさくらの前に、バイクで滑りこむ見知った顔。飛電ゼロワン  
ドライバーを巻いた或人がハンドルを握っていた…。

「貴方は…」

「怪我はない?」

「は、はい!! 平気です!」

「良かった。待ってて、すぐにやつつけるから。イズ、その娘を頼む。」

無茶だ…と、叫ぶより早くさくらは横から伸びてきた手に『こちらへ。』と導かれていた。振り向けば、いつの間にかイズがおり手を差しのべている。いつの間に…………

こうしている内になんとか取りつこうとするアナザーゼロワンのライダーモデルたちだが、コウモリは三式光武を守るように旋回するハヤブサに阻まれるわ、地上のカマキリとドードーは間合い入ろうも

のなら問答無用で飛蝗の後脚の威力をお見舞いされていた。

「……………すう…」

準備は整う。後は自分が覚悟を決めるだけ。

深く息を吸い込み、相対する敵を見据えて或人は展開したプログラ  
イズキーをベルトへ勢いよく装填し叫ぶ！

「変身!!」

「プログライズ!! Fly to the sky! フライン  
グファルコン!! Spread your wings and  
prepare for a force.」

直後、或人を包む黒のパワードスーツとこれに飛蝗とハヤブサのラ  
イダーモデルたちはエネルギーに分解され彼の装甲として再構築さ  
れる。文字通り、変身…マゼンタと蛍光イエローのカラフルだがシン  
プルかつ鋭い戦士の姿がさくらと、舌打ちするアナザーゼロワンの瞳  
に映る。

……………彼は人類とヒューマギアの未来を護る守護者

……………仮面伝説を受け継ぐ新時代のはじまり『令和の1号』

「…アナザーゼロワン、お前を止められるのはただひとり。俺だ!!」

…仮面ライダーゼロワン フライングファルコン。

これが、天宮さくらと仮面ライダーのはじめての邂逅…

オリジナルライダーとアナザーライダーが再び合間見える瞬間で  
あった。

↓  
参  
入  
つ  
づ  
く

## 令和と太正 参

「はあッ!!」

飛び立つゼロワン。マゼンタの猛禽を象つた力は羽ばたくことすら必要とさせず主へ縦横無尽の飛翔能力を与え、真つ先に鈍く飛べないが故に絶滅したドードーが餌食になったのはなんと皮肉なことか。

紫電はしらせる嘴は緩慢な動き故、簡単に見切られる上に空中のゼロワンに全く追い付けず挙げ句の果てにかわされた先にいたカマキリを突いてしまう始末。加え、後ろから追撃のキックを受けて大転倒してしまう…

『Giiiiiiiiii』

ならば、空中にいる相手には同じ飛べる者とコウモリ。ヴァンパイアさながらの翼を拡げ、臍の付近をすり抜け大空を駆けるゼロワンを追う。音速に迫る勢いで上昇しながら、ゼロワンはアタッシュウエポンの刃を展開してプログライズキーを装填する。

【 WING!! 】

「はああああああああああア…!!!」

Gに歯を食い縛りながらも身体を反って反転すると、マゼンタに輝くアタッシュウエポンの切っ先がほうき星のように光る。コウモリも回避しようとしたが、残念ながら飛翔能力は現実の生物と同じく遠く及ばないわけで…

「 フライイング カバンス トラッシュユ

「はあアアっ!!」

ー斬!!!

『Giiiiiiiiii!?!?』

ろくに身体を振ることすら出来ず、真つ二つ。おぞましいかなきり声のような断末魔をあげながら塵のようなエネルギーになると、アナザーゼロワンのベルトへ吸い込まれて吸収される。

まずは1体。減速して着地するゼロワンは辺りを見回す……す

『Giiiiiiiiii!?!?』

「うおっ!?!」

より早く、飛びかかり襲いかかるカマキリ。慌て振るわれる鎌をアタツシユウエポンで切り払うも、待ってましたとドードーからの横槍の体当たりがゼロワンを弾きとばし武器はあさつての方向へ奪われてしまう。

「いってえ……。出し惜しみしてる場合じゃないな。」

「Shining Jump!! オーソライズ!!」

地面を転がったが、まだ終わりではない。こちらにはまだ切り札がある……金色に輝くプログライズキーをドライバーに読み込むや、マゼンタのフライングファルコンの装甲が消失して基本形態フライングホッパーへ。そこに、隕石のように降り立つのはオンブ飛蝗のようなライダーモデル……明らかに、先のフライングファルコンより強いエネルギーを滾らせるそれはライジングホッパーを更なる次元へと進化させる。



「プログライズ!! The rider kick incre  
ases the power by adding to br  
ightness! シャイニングホッパー!!  
……when I shine, darkness fades.  
」

「キラキラキターッ!」

蟲の王は太陽の輝きを獲た。味方には空を照らす希望の光、仇なす者にはすべくを焦がす厄災の熱……背中へ伸びる飛蝗の後脚を想わせる鋭いデザインは夢へと飛び立つ可能性が如く。

……『仮面ライダーゼロワン シャイニングホッパー』

闇纏う異形たちを討ち祓うため降臨した姿に、遠くからイズに肩を貸されていたさくららは息を呑む。

「……すごい。本当に仮面ライダーみたい……。」

『彼は飛電或人、まだ若くありながら、飛電インテリジェンスの社長を勤め……そして、人類とヒューマギアの未来を護る者、仮面ライダーゼロワンなのです。』

「え!?! 本当に、あの伝説の仮面ライダーなんですか!?!」

あの花組と一緒に戦った……!?!」

……? 首を傾げるイズ。彼女の素性はまだわからないが仮面ライダーは知っているとはどういうことか。確か『仮面ライダー』の名前の由来は、昭和の都市伝説がその1つと言われているが『花組』なるものは不明だ。

やっと出来た認識の共通点故に、詳細を衛星ゼアに接続して情報を吟味したいところだが、その間にも戦いは進んでいく。

『Giiiiiiii!?!』

「ほら、こっちだ!!」

カマキリとドードー、完全にゼロワンの動きについていけず、攻撃は先読みされたように悉くかわされ続けた上に、確実に頭や関節などに回り込み防御の脆い部分を尽きダメージを入れてくる。

これで、シャイニングホッパーの能力。敵の動きを瞬時にラーニングして演算、結果の25000通りかは最適な攻撃パターンを繰り出すことを可能にするのだ。いくらアナザーライダーから生まれたとはいえ、ライダモデル単品では真価を発揮は出来ないため対抗するのがそもそも無理だろう。

「決めるー!」

ベルトのグリップからライジングホッパープログラムライズキーを外して、ドライバーに翳すゼロワン。異形の巨体は纏れ合い、トドメを刺すなら絶好のタイミング：跳躍すると彼の影は消え、同時に標的を囲うようにゼロワンのグラフィックが出現する。最早、逃れる術は無い。

「はあああああああああああ  
!!!!!!」

一撃、二撃、三撃……。的確に演算された最適解に叩き込まれるライダーキック。一発ごとにライダモデルは悲鳴をあげるように軋み、原型を失い、動くことすらままならない。そこへ、頭上から流星のような輝きが一閃……

「シャイニングメガインパクト!!」

「おりゃああああアアアアア  
!!!!!!」

『Giiiiiiii?!?!?』

ブチ抜かれ、ダメージが限界に達し爆発四散するライダーモデルたち。命は無いはずだが、滅却される悪魔のような断末魔を上げて消え…その爆発をバックにスライディングしながら着地するゼロワン。その力は圧倒的だ…

…しかし、まだ戦いは終わらない。

『流石、令和の1号!! この力も期待出来るというものね!』

「…ツ―!」

…パチパチと手を叩く音に振り向けば、そこにはアナザーゼロワン。或人は警戒するが、違和感を持つ…声もそうだが、感じるエネルギーが以前とは桁違い。そして刻まれた年号が西暦ではなく、『T A I S H O / 2 9』となっている…まあ、アナザーライダーは産まれた暦が刻まれているなんてルールはゼロワンたちが知るよしも無いが。…即ち、このアナザーライダーはこの世界では存在しない『大正29年』に産まれたことになるのだ。

「お前、ウィルじゃないな。何者だ!」

『気になる? なら聞き出してみれば…? 出来るならね?』

「…コイツツツ」

アナザーゼロワンの挑発…良いだろう、乗ってやる。人間かヒューマギアかわからないが、得体の知れない相手に容赦する必要は無い…

地を蹴り、機械斧オーソライズバスターを振り上げ斬りかかるゼロワン。飛蝗の跳躍の弾丸に匹敵するような勢いは防御が間に合えば精一杯だろう。だが、アナザーゼロワンは不気味に眼を光らせると一瞬でゼロワンのデータを読み込み…

『フンッ』

「…」

ガンッ!! と、刃がぶつかりあう音。なんと、素手だったはずのアナザーゼロワンの手にゼロワンと同じ、オーソライズバスターが形成されていたのだ。

バカな…その驚いた一瞬を逃さず、アナザーゼロワンからの斬りあげがゼロワンを襲う。胸から火花を散らし、地面に転がされるがなんとか立ち上がる。

「まだだ!」

面食らったが、何のこれしき。アナザーゼロワンの動きを演算し、攻撃パターンをホログラムにして投影。戦いの流れを掴もうとするが…

『残念だけど、それ…私も出来るのよ。』

アナザーゼロワンもシャイニングホッパー同様に眼を光らせて演算。対応してこちらも、ホログラムを展開する。

『ハアアアッ!!!』

そこから先は光速の戦い。互いに一手二手先を読みあい、その先を追い抜いて一撃を与えようとするがどちらも致命的な一撃を与えられず、逆に寸前で回避したりと激しい攻防戦が繰り広げられる。

「なんでシャイニングホッパーに追いつけるんだ!？」

『当たり前じゃない。オリジナルが強くなれば、アナザーライダーだって強くなるのよ!』

オリジナルの仮面ライダーが強くなれば、アナザーライダーも強くなる…。理不尽かもしれないが、実際にジオウという前例がある。彼がグランドジオウへと進化した際は、アナザーライダーであるアナザージオウも同等の能力をもつアナザージオウⅡへと進化した。光と影とでもいべき関係性以上、影響しあうということだろうか…

つまり、アナザーゼロワンはシャイニングホッパーに匹敵する力があっても不思議ではない。そして、活動時間が長いためにバツクフアイアで徐々にダメージが蓄積していたゼロワンが遅れをとりはじめていた…。

「…はあ …はあ」

『あらあら、もう限界かしら?』

「な、何を…!」

「社長、コイツを使え!!」

危機…ここで、見かねた不破がアサルトウルフキーからアサルトグリップを取り外し、ゼロワンへ投げ渡す。そうだ、アサルトシャイニングホッパーなら負担は大幅に軽減出来る…! 受けとるや早速、シャイニングホッパープログライズキーをドライバーから外してグリップを接続するゼロワン。

…このタイミングをアナザーゼロワンは待っていた!

『それを使うのを待っていたわアア!!』



そんな彼の背後から、歩いてくるポニーテールに一角のアイマスクをつけた女性。黒いマントに軍服と異様な出で立ちで、彼女に気がついた隴はため息をつく。

「なんだ、夜叉か。って、ことは…自称・上司にバレたわけか。」

「ええ。油売ってないで、さっさと戻ってこい…だそうです。」

「けっ、興冷めだぜ…」

仕方ない、内輪もめは避けるべき。隴の様子を確認すると、『夜叉』と呼ばれた女性は手元にあったアタツシユウエポンを弓型に変形させて妖しいエネルギーを纏うゼツメライズキーをセットし、紅雷を充填する矢尻を空へ向ける。

「さあ、新時代の幕開けですよ。」

バシユツ!! と放たれる邪悪な矢。雲すら穿ち、虚空を撃ち貫くと巨大な魔法陣が形成されて、銀色のオーロラが出現。そこから、巨大な光がアナザーゼロワンの元へ、柱のように降ってくる。

『あら、時間切れねえ。気づかれちゃったかしら?』

時間切れを察したアナザーゼロワンは組み付くゼロワンを蹴り飛ばし、エイムズのトラックの上へ。すると、引力でもあるかのようにトラックごと光に吸い寄せられていき…そのまま、空のオーロラへと登っていく。このまま、逃げるつもりだろう。

…逃がすか! と、ゼロワンもトラックに飛びつき尚もアナザーゼロワンと相対する。

『あら、貴方もくる? 太正の世界に…?』

「大正…!? またそれかよ!」

戦いは尚も続く。そして、空を見上げる者たちは天変地異クラスの怪異をただ見守ることしか出来ない……

……そして、さくらは気がつく。空のオーロラの先……微かだが見覚えのある街並みがそこには映る。

「……………帝都?」



## 次回予告

繋がってしまった令和と太正の世界、ふたつに迫りくる降魔の影!!  
混乱の中、或人とイズは帝都の護りの要たる帝国華撃団の本拠地『大帝国劇場』へ……しかし、既にかつての栄光はなく上海華撃団に頼



りきりな上に演技も酷い有り様だった。このままなら、帝国華撃団のとり潰しは避けられない!? …そこで、支配人の神崎すみれが提案したのは世界中の華撃団が集う祭典である華撃団大戦の優勝と飛電インテリジェンスとの並行世界の垣根を超えた事業提携だった!?

そして、帝都に見え隠れする謎の影…その中に『太正の1号』はいるのか? どうする、令和の1号!?! 仮面ライダーゼロワン!?!

次回、【交わる新時代】

……太正浪漫を駆け抜ける、令和の風ツ!!

……ねえねえ、知ってる? 大帝国劇場の七不思議。

使われないエレベーター

妖怪のぞき目玉

空飛ぶ本

中庭の幽霊石

誰もいない舞台上で啜り泣く女の声

呪われたプロマイド

……そして、してはいけない鬼ごっこ。

日が沈む頃、走って、回って、歌ってごらん？

鬼さんこちら、手の鳴るほうへ

かえってくるよ

鬼さんこちら、手の鳴るほうへ

知らないよ？ ……知らないよ？

本当に、鬼さん来ても知らないよ？

## 交わる新時代 序

太正29年…… それは、第二次世界大戦が起こらなかつた世界線。昭和がはじまらないということは、この時代の先に平成も令和も産まれないだろう。

……しかし、文明の発展は凄まじく一部の技術は平成のそれと近いところまで来ており、近代化と大正浪漫の雰囲気融合した風景は利便性を追及してシンプルさを追及した平成・令和には失われてしまったモダンさが息をしている。

そんな太正世界の日本の首都は『帝都・東京』。その中心街の一角にある古く厳かに建つのは『大帝国劇場』である……年月による傷みはあるがその威厳は尚も存在感を放つ。

「……くそっ！ くそっ！ 何処だ、さくらああああ!!!」

その劇場の前で声をあげる青年。上着を脱いだベストのスーツ姿に二刀流の帯刀とかなり変わった格好をしている黒髪の男……。彼は喉が裂けんばかりに声を張り上げていた彼の名は『神山 誠十郎』、この帝都の住人である。そして、行方知れずになった幼なじみの行方を捜しているのだ……。

そこへ、赤と緑の色違いの三式光武が現れる。

「駄目だ隊長さん、こっちはいねえ!!」

「こちらと同じくです。やはり、さくらさんは降魔に……」

搭乗しているのはどちらも女性。赤い方に乗る巫女服の気の強そうな彼女は『東雲 初穂』。赤毛の左サイドで束ねた髪は焦りのためか乱れている。もう片方の緑の光武に乗る金髪に緑の眼をした彼女は『クラリツサ・スノーフレイク』。愛称はクラリス。こちらはかなり落ち込んでいる様子で、心無しか機体も俯いているように見える……

「俺……だ……俺のせいだ！俺がちやんと指示をしなかったから……!!」

「違います、さくらさんは私を庇って……私のせいで……!!」

「責任の背負いあいしてる場合かよ!? まだ諦めんじゃねえ……まだ、決まったわけじゃない。アイツが夢半ばにすらならねえで死ぬかよ……」

先刻、現れた『飛蝗の怪人』とでも言うべき降魔。何処からともなく現れるや、帝都に現れた魔操機兵の相手をしていたクラリスを急襲しそれを庇ったのはさくら。直後、降魔もろとも何処かへ彼女の光武ごと閃光に包まれ消えてしまったのである。

降魔は文字通りの何処から降臨し人々を襲う異形の化け物、時には人間を喰らう時もある。そんな降魔に連れ去られたのだとしたら……最悪の結果が皆の頭を過るのは必然だろう。

クラリスは自責で潰れそうな勢いで、初穂もコックピットの中で認めようとはしないものの……悔しさに歯軋りをしていた。ついには神山も完全に折れそうになり、膝をつこうとした……その時

ーードオオオツ  
!!!!!!

「……」

突然、目の前に現れた光の柱。劇場まで呑みこみかねないほどの大きさのそれは、先まで無かった空に見える見慣れない街並みから伸び

ており、明らかに空の向こうの世界と繋ぐものであった。人の為す霊術か、降魔の妖術かは判別はつかないが、3人は突然の事態にたじろくばかりであった。

「初穂…！こ、これは一体…?!？」

「知らねえよ!? くそっ、次から次へと…!!」

「待って下さい、何か空から…!？」

上を見上げていた中でクラリスは、柱の光に動くシルエットを確認していた。……それは…こちらに真つ直ぐ…!？」

ーードオオオオオオオン  
!!!!!!

「ALTERNATIVE SHINING ASSAULT」

「かはっ……!？」

「!?!?!?!」

最初は隕石かと思った…しかし、煙が晴れるにつれて明らかになる光景は全く違うもの。

シャイニングアサルトホッパーへと進化したアナザーゼロワンが同じ形態のオリジナルを踏みつけ、クレーターを作っていたのだ。辛うじて、ゼロワンは動けるみたいだが、あちこちにプラズマが走り強制変身解除まで残り数秒といったところだろう。

そして、神山は気がついた…

「コイツはさっきの降魔!？」

アナザーゼロワン…そう、厳密には降魔ではないが、さくらを連れ

去ったとおぼしき犯人。すぐに身構えるが、当のアナザーゼロワンはフンツと鼻を鳴らすと、ゼロワンを彼等側に蹴り転がして背を向ける。

『…あげるわ、ソイツ。これからいないと困るでしょうから。フフ…』  
「待て、さくらは何処だ!」

『…ああ、あの小娘ね。会いたければ、この柱を辿って『令和』の世界へ行きなさい。取り敢えず、今は生きてるわよ…今はね。』

最後にそう言い残すと、蝗の竜巻になって消え失せた。『待て!』と追おうとした神山だったが、転移する相手を追う術などあるはずもなく地団駄を踏んで終わる。それよりも……

「神山隊長!」

クラリスの声、見れば彼女は三式光武を降りて変身解除されたゼロワン……もとい、或人を抱きかかえていた。或人は気を失っている様子で反応は無い。初穂も機体のハッチを開けて確認する。

「取り敢えず、降魔ではないみたいだな。どうする隊長…?」

「…何か事情を知っているかもしれない…こちらで保護しよう。よし、一旦撤収だ。もうここは俺達だけじゃ手に負えない。…それにここら一帯も封鎖しないとな。」

こうして、本人が知らないうちに太正世界とエンカウトした令和の1号。ふたつの時代の交錯、それはまだあるべき物語の流れを大きく振らせ破壊するものだとは知ることはない。

……まだこれは、小さな歪み。されど、確実に運命を変える幕開けである。

★ ★ ★ ★

「ライダージャンプ。」

「RIDER JUMP」

「ライダーキック…！」

「RIDER KICK」

帝都の路地裏…そこで行われていた戦いを表通りを歩く人間たちは気がつかない。皆、突然に現れた光の柱に釘付けだからだ…まあ、都合は良いが。そんなことを考えながら緑の戦士は隠れていた異形を粉碎すると、変身を解いて表通りに。ベルトについていた飛蝗のようなアイテムは何処かへピョンピョンと跳んでいき、男は道行く人々と同じ方向を見据える…

彼の格好は黒をベースとしたいかにもやさぐれた危険そうな雰囲気を出す…それは、太正だろうが令和だろうがあまりにも浮く様はさながら世紀末だろうか。

「……蟲の入店はお断りだ。」

そう呟くと、近くの中華料理屋に入っていく男。その店の名前は看板に大きく『神龍軒』…

……ここにひとつ、仮面の影



…とある海上。

水面ギリギリを飛ぶ巨大な空中戦艦。しかし、そのデザインと色合  
いには鉄の近代文明産物特有の無骨さより、古い欧州の匂いを感じさ  
せる気品がある。

古き良き時代の残り香を感じながら、明らかに不釣り合いなマフ  
ラーに灰色の昔の詩人や旅人を彷彿させつつも、穴が空いた服装に身  
を包む青年。怪しい雰囲気全開だが、当の本人は呑気にパラソルをひ  
ろげたまま椅子でくつろいでいる。しかも、サングラスまでつけて完  
全に気分はバカンス……

「…おっと。」

…すると、何かに気がついたかのようにテーブルから歯車が無数に  
刻まれた本を持ち語り出す。

「……………この本によれば、普通の高校生である常盤ソウゴには時の王  
者・オーマジオウになる未来が待っていた。しかし、その未来から運  
命そのものを力として継承したことで、可能性は未知数となった。…  
さて、言うまでもないと思うが私は預言者『ウォズ』。時の王者に仕え  
る者で、祝福する者。そんな私が何故、『太正』の世界にいるかと言う  
と…」



「……ねえ、あんた何独り言喋ってるの??」

そんな彼…ウオズを痛々しいものを見る眼を向ける亜麻色の髪をポニーテールにした少女。齡は天宮さくらと変わらないくらいだが、格好は和を基調とした彼女とは対照的に可憐なる少女騎士だ。その美しさと凛々しさにスレ違えば誰もが振り向くほどだが…彼女の表情は、今は目の前の奇行に走る自称・預言者のせいで酷く曇ってる。

「ランスロットくん、今は大事なところだから邪魔しないでくれるかな?」

「構わないけど、あたしの視界と耳に届かないところでやってくれたのかな? 鍛錬に集中出来ないんだけど…?? 折角の清々しい青空に海の風も台無し。」

『ランスロット』…本名ではないがそれが今の少女騎士の名。多少、好戦的でこそあれど彼女がここまで露骨に嫌悪感を示すのは珍しい。そりゃあ、そうだ…突然、やってきた昔の先輩が何を思ったのかこの怪しさと胡散臭さを混ぜて全開にしたような男を押し付けてきたのだから。

「はあ…ガヴェイン卿は何を考えて…。というより、なんでアーサーはOKしたのか…。」

「そんな邪険にしないでくれないかな? 少なくとも、華撃団大戦が終わるまでは、私たちは仲間だ。さあ、気楽に行こうじゃないかお互いに…?」

「…ぐぬぬ(許されるなら、今すぐに三枚に卸して魚の餌にしてやりた

い……！)」

大事な晴れ舞台の前、万全のコンディションで挑みたいのは山々だったが……残念ながら、ランスロットのストレスは溜まる一方であった。

そんな彼女を全く気にしないウオズは遙か海の先を見据えて物思いに耽る……

(さて、太正の1号……恐らく、この世界に侵入しているネオ・タイムジャツカーとやらもそれが狙いか。何としても、奴等よりはやく見つけなくては……)



……何処かの廃墟 それは、先日の降魔襲撃によつて壊された帝都の外れ。

デイブレイクタウンを襲撃した降魔『夜叉』は1枚の写真はずっと見ていた。俗に言うプロマイドというやつだ……しかも、バイザーを外した自分にそっくりの人間の女が映っているものを。

「……真宮寺さくら……」

……それが、彼女の名前らしい。

何故、自分にそっくりなのか……。もしかしたら、自分のベースにされた人間なのか……。瓜二つのこの顔にはきつと意味があるはずなのに思考がうまくまわらない。考えても仕方ないと割りきろうとしても異常に気になる……。生きてるのか？ 死んでいるのか？ 何者なのか？

……自分は何を為すべきなのか？

『あら、こんなところにいたのね。お待ちせ……』

「烈喰……」

そこへ、フラリと現れたアナザーゼロワン。その手にはトランクが握られており、嬉しそう握られてふらふらと揺らしていた……。あれが、『令和』の世界から持ち出した目的のものなのだろうが、中身については夜叉の知るところではない。

そんな彼女にクスクスと笑いながら、鍵を破壊してアナザーゼロワンは中からドライバーとおぼしき物体を取り出す。

「……それは？」

『滅亡迅雷フォースライザー……私が欲しかった物のひとつ。人を滅ぼすために、命ですらない鉄屑畜生が作りだした道具が産み出した道具……兵器よ。』

「兵器？ ……そんなものが？」

思わず疑問符が浮かぶ。夜叉は降魔だ……されど、上級に分類されるのでそれなりに人間社会などの知識・人間と遜色無い知能がある故、『兵器』なんて言われれば思いつくのは銃や爆弾……あとは霊子戦闘機

くらいなものだ。前者は超自然的存在と言っても過言ではない自分たちには火力で押しきれない限りは効果は薄い、後者はある意味で自分らと同じ次元の攻撃になるのでダメージは等倍かそれ以上になりうる。

…では、このフォースライザーとはなんなのか？ 血肉を裂く刃も、命を抉る弾丸を発射する銃身も無い。ましてや、防具にもならない小ささ…こんなもので何をしろと？ まさか、殴る鈍器とは言えない。

怪訝な顔をする彼女にアナザーゼロワンはフッフ…と微笑みながら、フォースライザーを差し出す。

『1つあげるわ。腹に当てて、キーを入れるだけで良いわ。それで、令和のテクノロジーが貴女も使えるようになる…。』

令和のテクノロジー…少しだけ興味が沸いた。

まあ、そう簡単に上級降魔の自分に何があっても大したことになるわけがない…と、思いフォースライザーを腹にあてる。すると…

ーバチチチチ!!!

「!？」

フォースライザーが百足のような帯を伸ばしてベルトの形態をとると、脚のような突起が彼女の中に侵入して肉体を抉りながら紫電を走らせる。その激痛たるや、今まで感じたことがない上級降魔の自分ですら悲鳴をあげてしまうもの…そして、自分の頭の中に手を延ばして精神をグチャグチャにしていくな。

「…がつ!? レクスう…貴様!？」

『さ、私と一緒に来て夜叉。共に世界を創りあげましょう?』

「駄目……だ……!! わだしは……降魔皇の……だ……めに……! それが、私の……運命……」

『違うわ。あなたの運命は……』

……この太正の世界で『仮面ライダー』になることよ。』

アナザーゼロワンを舐めていたと気がついた時にはもう遅い……  
夜叉のバイザーが外れ、紅く光る瞳が浮かび上がる。フォースライ  
ザーが馴染んだのだ……そして、令和で悲劇の幕開けを告げてきたあの  
言葉が彼女の口から流れる……。

「……滅亡迅雷netに接続。」

世界の揺らぎはまだ小さい。しかし、小さな虫食いが大樹を腐らせるように…… 太正の物語は未知なる脅威にさらされていた。

令和と太正…… 乙女たちと仮面の英雄…… 悪と魔……

それらが向かう先はまだ誰も知るよしは無い。

ライダー・イン・太正／001  
交わる新時代 壱

「滅亡迅雷 net はああ…ぶっ潰すツツ  
!!!!!!」

という不破の雄叫びの直後、ぶっ壊れたのは彼が乗っていたさくらの三式光武だった…。

『私の光武うううううううう?!?!』とさくらの悲鳴が響き渡り、唯阿が頭を抱えるこの場所はエイムズの研究ラボ…メンテナンス中のギーガーや大破したスクラップなど並んでおり、それを作業員たちが様々な機械を駆使して修理・解体などに従事していて忙しない。

そんな中に並ぶのが頭の皮を剥がされて無惨な姿になってしまった三式光武。ぶっちゃけ、ボロボロだったが不破さんがそれに興味本位で乗り込んだ挙げ句にトドメを刺して新サクラ大戦、完ツ!!…というわけではなく、取り敢えず動くところを見てみなくては、解析も解体もなんとも言う現場の声に応えた結果である。主であるさくらも、『私じゃなきや動くわけありませんから』ってタカをくくり触るのを許してうっかりフラグをたてた瞬間的に、不破という男がどういう輩かを知っている唯阿はこの展開を知っていたとため息をつく。

「光武…光武… 私の光武…」

「不破…」

壊れたようにオロロ…と手を伸ばす彼女には流石に同情する。不破も上司からの『謝れ』という視線を察して、『あー、すまない。わざとじゃない。』と眼がぶらんぶらんとぶら下がる光武に乗ったまま謝る。あまりの哀愁が漂う光景に、不破さん触らせたらきつと壊すから責任押し付けて中までじっくり直接調べられるぜ…なんて考えてい

たメカニックたちも顔を逸らす。基本、仮面ライダーの世界の技術者なんて畜生のオンパレードなので、ぶつちやけスポットライトが当たらないような者たちである故に、僅かながら良心の呵責はあったという事か……

ト) ……つて甘い考えがあるお前たちが本当に、大好きだ★(エボル

10分後、見事に光武はあの愛らしい桜色の装甲とかは全部とっぱらわれて、無骨なフレームやコックピットも取り外したに飽きたらず1ピースのケーキでも崩すようにどんどん分解していくエィムズ技術者の皆さん。知ってるか？ 仮面ライダーの世界の技術者って部類の人間はな、良心があっても好奇心か野心のほうが強んだよ……？ 科学者たるもの、欲望に忠実たれ。世界滅ぼしかけても尚、短パンアロハで開き直って大笑いできれば150満点オーバーだ。…机上の空論パンチで死んでください。

さくらも最早、勢いを止めることを叶わず挙げ句の果てに解析(解体)を担当した責任者から『…ただの化石ですな(ベネ●ト)』と唯阿に報告したのがあまりのショックでそれこそ、アンモナイトの化石みたいに真っ白になって隅っこに丸まっている。

「まあ、逆に言ってしまうえば『太正』？ でしたっけ…… その娘の話もまんざら嘘じゃないってこともかも。」

で、光武をバラバラにした主犯のエンジニアタイプの青年ヒューマ



ギア。エイムズへの滅亡迅雷net襲撃からハッキングを考慮して、隔離されていたのだが、彼のテロリスト壊滅を契機に呼び戻された彼を待ち受けていた三式光武の解析（解体）作業。そして、喜んで着手した結果がこれである。

取り敢えず、駄目だと思うが不破にさくらのフォローを任せて（人選ミス）唯阿は彼から話をきく。

「まあ、言うまでもないと思いますが我々の知る大正の時代にこんなパワードスーツみたいなものを作る技術はありませんし、動力部とおぼしき場所は既存のテクノロジーのどれにも該当しません。しかし、それ以外は何処なく既存技術の臭いを感じさせると言えますか…なんと言いますか…。」

「私もデータは見させてもらった。正直、これだけのものを組み立てるなら、何故もつと良いパーツを使わなかったのか… 調達できなかったのか、そもそも本当に技術が存在しなかったか？」

「あの娘の話を信じるとして、『太正』の世界とやらは我々の時間軸に当てはめると平成どころか、まだ昭和ですから。」

太正の技術は確かに凄まじいのは後程わかるが、まあ比較対象がヒューマギアやギーガー…ライダーシステムなんて作ってる令和のテクノロジーとなれば『化石』なんて言われても仕方ないかもしれない。それを、愛着を持つてる年端のいかない少女の耳に入れてしまうのはどうかと思うが…

「…（空に現れた都市、あれを『帝都』と言っていたな。もし、この光武とやらが物的証拠になりうるなら… 滅亡迅雷netの証拠品を奪った奴等は…）」

また別に、唯阿が気にかけていたのは先刻に自分たちを襲撃した謎の勢力。『降魔』と呼ばれる太正の世界に現れる異形の姿をした超自然的存在で、奴等はさくらの乗る光武のような『霊子甲冑』やその発

展系の『霊子戦闘機』でなければ、対処は難しいのだとか。実際、戦った時もライダーシステムがですら優位とは言い難い状況だったのも事実。

最初こそは、さくらの言う全てを妄言と片付けようと思ったが：今、空に現れた都市など起こっている事態が無視は不可能としていく。

「…(だが、待て。なら奴等の狙いはなんだ？ 滅亡迅雷の遺産で何を企んでいる？ 降魔とやらはどうやってこの世界に来た?)」

そして、行きつく疑問。降魔が狙っていたのはデイベレイクタウンに遺されていた押収品のゼツメライズキーや滅亡迅雷独自のものとおぼしきライダーシステム。起動していないヒューマギアには目もくれずそれだけ奪っていった…。わざわざ、並行世界まで来て狙う価値があれらにはあったというのか？

『恐らく、この一件にはタイムジャッカーが関わっていると思われる。』

「! …イズ?」

そんな彼女の疑問に答えるべく現れたのはイズ。飛電の社長秘書たる彼女が直接ここに現れることは人工知能やそれに携わる法を守るエームズとしては良くはないのだが、現状はそうも言ってられない。

『詳しくは飛電のラボで。天宮さくらさんも一緒に…』



……炎を見た。あるゆるものを呑み込み喰らう炎を見た。

……魔を見た。空を覆い、地を闇で閉ざすほど強大な影を見た。

焼け落ちる都市にはびこる異形の群。全てを討ちはらわんと、霊子  
甲冑と仮面の英雄たち… 燃えおちる都、絶望に人々が沈む中で彼ら  
は決して諦めない。

正義の声高らかに、彼等は闇に挑む。たとえば、その先が勝利などで  
はなく、無限の獄であっても……

「……！ あっつ……!？」

鈍い痛みを目を覚まし、飛び起きるとそこは病室。清潔なシーツによくあるアルミ製の受け皿や救急箱……ただ何故か窓が無い。まだハッキリしない頭で痛みをこらえながら、或人は自分に何が起きたかここは何処なのかを考える。

……確かアナザーゼロワンを追いかけたのは確か。しかし、シャイニングアサルトホッパーにまで進化した奴の力は文字通りの互角だった。戦いは演算先読みあいの激しいものだったが、突然にライダーシステムが不具合を起こして動きが鈍り、その致命的な隙を突かれて必殺技のライダーキックをもらってしまったのである。

そのあと、臆気ながら誰かに抱きあげられたような記憶もあるが……

「……君、気がついたか。」

誰!?! 右の見舞い者が座る椅子に見慣れない青年が座っていた……多分、日本人だがスーツらしい洋装(?)に二刀流の携帯とはかなりのコスプレをしているようだが、この人が助けてくれたのだろうか……?

「……は……?？」

「帝国劇場の医務室だ。君は劇場の近くで倒れていたんだ。」

帝国劇場……? あれ、何処かで聞いたような。

「俺は神山誠十郎、帝国華撃団・花組の隊長を務めている。ところで、君は何者なんだ?？」

「? ……えと、俺は飛電或人…… 飛電インテリジェンスの社長をしています。」

「社長……? 君がか? あまり、俺達と歳は変わらないようだが……」

うん？ 最近は滅亡迅雷壊滅を伝える記者会見とか開いたけど、良くも悪くも飛電の名と一緒に有名になってきている自分を知らないのか？ 名前はともかく、顔を覚えられていないとは…まあ、そんなこともあるか。

「って…：そうだ、ゼロワンドライバー!? 無い…!? プログライズキーも!?!?」

ここで気がついた…：ライダーシステムのものが全て無くなっている。まさか、落とした…!?

その様子を見た神山は少し考えると、意を決したという表情で或人を見た。

「君の装備品はこちらで預かっている。ケガをしているところ申し訳ないが俺についてきてくれ。」

「…は、はい。」

彼は立ち上がるとついてくるように促す。或人も状況が呑み込めないために、神山の指示に従い自分が寝ていたベッドをあとにするのであった。

## 交わる新時代 弐

「ふんぬううううう…ああああああアア…!!!」

不破さんがゴリライズしていいのではない、初穂がプログライズキーを挟じ開けようとしているのである。今、被害を受けているライジングホッパーに意識があるなら『違うそれは俺のキャラじゃない…。挟じ開けられるのはウルフの役回りだ…。(アブドウ●)』とか思っただろう。結局、渾身の力を込めた彼女だが残念ながらロックを解除は出来ず、ゼーゼーと息をする。

「駄目だ、全然あかねえ…」

「初穂さん、乱暴に扱うのはよくないと思いますよ。」

クラリスからのお咎め。是非、不破さんに言って欲しい… もうウルフとゴリラは手遅れだけど。

彼女たちがいるのは帝国劇場の地下にある格納庫。ここには彼女たちの霊子甲冑などが待機し、整備をする場所。劇場の地下だということに、物々しく油臭い雰囲気は少女たちは不釣り合いに感じられるが、かなり重要な場所である。

で、今何をしているかと言えば、突然の空からやってきた御客人の装備品を初穂の興味から物色しているところである。

「…はあ、何なんだろうな。空には妙な街が見えるわ、そこから降魔と一緒に降ってきたあの妙な奴。たく、さくとも行方知れずなのに、アタシらに手に余るぜホント。」

「上海華撃団の方たちやすみれ支配人も急いでこちらに向かっているそうです。あの光の柱の周囲は陸軍が封鎖していますが、今のところ進展も何も無いみたいですね。」

「あれかな…やっぱり、あの空の世界から来たのか。もしかしたら、さくくともあそこに…」

「憶測でものを言うのはやめましょう。根拠も何もありませんし……。」

初穂の予想が実はドンピシャどころか、光武をバラバラにされているなど誰も思いやしない。

取り敢えず、彼女たちはゼロワンの装備品を確認しているのだが、勿論のことセキュリティロックがかかっているので起動することは無い。クラリスも恐る恐るゼロワンドライバーを腹にあててはみたものの、静かなままなので、ほっとしたような……それでいて残念なような気分になる。そんな彼女の懸念はもうひとつ……

「それにしても、神山隊長はどうするつもりなのでしょうか。」

「あー……アイツか。しつかしなあ、妙な力を使ってるみたいだって、いったところで降魔じゃない。んで、証拠品だって何だかよくわからねえ。憲兵にしろ上海の奴等にしろ突きだしたところで笑いもんだぜ。」

空から降ってきたあの謎の青年……要は或人のこと。間違いなく、今回の異常に関わっていると思われるが一見すると普通の人間なので、取り敢えず保護。神山が監視を兼ねて看病している。参考人として、外部へ引き渡したいのは山々だが残念ながら因果関係の証明も出来ない上に自分たちでは取り合ってくれないだろう。

そんな話をしているとクラリスはゼロワンの姿を思い出す……あの飛蝗とおぼしき姿……

「……まさか、彼は伝説のマスクドライバー……」

「降魔大戦の時、昔の花組と戦ったあれか？ ナイナイ、歳がどう見てもアタシらと同じが少し上くらいじゃねえか。本当に『本郷猛』やその仲間って言うなら、最低でもすみれ支配人と歳近いくらいだろ？ しかも、本当にいたかはわからねえって話だし。」

「でも、風の噂で各国の華撃団が極秘裏にマスクドライバーを囲って

いるって話は巷で有名ですよ……。既に、上海にも在籍しているとも……」

マスクドライバー…要は仮面ライダーである。噂の域を出ないが、世界各地に現れているのだという。都市伝説の一種で有名どころだが、疑うクラリスに比べて初穂は全く信じる素振りすらない。

「…初穂、クラリス。」

そこへ、エレベーターを降りてやってきたのは神山…或人も引き連れてある。すると、怪訝な顔をする初穂。

「ちよつと待った隊長さん、ここ部外者以外は立ち入り禁止だぜ。ましてや、こんな素性がわからんやつ…」

「俺のゼロワンドライバー!?!」

「…でっ!? おい!?!」

或人を連れてきたことを咎めようとしたが、それよりも早くクラリスからゼロワンドライバーをひったくられ、タイミングを外してしまう。クラリスも驚いてゼロワンドライバーを離してしまった拍子にプログライズキーも落としてしまう。

「ああ、良かった! プログライズキーも無事だあ…」

「隊長! 何故、ここに彼を連れてきたんですか!?!」

「そうだ、何かあったらアタシらじゃ…」



身構えるクラリスと初穂…しかし、神山は心配ないよと手を振った。

「紹介するよ。彼は飛電或人、なんでも空の上の世界で会社の社長をやっているらしい。どうやら、この帝都に来たのは事故らしいが…」

「…社長？」

少女たちからの疑念の目…。 まあ、仕方ない…どう見たって自分たちと歳が変わらないのに社長とか。すると、察した或人は端末を取り出して名刺画面を出す…

「はじめまして、飛電インテリジェンスの社長の飛電或人です。こちらが名刺になります…？」

「…」

特に普通に挨拶を交わしたつもりだった… しかし、初穂とクラリスは目を丸くして固まってしまう。あれ、何か失礼でもあ…

「すまおとろん!?!」

「へ?…」

すまおと…? いや、確かにスマホに分類される飛電製の端末だが別に驚くようなことではない。一般的に普及しているものだ……  
そうあくまで、令和の世界では

初穂とクラリスは一旦、『ちよつと、失礼』と離れて背を向けるとヒソヒソ話をはじめめる。

「…(なあ、クラリス見たかあのすまおとろん!? アタシらに支給されてるのどこるかすみれ支配人のやつより、だいぶ凄いや!)」  
「…(私も素人ですが、画面の鮮明さが指令室のモニターより高かった

ですよ。きつと高価なもの…それこそ、財閥くらいの社長じゃないと使えないようなものでは？」

「…(じゃあ、マジで社長なのか？ でも、名前が逆さ向きで書いてあったぞ。ちよつと間抜けが過ぎないか…？ それに飛電なんちゃらなんて聞いたことねえぞ。)」

やはり、疑念が晴れない初穂。太正世界の通信端末『すまおとろん』は令和世界のスマホに外見こそ似ているが、まだまだ未発達で通話は出来ない上にお値段も中々のものなので、まだ一般的には普及はあまりしていない。使うとしたら、それこそ、金持ちや財閥クラスの間人やそういった企業や組織に準ずる人間のみである。

これを所持しているならさぞかし、有名な財閥の…という話になるが、太正世界には勿論のこと飛電インテリジエンスもヒューマギアも無い。そして、横の文章は令和世界の大正時代のように現代とは逆に書くので名刺を見せられても、逆に不信感が起きるのは当たり前だろう。

一方の或人も戸惑ぎらえなかった。飛電インテリジエンスの名前を出してすらこの反応… 自分の名前はともかく、世界に轟くこの会社の名を知らないのは流石におかしい。しかも、たかが端末にあの驚きようとききた…

「あの、神山さん…俺、おかしいことしました？」

「いや…。こほん、初穂もクラリスもちやんと挨拶してくれ。」

このままだと話が進まない。神山に促され、慌てながら姿勢を正して或人と向き合うふたり。

「…お、おう。はじめまして、社長サン。東雲初穂って言いマス。この帝国劇場の団員をしてる…マス。どうか、帝国劇場をご最員に……」  
「クラリッサ・スノーブレイクです…。クラリスとお呼びください。彼女と同じく、帝国劇場の団員です…。」

「どうした、ふたりとも？　様子がおかしいぞ？」

急な挙動不審、そりやあまあ何処にせよ大財閥の社長に失礼があったら最悪の場合、自分たちの劇場なぞ一瞬で潰されかねない。：別にそんなことは出来るはずもないし、可能だとしても絶対にしない或人社長であるが。

彼は初穂に握手されながら、『ここ劇場なの：？』と頭に疑問符を浮かべていると、神山がそろそろ話を進めたいと切り出す。

「社長さん、取り敢えずこっちに来てくれないか？　見せたい物がある。」

案内されたのはラボの奥。そこに並んでいるのは或人の記憶にも新しいロボット……『靈子甲冑・三式光武』。赤と緑の色違いで装備も差異あれど、あの空から降ってきた少女が乗っていた機体と同じである。

「これ……！　あのピンクのロボットと同じ！」

「やっぱり、か……。あなたはこの光武を見たことがありますね？」

「はい、会社の前に落ちてきましたから……」

頷く神山。もしかしたら、さくらの行方を知っているかと思っただけだが……やはり、自分の勘は確かだったようだ。機体の色まで言い当てるなら間違いない。

すると、初穂も顔色を変えて或人の肩を掴む。

「本当か!?!　なら、さくらは無事なのか!?!　どうなんだ社長さん!?!?」

「ま、待って!　多分、大丈夫だと思うけど俺もわからない……!?!」

「初穂、落ち着け!　気持ち解るが、今は順を追って話を……」

先の礼儀を気にする様子は何処へやら、強く揺さぶる彼女。神山の

制止もきかず、クラリスもオロオロとするばかり……その時だった。

「騒がしいですわね。何事ですか、神山隊長。」

エレベーターのドアが開き、現れた紫の着物の女性。扇子とフサフサのマフラー……泣き黒子が優雅さを演出するが、凛々しい眼は上に立つ者の風格……齢は30歳といったところだろう。彼女の登場するなり、神山とクラリスも姿勢を直し……初穂も渋々或人から手を離して続く。

間違いなく、彼等の上司かそれに類する人物なのだろう……そんな女性の視線は或人に向けられていた。

「わたくしの部下が失礼を。あなたが『仮面ライダー』……で、よろしいですね?」

「……あ、はい。」

「話は神山より伺っています。わたくしはこの帝国劇場の支配人を務めている、『神崎すみれ』と申しますわ。こんなところで話も難ですから、場所を移しましょう。」

堂々とした物腰……やはり、上司たるものこうではなくては。

そう思ってしまうような動きに或人は圧されながらも、この場所の主と名乗る女性の背中についていく。その一部始終を見届けた神山とクラリスは感服していた。

「流石、すみれ支配人…。こんな非常事態でもあの落ち着きようとは…。」

「旧華撃団のメンバーだけあって、私たちより肝っ玉が据わってるということでしょうか？」

「…。」

「初穂？。」

初穂だけはどうもやるせない顔でいたが、気がついた神山が声をかける。…逸らされてしまったが。

「隊長さんはさ…さくらは心配じゃねえのか？」

心配だった。付き合いは長い大事な仲間が…今は生死すらわからず、鍵を握るであろう人物もすみれが連れて行ってしまった。何かをしたいが、どうすればいいか分からない…そんな焦りと自分への怒りが彼女を不安定にしつつある。

反対に神山はすみれほどではないが、必要以上に焦燥を見せる様子もなく普段とそこまでかわらない様子だった。

「俺は…彼が『仮面ライダー』なら、心配はいらないと思う。これも勘なんだけど、さくらもきつと無事だと感じられるんだ。それに、夢半ばで死ぬようなやつじゃないって、それこそ初穂が言ってただろ？」

「それは…。」

仲間だろうか？ なら、自分たちが信じなくてどうする？

そして、天宮さくらには夢がある。

憧れの人のように、強く美しいトップスターになるという目標があるのだ。その強い想いは翳ることなく、少女を夢の舞台へ続く道を拓かせたのである…。そんな情熱の乙女がたかだか降魔ごときにやられるものか。

「…俺は信じてる。さくらは帰ってくる。」

…そう、きつと大丈夫だ。

## 交わる新時代 参

支配人室…… 要は社長室と同じようなもので、典型的な社長専用デスクを中心に据えられているのはお約束。飛電の社長室に比べると、掛け軸や皿が飾られており、棚の上には扇子が開かれて堂々としている。独特のセンスだが、もう少し自分の社長室も華やかにしてみようかと考えていた或人は取り敢えずこの帝国劇場の支配人であるすみれと名刺交換を……

「あら、そちらが名刺……？ 紙ではないのですね。」

「え？ まあ、紙もただではありませんから。」

やっぱり、たかが名刺にこんなに驚くのはおかしくない？ まあ、紙の名刺も使っている人はまだまだいるけど……（1000%おじさんとか）、実際のところ規模が大きい会社になれば社員ひとりひとりに支給する名刺の金額も馬鹿にはならないし、役職などが変われば更新に一手間。加えて、古い名刺は使えなくなるし新しい名刺が来るまでタイムラグもある……資源も時間もエコじゃない。

一方、このライズフォン機能の飛電製名刺ならデータを更新すればすぐ使える。紙も消費しないので環境にも優しいはず。

そんな飛電名刺は既に先代社長の祖父の頃から普及してたし、特別に珍しくもなんともないような……

「では、改めて私がこの帝国劇場の支配人を務めております、神崎すみれと申しますわ。失礼にあたりと存じますが、随分とお若いんですね。神山隊長とそこまで歳は変わらないようですが……」

「亡くなった先代の社長が祖父で、遺言に添って私が後を継いだんです。まだまだ新米ですが、優秀な社員と信頼できる秘書のおかげで何とかやれています。」

確かに社長にしては、歳若いというのは事実。気になるのは仕方な

いだろう…この手の質問は慣れていると苦笑して返す。すると、すみれも『すみません、私も人のことは言えませんわね…』と苦笑して返された。そういえば、支配人という役職を担う彼女も自分より歳上なのは確かだがまだ若い…いくつなのだろう。この手の質問は女性には野暮だが。

「…さて、神山くんお茶をお客様に出してあげて。今、カオルは留守にしているから。」

「は、はい！（…お茶、何処にあったっけ？）」

同室していた神山を一旦退室させ、ここで支配人と社長でふたりきり…さて、人払いをしたということは他の隊員に切り出せない話をするつもりだろう。

「さて、飛電或人さん…貴方は神山隊長の報告にあったように『仮面ライダー』…で、間違いないですね？」

「…はい、ゼロワン…仮面ライダーゼロワンです。」

「……そう。なら、かつての花組や本郷猛についてご存知では？」

…？ 花組？本郷？ 何の話だろうと首を傾げると残念そうな顔をしたすみれ。仮面ライダーのことは知っているようだが、どうもゼロワンのことではないらしい。

すると、彼女は自分のデスクの引き出しからある物を取り出して或人へと手渡す…

「では…これが何かわかりますか？」

…それは、本来ならばこの世界に存在しないはずのもの。見た瞬間、目を見開かざらえなかった。

「…これ、滅亡迅雷のツ!？」



そう、まさかの滅亡迅雷フォースライダー…

或人も時間改変事件に緊急措置として使用したこともあったが、本来ならば滅亡迅雷の仮面ライダーの変身ツールである。無論、ライダーシステムなんて一般に出回るわけもない…なら、何故に彼女はこれを所持しているのか？

…その理由も語られる。

「先日、わたくしの夢枕にオーマジオウと名乗る者が現れました。必ず、これを必要とする『新たな仮面ライダー』が現れると…。そして、これを渡すべき者に渡せば、『太正の1号』への道が拓かれると。そして、目覚めた時に枕元にこれがありました。」

「…！」

オーマジオウに太正の1号… まさか、ここでまた接点か。

フォースライダーの出所はわからないが、どうやらこの事態も想定しており先回りして手を回していたということだろう。しかし、今の自分にはゼロワンドライバーがある…正直、これは必要になるとは思えないのだが。…更に、彼女は続ける。

「わたくしたちは、この大帝国劇場で歌劇を行う『帝国歌劇団』…そして、帝都・東京を守護する『帝国華撃団』でもありますわ。恐らく、あなた方の世界には存在しないでしょうが…」

そして、わたくしは仮面ライダーと名乗る異邦の戦士たちとかつて共に戦ったことがあります。それが、10年前の降魔大戦の時… 彼等は世界の平和と引き換えに当時の華撃団と共に姿を消してしまつた。そして、今…また新たな仮面ライダーが華撃団の前に現れたということは、再び大きな世界の危機が訪れる前触れではないかと考えていますわ。」

「ま、待ってください！ 全然話に着いていけないのですが…!？」

待って、待って!?!と手を出す或人に先走り過ぎたと理解したすみれ。そうか、この子はまだうまく状況を呑み込めていないのだ…。  
どうやら、ここは手順を踏んで説明していく必要があるようだ。

「少し外に出ましようか。それで、状況がもう少し理解しやすくなるはずですね。」

こうして、或人はすみれに劇場の外へ連れ出されることになる…。  
この時、彼等はすっかり忘れていた。

……………お茶を持ってきた神山が、入れ違いになり途方に暮れてしま  
うことを



……………飛電インテリジェンス 社長室

イズはホログラムを起動して、衛星ゼアの最高機密の秘匿事項にア

クセスする。

それは、失われた時間軸の記録映像。ヒューマギアたちが打ち上げられた衛星アークによって人類に反乱を起こして、地上の支配者へと取って代わった世界の映像がそこには記録されている。この時間軸は黒幕であったタイムジャッカー・フィーニスと、契約していた初代アナザーゼロワンであるヒューマギア・ウイルの撃破により、無かったことにはなったが記録だけは衛星ゼアに残されている。

その中には、バルカンとバルキリーがアナザーゼロワンを撃破する映像もあり、不破と唯阿は非常に驚いていた。

「おい、こんなの記憶に無えぞ!？」

「デイブレイクが成功した世界か…考えただけで、ゾツとするな。」

このふたりにはその記憶は無い。失われた時間軸の記憶を保持しているのは衛星ゼアに接続している或人とイズのみ。今後、この手の事態は起こらないという予想と、公開しても無用な混乱を招くであろう衛星ゼアの回答結果により秘匿されていたのだが……

再び現れたアナザーゼロワンというイレギュラー。更に、次ぐ異常事態によりエイムズの協力は不可避ということからふたりへ情報の公開に至ったのである。

……そして、イズは更に説明をする。

『今回、タイムジャッカーの介入は間違いないかと思われます。敵の狙いは不明ですが……。もしかしたら、奪われたデイブレイタウンの押収品が関係があるかもしれません。』

狙いは謎、情報は不足しているが皆無ではない。奴等はデイブレイクタウンからの押収品を狙っていたならそこに手掛かりがあるはず……。となれば、唯阿というわけだがやはりこちらもエイムズの機密に関わる分、洩る顔をせざるえないが事情が事情。不破からの視線もあり、ライズフォンを操作して情報を開示する。

「やむ得ないか…。これが、奪われたものを含めた押収品の一覧だ。」

ホログラムに流れるゼツメライズキーやライザー…旧型のヒューマギアといったデータの一覧。文字通りの滅亡迅雷の遺産の数は中々のもので、ゼロワンのプログライズキーのレパートリーに負けてはいない。だからといって、特別なものは無いようだが……

『…』

その時、イズの目に留まったデータが…

『これは……』

コバルトのゼツメライズキー…破損はしているようだが、『飛蝗』のデザインが確認できる。その隣のデータにはフォースライザーとそっくりな変身ツールが映しだされている。

『…（ロッキングホッパーゼツメライズキーと、サイクロンライザー…）』

まさか、まだ残っていたとは。この2つは或人の父親であるヒューマギアⅡ飛電其雄が『仮面ライダー1型』へと変身するために使っていたツールで、現在のライダーシステムのプロトタイプと推測されている。

仮面ライダー1型は、失われた時間軸で或人たちに超えるべき父親の壁として立ちはだかった。そして、息子との死闘を経て己の使命と悲願を全うしたのである。

…時間軸が元に戻った現在、ロッキングホッパーゼツメライズキーは或人の手元から消えた。もし、現存するならダイブレイクタウンの滅亡迅雷の手に…という予測もあったが、出来れば的中はしてほしく

はなかったというのがイズの思いである。…或人もきつと、同じだろう。

『…(奪われては、いないようですね。』

せめてもの救いはアナザーゼロワンに奪われていないこと。取り零したのか、そもそも眼中に無かったかは謎だが、ほっと胸を撫でおろす。

「そういえば、社長は大丈夫なのかそちらで確認は出来ないのか？」

…ふと、ここで唯阿は或人の安否を切り出す。正直、イズの平常運転ぶりに面食らっていたのだが、そろそろ完璧にタイミングを失いそうだったので質問を試してみたのだ。

『或人社長の行方は衛星ゼアが全力で搜索していますが、まだ足取りは掴めていません。生存しているかも不明です。』

「…変なことを聞くようだが、心配じゃないのか？」

『……………私は或人社長を信じていますから。』

まあ、愚問だったが。自分の敬愛する社長が、そう易々と死ぬものか…かつては、今より絶望的な時間改変事件すら乗りこえたのだ、今回もきつと…。

「ま、あの社長がそう簡単にくたばるかよ。」

不破もイズに同調する。共闘する機会が多く、時には意見のぶつかり合いがあったからこそ、或人への信頼がある彼もまた生存を疑っている様子は無い。

『ありがとうございます、不破さん。』

「別にヒューマギアに気をつかったりなんかしねえ……」

『お礼として、社長のギャグ100連発をお納めください。』

「……ちよつ、まつ!？」

そんな不破について何か返礼しなくてはと、あくまで感謝の念でイズはデータを送る。しつこいが、あくまで善意なので悪気はない……例え、彼が仕事で笑いを我慢するため悶え苦しむことになっても。

…尚、唯阿は面倒なので放っておくことにした。



一方の社長室の窓際……そこでは、令和の街並みの夜景を眺めるさくらの姿があった。イズたちの話についていけず、哀愁漂う姿で外を見る彼女にいつもの元気は何処へやら…

そこへ、歩み寄るヒューマギアの青年。

「平気……ではないよね?」

「あ、確か……」

『せがた三四郎』だよ。ヒューマギアのね。」

彼は『せがた三四郎』：エイムズの所有のヒューマギアだ。技術者らしい白衣を着ていたりするが、癖っ毛の黒髪に優しそうな顔立ちは近所の優しいお兄さんみたいな雰囲気である…。

…そんな彼が、さくらの三式光武を解体した張本人だったりするのだが。

「君の光武は明日中には元に戻すよ。摩耗が激しい部品は可能な限り衛星ゼアに復元してもらってるから、状態は前よりよくなるはずだ。」  
「本当ですか！ ありがとうございます!! ……でも…」

三式光武を直したところで自分は帝都に帰れるのだろうか？ 正直、不安で胸をがいっぱいでたまらない… 自分の華撃団の話などをしててもエイムズの面々はとても信じているようには見えず、この世界では自分は独りぼっちである。文字通りの孤独は歳若く幼さを残す彼女には堪えるもの…それを見越して三四郎はポケットからプログライズキーとおぼしき物を取り出す。

「君、仮面ライダーのことは知ってるんだっけ。 なら、これをあげる…社長から御守り代わりに貰ったものなんだけど。」

「え… でも、そんな大事な物……」

「良いから。多分、君には小さくても心の寄り処が必要だ。」

三四郎は強引に押し付けると、さくらも断りきれず受けとる。実際、自分の『憧れの人』と一緒に戦った戦士の縁の品なら特別に悪い気はしない。それに、あの若い社長ライダーには次に合う時には助けてもらったお礼を言わなくては…。

「……ありがとうございます。」

「うん、どういたしまして。しっかり、大事に持っていてね。…(出来れば誰の目にもつかないように…)」

「へ？」

最後、何故か小声だったがなんだったのか？

この時、さくらは知らない……御守りと渡されたコバルトブルーのキーが『ロッキングホッパーゼツメライズキー』と呼ばれていることを。

(さ、『悪の1号』も本格的に動かないとな。)

そして、せがた三四郎と名乗るヒューマギアが意味深に微笑んでいたことを……



## 交わる新時代 肆

「……さて、何処から話をしましょうかしら。」

太正の世界……帝都へとすみれに連れ出された或人は驚いていた。まず最初に帝都劇場の劇場エリア。建物事態は古くなっているものの、歴史を感じる洋式の造りは大したものである。ここで、初穂やクラリス……そして、あの三式光武に乗っていたさくらもここで演劇を行っていたらしい。

そして、外……完全に街並みは令和の世界とは別。モダンな雰囲気。気の建築物は『大正時代』の息吹きを残したまま近代化が進む独特なもの。空には気球船が飛び、行き交う人々は和服が多めで洋装は少ない。車も一応は存在しているが、やはり微妙に自分の世界のものとう。

「……すつげえ。」

「これが、わたくしたちの街『帝都・東京』。かつての華撃団が命懸けで守り抜き、わたくしたちが今、守らなければならない場所ですわ。どうですか、この街は？」

……自分の異物感が半端ないです。

別に、或人の服装がおかしいわけじゃない……あくまで、令和の世界では。しかし、元号を2つも跨ぐほどのファッションの違いはこの太正時代では目立ってしまい、道行く人々がヒソヒソと言葉をかわすのが目についてしまい辛い。街の大通りをコスプレしてる奴が何か歩いているぞみたいないな感覚なのか……

「この街のみならず、世界の技術は10年前とは比べ物にならないほど発展しました……ですが、尚も我々は降魔の脅威からは逃れられてい

ませんの。」

「降魔…？」

そういえば、度々耳にする単語。もしかして、デイベレイクタウンに現れた妙な機械類の連中だろうか…。それについても、すみれは語る。

「降魔とは遙か古より存在する妖のようなもの…。人の怨念が固まり意思を得た存在。それ故に、生まれながら人間を憎み、喰らうと言われておりますわ。本来、貴方の世界に現れるのはおかしいはずなのですけど…。それに対抗するにはほぼ、靈力を用いた兵器しかありませんわ。」

どうやら、太正の世界由来の怪物・超自然的存在といったところだろう。

これらに抗い、滅するための靈子甲冑といった存在。しかし、『靈力』を扱える人間は限られるために戦力の拡張は技術進歩が進む今でも限られる。各国の華撃団も適格者をさがしてはいるものの、そう簡単ではなくどこも人手不足である。

…そんな中、10年前…世界を揺るがす事件が起こる。

「…これを見てくださいな。」

「！…これ…。」

帝都のある大通りの一角。帝都の劇場から少し離れた場所には靈子甲冑とおぼしき巨大な石像と剣を持つさくらに似た雰囲気の乙女と、明らかに仮面ライダーとおぼしき飛蝗男が並び立つ像が鎮座していた。1／1スケールと本物と変わらない大きさに、精巧な造り…そ

して、足許には献花。台座には『帝都の英雄』と刻まれている……

「……………墓だ。」

率直な或人の感想。讚えているのは間違いないが、静かな雰囲気  
に献花から察するに恐らくは鎮魂の意味合いもあるのだろうと感じら  
れた。すると、すみれの顔に陰が刺す……

「降魔大戦、10年前に起きた悲劇。」

降魔大戦とは……かつて、世界に降臨した『降魔皇』との戦い。

降魔の親玉というべきその強大な降魔は何の前触れもなく太正の  
世界へ現れたのである。地をなぶりつくすほどの異形と空を覆うほ  
どの怪異の群が世界中のあちこちで押し寄せた…瞬く間に、各国の華  
撃団をはじめとした諸国の機関は甚大な被害を受けた。世界崩壊は  
あつという間に進み、全ては魔界に吞まれようとした…… されど、  
人は諦めず最後の手を打つ。

帝都、巴里（パリ）、紐育（ニューヨーク）、当時の世界最強の三大  
華撃団と伝説の1号ライダーⅡ本郷猛率いる仮面ライダーたちによ  
る連合部隊を組織…決戦の地を帝都として、降魔皇との人類の命運を  
賭けた最後の戦いに挑んだのである。

「……………あと一步、のところまで降魔皇を追い詰めたのは確からしいで  
すわ。そして、彼等は自らの命と引き換えに降魔皇を退けたと。」

「まさか…。皆……………」

死闘を経て、降魔皇は退けられた。しかし、代償はあまりに大きい  
…… 三大華撃団や仮面ライダーたちは行方不明になり、その足取り  
は掴めていない。刺し違えたことが通説であるが、本当に何も痕跡が  
無いまま時が過ぎて現在に至る。

この降魔大戦を契機に極秘組織だった華撃団は世界中の人々に知られることになり、各国は躍起になって自国の華撃団と歌劇団を結成したのだ。……次なる脅威が襲いくる前に。

……そして、この石像は今の平和の礎となった英雄たちを讃えるためのモノ。

「此度の異常、10年前と似ている点があります。だから………」

「だからア、何だっというんだア??」

「!」

突然、頭上からかけられた嘲笑うような声。視線を上げれば、街灯の上にフードの男…あの吊りあがった口許は見覚えがある! 確か、デイベレイクタウンにも現れた魔操機兵を操っていた……

「……お前は?」

「お？ 覚えているみたいだなあ仮面らいだーあ？ この上級降魔・  
臙様をよお?！」

上級降魔…！ 戦慄を走らせるすみれ。そう、一見すれば人間だが  
纏う妖気は異形の存在…令和の世界でバルカンと戦っていた臙であ  
る。或人もその顔は覚えていた…

「俺がこの世界に来たのは、お前のせいか！」

「は？ 知らねえよ、んなこと。お前を連れてきたのは烈喰（レクス）  
の野郎だ…。ま、そんなことはどうでも良い…上司からのお達しでテ  
メエを始末しろだよ。」

…つてなわけで、とつとと死ねや。魔幻空間…起動ッ!!」

奴が叫ぶと同時に、景色が歪む。太正の街並みは掻き消え、代わり  
に邪気で満たされた暗い水晶洞窟と毒物が沸き出る沼の地獄絵図に  
とつて代わる。

『魔幻空間』……上級降魔が持つ結界の中にそれぞれの個体特有の  
邪悪な異空間を形成する能力。無論、ただの生身の人間が彷徨してい  
いものではない。

「……うつ?！」

特に、臙の毒と幻術の魔幻空間は危険…。或人はすぐに強い目眩と  
吐き気を覚えてふらついたところをすみれに支えられる。このまま  
ではまずいとゼロワンドライバーを装着し、キーを読み込ませるが  
……

【……シユン】

「！ ……反応しない!？」

オーソライズすら発動しない…何故!?

「……まさか、ゼアがこの世界に無いからか!？」

ゼロワンのライダーシステムは正常に運用するためには、まずは衛星ゼアの存在が不可欠である。しかしだ…いくら飛電の恐るべき技術も並行世界は越えられない。そもそも、ライダモデルの転送どころかゼロワンドライバーの起動すら探知出来ないのだ。

…つまり、ゼロワンへの変身は不可能である。

「お？ どうしたア？ お得意の変身はしないのかア…なら、さっさとくたばりやがれ。」

「…！ こちらへ!!」

異変を察知し、すぐさま或人の手を引いて走り出すすみれ。その背後を朧が召喚した魔操機兵たちがワラワラと後を追う… 今、彼女たちは逃げることにしかできなかつた。

★★  
★★  
★★  
★★  
★★

「……！」

令和の世界にて異変を察知したせがた三四郎。今、彼は街中を激走する三式光武の頭にひつついている。コックピットにはさくらが乗っているがほぼ完全に修復された愛機を駆るも、その顔には大きな戸惑いがあった。

…それも、そのはず。今、後方からは凄まじい形相でバルカンとバルキリーが追跡してきているのだから。

「せ、せがたさん!? 本当に大丈夫なんですか!？」

「ああ、平気さ。君をちゃんと帝都へ返してあげられる。」

そういうことじゃなくて!! と言いたかったが、ショットライザーの弾丸が三式光武の装甲をかすめていくため、余所見は出来ない。修復したとはいえ、当たりどころが悪ければ再び行動不能になってもおかしくはない。

そもそも、エイムズの許可が降りたし帝都へ帰れる目処が立ったという話なのにこれはどういうことか。

「止まれ、天宮さくら!! 止まらなければ実力を行使する!」

「もう行使してませんっ!」

バルキリーの警告は別に間違いではない。本気を出せば、三式光武の無力化なんぞ造作も無い…それでも、威嚇射撃で本気で当てていないのはせがた三四郎が気になるからである。ヒューマギアがまさかとは思うが、彼女を言いくるめている可能性もある。普通はありえないが、もし滅亡迅雷の生き残りや降魔の仲間なら…

「せがた三四郎! 貴様は…」

「あ、ごめん…: 俺、ヒューマギアじゃないんだ!」

…は? せがた三四郎はそう答えるなりヒューマギアの証であるイヤータグを取り外す。そこには、しつかりと人間の耳が…: いやいや待って待て!? それなら、イズが気がつかないわけがない!

「しゃらくせえ!! 力強くで止める! うおおおおおおお  
おアア!!!」

「シヨットライズ!! パンチングゴング!!」

何にせよ、話を通じないなら力強く。パンチングゴングに変身し、無理矢理に三式光武にとりつくバルカン：マフラー部分を掴むなり地面で踏ん張り、強引なブレーキをかける。

同時に、ギリギリと桜色のボディが悲鳴をあげはじめ、さくらの脳裏に不破が自分の愛機に犯した大暴挙が通り青ざめた。

「や、やめてください不破さん!?!? また光武が壊れちゃう!?!」

「なら、止まれってんだ!! おおおおおおおおおおお!!!!!!!!」

バキツ …メリメリメリメリメリメリ (光武が壊れる音)

「嫌あああああああああああ!?! 本当にやめてえええええええええええ!!!!!!」

本当にヤバい音をたてはじめる愛機に悲鳴をあげるさくら。ぐらぐらと揺れても、バルカンの文字通りゴリラの握力が離さない：再びスクラップになるのか光武：

…その時

「とうっ!!」

「!?!」

ぐらぐらと揺れる車体を常任離れた動きで、バルカンにキックを叩き込むせがた三四郎。ヒューマギアでも至難であろう動きで、そのままバルカンに組み付き自分もろとも引き剥がしてアスファルトの地面に転がるも平然と立ち上がる。これには、さくらも慌て三式光武のブレーキを踏んだ。



「せがたさん!？」

「はやく行つて！ 光の柱の先…帝都にいるゼロワンにキーを届けるんだ!!」

「…でも！」

「はやく!!」

彼の身を案じるも、気迫に圧されて再び疾走していく桜色の機体。バルキリーが追おうとするが、せがた三四郎が許さんと立ちはだかる。人間でも全身骨折、ヒューマギアでも半壊はいくようなダメージを負ったはずなのにゆらりと構える彼に不気味さを覚えながらも、シヨットライザーを突きつけた彼女。この男は一体、何者なのか…？

「貴様…！ 滅亡迅雷…それとも、降魔か？」

「どっちも外れ。悪いけど、彼女を行かせてくれないかな？ あの娘はこの世界にいるべきじゃない。それに、今はゼロワンに死なれたら君達も困るんじゃないか？」

「…なに？」

ゼロワンが死なれたら困る…つまり、飛電或人は生きていることを察しているような物言いは更に警戒心を跳ねあげさせた。復帰したバルカンと前後で挟むように囲むが、彼は尚も余裕の表情を崩さない。

「ここで俺と戦つても何の意味も無い。君達が戦うべき相手は…」

「うるせえ!! お前を拘束するッ！ 手を頭の後ろに当てて、膝をつけ!!」

迫るバルカン…しかし、『やれやれ…』と溜め息をつくなり腹に手を当てるせがた三四郎。

すると、風車のバツクルが鈍く輝くベルトが現れた。

「仕方ないか。なら、見せてもらおうかな…令和の仮面ライダーの力を。」

すうう…と息を吸うと、機械的な紅い涙腺が顔に浮かび上がり、バツクルの風車がギユギユイイイイン!!!と、激しく火花を散らして駆動しはじめる。そして、手を斜め上にあげるポーズをとると辺り一帯が黒い嵐に包まれバルカンとバルキリーは動きを封じられてしまう。

…同時に、彼は告げた。

「ライダー…変身ツ!!!」

あの『はじまりの伝説』の掛け声を…

「とうツ!!」

ジャンプすると、彼は竜巻に包まれ人間の肉の裏に潜む強化骨格を展開していきその姿を『飛蝗の異形なる戦士』へと変身させていった。ゼロワンより遙かに有機的な緑のマスクに紅いマフラー…白い2本ラインが走る黒い襟が立つコートは正義のヒーローとしては異質。力の由来は、令和由来の飛電やザイア技術ではない仮面ライダーとして原始的かつ原典にあたるショッカーの改造人間が起源。

そう、彼は始まりの 正義 ・ 原 典 (オリジン) にして…

「俺は…本郷タケシ、仮面ライダー1号

… 1号オルタ

… 悪・反転（オルタナティブ）。

平成でもなく、昭和でもない異聞の歴史に現れた『悪の1号』。  
乙女の行く道を追う者を阻むため、その伝説は令和の戦士たちへ立ち  
ちはだかる。

★★  
★★  
★★  
★★  
★★  
★★

「…はあ！はあ！」

すみれに引かれるまま、逃げてきた或人だったが魔幻空間は逃れる  
どころかどんどん洞窟の深溝へと入りこんでいくようで先は見えない。  
追う魔操機兵と隼はあえて、消耗させ疲弊する様を嗤っていた…  
抗う術の無い獲物を手元で弄ぶような感覚なのだろう。

このままでは、どちらも生き延びれないのは明白。今度は逆に或人

がすみれを引いて止めた。

「何をやる気ですか!？」

「このままじゃ、やられます。ライザーをこっちに!」

戸惑う彼女からフォースライザーを受け取ると、それを装着する。同時に、全身に焼けるような激痛が走るが気にはしていられずライジングホップパーキーを起動…フォースライザーへと装填する。

【 J u m p ! ! 】

「うぐっ!? ……ツツ…変身ツ!!」

【 フォースライズ!! ライジングホッパー!! …… B r e a k  
d o w n ! ! 】

フォースライズによる強引なキーの解錠。同時に飛び出す黒い飛蝗のロストモデルは、小さい大群になりあり得ざるゼロワンの姿を組み立てていく…。ライジングホッパーの意匠は残しつつも、防護服のように黒が大半を占めるゴツイ姿に六角形の複眼といった特徴は滅亡迅雷のライダーを思わせる。それは、失われた時間改変が起きた時に緊急措置として変身した時と同じ……

… 仮面ライダー001 (ゼロゼロワン)

再び異端の仮面は纏われた。

## 太正の輝き 壺

…仮面ライダー001

言ってしまうえば、滅亡迅雷の技術で産まれたゼロワン…のように見えるが、実際はドライバーの試作品であるフォースライザーによる変身なので、ある意味プロトタイプと言えなくもない。(滅亡迅雷・netが扱っているものはあくまでヒューマギアで扱うことに特化したもので別物らしい。)

利点としては、衛星ゼアのバックアップ無しでもライジングホッパの力を十分に扱えることで今回のように通信が出来ない環境下でも戦えるということ。

が、逆を言えば衛生ゼアのバックアップを受けられないということ。また、ゼロワンの他プログライスキーや武装を用いた柔軟な戦い方が出来なくなる上に、試作品を強引に使う反動でダメージが或人へフィードバックするデメリットもかなり大きい。

(※そして、このフォースライザーは我が魔王が提供したものです。)

「…はあっ！」

「ライジング・デイストピア！！！」

しかし、今はやるしかない…戦えるのは自分だけ。

迫りくる魔操機兵に跳びかかり、拳を打ちつける。それから、凄まじい速さで翻弄しながら次々してキックなどで粉碎していく。稲妻のような勢いはそこの雑魚では対応は出来ない…しかし、倒される彼等とて降魔の端くれである。故に、倒しきるにはより出力が必要でより001の消耗と負担を加速させるのだ。

ハッキリ言えば、焼石に水。自傷ダメージ込みで抗うのもままならないこちらに対し、質でも数でも負ける。まだこちらが潰れないのは敵が舐めプしてるからであるのは解っている。

「ほくら、頑張れ頑張れ。ははははア!!」

自分の懐に飛び込まれてしまうなど露とも思っていないこの油断こそ唯一にして最大の付け入る隙。001は魔操機兵が隴との直線上に入るのとタイミングをあわせてフォースライザーの引き金を引く。

「ライジング・ユートピア!!!」

「はああっ!!」

地を蹴り碎き、プラズマを纏うライダーキックが放たれ魔操機兵が粉碎された。ライジングホッパーのベースである『サブクトビバツタ』は人間スケールにした場合、ビル10階は跳躍で超えられるらしい：その脚力と雷のエネルギーを集中させた必殺技は爆発を貫き、先にふんぞり返る隴へ牙を剥く！ 敵の指揮官を的確に狙い、一撃は隴の胸を抉って……

「ぎーンねーん。」

「!?」

しまうことはなく、どろりと彼の姿は蕩けてライジング・ユートピアはすり抜ける。嘲笑う顔を横目に、001を待っていたのは巨大な機械の手… 一撃を野球のグローブのように簡単に受け止めると異形の掌は獲物を掴んだまま握られる…。グシャ!!グシャ!! バキツ：!!と執拗に、念入りに力を込められ拳の中で潰される音とつんざくような或人の悲鳴。 見えないが、起きている惨劇にすみれは恐怖を覚えた。

やがて、開いた掌から出てきたのはくちやくちやになった001：



「…！」

………  
今、笑ったな？

「…ぎゃははははは…はっ…」

唐突な第三者の声。朧は笑うのを止め、辺りを見回す… 馬鹿な、今この場にいる奴以外としたらせいぜい巻き込んだ一般人くらいなものだ。自分の毒で充たされた魔幻空間を自由に動ける者など



早々…

「……俺も笑ってもらおうか?」

「ハッ!? 誰だ!」

後方。洞窟の闇から歩いてくる人影。茶髪のスラツとした男：黒の服装にチエーンと世紀末風な異様なやさぐれさを醸し出す。太正の文化にもそぐわない出で立ちはすみれさえもどうリアクションして良いかわからない。……敵なのか味方なのか? 取り敢えず、臙は彼を把握していなかったようだが。

すると、ひっさげていた紙袋から卵を取り出す。

「お前のせいで、買い出した食材が台無しだ。どうしてくれる。」

そのまま、卵をなげつける男。臙は片手で防ぐが、衝撃で割れた卵の中身が袖にべっちよりついた上に靴に変色した卵黄が破れてかかる。恐らく、臙の魔幻空間の影響で腐敗してしまったのだろうか。

そんなことはどうでも良い。弱いもの苛めで最高の気分浸っていたのを一瞬で台無しにされた臙は一転して脳天まで沸騰した怒りに。吊り上がりきっていた口許は今度はぐにやりと歪む。

「テメエ、これから良いところだったのによお… 邪魔しやがってえ。

許さねえ…絶対がいい 許さねえええええ!!! 八つ裂きにしてやる  
よお!!!

「…」

上級降魔の怒りをかう…ただの人間なら死を免れない展開を尚も静かに見据えていた男。この時、すみれは気がついた…彼が『見慣れない異様な銀のベルト』をしていることに。

臙が怒り狂い、001を握り潰した手を召喚してる最中…男の手元へ何処からともなく現れた掌に乗るくらいの飛蝗のモジュール『キツ

クホッパーゼクター』が現れ跳び乗った。

「変身。」

【 HENSHIN 】

男はベルトのバックル部分の台座に、キックホッパーゼクターを接続。呼応して、彼の姿は緑色のヒビロカネの鋭い装甲の鎧に包まれる。ゼロワンと同じ飛蝗がモチーフであれど、システムは完全の別物。かつて、別の世界で地獄兄弟と呼ばれたその兄貴分…

【 CHANGE KICK HOPPER 】

仮面ライダーキックホッパー…：変身者、矢車 想。仮面ライダーカブトと幾度となく戦い、絶望の果てに自らの美学すら否定して、地獄の底辺まで堕ちた戦士。所為、ダークライダーである。

変身シークエンスが完了すると素早く、走り出すキックホッパーは迫る異形の掌を抜け臍を肉薄し一言。

「邪魔だ。」

有無を言わず蹴りとばし、或人を回収。その勢いのまますみれの元に送り届けた。

「……あなたは？」

「上海華撃団の…仮面ライダーだ。……一応な。」

上海華撃団…：衰退著しい帝国華撃団に代わって帝都を守る華撃団なのは無論、すみれは知っているが彼の口振りからすればまるで所属しているかのような様子。噂では聞いていたが、本当に華撃団に属する仮面ライダーを見るのは彼女もはじめてだった。全くをもって、中

華要素皆無だが気にはいけない。

「上海の仮面ライダーだあ?? ふざけやがって!」

一方、攻撃を外し玩具までとられた臚は魔操機兵をけしかける。なに別に、何処の仮面ライダーだろうが虫けらが1匹増えたからなんだ?ここは自分の魔幻空間で質も量も自由自在、物量と幻でかかればこんなやつ……

「とうっ!!」

「ぎっ?」

しかし、交錯する2つの機影が魔操機兵たちを一瞬で蹴散らせられ爆発に目がくらむ。魔を討ち祓ったのは霊子甲冑の発展型の『霊子戦闘機』であり、刺々しい龍の意匠を施された機体の名は『王龍』……即ち

「上海華撃団…参上ッ!!!」

帝都を護る『上海の龍』…上海華撃団が邪悪を討つためここに見参したのであった。

## 太正の輝き 弐

「上海華撃団、参上ッ!!」

並び立つ霊子戦闘機・王龍。緑の隊長機に乗るのは三つ編みの髪をした自身に満ちる青年は上海華撃団の隊長『ヤン・シャオロン』、もう片方の黄色い機体に乗る髪の両サイドをお団子状にした活発な少女は『ホワン・ユイ』。帝都を護る上海華撃団：主力のメンバーである2人はすみれもよく知り、まさに絶望を打ち砕く希望の光そのものだった。

「シャオロンさん…！ ユイさん…！」

「すみれ支配人!? …っど怪我人か！ ユイ、支配人たちを頼む！」

「矢車は俺と一緒にコイツをやるぞ！」

「任された！」

「…勝手にしろ。」

すみれと重傷の或人はユイに託され、彼女の王龍に抱えられ離脱。残ったシャオロンとキックホッパーが構え、齒軋りする臚と対峙する。

「さて、上級降魔か。ここら最近からすりやレア物だな。矢車、油断すんなよ…あと、完膚なきまでぶちのめすぞ。」

「フン。」

シャオロンは久方ぶりに、本気の怒りに震えていた。元より正義感が強い彼は理解したのだ…この降魔がただの人間である或人に対し、一体どれだけの酷いことをしたのかを。いたぶり、なぶり…ついさっきまでコイツは悦に浸っていたのだろう。御し難い凶行に声にまで怒気が帯びる…それを、特にキックホッパーは気にはしなかった

が。

一方の隴は

「ぎいい…!! ぎいいいいい!!! この人間風情がア!!!!」

沸き上がる怒りがついに臨界を超えようとしていた…… 溢れ出す凄まじい妖力が彼の煮えくりかえる感情を現しているようだが、シャオロンは怯まない。

「覚悟しろ、降魔。上海華撃団の庭のこの帝都で、好き放題やったんだ。テメエの首で償ってもらおうからな。」

「…」

…… 限界は訪れた。

過剰な激情がスー…と熱は消さずに隴の頭を流れる。

人間が？ 人間が？ たかが、人間ごときが俺を倒すと？ 許さな

いと？ 矮小で貧弱な虫けらが？

奥歯に力が入り、決定的な一線を決壊させ感情の濁流が自分に命じる。陵辱も侮蔑も不要……

「潰す。」

ガンツ!!と何も無い空間に手を突っ込むと亀裂が走り淀んだ空に魔法陣が形成される。そして、彼は自分の『最強の切札』を呼ぶ……!

「来いッ!! 荒吐 (アラハバキ) イイイイイイイイイイイイ  
!!!!!!」

「!」

魔法陣から姿を現す巨大な影。霊子戦闘機すら軽く超えるほどのサイズに、001を握り潰した手を腰の両サイドヘスカートのように展開した異形の機体がゆらゆらと浮かび、王龍とキックホッパーを見下ろす。

「ハッ。」

完全に雑魚とは一線を駕する機体に飛び乗る臃。不気味な赤い単眼輝く人型のコアユニットに融合すると、彼の口許は再び吊り上がる笑みを取り戻す。



「…すみれ支配人。悪いけど、その人は諦めよう。この場はわたしだけじゃ切り抜けられない。」

「なんですって!?!」

「わたしの見立てだと…多分、もう手遅れだ。仮に、脱出出来たとしても、もう助からないよ。」

苦渋の決断。されど、魔幻空間に長い間居た上に臙からの全身に骨折などをはじめとしたダメージがある様子などはユイからしても一目瞭然。ならば、助かる可能性が高いほうだけを選ぶのは当然だったろう。

「そんな…彼は…」

であつても、割りきれないすみれ。彼は自分を護るため恐らくは身体に負担がかかる力を使つてまで助けようとした。無論、ユイだつて見捨てたいわけではないがとてもそんな許される余裕はない。靈子戦闘機という力をもつてしても、如何なる時に如何なる存在からでも護り抜く盾にはなりえないのだ。

『シャアアアア!!!』

「…!」

そして、迷っている間にも敵は牙を剥く。飛行降魔が襲いかかり、ギリギリの操作で王龍を駆使してかわすユイだが続いて迫る魔操機兵の群に回り込まれてしまう。

「しまった…!」

完全に包囲されてしまった。かなり、まずい…状況は悪化する。このままでは、自分すら危ない。されど、シャオロンたちが臙にかかり





すみれに気がついた時、彼女は見てしまった。  
届けるべき相手の命が最早、風前の灯火であることに……

「そんな…間に合わなかった……」

【「いや、まだだ。」】

「…だ、誰!？」

諦めかけたその時、懐から声が響く。優しい男性の声色：ロッキン  
グホッパー・キーから聞こえるようだ。どういうわけか、光を帯びて  
いる… 何事!？」

【「このキーを早く息子に。まだ助けられる。」】

「…む、息子? は、はい?」

三式光武から降りて、或人の元へ駆け寄るとより一層強く光と共に  
熱を帯びる。すると、ロッキングホッパーのキーはさくらの掌の中で  
完全に原型を留めない別のアイテムへと変質する。アサルトグリッ  
プに近いが、何処と無く三式光武の横顔を思わせるデザイン：『ス  
チームグリップ』とでも呼ぼうか…

「これは……こうすれば良いのかな…」

頭の中にぼやっと浮かぶイメージを手探りで行っていく… 或人  
の懐からシャイニングホッパー・キーをおもむろに取り出すとこれに  
接続。『CAUTION』とか音出たけど大丈夫だよな?

あとはゼロワンドライバーを装着させて翳して装填すれば…

【「オーバーライズ!!」】

「ひゃっ!？」

突然、或人を包む強い光……。ふわりと浮き上がると待機音を鳴らしながら骨折など大きい怪我は治癒していく。『やった……!』と喜んだのは束の間……。浮遊する彼はどういうわけか吸い寄せられるようにコックピットが開け放たれた三式光武の中に。

「え?。ちよ、ちよつと!？」

あれ……。この流れは……。さくらに悪寒が走ったが、もう遅い。

「変身!!」

「Warning! Unknown unit connected. Is it OK? ツインライズ!!!」

その時、ゼロワンドライバーのシステムと三式光武の機関が接続されシャイニングホッパーに変身。そして……

バアアアアアアアン  
!!!!!!!

「……へ?」

三式光武が粉々に吹き飛び、滅亡迅雷のロストモデルのように装甲として再構成されシャイニングホッパーの追加装甲として装着され



## 太正の輝き 参

…その技は猛る竜が如く

「はあああああああ  
!!!!!!」

シャオロン駆る王龍の拳、蹴りの流れるような連撃は流れるようでありながら凄まじい。簡単に魔操機兵の群れを平らげ、積み上がる残骸は瘴気となりドドドドドド!!!!と爆発を起こす。

上海の龍の銘を背負い、その上海華撃団隊長の名に恥じぬ戦いぶりだ。

「ライダージャンプ…!」

【 R I D E R J U M P 】

一方のキックホッパー…こちらも遅れることはない。襲いかかる魔操機兵をライダージャンプでかわし頭上から一瞥…そのまま、紫電走る脚で獲物を蹴りつける。

「ライダーキック…!」

【 R I D E R K I C K 】

穿たれる魔の装甲…それで、終わりではない。右足のグリップが伸縮し再び跳躍し別の魔操機兵へ再びライダーキック。更にこれを何度も行い周囲を一瞬で全滅させてみせた。霊力が無いとはいえ、歴戦の仮面ライダーである彼の實力はライダーシステムの性能差で一概に断定出来ない強さを持つ。

このふたりなら降魔なんぞ…と思うかもしれないが、実は戦況は芳しくない。



「バスター・ダスト」

「ぐえッ!!」

唐突なカットイン砲撃が荒吐を襲う！コアユニットの顔面に強烈な一発が入ったため上級降魔の臍でも呻くような衝撃で機体が揺れた。馬鹿な、目の前のムシケラたちは飛び道具など無いはずなのに…!?

「誰だ!？」

「…俺だ!!」

そして、続けざまにキックをもらう。直後、痛む顔面を押さえる手の狭間からの視界が映したのはゼロワン…しかし、さっき潰した間に合わせの姿ではない違う姿。霊子甲冑や霊子戦闘機を併せたようなデザインにスツと立つ自信に満ちた様子は先の焦りは露ほども…否、皆無である。

「お前エ…さっきの…！　なんだ、その格好は…」

「よくわかんないけど、新しい力だ！　これでお前を倒すぞ、臍!!」  
「ハッ!!…やれるもんならやってみなア!!」

上等だ…！　一気に、荒吐のビットがレーザーを放ちゼロワンを狙う。これをゼロワンは前方に踏み出し加速をかけると、踵の車輪で

滑るように移動する。ローラースケートのような動きで右へ左ほ、文字通りに死線を掻い潜り荒吐へ迫っていく。

「ふっ！ はっ！ よっつと!!」

「何!? コイツ、さつきまで死にかけだったじゃねえか!? クソツ、クソツ!!!」

「相手を見下すから、見落とすんだ:!! 当然だろ!」

「黙れ!! 荒吐イイ!!!」

あと一步で届くところで荒吐は分身。同じ荒吐が無数に空間に現れてゼロワンを囲む……全てが本物ではないだろうがこの手の幻影はシャオロンやキックホッパーも手を焼いている。

しかし、ゼロワンには彼等には無い『力』があるのだ。

「…演算!! そこっ!」

シャイニングホッパー由来の演算能力…加え、太正の技術である蒸気機関や擬似的に霊子甲冑などのコアである霊子結晶再現して装着したユナイトドライブコアが連動して臙の位置を割り出し分身の一体を示すと同時にドライブバーのスチームシャイニングホッパーキーを押し込む!!

「はあああああああ!!!」

「シヤイニング・ブロットサムイン  
パクト!」

腰を素早く落としてから一気に跳躍し、桜色の衝撃波を出しながら唸りをあげるライダーキックを荒吐のコアユニットへ一撃。荒吐も咄嗟に防御の姿勢をとったが、ビットごと粉碎され抉られ臙は悲鳴をあげた!



「ぎゃああああああああああああああああああ?!?!? 俺が、この俺がツ人間なんかにはいいいいいい?!?!?」

致命的なダメージにぐらつく荒吐。幻影も解け、ふらふらと墜落する機体…もう限界だろう。

「ゼロワン、テメエの顔は覚えたからなア!! 次は粉々に磨り潰して……!」

「じゃあ、俺たちの顔も覚えとけ!!」  
「ツ!」

逃げようとした臆だが、だめ押しと今までやられた借りを返さんとはばかりに王龍とキックホッパーのライダーキックが迫っていた。完全に駆動系が麻痺した荒吐…勿論、かわせる術などあるはずもなく……

「嫌だ……死にたくない……」

正義の鉄槌に貫かれ、大爆発を起こすのであった。



荒吐の撃破に呼応してか、魔幻空間はガラスが割れるように崩壊し

て元の帝都の風景が帰ってくる。残りの降魔ももういないだと、ゼロワンはドライバーからキーを抜き取ると変身解除：外れたパーツが再構成され元の光武が復元され、地に降り立つ。自分も予想外だったが、さくらを驚かせてしまっただろう：あとで謝るのと……

「ありがとうな……」

膝をつく光武に手を伸ばし、そつと撫でる。取り敢えず、コイツがいなければ自分は助からなかっただろう：ヒューマギアみたいに意思があるかはわからないが、お礼を言っておこ……

「私の光武うううう」

!!!!!!

ドゴツ（或人が弾きとばされる音）

「ぐえッ!!」

メリッ（骨折が再発する音）

「ぎやああっ!?!」

しかし、突然に後ろから飛んできた何かに或人は弾きとばされ地面に投げ出された。すると、今まで忘れていたケガの痛みが一気に襲いかかり、悶絶するも弾きとした張本人である天宮さくらは泣きじやくりながら自分の愛機に抱きついて頬擦りしている……

「良かった！ 私の光武う!!」

「いや、あの……こっちは大丈夫じゃないんだけどなあ……。……うつ」

「へ？ ……あつ」

あつ…つて、今気がついたのか。

「どうやら、皆さん無事の様子ですね。」

「すみれ支配人！」

だから、無事じゃない。シャイニングスチームホッパー…感覚的なものだが、降魔への攻撃弱体化や特殊能力の無効果や蓄積したダメージの緩和などがあるようだ。まあ、後者に関してはさくらのせいで台無しになったが…

王龍に乗る上海華撃団と変身解除した矢車に引率される形で合流したすみれに取り敢えずは安心。あとはこの悶絶するほど酷い痛みをなんとかすれば良い。

「さくらさん、改めて無事でしたのね。本当によかった…」

「はい。天宮さくら、戻りました。説明は今この場では…それに、ご迷惑と心配をおかけして申し訳…」

「いいえ、本当に…よかった…」

もしもーし…？ ここで、頑張った怪我人放置はひどくない？

と、ここで気がついた矢車が或人を助け起こす…

……のではなく、その前に這いつくばって

「良いよなあ？ こうやって地べたに這いつくばって空を見上げるのは…」

「……はい？」

地面に頬擦りして不気味な笑顔。或人もドン引き、ユイもコック

ピットの中でドン引きして顔をひきつらせている。そんな中、『弟にならないか?』と勧誘してきたので結構ですと断りを入れておいた。

「そうだ、はやく帝劇に戻らないと…! それに、社長さんの手当ても!!」

何はともあれ、一段落。僅かな間とはいえ、離れていた仲間たちに顔を見せねばとさくら。サラツと或人の扱いがついでは指摘しないでおこう…。安否確認や報告のもろもろと色々あるが今は家である帝劇にいち早く戻りたい。

…そんな時だった。シャオロンが入ってきた通信に顔色を変えたのは

「こちら、上海華撃団のシャオロン…………… 何ツ!? 帝劇が!」

風向きは再び不吉な方向に舵をきった。



「ぐあっ!!」

グシャツと地面に叩きつけられ、鋭い爪をたてられる深紅の機体。

初穂が操縦する光武の装甲は切り裂かれ、かかる圧力に計器はけたたましい警告を鳴らして、コックピット中から火花が散る。このままいけば、パイロットの初穂ごと握りつぶされるアルミ缶みたいになるのは時間の問題だと誰もがわかる。無論、反抗こそはしようとするが『敵』の力が文字通りの桁違い過ぎた。

クラリスも初穂を助けるべく光武を動かそうとしまが、光武をも凌駕する異形の巨体に対峙するだけで全身に走る恐怖のほうがり勝り動けなくなっていた…。

「Oh, den Diwel…(あ、悪魔……)」

金の角に紅い眼：昆虫のような紅い血濡れたような紅いボディと嘲笑うような銀の口元まさしく蟲の悪魔。肌で感じるそこらの降魔と異質かつ異常な存在感はこの太正の世界に由来するものではない。平成のある時代、『平成の1号』と呼ばれた英雄の力を歪め産まれた怪物……その名を『アナザークウガ』。アナザーゼロワンと同じ、仮面ライダーの歪んだ虚像の類いかつアナザライダーの中でも群を抜く体躯と火力を持つ。

そんな、アナザークウガを操るのはアナザーゼロワン シャイニングアサルtpホッパーである。

『ねえ、きつさと『帝鍵』だがなんだが知らないけど、渡してくれないかしら？ 大人しく差し出すなら、このくたびれた劇場は吹き飛ばさないであげるときつきから言ってるのだけど……？』

「知らねえって、言ってるだろがッ!! ここにそんな物は……うわああああああああ!？」

『貴女に答は求めていないわ。』

初穂の光武を今にも踏み潰さんとばかりに、アナザークウガはおさえつける力をあげる。メリメリと徐々に本来の輪郭を崩していく……助けなくてはいけないのにクラリスの足はすくんでしまう。まるで、

怯える子鹿のような有り様にアナザーゼロワンは嘲笑を向けた。

『全く、仲間の危機でさえこの体たらく…噂には聞いていたけど、堕ちぶれたものね…帝国華撃団？ 見るべきものもなさそうだし、それだけ大層なものなら簡単に壊れやしないでしょう。』

オーソライズバスターをガンモードにし、ドードゼツメライズキーを装填…クラリスの光武を直線上に銃口を向ける。アナザークウガも角に荒ぶる電撃を走られ、狙いを定めていた。このふたつが直撃すればいくら霊子甲冑だろうとひとたまりもない。

「クラリス、もう良い！ はやく逃げろ!!」

「駄目です、私が逃げたら帝劇が……!」

神山が通信で逃げるように叫ぶが、彼女は従わずにせめてと自身の愛機の武装である本型のデバイスを起動して全面に向ける…… 自分を犠牲にして盾になるつもりなのだ。

「落ちこぼれだって、弱くたって、私には華撃団の団員として意地があります…! 盾くらいには……!」

『なると良いわねえ。』

そして、アナザーゼロワンはトリガーを引き、赤黒い光球が牙を剥く。続いてアナザークウガの雷撃が大蛇のように地を這い、迫る!

魔法陣を盾に展開して、踏ん張るクラリスだが光武がもたないのは明白……

………数秒後、程なくして彼女とその愛機は閃光の彼方へと見えなくなった。

## 太正の輝き 肆

「…クラリス!!」

さくらや上海華撃団が帝劇前に着いた時、既にアナザーライダーたちの攻撃が放たれクラリスの光武の姿は爆発の煙で見えなくなっていた。あちこちで、チラチラと火が燃え、立ち込める焦げ臭いがどれだけ凄まじい威力だったかを物語る。

「クラ…リス…：… そんな…：… 嘘…：…」

「ボケツとすんな！ ユイ、矢車!!」

呆然とするさくらを叱咤し、王龍を駆ろうとするシャオロン…しかし、気がつく。

アナザーゼロワンがこちらに気を向けず、未だにクラリスがいた場所に眼を向けていることに…

『あなた…：… 誰?』

晴れていく煙の中…クラリスの光武はまだ原型を留めて踞っていた。そして、彼女の前に刺さっていた獲物…槍。大きさから霊子甲冑などの武装だが、帝国どころか上海華撃団にも槍を愛用する隊員はいないはず。

しかし、立っていた…：… 槍を引き抜き、肩に担ぐ『白銀の光武』が。

「…：…え?」

クラリスは自分がまだ生きていることに戸惑いながらも顔をあげた…：… 未だ、紫電を帯びる槍…：…腰には二振りの刀がマウントされているのに加え、背中にはマシンガン。霊子甲冑にしては異様に重武装だが、この機体は間違いなく自分の愛機と同じ三式光武。恐らく、こ



の機体が自分を庇ってくれたのだろうか、既に旧式の機体でアナザライダー2体の力を打ち消すなどただ者ではない。

すると、白銀の光武はクラリスの光武へ優しく手をあてる。

「よく頑張ったな。ここからは、俺に任せろ。」

(男の人…?)

スピーカーからしたのはまだ若い落ち着いた声。パイロットのものだろう…すると、白銀の光武は槍をアナザークウガに投げつけ初穂を解放させる。そして、刃を抜き放ち構えるとコックピットを開けて見栄をきった。

「俺は…新生帝国華撃団 花組隊長、『神崎 星児(かんざき せいじ)』…」

……神崎すみれの息子だツ!!!

………息…子…?

周囲は突然の宣言に固まっていた。

神山と似たスーツに身を包むまだ少年の残り香を残す赤寄り茶髪の青年…確かに、堂々とするその横顔にかつてのトップスタアの面影があるような気がしたと後にクラリスは語る。しかし、上海華撃団や仮面ライダーたちは愚か、さくらとクラリスも自分たちの上司に子供がいたとは聞いたことがないと啞然とするばかり。必然的にすみれに視線が向くが、こちららも頭の理解が落ち着いていない様子……

(そんな…、あの子には華撃団の復活のことはまだ……)

「おい、まさか…本当に帰ってきたのか!? すみれ支配人!」

初穂の叫びに我にかえるが、その間に状況は進む。槍を受けたアナ

ザークウガは怒りを剥き出しの唸り声をあげ襲いかかろうとしたが……アナザーゼロワンが手を挙げ制止。すると、不敵な笑みを洩らしながら銀色のオーロラを呼び出した。

『あらあら、邪魔が入ったわ。出直すとしますかね…それじゃ、また会いましょう。』

「！ 待て!!」

シャオロンがその意図に気がつき、追おうとしたが既に遅し…アナザライダーたちはオーロラを通じて撤退して降魔の気配も消える。さて、これで一時は落ち着いたわけだが……

「ひとまず、色々話を聞かせてもらおうか。」

彼の意識はすみれの息子を名乗る青年に向けられる。

……そう、まだ全部の問題は解決していない。



(…OMO) <ゴポポポポポポ…

正直、この扱いってあんまりじゃない？ と或人は思う。大怪我を負った彼に提供されたのは清潔なベッドではなく、人ひとりがまるまる入れる水槽とおぼしき機械装置。戦闘が終わるなり有無を言わさずさくらと初穂に服を剥ぎ取られ放りこまれたのだ。人口呼吸器こそつけていれど、浴槽(?)を満たす茶色い液体になんか浮いてるもずくみたいな海藻(?)に不穏な空気を感じずにはいられない。……怪我の治りがはやくなるらしいが、大丈夫なのこれ？

……そんな或人はさておき、場所は支配人室。

帝国華撃団の面々は勿論、上海華撃団に矢車…

…そして、

「改めて、俺は神崎星児！ 帝国華撃団 花組隊長だ!! よろしくな  
！」

問題の青年、神崎すみれ支配人の息子を名乗る彼。髪色といい雰囲気といい何処と無く似ている気もしなくもないが…なんかこう、暑苦しい。多分、年齢は神山とさくらの間くらい…17くらいか。それよ

りも、帝国華撃団花組隊長とは一体どういうことだろう…すみれと初穂は頭を抱え、それ以外は戸惑うばかり。矢車のみはどうでも良いと部屋の隅でカップ麺を啜っていたが……

取り敢えず、ユイがこそこそと神山を小突き……

「…(クビ?)」

「……(…違うと思いたい。)」

率直な疑問をぶつける。いや、神山だって知りたい側だ…まだ彼は隊長になってから1ヶ月と経っていない身である。ちよつと、待つてもらいたい。

さくらとクラリスも、顔を見合わせている。全く話が見えない…すると、見かねた初穂が説明をはじめた。

「あー、その…だ。コイツは星児、すみれ支配人の息子…つてのはまあ粗方事実だ。クラリスが来るのと入れ違いで帝劇を離れたから、知らねえのは無理もねえか。支配人も話してる様子なかったし…」

「久しぶりだな、初穂。おふくろも元気そうで何よりだぜ。で、君たちが新しい花組のメンバーか!」

「…!」

星児は初穂との再会の挨拶を経るなり、関心はさくらとクラリスへ…すると、『あのタイプ、無理です!』とさくらの後ろに隠れたクラリス…必然的にさくらから自己紹介をはじめることになる。

「クラリス…失礼だよ! 天宮さくらです。何か色々複雑みたいですが、よろしくお願いします。」

「さくら……『さくら』か! へエ、姐さんと同じ名前か。」

「……あねさん?」

首を傾げるさくら。星児の言う姐さんとは一体……

「あれだよ、『真宮寺さくら』。昔の帝劇のトップスターのひとりの……」

「ちよ、おまつ!?!」

その時、初穂の顔がひきつった。『真宮寺さくら』…それはある意味、さくらにとつての『スイッチ』であり『地雷』である。迂闊に触ってはならないことは彼女をよく知る人物なら知っている…うっかりでも踏もうなら

「真宮寺さんを……」

「…ん?」

「真宮寺さくらさんを…知っているんですかあああああああああああ  
ああ!?!?!」

「おおおう!？」

(天宮さくらの理性が) 爆発する。

やっちゃまったなあ…と神山は呆れていたが、こうなったらもう止まらない。崇拜する憧れの人(オシ)の話はドルヲタにとっては、ニトロも同然である。例え陰キャでも饒舌にそれを語り、場合によっては語彙力や理性すら吹き飛ばす爆発力があるのだ。目をキラキラと輝かせ、星児に食らいついたさくらは正にソレ。

「わ、わわ私！ 真宮寺さくらさんの大ファンなんですツ!!」

「え…そうなの…？今時の子でだと大分珍しいな…。10年以上前だぞ…」

「し、真宮寺さくらさんは私の憧れの人でツ!! 貴方も同志(ファン)なんですか!？」

「いや、ファンとは違うぜ…？ なんとというか、育てられたんだよ、俺は。昔の帝国華撃団にさ…。だから、姐さんも世話してくれたひとりで…」

……一緒に風呂に入ったりとかしたぞ。ガキの時とか。」

「ファッ」

核燃料、投下されました。

さくら(ドルヲタ)の心臓があまりのショックで一瞬止まる。咄嗟に、クラリスは危機を察して、初穂の後ろに隠れた。

「なんて、羨ましいiiiiiiiiiiiiii!?!? ハッ

！ つまり、この手は生の真宮寺さくらさんに触ったことがある手ツ!! つまり、この手に触れれば、さくらさんと間接的に触れあえたことに……」

「ねえ、君さ大丈夫？ ちょっと、怖いんだけど……」

星児の手をとって、明らかにメインヒロインがしちやいけないうえへへ……と顔をだらしなくする様は些細なことで動じないシヤオロンですらドン引きしており、ユイも『へ、変態だ……』とさくらへの認識を改めつつあった。

このままでは混沌が続くと危惧した神山がさくらを星児から引き剥がし落ち着かせる。とにかく、事情を知るであろうすみれに確かめなくては……

「すみれ支配人、これはどういうことですか!？」

「はあ……血は繋がってはいませんが、確かにわたくしの倅(せがれ)ですわ。こんな形で皆さんにお話したくはありませんでしたのに……」

「もしかして、養子……?？」

「ええ、その通りです。ここ3年ばかり前に帝劇を突然、飛び出した以来……ろくに連絡を入れないで何処をほつつき歩いていたのやら。」

息子、という点親子の再会にしては眉間にシワを寄せている顔のみれ。星児とは対照的に喜んでるわけではなさそうだ……

すると、星児はビシツと皆へと宣言する。

「俺が来たからには、もう安心だ! 必ず、この帝国華撃団を再建してみせるツ!! 皆、俺についてこい!」

自分が華撃団の隊長……そう全く疑わない発言。流石にさつきまではしちやいでいたさくらでさえ、これはどうしたものかと迷うがすみれは無慈悲に告げる。

「星児、何を寝言を言っているのです？ 帝劇を無断で離れた人間に隊長を任せられることがあるわけじゃないでしょう。」

…あ、この流れは。神山は察した、火が自分に燃え移ろうとしてると。

「お、おふくろ…?」

「耳をこじ開けてよく聞きなさい。今の花組の隊長は、そこの彼…神山誠十郎くんですわ。」

やっぱり…誰か助けて。理不尽な災厄の渦の中心に巻き込まれながら神山は自身の不幸を呪うのであった。



## 帝都篇

### 再起の鼓動 I

「くつついた〜！」

翌日。すつかり、回復した或人は帝劇の地下施設の廊下を歩いていた…

いやあ、驚いた。割りと洒落にならない怪我だったが、ほぼ全快に近く身体に大した痛みも無い。西暦にすれば1941年にあたるらしいが医療や霊子戦闘機といった一部の技術は令和をも凌ぐかもしれない。まあ、ゼロワンの世界のヒューマギアやライダーシステムも太正世界から見れば大概だが…

今、或人は眼鏡に黒スーツのキリツとした女性『竜胆 カオル』に連れられすみれ支配人の元へ急いでいる。

「もう痛みなどはありませんか？ 無理はくれぐれもなさらないようにとすみれ様も仰っていられたので。」

「ん〜、取り敢えず平気かな。でも、色々と話すことは山積みだね。」

怪我の油断こそはできないが、それよりも或人の問題は早く令和の世界に戻り、飛電インテリジェンスに復帰することだ。滅亡迅雷・netが壊滅したとはいえ、社長の業務は勿論ある。イズが何とかうまくやってくれていると願いたいが、恐らく副社長の福添あたりは事故のようなものとはいえ自分の不在にカンカンに怒っているだろう。この太正の世界を放っておくのは気が引けるが、元々さくらたちがいるのだし平気だろう。

…で、どうやって帰ると言われれば言葉が詰まってしまふのだが

「…ん〜？」

ふと、足を止める。廊下の先に誰か……すみれと神山、あとは知らない青年。まだこの時、或人は星児のことは知らないためそんな認識だった。ただ判るのは恐らく良い話というわけではないことだろう。特に、すみれの顔はまさに冠といった様子……

「何をふざけたことを。あなたにそんな権限はありません！」

「そうだ！ さくらたちのことを考えろ!! アイツらだって、必死にやってるんだ…それを踏みにじることだぞ!!」

神山もかなり声を荒げている。どちらも普段は優しそうな雰囲気なのに、怒りを露にしている……対し、星児は冷たい視線を向けていた。

「気持ちで、華撃団大戦を勝ち抜けるか？ 帝都を守れるか？ …今のアイツらじゃ、到底無理だろ。おふくろも神山も、現実見ろよ。施設もボロいわ、人手は足りないわ、公演はあの始末。挙げ句の果てに守りは上海の連中に丸投げ。再建どころか、廃れてく一方じゃねえか。…ガキのお遊戯じゃねえんだ。」

「……なんだと!?!」

まずい! ついに神山が掴みかかろうとした時、或人は走り割って入る。暴力は止めなくては!!

「待つて! 一体、どうしたんですか?」

間一髪、勢いを削ぐことには成功。完全に部外者である或人の介入で、神山も不発になった。すると、星児は背を向けて言い捨てる。

「俺はお前たちを帝国華撃団とは…花組とは認めない。」

神山とは意味合いは違うが、こちらも言葉を静かに怒気が帯びてい

た…。彼は立ち去っていき、すみれの目配せでカオルが領いて後を追う。

ひとまず、嵐は去った。されど、空気は重く…すみれは申し訳ないと頭を下げる。

「すみません、お見苦しいところを…」

「いえ。あの、さっきの人は？」

「…わたくしの倅（せがれ）です。 …はあ。」

星児：ああ、アナザークウガを退けた強襲型光武の…あの見栄をきれば嫌でも印象に残るわ。でも、わざわざ息子だと名乗るくらいなら、仲がさぞかし良いのかと思ったがあのをやり取り…些か気にかかる。

「神山くん、或人さんを任せます。わたくしはまだやらなければならぬことがありますから。」

「はい。了解しました。」

それから、すみれが去って神山とふたりきり。結局、残された者同士で気まずい空気が流れること数秒…すると、神山が苦笑いしながら口を開いた。

「あー、えと、社長？ こんなところでは難ですし、場所を変えましようか。」



「引き抜きッ!？」

帝劇の劇場側面の1階廊下…支配人室や楽屋やらが建ち並ぶ場所を神山に連れられ歩く或人。先の件について聞くと、どうやら星児が無断で『引き抜き』を行っていたらしいのだ。

「まあ、平たく言えば。星児と縁がある華撃団に片っ端から声をかけようとしていたのをたまたま、俺とすみれ支配人が見つけて…で、さっきのように…」

引き抜き…意味合いとしては、他の国の華撃団から帝国華撃団への勧誘ということか。でも、それなら帝国華撃団にとってはプラスであつてもマイナスにはならないはず。あんな劍幕にならなくても良いのではないかと正直思う或人。

「アイツは、自分の目をつけた奴を花組の主力に入れようとしてたんだ。確かに、それは正しいかもしれない。でも、今まで何とか帝劇や華撃団を支えてきたのはさくらやクラリス、初穂たちなんだ。確かにまだまだアイツらは演技も戦いも未熟だけど…それを…」

「か、神山さん…」

よく解らないが、無断人事の先走り…しかも未遂にそこまで怒る？  
独断とはいえ、華撃団を思つてやったことでは？

『その人事が採用された場合、天宮さくらさんといった団員の立場が無いからではないでしょうか?』

「あーそういうことか。」

イズからの説明に納得。神山は隊長として、さくらたちのプライドを守ろうとしてたのだ…

……は？

今、馴染み深いがこの場にいないはずの秘書ヒューマギアの声がいや、そんなはずは……彼女はこの世界に来てないはず… と、振り向くと

「…イズ!？」

『はい、或人社長。』

「ええ!?! どうしてここに…」

いた。いや、なんでさ…神山も『知り合い…?』と驚いている。突然の再会は嬉しくもあるが、彼女は令和の世界に置いてきてしまっていたはず…。いくら特別なヒューマギアとて並行世界を渡る術は無いは勿論である…当然生じる疑問についてもイズはいつも通りに丁寧な喋りで答える。

『オーマジオウさんのおかげです。あのお方が或人社長には私が必要だと話を受け、衛星ゼアごことこの世界に送って頂きました。』

「…へえ。 ……ゼアごこと?」

『はい。これで、こちらの世界でも問題なくゼロワンの力が使えるようになったはずです。』

あー、だから朧戦の時にゼロワンドライバーが復活したのかと納得。衛星ゼアが太正の世界にあるなら問題ないが、それをイズごと持ってくるとか何者なんだオーマジオウ…。

しかし、ちよつと待つてほしい。衛星ゼアがこっちにあるということとは飛電インテリジェンスの営業や令和世界のヒューマギアたちに影響が出るのでは？

「まった、イズ…それってヒューマギアたちが…」

『それは、問題ありません。今、令和の世界はオーマジオウさんの手によって時が止められていますので業務に支障をきたす可能性は限りなくゼロに近いと衛星ゼアも判断しています。』

「ごめん、何言ってるか全然わかんない。」

要は現在、オーマジオウが重加速やタイムベント、ポーズといった時を操る能力を全開にして令和世界の時間そのものを止めている：故に、或人が令和世界では太正世界に座礁してから、実はあんまり時間は経っていないのである。無論、そんな無茶苦茶なことが出来るのは我が魔王だからだ。平成ライダーの歴史を甘くみるなよ…？（平成理論）

「イズちやくん！」

そこへ、息を切らして走ってきたのはさくらと初穂。イズを追ってきたのだろう… 割りとイズの運動能力は高いので並み大抵の人間のスペックでは追いつけない。

「やっと追いついた…」

「たく、あんなふざけた走り方でなんて速さだよ！」

初穂が悪態をつくのも無理もない。イズの走り方は基本、前へ組ん

だ手を崩さないで独特なフォームとテンポで走るのだから。

さて、状況がここで一番理解出来ていないのは神山である。イズがそもそも何者なのか、それをさくらが説明する。

「神山隊長、こちらはイズちゃん。或人社長の秘書をしている『ひゅーまぎあ』？ で、良いのかな？ すごいんですよ、ロボットなのに生きている人間と全然、見分けがつかなくて……」

「ヒューマギア…ああ、君が社長が言っていた！というか本当にロボットなんだ…成る程、凄いなこれは。」

令和技術の象徴のひとつたるヒューマギア…話には聞いていたが、実物となると神山もその技術に唸らざらえない。太正世界にはこれに相当する存在は無く、やはり或人は別の世界から来た住人だと再認識させられる。

すると、『そういえば…』と初穂

「なあ、隊長さん。さっき星児のやつがすげえ剣幕で歩いてたんだが…何かあったのか？」

「…ちよつとな、色々あつて。」

どうやら、星児とすれ違つたらしい…そして、神山の気まずい表情から何となくだが初穂は察した。恐らく、危惧していたことが起こるべくして起こつたのだろう。快活だった彼女の顔にも曇りが生じる。

「神山隊長、ちよつと付き合ってくれ。話がある。」



何処かの廃工場： 何処となく滅亡迅雷netのアジトを思わせそんな空間に蒸気機関の機械類はまだ使えるにも関わらず、打ち捨てられていた。確かに旧くはあるが、勿体無いと見る人が見ればわかるだろう…。これにアナザーゼロワンが自身のアナザーウォッチを埋め込み、起動させるとその形と本来の用途を変えてビキビキツと不気味に変貌していく。命を得たように、蠢く蟲のように自らを動かし、切断し、溶接し、新たな主のために自身を創りなおす。

これに、満足げなアナザーゼロワンは微笑むと変身を解除して本来の人間の姿を露にした。金髪に中性的な顔立ちだが目付きは大蛇のように鋭く、纏う空気も怪しい…。服装はウォズのそれととてもよく似た白色のもの。

「…上場ね。」

ガラガラとした声で笑みながら、作業を続ける。機械から複数の触手を発生させると近くのテーブルまで伸ばし、先端の眼球からビームだして何かを形成させていく。まるで、衛星ゼアがプログライーズキーを創るように…

「さて、…何か用かしら幻庵？ こう見えても忙しいのだけど？」



「…」

辺りの空間には何もない。しかし、来客を感じとった『彼』は居ない誰かに話しかけると…背後の景色が歪んでフードの男が現れる。『幻庵』と呼ばれた男の顔は影で見えないが、肩に力を入れている様子から察するにどうも苛立っているようだ。

「よくもまあ、白々しいな貴様。何がタイムジャッカーだ!! 帝鍵無くとも幻都を解けるといふ話だから、夜叉や朧も貸したのになんだあのザマは!?! あまつさえ、異界の者どもが流れこんでくる始末… 状況は悪くなっただけではないか!?!」

「私は『ネオ・タイムジャッカー』の『レクス』ですよ幻庵。あとその程度のことなら予想の範囲内…オーマジオウの封じ込めが出来た時点で大きな収穫よ。」

ネオ・タイムジャッカー…レクス。それは、仮面ライダージオウの物語にて平成ライダーの歴史を弄び悪逆の限りを尽くした組織の名を受け継ぐ存在。同じく、レクスも同列の存在である。また厳密には降魔ではなく、降魔側に強力しているだけにすぎない。

一方の幻庵は降魔だ。朧や夜叉と同じ上級降魔であり、異形たちの司令塔である。レクスとはあくまで協力関係にこそあるがこちらはかなり不満がたまっているようだ。

「貴様、何を企んでいる…?」

「それは、最初に言ったはず。私の目的はオーマジオウを倒すことと、『太正の1号』を手に入れること。その過程で同じく『帝鍵』を求めたからこそ共にいる。そこに何の変わりも無いわ。」

何度も言わせないで頂戴、とのらりくらりとするレクスに更に苛立ちを募らせる…。手元からズルズルと伸びる触手が呼応するようにしなり、ビュツ!!と無防備な背中へ…

「舐められたものね。」

「！」

…当たることはなく、幻庵ごと時を止められる。タイムジャッカーの固有能力『時間停止』…これの前では平成ライダーたちも為す術なく、力と歴史を一方的に奪われた凶悪な能力である。無論、降魔とて脱する術は早々無い。

レクスもこれを使え、悠々と幻庵の背後へ歩いていく…そして、去り際に一言。

「ああ、そうそう…夜叉ちゃんはもうちよつと借りるわよ。」

「…貴様！」

同時に時間停止が解除され、振り向いた幻庵の先にレクスはいない。ちつ…と舌打ちすると触手を収納して虚空を睨む。ああ、腹立たしい。変わった力と奴の語った話に興味深いと軍門に引き入れたのに全く思い通り動かないのでは意味が無い。厄介なら殺せば良いと思ったが想定以上に始末に追えない。

…されど、幻庵は口元を吊り上げた。

「まあ、良い。降魔皇様さえ解放されれば…レクス、貴様など一捻りだ。真つ先に貴様を生け贄にしてやろう。」

そして、幻庵も廃工場を去る…

残ったのは作業中の触手たち。邪悪な光が織られるテーブルの上では、新しいゼツメライスキーが誕生しようとしていた。

## 再起の鼓動 Ⅱ

…翌日。

帝劇は歌劇団としての活動…即ち、舞台公演を行うことになる。そう、帝都を刃を持って守る花組のもうひとつの顔。華撃団維持の収入としての意味合いもあるが、魔を祓う祈祷の意味合いもあるのだらしい。

多々、色んな側面があるこの公演を或人とイズも是非ともと見ることになった。役者を務めるさくらも『星児さんを見返してやります！』とやる気を出していたが、一方の初穂の眼は泳いでいた…どうしたというのだろう。クラリスに至っては遠い眼で何処かを見つめている始末…

「…気にしないでくれ、本番前は皆こんなかんじなんだ。」

モギリとして劇場の窓口に立つ神山の悲しげな笑顔に見送られて、或人とイズは劇場の座席へ。施設はまあ古くはなっているが赴きはあると思う…。

「さくらちゃんたちの演技かあ…。それにしても、降魔と戦いながら役者の仕事って凄いやなあ。」

『…：或人社長、公演時間が間もなくです。私語は控えましょう。』

「え、もう？ でも客席ガラガラ…」

片手で足りるくらいしか客席は埋まっていないが、開演を告げるブザーが響く。まるで、最終日の映画みたいな風通しでだけど本当に時間あつてる…？戸惑う或人を尻目に文字通りに帝劇の舞台の幕が上がる。

……公演開始から数十分

「……なにこれ。」

思わず或人の口から洩れてしまう言葉。基本、滅多なことでもない限りは怒ったり、嫌みを言ったりすることはない彼からしても花組の舞台の内容は想像を絶するものだった…。

演目は『桃太郎』、仮にも軍隊の組織かつ年頃の乙女たちのやるにはもつと他に題材があると思うのはひとまず置いておくとしてだ。役の兼任があまりに過ぎる…主役のさくらは桃太郎一本だが、クラリスと初穂に至ってはそれぞれお爺さんとお婆さんの他に、猿と鬼役まで担うのは流石に無理がある。そして、犬とキジはリストラ…寂しい桃太郎だ。

と、まあ明らかに3人でまわすのは無理な内容な上に更に酷いのが…

「桃太郎ーオ、これで終わりだーあ!!」

「鬼い！俺が、お前を倒して村に平和を取り戻すっ！」

…演技そのもの。

本人たちは至って頑張っているのは判るが、如何せん無理に無理を重ねたこの桃太郎…今は鬼との決着であるクライマックスだが、演者たちの力み過ぎとステージのボロさが相まって滑稽に見えてしまう。…さらに、挙げ句の果てに

ガタンツ!!

「へ？」

なんと、演技中に床板が抜ける。そのまま、さくら桃太郎と初穂鬼はまっ逆さま…岩のセットも倒壊して隠れていたクラリス猿が露呈し、『う、うき!』と誤魔化しながらその場を逃走。同時に舞台の幕は降りていった。

「ふひひ、これが見たかったんだ！」

「流石、花組! 今日笑わせてくれるな！」

数少ない観客も目当てはこの花組の醜態。『笑うな!』と怒りたいが、残念ながらこのクオリティで金をとるなら真面目な演技を期待した一般客の場合どれだけのクレームが飛んでくるか…。

「これ、本当に大丈夫なの…。」

…事態は深刻。

そんな一部始終をある客席から星児が険しい顔で見ている…。



「今日も散々だったな…痛つつ…」  
「気分は最悪です。」

初穂が気だるげに洩らす声とクラリスの嘆き…  
帝劇2階のサロンに花組のメンバーは集まっていた。カフェのよ  
うな雰囲気があるこの空間は彼女たちの憩いの場…しかし、丸テーブ  
ルを囲う乙女たちの顔は憂鬱そのもの。湿気がジトジトと上がりそ  
うな空気だ。

神山も或人とイズを連れてやってきたものの、『あー…』と顔に手を  
当てた。

「やっぱりこうなってたか…。おい、皆…気持ちは察するけども、うじ  
うじしててもどうにもならないぞ。」

「だけだよお、隊長さん。なら、どうしろって言うんだよ。」

「それは…」

「もうふたりともしっかりしてよっ!!落ち込んでる場合じゃ…!! 華  
撃団大戦も近くなってるんだし!」

さくららが叱咤するも、逆効果。『はあ…』とため息をつくばかり…。  
特にクラリスは悲壮な顔をしていた。

「こんな演技じゃ無理ですよ。それに、光武も私や初穂さんの機体はもう動きません。帝都の笑い者から世界の笑い者になるだけですから。」

「クラリス！」

「だな…。これじゃ、土俵にすら立てねえ。」

「初穂まで！」

華撃団大戦？ 首を傾げる或人…すると、察した神山が説明してくれる。

「華撃団大戦ってのは、2年に一度に開催される世界中の華撃団が演技と戦闘の技術で頂点を競い合うイベントだよ。それが今年も帝都が開催地なんだ。」

成る程、いわば華撃団オリンピックというところか。或人たちはまだ上海華撃団しか出逢ったことはないが、世界中にはまだまだ沢山の華撃団がある。そして、彼等は向かう先を帝都に向けており、その戦艦の幾つかには或人と同じ『仮面ライダー』が乗っていることはこの場の誰も知らない。

「へえ…。でも、これじゃ…」

「すみれ支配人も何か策があるようだが… 時間は限られてきている。このままだと、厳しいな…」

神山はすみれが独自に動いているのは聞かされていた…が、彼女たちに演技指導出来るとしたらそれこそすみれだけなので、自力があげられないというジレンマ。花組隊長として上司を信じてはいるが、現状は中々歯痒いものがある。ならば、自分がしっかりしなければ…自分まで落ち込んでしまえば完全にこの花組の心臓は止まるのだ。情けなくとも拳を握り、今はこうえ…

「無理だろ、このザマだよ。」

「星児……！」

その時、冷たい言葉が皆の胸を刺す。

星児だった……付き添っていたカオルが制止を振り払いながら、歩いてくると不甲斐ない少女たちを見下していた。怒り、侮蔑、向けられる感情は無慈悲。おおよそ仲間に向けるそれではない視線。

「お前ら、本当に帝劇守る気あるのか？ 戦闘も演技も何一つろくに出来やしねえくせに華撃団大戦……？ ふぎけん。あとどれだけ帝国華撃団の看板に泥を塗れば気が済む？ まだ足りないのかお前たちは!!」

「坊っちゃん！ 言い過ぎです！」

「黙ってて下さいよ、カオルさん。俺はコイツらが許せねえ。何だつて、おふくろはこんなズブの素人だらけの連中に……！」

「星児……!!」

見るも聞くも耐えられず、とうとう掴みかかる神山。胸ぐらを掴むが、星児は動じずキロリと目線を移す……

「なんだよ。お前だつて自分が隊長に相応しと思つてんのか？」

「なに……？」

「調べたぜ……お前のこと……海軍にいた時のこと……『自分の艦を沈めた間抜けの船長』だつてなあ!!」

「っ!？」

次の瞬間、パンツ！と乾いた音がして星児がよろめいた。上がる少女たちの悲鳴、拳を握って震える神山……。例えるなら、逆鱗に触れた……普段は温厚な彼からすれば、或人は愚かさくらたちも驚く一面



だった。

すると、星児は口元を拭うと不敵に笑い背中に背負っていた双剣を抜き放ち逆手で構える。

「気に入らねえか、なら来いよ。白黒つけてやる。」

「…貴様ツ！」

対して、神山も腰の二刀流を抜き放つ。まずい！このままでは下手な怪我で済む問題ではなくなる！ 咄嗟に神山をさくらがおさえ、星児を或人が抑えにかかる。

「落ち着いて下さい、神山隊長!! 今、こんなことをしてる場合じゃないでしょ!!」

「星児さん、あんたも挑発しないでよ！」

されど、刀を持ち頭に血がのぼった大の男2人：完全に危険なこの場を止めるにはまだ足りなかった。強引に或人とさくらは振り払われ触発状態に。もう生身で止めるのは厳しいと或人はゼロワンドライバーを……

「望月流忍法 影縫い!!」

「ニツ!?!」

つけようとした瞬間、シュツと何処からともなく現れたクナイが神山と星児の影に刺さり…文字通りに彼等は金縛りのように動けなくなる。すると、そこへ黄色いメイド服のような服装をした小さな少女が現れる。黒髪で目付きが鋭く、今の技とシュタツと軽快な着地は『忍者』のよう……

さくらは気がついた……

「あざみ!? 何処行つてたの…演劇も放り出して!!」  
「あれ、今日だったっけ? ごめん。」

『望月あざみ』…彼女もさくらやクラリス、初穂に続く花組のメンバーである。最年少で、単独行動が多く滅多に帝劇にいない。(実は、先の桃太郎の犬やキジの不在は彼女が一員であったり…) それ故に、メンバーとの再会は数日以来で或人と出逢うのは初めてであった。

あざみは舞台サボりを平謝りすると、神山の足許からクナイを抜いて彼を解放する。

「隊長、落ち着いた…?」

「あざみ……。」

我にかえった神山。心配そうに覗きこむあざみの顔に、テーブルを倒して尻餅をついて呻くさくらや驚愕しているクラリスと初穂。やっと自分が何をしてしまったのか理解した。

「……………すまない、頭冷やしてくる……。」

そう言い残してサロンを後にする神山。

同じタイミングで、紫電を発生させてクナイを弾き自力で脱出した星児。ドアを開け、見えなくなる背中になだめ押しと吐きつける。

「腰抜け。」

「ッー」

今度はさくらが爆発しそうになったが、察した初穂が肩に手を置いて制した。やがて、星児も言うことが無くなったのかカオルと一緒に立ち去っていく。

嵐は去った…されど、尚も暗雲は渦巻く

最中、さくらは気になっていた。

(神山隊長が……艦を沈めた？ どういうこと？)

## 再起の鼓動 III

…神山 誠十郎

帝国華撃団に来る前は海軍に所属していた。まだ若いながら、士官学校で優秀な成績を修めた彼は駆逐艦『摩利支天』の艦長を任されることになる。その活躍ぶりは周囲から『神童』とまで持て囃された程…そして、艦を任されるは神山自身の夢だった

……だが

「…」

神山はミカサ記念公園に来ていた…。芝生が敷かれた喉かな海辺の公園は太陽が燦々とするお出かけ日和ということもあり、家族連れや恋人たちなどで賑わっている…。

ふう…空いてるベンチに腰かけると一息。我ながら隊長という立場でありながら、よりによって仲間の前に感情的になっちゃったと落ち込んでいた。うつむき、頭を抱えるとまたため息がこみあげてくる。

「…ッ（何をしてるんだ、俺は…）」

「誠兄さん…」

そこへ、追いついてきたのはさくら…つづいて、或人とイズ。どうやら、自分気にかけて追ってきたようだ。

「さくらに社長たちまで…」

「心配したんですよ！ 急に飛び出していつちやうから…」

息切れする彼女の様子に、迷惑をかけたと実感する。『ごめん…』と謝ると今度はぶんぷんと怒り出すさくら。

「誠兄さんは何も悪くありません！ そもそも、いくら支配人の息子だからって、あの態度は横柄です！ 私達の隊長は神山隊長ただひとりなんですから…！」

「そうだよ、神山さん！ 仲間を信じない奴に、隊長なんて絶対無理だと思う。」

星児の印象が最早、最悪まで転げ落ちたふたり。先の現場を思い出すだけでふつふつと腸が煮えたぎってきそうだが、対照的に神山は酷く落ち着いていた…まるで、何かを悟ったように。

ふと、そんな横顔にさくらは思い出した。星児は神山を『艦を沈めた船長』と言っていたことを……

「あの…、神山隊長。星児さんがさつき言っていた…その…」

「ああ、そのことか。さくらたちにはまだ話してなかったな。」

「い、言い辛いことだったら、別に!!」

普段は温厚な神山が刀を抜き、あれだけ怒るほど…だとしたら神山に苦痛を与えるかもしれないと危惧した。だが『いいや、いずれ話す

べきだとは思っていた…』と神山。

そして、彼は話す…自らの夢とそれが砕けた運命の日を。

「……あれは、半年前だったか…。」



駆逐艦 摩利支天の艦長を務めていた神山。その日、洋上の巡回任務へと艦を駆り出していた…。いつも通りなら、何も無く終わり港に帰るはずだった。

しかし、この日は違った。

摩利支天のあちこちから火の手が上がり、訪問は粉碎されて船体が傾く。甲板とその上空では異形の影が蠢いていた…。

「…なんで、降魔が!? 上海華撃団は…!」

「まだ到着まで時間がかかるそうです! なんとかこちらで持ちこたえろと…!」

「無茶な!? 我々の武装では…!」

突然の降魔の急襲。そのため、艦橋は半ばパニック状態で、死人こそは出ていないが被害が看過出来ない状況に文字通りの舵とりが出

来ない。頼みの綱の上海華撃団はまだ気配すら何処なのか…

…懸命に足掻こうにも爆発は次々と起こり、ギイイと船体が悲鳴をあげる。

…もう猶予は無い。艦長である神山は苦渋の決断を下す。

「総員、退艦せよ。任務遂行は困難と判断し、これより摩利支天は放棄。救命ボートへ急げ！」

限界の摩利支天を失うのは大きな痛みだった。されど、優先すべきは人命と下した選択…船員たちは悔しさを噛み締めながら逃げだしていくがあるひとり。神山が足を止める。神山が動こうとしないのだ。

「艦長…？」

「何をしてるんだ、はやく行け。俺はこの艦と運命を共にする…降魔たちを港に近づけるわけにはいかない。」

「そ、そんな艦長!？」

「命令が聞けないのか!! さっさと行けと言ってるんだ!!」

神山は覚悟を決めていた。せめてこの摩利支天と共に最後まで戦い一太刀報いられればと…。この艦が墓標ならば本望、命ここで燃え尽きて悔いは無い。部下の船員はそれを察し、涙を流しながら敬礼すると自分も先に言った船員たちと同じく救命ボートへと急いだ。

…さて、行つたか。残された神山は外を見る、すると外で暴れていた降魔と視線があいこちらへ牙を剥く。

「短い夢だったな……。」

刀を抜き、構える。こんなもので太刀打ち出来ないのは解ってる…でも、それはまだ戦う意思があることと、内心は恐怖で震える自分を奮い起たせるため。

そんな彼を喰らわんと異形は涎が飛び散る口を開けた…。

『シャアアアアアアアアアアア…!!!』

「人を舐めるなよ、このバケモノがああああ!!!」

その時

ズドンッ!!!

『ッ!?!』

「!」



とつては、砲弾のような『何か』が降魔を粉碎した。そして、『彼は舞い降りた：燃える炎を背に、正義の仮面を纏う嵐の英雄。その赤い眼が今でも忘れることない。』

——諦めるなッ!!

そのまま、『彼』は有無を言わず神山を抱えあげ艦橋から脱出する。その後、神山は降魔の襲撃を逃れ上海華撃団に救助されることになった。

★★  
★★  
★★  
★★  
★★

「……それから、脱出した仲間から聞いた。俺を助けた仮面の男は『本郷 猛』と名乗っていたらしい。まあ、俺はその時のことをよく覚えていないんだが……」

「本郷猛！ 真宮寺さくらさんと一緒に戦った伝説の1号ライダー！」

帝都でもよく知られる仮面ライダー1号、本郷猛。神山はかつて、彼に救われていたのだという。さくらもこの話には興奮した様子で眼を輝かせていた。

「そのあと、すみれ支配人の目に留まりこうして帝国華撃団の隊長になったわけさ。」

中々壮絶な来歴を持つ神山。或人もまさかの1号ライダーの登場に驚きを覚えると同時に羨ましさを若干覚える：自分の縁のある1号なんて下半身バイクのデカブツの自称・自分が正しいパチモンであ





『キキキキキキ…!!』

そんな彼を嘲笑うようにアナザークウガは地面に自分のエネルギーを流し込むと近くの外灯などに憑依させる。すると、それらは降魔へと変貌し独り奮戦する強襲光武へ牙を剥く。…ある時間軸の仮面ライダークウガは東京タワーを龍へと造りかえたという。それに比べればまだ可愛いくらいだろうが、戦況が更に悪化したのは間違いない。

「…クソツッ！ かかってこいよ…。」

「星児さん！」

そこへ駆けつけたのはさくらの光武。帝国華撃団の唯一残る動く残りの機体だ。刀を抜き、強襲光武と並び立つと眼前の敵たちを睨む。

「お前……」

「あなたには色々と言いたいことがあります。それは後です。今は目の前の敵を片付けます。いいですね？」

「フンッ」

共闘はするが心を許したわけじゃない。ピリピリとした空気の中あわせに司令室に残る初穂とクラリスは何か一抹の不安を感じるが今は彼女たちに任せるしかない。

続いて、或人も到着しゼロワンへと変身する。

「俺も…変身！」

「シャニイング・アサルトホッパーー！！！！！！」

現・最強形態のシャニングアサルトホッパー：衛星ゼアのバックアップがあるなら動作は問題ない。すぐに加勢をしよう……

「変身。」

「サイクロンライズ!! アルゲンタヴィス!!」

「なっ!? うわ!!」

無意識の刺客。隼の狩りが如く『それ』は一瞬で兎でも拐うようにゼロワンを連れ去った。脱出のために抗う暇すら与えず、光武から引

き離すとビルの上へと投げ出した…。

　　「…立ち上がるゼロワンの目に映ったのは

「つ……… え？　なんでお前が………」

『奴』は令和の世界で引導を渡したはず。しかし、黒い装甲と金の邪悪な紋様を抜けば、その『猛禽のモチーフの仮面ライダー』はまさに瓜二つ。

「……………なんで………迅!?!」

「…」

滅亡迅雷のライダー、仮面ライダー迅…しかし、或人が自らが引導を渡したのだ。この太正の世界にいるわけがない。

すると、黒い仮面ライダーは『女性の声』でカラカラと笑いながら自らを名乗る。

「はははは………　まだ名前を名乗っていませんでしたねゼロワン。私は夜叉………」

……………『仮面ライダー夜叉』」

## 再起の鼓動 IV

仮面ライダー夜叉

判るのは明確に『敵』であること。ゼロワンへ翼を拡げ、脚から猛禽のそれより鋭く刀のような爪の羅列が襲いかかる。眼前の高さで羽ばたきホバリングしながら、容赦なく執拗に蹴ってくる夜叉をゼロワンはオーソライズバスターを斧形態にして盾がわりに凌ごうとするが、あまりの手数の多さと空中というアドバンテージが防御の穴を突き装甲に火花を散らす。

「くっ…！」

このままじゃ…！ オーソライズバスターで凧はらい、強引に距離をとるとシャニイングアサルトホッパーの演算機能を展開する。導きだされる夜叉への攻撃パターン…最適解は背後からの一撃。とった…！高速移動で視界を外し、不意を突かれ着地した瞬間を後ろから空きの脇腹目掛け一気に…

「甘い…。」

「！」

しかし、ガキン！という音と共にオーソライズバスターは止められた。不敵に笑う彼女はまだ鞘におさめる愛刀で余裕で受けていたのだ。

その時、或人は気がつく…

「！…そのドライバー!?!」

夜叉のつけているフォースライザーに似た赤と銀のドライバー…装填されているゼツメライズキーこそ違えど、かつてヒューマギアの

父親がつけていたものと同じ。時間改変が修正されるとロッキングホップパーキーと消えたはずの『正義の証』……サイクロンライザーだ。

今は、恍惚に笑う『邪悪の徒』にそれは『降魔サイクロンライザー』として渡っていた。

「ああ、これが滅亡迅雷の力！ 令和のテクノロジー…ッ!! こんな高揚感は産まれてはじめてッ!!」

「滅亡迅雷…だとッ!？」

一気にゼロワンの怒りのボルテージが叩き上がる。滅亡迅雷だと…? ふざけんな!! 間違つても人に仇なす系譜の力では断じて無い! それに並べる行為は或人の父親への侮辱である。

「それは…そのベルトは…… 滅亡迅雷のものじゃない!」

怒りのまま、シャインシステムを起動しビットで急襲を仕掛けるゼロワン。対し、夜叉は背中のナイトメアウイングを盾のように拡げて盾がわりに防御、そのまま羽ばたきの旋風でビットを一網打尽にしてしまう。

「…なっ!？」

「ゼロワン、お前の死を幻庵様がお望みです。消えてもらいますよ。」

そのまま、降魔サイクロンライザーに手をかけトリガーを引きエネルギーを高めナイトメアウイングを本物の猛禽のような羽根を生やした状態へと変化させ大空へと舞い上がる…!

「煉 獄 絶 影」

「はああああア…!!」



そして、再び脚の爪を展開し獲物へ一気に急降下

「オルタナティブ・スパーク!!」

「ぐわあああああああ  
!!!!!!」

一撃…爆発とゼロワンの悲鳴が響き渡り、炎が立ち上る。

夜叉はふわりと着地し、ナイトメアウィングを畳むと脚を気にする  
ような素振りをして『ふむ…』と頷くと自らが起こした爆心地を一瞥。

「仕留め損ないましたか…。やれやれ、まだこの力が馴染んでいない  
のか……」

「はあ…っ！ はあ…っ！」

なんと、まだゼロワンにはまだ息があった。大ダメージはあったもの  
の変身は何とか保ったままで、ビリビリとプラズマを走らせながら  
片膝をついていた。

「おまけは一体、何者なんだ?! そのドライバーは何処で!」

「だから、さつきも言ったはず。私は夜叉、上級降魔にしてこの太正の  
世界の仮面ライダー。このドライバーについては、貴方も概ね検討  
がついているのでは?」

降魔サイクロンライザーの出所…考えられる可能性は確かにある。  
デイトレイクタウンからアナザーゼロワンは滅亡迅雷の遺産を  
強奪している…まさか、奪うだけに飽きたらず一部を運用している  
というのか!? よりによって、一型が使っていたサイクロンライザーを  
…!

「このドライバーがどんな意味合いがあるかは知りませんが、些細なこと…貴方はここで首を跳ねてさしあげましょう。」

しかし、或人の慟哭など簡単に吐き捨て迫る夜叉…。刀に手をかけ、ゆつくりと間合いに…

「おおおおおおおおお  
!!!!!!」

「!」

突然、背後からの突進。勘づいた夜叉はひらりとかわすとそこにはゼロワンに続く『令和の仮面ライダーたち』が立つ。

「大丈夫か社長!」

「やはり、この世界に来ていたか!」

「不破さんに…刃さん!! どうして…!?!」

バルカンとバルキリー… 心強い味方だが、ふたりは令和の世界に残っていたはず。

「色々、事情があつてな…! それよりあれは迅…か? 滅亡迅雷は壊滅しただろ!」

「なにせよ、こちらの味方ではないのは確かだ。社長さん、まだ戦え

るか？」

「……なん……とか……」

思いがけない加勢に乱れていた心が落ち着き、再び奮い立つゼロワン：対し、仮面の下でしかめっ面をしていたのは夜叉。一思いに倒せなかったのがここまで面倒を引き起こすのは想定外だった。

「妖力の消耗が激しい……。だがこの程度の雑魚なら……！」

「いえ、ここは退きなさい夜叉。まだゼロワンを倒されては困るわ。」

「レクス……！ ……わかりました。」

念話をとばしてきたレクスに促され、渋々といった調子で撤退する夜叉……バサツと羽ばたくやその姿は弾丸のような勢いでその場から離脱していた。追おうとしたバルカンとバルキリーだが、既に認識は不可能だった。

「くそ、逃げられたか……！ 大丈夫か、社長？」

「不破さん……俺は平気。それよりも……！」

……  
バルカンに助け起こされるゼロワン。事態はまだ終息していない





唸る三式光武。煙を上げ、残る力を振り絞り主に応えんとアナザークウガへと立ち向かう。

「私は諦めない！ 私の夢は…真宮司さくらさんのようなトップスターになること！ 帝国華撃団を建て直すこと…！ 自分の夢のために…こんなところで諦めてられるものかア!!」

刀身に荒波が如く迸る桜色の霊力。飛び散る飛沫は桜の花弁のよう…。。美しく、されどその一撃は嵐の剣閃

「天剣・桜吹雪いいいい!!!  
!!!」

『!』

天宮さくらの必殺技『天剣・桜吹雪』がアナザークウガを呑み込む。先とは比べ物にならない威力に異形の巨体も流石にバランスを崩し倒れていく。

「やった…!」

「馬鹿野郎、油断すんなツ!!」

『…グルアアアア!!!』

『!』

だが、しつこいようだがアナザーライダーそんな甘い相手ではない。さくらの渾身の必殺技さえ踏み留まるや仕返しと言わんばかりに光武を風ぎ払う。

直撃を受けた光武は地面に叩きつけられ、その衝撃で機能を完全に停止してしまう。

「ちっ！」

すかさず、フオローに入る強襲光武。マシンガンで牽制しなんとか追撃を防ぎ、この隙に星児はさくらへ逃げるように促す。

「もう良い、逃げろ！ 足手まといだ!!」

「嫌だ…逃げないツ!! 絶対に…!」

「いい加減にしろよ!! お前たちじゃ、帝国華撃団にはなれないんだよ! おふくろや姐さんたちの帝国華撃団の名前をこれ以上、泥を塗るんじゃない!!」

しかし、尚も留まろうとする彼女にとうとう怒りを露にする星児。劣勢な状況に内輪揉め、こんな有り様…無論、アナザークウガも待つてくれるわけもなく弾幕に怯みながらもジリジリと光武に迫る。

「さくら…どうして君は…」

その一部始終を物陰で見ていた神山… 帝劇前での戦闘のため、司令室に戻れず屋外に留まっていた彼。今、生身の彼は戦えない…愛機も無く、仮面ライダーでもない…ただ、見ているだけしかできない。自分の夢ごと異形に潰されそうな女の子ひとりすら助けることすら手を伸ばすことすらも叶わぬこと。

「ああ、どうして…ッ！ 俺はいつも見てるばかりなんだ!」

過る記憶………… おぼろげな意識で見た炎と煙をあげ沈む艦

「もう止まらないって決めたじゃないか…! 諦めないと決めたじゃないか…!」

…初めて帝劇に来た日。…隊長をすみれから任された日。

…再会したさくらに密かに誓ったあの時

「なのに、まだ一步も進んでない… また見てるだけ…畜生…。どうして無いんだよ俺の機体…

…俺にも戦わせてくれよ!!!」

【その言葉を待っていましたよ神山くん!】

その時、すみれからの通信。同時に、帝劇前の道路からカタパルトが展開されて『何か』が射出されたアナザークウガに激突、弾きとぼすと美しい白銀の姿を露にする…。鎧武者を彷彿させるが、シンプルな丸み帯びたデザインが目の前に止まると神山は思わず息を呑んだ…

「これは…霊子戦闘機?」

【そう、帝国華撃団の新たななる刃。最新鋭霊子戦闘機『無限』…あなたの愛機よ。】

霊子戦闘機『無限』： 搭乗者が持つ無限の可能性を引き出す存在としてその銘をつけられた機体。光武とは一線を越えた存在感：圧倒されそうになるが、神山を意を決し、コックピットへと乗り込むと機体へと接続し起動する！

「無限……俺の新しい機体……！　いくぞ……！」



## 再起の鼓動 V

「はああああアア…ツ!!」

疾風怒濤。神山が駆る無限の猛攻はまさにその一言に尽きた。二刀流を振るい、眼にも留まらぬ速さで巨体の隙間を掻い潜りながら休む間もなく斬り裂き続け、今までもろくにダメージが入らなかったアナザークウガの身体から血飛沫が飛ぶ!

「これは、さくらの分ツ!!」

『!?!』

更に駄目おしと顔面を十文字。直後、耳をつんざく悲鳴…あまりの激痛に巨体は辺りの建物にぶつけながらのたうち回る。そう、戦場の流れが変わりつつあった。

「すごい……これが、無限?」

【隊長さん、もしかして…実はすげえ奴だったのか?】

【光武とは全てが別次元です…!】

その場にいるさくらもそうだが、司令室で待機していた初穂やクラリスも映像越しに驚きの声をあげていた。今まで機体を宛がわれなかった神山は彼女たちからすれば気さくな青年留まりだったが、今まさに発揮される実力に眼を奪われる……それは一種の熱い興奮に近い。

「……なんで…… どうして…… その色は…!」

たったひとり、無限と同じ色の光武に乗る『彼』を除いては……

『…グウアアア!!』

「待て！」

最中、戦いは更に進む。翅を拡げ、大空へ逃げだそうとするアナザークウガを逃がすまいと無限の出力を上げる神山。二振りの刃に蒼銀の霊力が纏われ荒波が如く唸りをあげる。

「闇を裂く、神速の刃!!」 「縦横無尽・

嵐」!!」

『ギャアアアアアアアアアア!?!?』

地を踏み碎き跳躍すると、必殺の斬撃が異形の翅を引き裂いて空の自由を奪い取る。そのまま、アナザークウガはまっ逆さまに落ちていき神山の無限も後を追って着地。サツと刀を祓って再び構え直す…

(さて……、勢いよくは出たものの……どうする?)

流れは確かに押し返しつつある… しかし、アナザークウガは尚も健在で、土煙をあげて不時着するもガタガタと呻きながらまた体勢を立て直そうとしていた…。無限の猛攻持ってしても、この異次元の化け物には決定打を与えられていないのだ…

「……………何か…あともう一押し…!」

「……………私……………だって…!」

「! さくら!?!」

その時、聞こえたのは傷ついた光武で再び立ち上がるさくらの声。あちこち軋んでいるが、消えない少女の意志に応えるように桜色のボ

デイは刀を構えた。  
それだけではない。

「神山さん！」

「！…社長!!」

ゼロワン シャイニングアサルトホッパーも駆けつけ、光武と共に並び立つ。

「隊長が戦っているのなら、私も光武も弱音は吐いてられません…！」  
「行こう、俺たちなら出来る！」

「…わかった！ ふたりとも、俺についてこい!!」

はは、何故だろうか…途端に不安もふつとんだ。僅かな翳りすら無く、今は勝利の確信が胸に満ちている。もうこの場に足踏みをしている者は誰もいない。

そんな様子を物陰で見ていた人影

「やつぱり、ああいう若い子は応援したくなっちゃうなあ。」

令和の世界にいたはずの男…せがた三四郎と偽りを名乗っていた者、本郷タケシ。まだ青年な外見な割りに年寄りくさいこと口にする と弄んでいたプログライズキーをゼロワンに向けて投げた。数秒後、プログライズキーはカラカラとゼロワンの前に転がっていき、気がつかれ拾いあげられる。

「あれ…なんだ、このプログライズキー…?」

見たことがないキーだった。刻まれているのは動物ではなく、アナザークウガのオリジナルである『仮面ライダークウガ』。キーの名前

は『サムズアッピングクウガ』と記されている…。エイムズの所有の物などは把握出来ない物もあるだろうが、これは何処から来たのだろうか?…まるで、使ってくれとでも言うように唐突に

「やってみるか…。」

「 スチームグリップ!! CAUTION!! 」 「 オーバーライズ!! 」

「ひっ!? 社長それは…!?!」

ならばと、シャイニングホッパーキーからアサルトグリップを外してスチームグリップへと付け替えるゼロワン。すると…一度、飛蝗のライダーモデルが分離してアナザークウガを蹴りとばし着地。光武と無限から霊力を吸い上げてリンク状態になるとメカメカしい鎧を纏ったような姿を経て再装着。

「 シャイニング…!!! スチーム・ホッパー…!!!!!! Bloomin  
g and falling flowers,!! SAKURA  
AS !! 」

「あ…あれ、今回は光武がバラバラにならない…?」

さくらの気の抜けた安堵と同じくシャイニングスチームホッパーへと変身完了…これで、降魔へのアドバンテージは存在しない。

「よし…!」

「サムズアッピング クウガ!! 」

そのまま、オーソライズオックスのアックスモードへクウガプログラムを装填。直後、目の前が強い輝きに炸裂しアナザークウガは眼を覆った…。

「合体攻撃!!」

『…オオアアア!?!?』

★★★  
★★★  
★★★  
★★★  
★★★  
★★★

重い荷物を枕にして……桜舞う丘で青空を見上げる或人。付き添いにはイズがいる…今は暖かな春先の昼下がり。

「社長さ〜ん!」

「あ、さくらちゃん!」

「こつちよ〜♪ こつち、こつち〜!」

すると、丘の上からさくらが呼んでいる。起き上がり、彼女の後を追いかける…。花吹雪が舞う中での追いかっこはまるでひと昔前の恋愛ドラマのような一幕。やがて、行き着いたのは一件のモダンな雰囲気カレー屋。

「いらっしやい。はい、いつもの神山カレーね。」

店内で待っていたのはバイトの神山。カウンター席に座る或人と

さくらは、彼から出されたカレーをほうばると『んまあい〜!』とご満悦。

それから、イズを含めた4人で店の前で記念撮影をすることに…。或人が脚立にカメラをセッティングして、タイマーをセットする。

「合体攻撃… 桜色の思い出。」

ピピピ…パシヤツ!!

シャツターがきられた…フィルムに焼かれる思い出の一頁。

『…? …??』

アナザークウガは混乱していた。何故、自分はこんな小芝居を見ているのか…。基本、理性のない化け物でも戸惑いを覚えてしまう。そんな異形の懐はから空きで…

「サムズアツピング・スチームドライブ!!」

「二っつけええええええええええ!!!」  
!!!

『ウ!?!』

唐突な必殺カットインに反応が遅れてしまった。無限、光武、ゼロワンと斬り裂かれ…更に自分への特攻を持つクウガの力は核であるアナザーウオッチまで到達しダメージを与える。馬鹿な、自分がこんなふざけた技に…!?

『ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!』

直後、アナザーウオッチが分離して変身していた降魔が盛大に爆発

四散するのであった。



唐突にはじまった合体攻撃という謎の小芝居空間はアナザークウガの撃破によって終わりを迎える。現実世界では一瞬で倒されたようにしか見えず、誰もこの小芝居を認識していないままストレスマツハで朽ちていく異形の心はさぞかし無念だろう……。アナザーウォッチも粉碎され状況は終了……。つまり

「勝利：ツ!!」

見事、帝劇は……いや、帝都は帝国華撃団の手で守り抜かれたことを意味する。無限と光武が剣を掲げ、高々に叫ぶ。

「やりましたよ、神山隊長！ 社長さん！ ついに私たちが上海華撃団の力を借りずに勝てました……！」

「ああ、これが俺達、帝国華撃団の新しい一歩だ。」

「俺は華撃団は華撃団じゃないんですけど……ま、いっか！」

今は勝利の余韻に浸りたい。こんな高揚した気持ちは何時以来だろう……自然と神山の口角も上がっていた……

(そうだ、俺も……帝国華撃団も……これからが本当のはじまりなんだ。まだまだ花開くとさいかないけど……さくらや皆となら……)

「俺はもう止まらない。帝国華撃団隊長として、全力を尽くす！」

「ふざけんな…」

「！」

しかし、狼の唸りのような声がする。ガチリと鳴る刀…満身創痕ながらも怒りに身体を奮わせる白銀の光武。

「隊長は俺だ…。そのために、世界中を駆け回ってきた。泥水を啜る思いだって何度もしてきた。何年も鍛練を積んできた…。なのに、ポツと出のお前かなんかが…なんで隊長なんだよ!?! なんで…ツ!!」

「…」

悔しき、慟哭、ありとあらゆる激情がぐちゃぐちゃになって滲み出る叫ぶは悲痛ささえ感じた。先は神山に対する挑発に嫌悪感しか持たなかったさくらでさえ、哀れみを覚える程…。しかし、神山は違った。ここで星児を哀れむことは彼を蔑む行為と同じだろう。故に、問う。

「星児、君が隊長になってしたかったことはなんだ？ 華撃団を建て直すと言いながら、仲間を蔑みあまつさえ、刃を向ける…そんな奴に



隊長が務まるとは思えない。

……君が守りたかったのは『帝国華撃団』という名前だけじゃないのか?」

「ッ!! 黙れ、お前に何が解る!?!」

ついに決壊したように剥き出しの感情のまま襲いかかる星児。光武が持つ槍に稲妻を走らせ、無限のコックピット目掛けて矛先が向く。

対して、神山は静かに半歩下がると……

「分からないな…何も。」

ブンツとスレ違いざまに双刃が舞った。同時に、槍もろとも光武はバラバラになり大破。達磨になった機体が地面に転がり、パイロットの星児も投げ出される。

「畜生…ッ! 畜生おお!!」

愛機もプライドも一瞬にして、何もかも斬り裂かれた。

………新しいはじまりを迎える帝都に虚しい残響が響き渡る。

## 夢見た幸せ／手離す夢 I

雨の日…… 季節の割には酷く雨が降っていた気がするあの日。

帝都郊外のとある豪邸。そこは新規事業を起こしたある成金の男の住処であった…… 壺や絵画などなど高級品が並ぶこの広い邸には彼の愛人やまだ幼い孫たちまで住んでる。人生勝ち組に部類されるような生活のこの男…… かつての帝国華劇団の常連であった。10年前、降魔大戦の復興事業に眼をつけたが転機になり…… 色々な意味合いで帝国華劇団と帝国華撃団には感謝をしていた。

「……かつての帝劇を知る身だからこそ、手を差しのべたい。だが……」

すみれのものより豪勢な服を着る中年男。窓を眺める彼は悩んでいた…… 心苦しいが、後ろのソファアに座る彼に告げねばならない。

「やはり、今の帝劇に融資も支援も出来ないよ。申し訳ない……」

現・帝劇支配人の息子…… 神崎星児。かつての花組たちの忘れ形見…… 彼が幼い時から知っているからこそ尚、胸は締めつけられる。

「こんなに頼んで…… いるのにですか？」

「ああ。君たちに援助をするということはW・O・L・F. に眼をつけられかねない。君だって分かっているだろう？ プレジデントGは旧華撃団勢力の再興を望んでいない…… 下手に動けば確実に潰されてしまう。」

金はある…… だが、それだけでは世間は生きられない。男は知っていた…… 義理人情で手を差しのべた者たちの悲惨な末路を。…… ある者は事業の不正を暴かれ倒産、…… ある者は路地裏で冷たくなって見つかり、…… 不審な事故で死んだという話も聞く。危険な橋は渡れない……

しかし、星児も諦められない

「頼む、この通りだ!! 今、融資を受けられなかったら、帝劇は……」

ソファアールから立ち上がると、勢いよく地に頭を擦りつける。懇親の土下座だった。恥も何もかもを呑み込んだ願い。されど、男の返答は変わらなかった……

「やめてください、孫たちもいる……。そんなことをしても何も変わらない。申し訳ないが、帰ってくれ。」

不安そうに覗きこむ小さな子供たちが星児の眼にも映った……。悔しいが、これ以上は食いが下げられない。渋々立ち上がり邸をあとにする。

「……また……出直します……。」

「……すまないが、もう来ないでくれ。」

「……っ!」

見送り際に冷たく突き放され、帰路につく。刻は夕暮れ……雨足と近づく夜が街並みを更に闇を濃くしていった……。道行く人々は傘を指しながら先を急ぎ、星児と肩がぶつかろうとまるですり抜けるように去っていく。

残念ながら、傘は無い。でも、今は無いほうが良い……雨音とずぶ濡れの冷たさが気を紛らわせてくれる。

「……」

――なあ、帝国華撃団って再建してるって話じゃなかったのか？

――お前、知らねえのかよ。例の神崎すみれの倅、W・O・L・F.のお偉いさんの顔に泥を塗っちゃったらしい。詳しくは知らねえが、なんでも肝いりの計画を台無しにしちゃったとか。

――元々、W・O・L・F.とは仲悪いつて噂なのにそれじゃおしまいだな。

――倅も所詮、親の七光りか。かつての帝劇の忘れ形見なんて聞こえは良いが、それだけだ。しかも、神崎の名を名乗っちゃいるが血は繋がり無し孤児とかいう話。

――神崎重工も手を貸さないってことは、いよいよあの親子を見捨てにかかったってわけね。息子も共々惨め過ぎて、可哀想だわ。

――実子でもなきや、足許見られるのは当然か…

「…ツツ!!」

行き交うのは人々の往来と心無い言葉。通りすがりに意識すらかけずに心を斬りつけ、言い返してやりたくても何処から流れるか分からない有象無象に歯をくい縛り耐えるしかない。

…きつと、見返してやる。

自分が花組の隊長になって、帝劇を…帝国華撃団を復興させた暁にはきつと、誰もが認めてくれる。母親も、自分のこと…  
帰る場所を守るんだ。遠くへ行ってしまった『あの人たち』のためにも

「星児……！」

……あ。気がつけば帝劇の近くまで来ていた。

初穂が傘をさして待っている……片手にはもう1本の傘。そうか、  
気遣って持ってきてくれたのか。

「……初穂。」

心配そうな顔がこちらを覗きこむ。思いやつてくれる彼女に今の  
表情を見せるわけにはいかない……奥歯の力を解いて、無理矢理に口  
角をあげてクシヤツと笑顔を作る。

「わりい、駄目だったわ。」

……それが、星児が帝劇を離れる数日前のこと。



「……」

初穂は、今回の星児の騒動が起こるべくして起きたと考えている。神山が隊長として帝国華撃団に招かれた日からずっと、こうなるのではと不安に思わない日はなかった。故に、すみれに訊いたこともあった。神山を隊長にしたあとは星児をどうするつもりなのかと……

…そして、返ってきた答は

——あの子ならきつと、解つてくれますわ。

何とも楽観的で、基本的に異を唱えることはない自分でさえ『解つてくれるはず』で済むはずがないと訴えた。しかし、すみれは意見を曲げることはなく引き下がるしかなかったのである。

「…そして、最悪の形で終わった。いや、はじまったわけか。」

溜め息がかき消えていく食堂。初穂は朝食を終え、虚空を眺めていた。まだ開場していないから一般客は来ていないが、華撃団のメンバーや仮面ライダーたちは各々まだ食事をとったりしている。加え、新たに加わった不破と唯阿は自己紹介を兼ねて挨拶をしていた。

「改めて、A. I. M. S. 所属の不破諫だ。暫くここで厄介になることになった。よろしく頼む。」

「同じく、刃唯阿だ。可能な限り、不破と一緒に帝国華撃団には協力していく所存だ。天宮さくらさんとはまた付き合いが続くな。今度はこちらが世話になるとは…」

『あはは…』と苦笑するさくら。令和の世界では御世辞にも良い別方をしたとは言えず、もし1号オルタの助けがなければ今頃はこのふたりに牢屋にぶちこまれていたかもしれないと思うとゾツとする。特に不破に関しては、光武の一件から苦手意識が芽生えつつあった…。

「：取り敢えず、機体には触らないで下さいね不破さん。」  
「あ？　なんで俺だけ名指しなんだよ…？」

早速、喰ってかかろうとする不破。そこを神山と唯阿が宥めて事なきを獲る。

さて、ドタバタする朝だが或人は不破たちに確認しておきたいことがあった。

「ねえ、不破さんたちはどうやってこの世界に？」

「は？　ああ…：…それか…」

そう2人はどうやってこの世界に？　すると、憂鬱な顔で不破は経緯を語りはじめた…：



天宮さくらが太正時代に帰還したと同じ時刻

「くそっ　なんで攻撃が通らねえ!？」

「動きが全て読まれている？　本当に人間なのか…？」

立ち塞がった1号オルタをバルカンとバルキリーは果敢に攻め立てていたが、射撃はいなされ、格闘は振り伏せられたりと連携をもつてしても有効な一撃を与えられずにいたのだった。悪(Alter n

active)であれど、『技の1号』の名を冠する仮面は伊達ではない。

「流石、令和のライダー… 実力は申し分ないね。魔王様はゼロワンだけで事足りるとは言ってたけど、このまま刻を止めた時代に置き去りは勿体ないかな。」

膝をつく令和ライダーたちを前に、余裕の1号オルタ。苛立ったバルカンが突っ込もうとするがそれが狙い… 右足に赤黒いプラズマを走らせて、姿勢を低くしてバルカンの懐目掛け…

「ライダーキック・オルタナティブ！」

「かばっ!？」

必殺のライダーキックで弾きとばす。ふつとばされたバルカンはバルキリーを巻き込んで地面にゴロゴロと転がり2人とも変身解除。戦闘不能まで追い込んだ。

ほぼ、それと同時に…

ー　ゴオーン、ゴオーン…

「!」

刻の停止、物語の筆先が強引に止められることを告げる鐘の音に似た音が響き渡る… 恐らく、魔王（オーマジオウ）からの合図。これ以上、ここにいれば自分も巻き込まれるだろう。

「サウザーも可能ならって思ったけど、時間もないみたい。それじゃ、君達にも来てもらうよ… 『太宗の世界』に。」





…そこからの記憶は定かじやない。気がついたら、帝都の銀座辺りに放り出されていて、行く宛もなくウロウロしていた。その内に、ゼロワンと夜叉の戦いを感知し救援に向かって現在に至るというわけだ。

不破は『次会ったら、あの飛蝗野郎をギタギタにしてやる!』と意気込んでおり、唯阿はまたそんな彼に呆れつつも或人たちと情報を交換する。

「ふむ、どうやら私たちと社長さんたちとはこの世界に来たタイムミングにラグがあるようだな。まあ、そこは良いとして：問題は『仮面ライダー夜叉』…：明らかに滅亡迅雷の遺産が降魔に渡って運用されているということか。」

唯阿の一番の懸念は『仮面ライダー夜叉』についてだった。降魔についてはまだ詳細を把握していないが、奪われてから僅か数日もしないうちに異世界の能力を調整して実践投入してくるとはかなりの脅威である。これには、神山も頷く。

「降魔は産まれながらの異形の力以外にも、『魔操機兵』といった独自の技術も持っています。こちらも解析しようにも、倒せば塵に還るため研究は現在でもろくに進んでいません。」

魔操機兵… 或人の脳裏に浮かぶのは臃が使っていた『荒吐（アラハバキ）』。もし、仮面ライダー夜叉があればと滅亡迅雷の技術が組み合わせて産まれたものだとしたら、その脅威は未知数だろう。

ここで、イズが口を開く。

『恐らくですが、タイムジャッカーも関わっているのではないかと思

われます。でなければ、技術体型も違うこちらの世界に我々の技術を即座に繁栄させることは不可能かと。』

「降魔とタイムジャッカー…組まれたら厄介どころじゃないな。」

「たいむ…じゃつか…?。」

あ…：神山とさくららが首を傾げている。そう、彼等がタイムジャッカーについて知る由が無い…これは仕方ない。まあ、令和組からしてもイレギュラー過ぎてよく分からない存在だが。

…そんな話をしていた時だった。

「隊長。」

「ん？ あざみか…どうした?。」

シユタツと降りる人影… 呆れた表情をして溜め息をしたあざみ。何やら言いたいことがある様子…

「どうしたじゃないよ… これから花組の新メンバーの出迎えでしょ。昨日、支配人が話してたじゃん。」

「え？ あアっ!?! いっけねええ!!。」

新メンバー… おいおい隊長がなんてこと忘れてんだ。慌て玄関に駆け出していく神山を目で追いながら残された面々は優雅に朝食を再開する。

「新メンバー…最後の1人が来るって聞いてはいたけど、誰なんだろ? そろそろ演技の本格的な経験者なら良いんだけど…」

「?。」

さくらの発言にふと気になった或人。

「すみれさんって、演技は指導してくれないの？ 元々女優さんって聞いてただけど……」

「そうしてくれれば一番なんだけど、帝劇の運営維持で手一杯で手がまわらないの。わたしたちも素人なりに頑張ってはみたんだけど……はあ。」

すみれは元々は帝劇の看板を背負う女優のひとりだったという話は聞いていた… 支配人と演技指導をどちらもしているのだと考えていたが、実際は違うらしい。確かに、指導が入ってるなら公演だつてまだマシだっただろう。加え、他のスタッフの人手不足も運営の厳しさに拍車をかけている。

（そのための『秘策』、うまくいけば良いんだけど…）

「……社長さん？」

実は或人、すみれとこっさりそれらへの対策案を出していた。元々はイズが提案したもので、或人自身も厄介になるからには可能な限り助力をしたいと賛同。問題はこの太正の世界でうまくいくかどうかだが……



その頃、降魔たちのアジトである廃工場に降り立つ黒い翼……仮面ライダー夜叉。降魔サイクロンライダーに手をかけるとゼツメライ

ズキーを引き抜き、変身解除：露になった姿はやはり、上級降魔・夜叉。不敵に笑うその顔にいつものバイザーが無く、『真空寺さくら』の姿を露にしている。実は変身の時に被り物が重なると邪魔だからという事情があるからというの本人しか知らないが、今日とはかく気分が良い。新しい力の扱いも解ってきたし、今後は令和のライダーたちに遅れをとることはないだろう。

さて、アジトの中に戻った時……気がついた。『来客』がいることに。

「おや、幻庵様。今回はどのような御用事で？」

フードの男：幻庵は夜叉を見るなり、顔をしかめる。

「夜叉、貴様……仮面はどうした？」

「おっと、これは失礼しました。なんせ、『新しい仮面』のほうが気に入ってましたから。」

彼はかなり苛立っている様子。一方の夜叉はわざとらしく、バイザーを取り出して装着：そんな様が幻庵のストレスを更に加速させていく。フードの奥は見えないが、血管が浮いてきてそうだ……

「その顔は虫酸が走る。良いか、次は絶対に外すなよ！」

「はて？ 私には『真空寺さくら』を求められ、あなた様が産み出したはず……なのに、不服ですかこの顔が？」

「黙れ。お前は私の『道具』だ。求めたのは真空寺さくらではなく、真空寺さくらの力のみ。道具は道具らしく主の言うことだけを聞いていれば良い！」

……道具

夜叉は冷たく放たれた言葉に胸の奥で、何かが決壊したような感覚

に襲われる。裏切られたような痛みとまるで愛想が尽きたような冷ややかさが胸に満ちていく…。この男は『あの人』の代わりにはならない。

(ああ、やはり貴方も私を満たしてくれないのですね?)

「…なんだ?」

「いいえ。ゼロワンの件ならレクスに訊いてください。」

やがて、幻庵はレクスを探してアジトの奥へ。一方の夜叉…ある決意を固めていた。滅亡迅雷の力を手にした時、高揚感と同時に自分の思考の根幹が書き変わっていくのを感じた。全てを降魔皇様と幻庵様のために誠心誠意尽くすことで埋まっていた精神・存在意義に『疑問』という亀裂が走り、亀裂は内面の欠損となりそれを埋めたくてたまらなくなったのである。だが、不思議と嫌な気はしなかった…。むしろ、やっと自分が『生きている』と感じた程。それが、彼女の『革新(シンギュラリティ)』のはじまりであった。

「ふふ…ふふふふふふ…。あはははははははは…」

道具で終わるはずだったひとりの降魔の運命。

……………そんなものはもう存在しない。

## 夢見た幸せ／手離す夢 Ⅱ

「ここが大帝国劇場……」

帝劇前に止まった車から降りてきた褐色の女性。銀の髪に美しいボデイラインが妖艶な雰囲気醸し出す露出強めの長身……。彼女が降り立っただけで道行く人々は振り返りひそひそと話しだす……。『あれは誰?』『見覚えがある。』『でも、ありえない……。なんで?』と……。迎えに出た神山とあざみも目を丸くしていた……。あわよくば演技指導が出来る経験者なんて考えていたが、そんな小さいものじゃない。それより遥かに上、いや最高峰の選ばれた女優……

「……あ、アナスタシア・パルマ!? 新入メンバーって、まさか!」

「世界的トップスタアの……あの!」

「ええ、そうですね。新生花組の最後のひとり……世界的大女優と名高いアナスタシア・パルマさんですわ。」

『アナスタシア・パルマ』……太正の世界でその名を聞けば、誰もがあ知つていと答える程。世界を股にかけるスタアの中でも屈指の存在であるのが彼女である。一緒に降りてきたすみれの紹介で、本物だと確信……すると、彼女はクスツと笑って改めて自己紹介をはじめた。

「あまり持ち上げられても反応に困るわ。改めて、『アナスタシア・パルマ』……星たちの導きの元、この帝国華撃団にお世話になることになったわ。演劇は勿論のこと、戦闘も安心して頂戴。これでも射撃にはそれなりに自信があるの。」

「凄い。演技も戦闘も出来るスペシャリストというわけか! まさに願ってもない人材だ!」

「でも、演技の指導はあくまで最低限よ。ある程度まで身についたら各自の努力でどうにかして……そういう契約だから。」

ん？ 何か最後の言葉に引つ掛かりは感じたがまあ良いだろう。  
すると、騒ぎを聞きつけたさくらや或人たちも外へ出てくる。さくらはすぐにアナスタシアへと飛びついたが、或人は違う…気になったのは送迎の車の運転席で仏頂面をしている青年。この空気で唯一笑っていないのは星児であった…。「車を置いてくる」と遺すと何処へやら走り去っていく後ろ姿に何か胸騒ぎを覚える…多分、車を格納するなら地下の施設か。

「イズ、ちょっとついてきてくれる？」

『かしこまりました。』

帝劇の中へ、イズと戻っていく或人…その背中をアナスタシアが追っていたとこの時は誰も気がつくことはなかった。



格納庫に車を置いた星児…

地下の更に深い車庫に入ればもう仕事は終わりだ。不服な仕事だったが、このままだ飯喰らいとはいかず仕方ないと引き受けた…。今の自分に降魔と渡りあうための光武は破壊され修復不能で、隊長の役割も任せられない今ではただ飯喰らいで終わってしまうのだから。

(おふくろ…認めてくれたんじゃないのか…)

帝国華撃団が再び旗をあげたと聞いた時、それは『帰ってこい』と

いう意味合いだと思った。帝劇を出る前から母親に事あるごとに花組の隊長になると言って、努力を惜しまない自分を見てきたのだから当然だと思っていた。

しかし、帰ってみればどうだ？　自分が任されると思っていた隊長の役割は見ず知らずのつい先日まで華撃団に関係なかった人間：しかも、自分の任された艦を沈めたような奴が就いていた。加え、メンバーは新人とは名ばかりの素人ばかりで帝都の笑いや者。

母親を疑いたくはなかった：でも、こんな有り様では華撃団の維持など無理なのは明白過ぎた。せめて、演技を出来る人間がいなくてはと旅の途中で出逢った華撃団やそれに連なる人間たちに声をかけた。ありとあらゆる場所に手紙や電報を出した：時間の合間も見て直接、交渉したりなどすみれや神山の反対を押しきって強行したりもした。しかし、その全ては：

ー プレジデントGを敵にまわせない

これが答だった。異国で月日を重ねたかつての仲間や　信じた友も、支援を約束してくれた有力者も呪文のようにそう唱えて星児の誘いを退ける。誰もリスクを冒せないと尻込みして去っていく。

「クソ：　俺はこんなことをするために帝劇に戻ってきたわけじゃ  
：」

苛つきながら歩く格納庫の傍らには並んでいく色とりどりの新型  
霊子戦闘機・無限が並んでいる：。因縁の白から赤・緑・黄色・青：  
そして、その横には惨めな残骸となったかつての愛機が打ち捨てられ  
ていた。旧式だったためパーツの生産はされておらず、修復は不可能  
：残った無事な部品は無限の配備が遅れているさくらの光武の予備  
パーツ扱いへ。

そんな自分への無限の支給予定は無い：突然、帰ってきて騒動を起



こした身なら仕方ないだろうが、これはすみれの怒りがそれだけ凄まじいことの現れでもある。仲間に防人としての力を向けるなど言語道断、そんな者に預けられる刃は無いと…

それから、親子関係はギクシヤクしている…。今、足並みが揃えないといけないのは充分承知はしているのだが…

(…なんでなんだよ。よりによって、なんでアナスタシア・パルマなんだ…)

「あの、星児くん!!」

「ああん?」

突然、自分を呼ぶ声…ああ、確か帝都に来た新しいライダーで『社長』とか呼ばれている奴。印象は我ながら最悪であろうになんてわざわざ笑顔で話しかけてくる…。

「…ちよつと、いいかな? 話をしたいんだ。」

★★  
★★  
★★  
★★  
★★  
★★

…一方、その頃

ある華撃団員の自室。大きな本棚に西洋式なレースで着飾れたベッドとまるでお姫様の住むような部屋（足許に散らばるグシヤグシヤの紙屑たちに眼を瞑れば）で、この場所の主である少女は原稿が鎮座する机につつぷしていた…。

「うう……全然、進まないよお……。やっぱり私なんかじゃ無理です……」

帝国華撃団のメンバーであるクラリツサ・スノーフレイク……愛称・クラリスは今、『難題』に押し潰されそうになっている。先日のアナザークウガ襲撃などの騒動がまだ冷めないうちにすみれから呼び出し：『あなたに帝国歌劇団として、とても重要なお仕事を任せようと思いますの。』と指令が下る。言い方を変えれば無理難題をぶん投げられた。すぐに同席していた神山に助けを求めたが、あろうことかすみれの意見に賛成してだめ押しの隊長命令で完全に逃げ道を塞がれてしまう始末。…味方なんていなかった（嘆き）

——大丈夫、クラリスなら出来るよ。

「隊長、全く出来る未来が見えませんが……」

あの能天気な笑顔を殴りたい……。溜め息をつきながら、せめて気分転換にと机から立ち上がり窓を開ける。彼女の部屋の窓は丁度、帝劇の内側に面しており中庭を一望することが出来て、中央の噴水を中心にして拡がる芝生のちよつとした公園だ。団員たちがよく気晴らしをしているこの場所に今居るのは……

「あれは…… 社長さんとイズさんに…… 星児さん……？」

意外な組み合わせである。或人はまあそれなりに出逢えば挨拶を交わしたりするくらいで、星児は……正直、騒ぎを起こして以来から近づき難い印象であった。仮面ライダーと上司の御子息以上の認識は無く、適度に距離を保っていたい両者だが何を話しているのだろうか？

…大して興味があるわけじゃないが、少し耳を傾けてみる。

「あのさ、やっぱり他の花組の皆とかすみれさんたちとうまくいってないんでしょ？」

「…余計なお世話だ。アンタらは部外者だろ？ 首を突っ込むんじゃないねえ。」

案の定、揉めているようだ。まだ怒鳴り声等は聞こえないが、星児は苛立っている様子…話しかけたのは社長のほうらしいが、わざわざ何を思ったのか。藪から蛇なんて日本のことわざを彷彿させるが、或人は明確に伝えたいことがあるらしく落ち着いている。そういえば、花組の最年長の神山よりも歳上という話があったような…

「まあ、そうかもしれないけど。でも、それは君の夢が原因なんじゃない？」

「…なんだ、喧嘩売りにきたのか？」

「そうじゃなくて！ すみれさんからも聞いてるんだ…行方不明の先代の隊長の背中を追って、世界中を何年も旅して来たって。だから、花組の隊長になる夢もその努力は間違ってるとは思わない。」

…でも、と続ける或人

「もし、先代の隊長さんが帰ってきたらどうするの？ 君はそれでも花組の隊長を続けられる？」

「…！」

(かなり踏み込んだ質問を…!?)

正気を疑う…わざわざ、竜の逆鱗を触りにいくような問いを本当になんでわざわざ!! なんとなくて耳を傾けていただけだったが、急に嫌な汗が伝ってくるのを感じる。

一方の星児…かなり強く動揺しているようだ。

「俺は… 花組は元より『あの人』のものだ。帰ってくるなら、返すのが筋だろ…。」

「ならさ、星児さんが目指す先にあるのは『花組隊長の代わり』じゃない？ そこをすみれさんは気がついて君に隊長を任せなかったんじゃないか？ …つて、俺の考えなんだけど。」

「!!?」

隊長ではなく、その『代用』…考えたこともなかった。自分の大切な中心が更に揺らぎ、星児の顔色はみるみる青ざめていく…

「…：代わり？ 俺が目指していたものが…：代わり？」

「あ、あの…。偉そうなこと言っておいてだけど、あくまで俺の個人的な意見だから！ そんな気にしなくても…。」

気にしなくて良い…いや、むしろ気にするべきは或人だった。逆さ鱗を鷲掴み、地雷を踏み抜いたことを察していたのは遠目で見ていたクラリス…今、一気に情緒不安定な身震いする星児の手が背中の二刀流に伸びはじめている。過る、神山との刃を交える寸前になったあの時の記憶…：まさか！

「駄目えー！」

思わず叫んだその拍子。突然、彼女の部屋の中で突風が吹き荒れ、嵐が産声あげたように部屋は一瞬で滅茶苦茶…机の原稿も舞い上がり、風の唯一の逃げ道である窓向きの気流に乗って外へフライアウェイ。『ああっ!?!』っと焦ったところでもう遅い…空を舞う紙切れは渦中の中心への片道切符にジョブチェンジ。地面に落ちかけた数枚は奇跡の確率で或人と星児の顔にグシヤリ。この拍子に付き添っていたイズと目があってしまった…。

「わっ!?! なにこれ…?」

「ああ…っ!?!」

『あれは、クラリスさん?』

「あ……ああ……」

G o t o h e l l .

傍観者を気取ってたお嬢さん……地獄へようこそ、おいでませ。

## 夢見た幸せ／手離す夢 Ⅲ

「脚本？」

「…はい、そうなんです。」

帝劇の書庫に移動した3人。そして、クラリスは事情を語る。すみれ支配人から任せられたのは演劇の柱のひとつである『脚本』の仕事…理由は本が好きだからということ。『歌劇団』としての活動は華撃団の収入・維持などに強く影響する重要な部門…どんなに良い役者が揃おうとも脚本が形にならないければ何も出来ることはないの、言うまでもないが、活動の柱になる責任重大な仕事である。

しかし、だ…

「いくら書庫の管理を任されている身とはいえ、私は素人…しかも、創作活動自体がはじめてで…。」

クラリス、いくら本が好きで自室にも本棚を置くくらいだが…初脚本の『素人』なのである。確かに、帝国華撃団の中で脚本を書ける素質があるとしたらクラリスしかいないだろう。だが、元より創作活動の経験も無い彼女はいきなりの大役にかなり参っている様子だった。

溜め息をつく彼女…されど、テーブルの上には文章が書き込まれた原稿の束が小説の単行本並みに積まれていた。口では自信なさげだが、クラリスなりに帝国華撃団としての役目を果たそうとしているのが窺える…。

「はあ…やっぱり、私なんか、脚本なんて…」

「そうかな？　ひとりでこれだけ…しかも、はじめてでここまで出来るのは凄いと思うけど。」

「後々、添削すればかなり薄くなりますよ？　それに私の書く物語はどうしても…。」

……どうしても？　そう言いかけたところで『な、何でもありません！』と誤魔化した。

一方の星児。書きかけの脚本を手にとって文章に眼をおとす……それに気がついたクラリスが声をあげる。

「あつ!?　待ってください！　まだ読める段階じゃ!?　それにまだ日本語に訳してない部分も……」

「構わねえ、読めるからな。」

創作者の中には自分が中途半端な状態の作品を見られることを嫌がる者はいるが、彼はお構い無しに読み進める……。原稿をめくり、1枚……また1枚と……。

クラリスは生きた心地がしなかった。もし自分が神山の時に向けたような怒りを向けられたら太刀打ちは出来ない……。心臓が締め上げられるような緊張が襲う。

……そして、怯えること数分

トントンツと机上に原稿が整えられ……

「面白かったぞ。」

「ひっ!?　ごめんなさ……　……へ？」

面白……い？　怒らないの？

こっちはかなり身構えてたんだけど……つまんねえ脚本書きやがって！　やっぱ、華撃団にお前らは相応しくない！　ぐらいは飛んでくると思っていたのに……拍子抜けだ。

「全体的にまだ荒いが、主人公の葛藤する部分……そこに眼を惹かれる。」

ここからどう這い上がるかが見所つてところか。うん、良いと思うぞ？ 良い気分転換になった。また見せてくれ。」

「は……はい。 え？ また？」

さらつと次なる爆弾をセッティングしていった以外は本当に何もなく書庫から去っていく星児。或人はその背中に微かに張りつめた空気が弱くなったような気がした……

一方、逆に顔を険しくしていたのはイズだった。

『或人社長、今のはかなり危険を伴う行為です。彼が暴力等に及ぶ可能性は充分ありました。』

「うん。でも、今回は偶然が重なったとはいえうまくいったんじゃないかな？」

「はい？ ……しゃ、社長さん？」

どういふことだろう……話が見えないクラリス。すると、或人は事の経緯を説明する。

「星児さんを問い詰める時、下手をしたらまた危ないことになりうるのは予想はしてたんだ。でも、踏み込まないと星児さんを動かす夢もについてはわからなかったし、クラリスが頑張ってることも伝わらなかった。だから、ちよつと博打をね……！」

「…成る程。ん？ ちよつと待つてください！ 脚本については社長さんには今はじめてお話したはず……！」

「ごめん、実は神山さんから既に聞いてた。タイミング逃して言いそびれたけど……。」

重要視したのは『星児の隊長を目指す動機を知ること』・『今の花組も精一杯頑張っていることを理解してもらおうこと』の2つ。正直、星児の花組たちの第一印象があつた桃太郎モドキ(?)なのは不味かつたと感じていた…。人間というのは人間関係のみならず、学問などに至



るまで第一印象という先入観は時にプラスにもマイナスにも作用することは営業も自ら行う社長である或人自身も嫌というほど味わってきた。好印象のものはすんなり受け入れやすいが、逆もまた然り。しかも、悪印象は覆すのが本当に容易ではない……  
それこそ、ヒューマギアの暴走のように……

「それに、あの星児さんが褒めてたんだから、自信持っていないんじゃないかな？」

「そ、そうでしょうか……？」

確かに、悪印象スタートの星児が褒めるくらいなら脚本の内容は悪くはないはず。それに、彼の花組に対する印象も少しは変わったと信じたい……

(それに……)

或人の脳裏に過るある時の神山とのやり取り…… 実は彼からある相談を持ちかけられていた。

「クラリスちゃんに自信を持たせたい？」

「ああ。難しい相談なのは分かっているが……社長という目線から何か良い案は無いか？」

(これもたまたまだけど、うまくいったかな？)

クラリスに自信を持たせたい…… 自信は確かに過剰なら慢心を孕む危険性はあるが、極度の低さはその人の秘めるポテンシャルを引き出すのを抑えてしまう。彼女はまさに後者にあたるとして、どうか背中を押す何かがあればと考えていた。そこで、社長という立場の或人に相談したのだった。

……その効果は

「……もう少し、頑張ってみようと思います。」

少しはあったようだ。

さて、これ以上は居座つても邪魔だろう。或人とイズは彼女の執筆作業を妨げないようその場を後にするのであった……



自室に戻った星児…… ベッドに身を投げ出した彼は枕元のある写真を手にとって眺めていた……。かつての花組の隊長だった白い制服の青年とボロい服を着てボサボサの髪をしていた自分が映る写真。もう10年以上前のもので、自分が帝劇にきたばかりの頃の1枚。

(俺は……どうしたら良いんだ、大神隊長……)

信じてきた……かつての花組と自分の母を。

そして、自分の夢を。隊長になれば、きっとそれが帝国華撃団再建に繋がると……

行つてしまった憧れの人たちの帰る場所が守れると。しかし……

母は見知らぬ男を隊長に選び、隊員たちはズブの素人が大半を占める上に、帝都からの笑いや成り下がった帝国華撃団。極めつけはあの『アナスタシア・パルマ』……名声も悪名も高い大女優。演劇の経験者が必要なのは事実だが彼女はいわば『劇薬』、扱いをしくじれば間違ひなく帝劇は潰れる。加え、彼女をバックアップしているのは因縁深き『あの男』……

最早、人材育成など悠長なことは言つてられないと独自に勧誘活動

をしたが、結局は昔の繰り返し。焦った拳げ句の果てに、愛機も失った…。

そして、突きつけられる自分の夢の行き着く先…

（自分が『代わり』だなんて考えたことはなかった…。でも、俺は無意識にそうなっていた…おふくろはそれを見抜いていたのか？ だから、俺が旅に出るのを眼を瞑ったのか？ 再建の時に俺を呼ばなかったのか？）

頭の中で悶々とする幾つもの考え…そんな時だった。コンコンツとノックする音。

「おーい、星児。いるか？」

「初穂？」

来客は初穂だった。むつくりと起き上がると『入っていいぞ』と招き入れる。入ってきた彼女はかなり心配そうな顔をしていた…。正直、神山へした罵倒が彼女の彼女にも架かるため顔をあわせ辛いのだが…

「よお。元気か……」

「…」

ぎこちない挨拶。普段の彼女の快活さからは考えられないくらい歯切れの悪さ…解ってる、自分のせいだ。

「あのさ、やっぱりアタシらちゃんと話しあうべきだと思うんだ。花組の全員とすみれ支配人とで。でなきや、華撃団大戦どころじゃねえし。うまく言えねえけど、これじゃ駄目なんだ…このままじゃ本当のスタートは切れないと思う。……なあ、アタシの言いたいことわかっ

てくれるか?」

ああ、解るとも。だから…… 確認しなくては

「なあ初穂……もし、俺が神山に代わって隊長になったらどうする?

俺についてきてくれるか?」

「えっ…… そ、それは………」

今の花組で隊長になったらどうなるか?

初穂は喉を詰まらせた…… 星児の前に『神山についていく』とは言い辛い、首を縦に触れない自分がいることに気がついた。そして、ふたりを天秤にかけてどちらにも降りきれないことに……

「卑怯だぜ、その質問……」

「……悪い。答は今じゃなくて良い。」

このタイミングですぐに答を求めるのはあまりに難すぎた。別に急ぎはしない……心無い答が返ってくるより、ちゃんと考えてもらったほうが納得出来る。それに、彼女は責められないだろう……自分が留守の間、神山が来る前より帝劇を支えていたのは彼女なのだから。

「不甲斐ないな……俺。」

「不甲斐ないのはアタシさ。帝国華撃団に居座るだけ居座わって、さくらのように前向きになることも、クラリスのように脚本を書く事だって出来ない。何も出来てないのはお前の言うとおりだよ。」

部屋に充ちていく湿っぽい空気。ここをつつくのはお互い傷を深めるばかりだろう。この話題はやめよう……

……もうひとつ気になることを訊きたいこともある

「もうひとつ聞きたいことがある……クラリツサのことだ。」

「クラリス…？　なんでだ？」

「アイツの脚本を見た。それで、気になることがあつてな…」

クラリスの原稿を読んだ時、ボツ原稿とプロットとおぼしきメモらしきものが紛れこんでいたのでそれらも読んでみた…そして、気がついた。幾つもの物語をイメージして構成を考えている…面白いとも感じる…。しかし、その全てが悉く『同じ結末』になっていることに違和感を抱いたのだ。

…不思議とそれが、彼女の大きな問題に繋がるような気がしていた。

## 夢見た幸せ／手離す夢 IV

「神山隊長、私とデートしてください!」

「へ?」

「「「「?」」」」」

「…?」

突然のクラリスによる爆弾投下。現場は帝劇音楽室のアナスタシアによるレッスンの最中を神山が訪問した瞬間、唐突に行われた。姿勢の制御の鍛練をしていた中で、呆氣をとられた初穂が足をとめてあざみが追突。一番酷い有り様だったのは足運びをミスったさくらで、驚いた拍子に変な方向に足が向いてグキツと捻挫:『ヴェアアアアアアア!』とおおよそ人のそれとは思えない叫び声をあげ、アナスタシアは耳を塞ぐ。(尚、この叫び声に見学に来ていた或人は失神し、イズも謎のシステムダウンを起こすという二次災害

…取り敢えず、この凶行(?)に及んだ理由を問わねばならない。

「あの…クラリス、話が突然過ぎて見えないんだけど?」

「創作活動には協力するって言いましたよね? それに、私を支配人に脚本へ推したのは貴方ですからちゃんと責任をとって下さい!」

「え、いや、でも…レッスンは良いのか?」

脚本製作の協力とはいえ、今はレッスン中。激痛に転げまわるさくら等々、混沌な有り様だが… アナスタシアの様子を窺うと…

「ああ、キャプテン…別に構わないわよ。どうもレッスンにいまいち集中出来てない様子だったし、脚本もそろそろ完成を急がないといけないとは感じていたの。それに、私も頭が痛い…」

おいおい、クラリスよりバインドボイスのほうが被害甚大じゃねえ

か。

それは、さておき指導にまわっていたアナスタシア（軽傷）の許しも降りたのは良いが、いくら創作活動の一環とはいえデートってどうなのだろう。いくらなんでも仕事中心と考える神山…

「あの…私じゃ嫌ですか？」

しかし、うるうるした瞳で見上げられたら世の男はひとたまりもない。ここまでの真摯な少女の願い…無下には出来ない。

「わかった、協力するよ。準備をするから少し待っててくれるかな？」

「！ありがとうございます！」

笑顔で承諾する神山。その傍らで悶えていたさくらが『なんですとっ!』と跳ねあがった拍子に助け起こそうとした初穂に頭をぶつけあつて更に被害が拡大。…これ大丈夫かと気になるが、あざみがこの場は自分なんとかするとジェスチャー…こんな時は最年少でありながら頼りになる彼女である。

「おい、今なんかこの世のものとは思えない叫び声が聞こえたんだが……って、社長!？」 どうしたんだ!？」

そんなふたりと入れ替わりで入ってきた不破。失神している社長とイズを発見して仰天してゆさぶりにかかる。誰だ、降魔か？マギアか？ 焦る彼にアナスタシアが声をかける。

「大丈夫よ、ちよつとした事故があっただけ。医務室に連れていくから、手伝ってちょうだい。初穂、あざみ、さくらのことは任せるわ。」

或人を不破と一緒に抱き起こし、肩に腕をまわす…。イズはヒューマギアなので黙っていてもそのうち再起動するだろう。

「いや、こっちは俺ひとりで大丈夫だ。稽古の続きをしててくれ。」  
「あら、そう？　なら、任せるわ…。」

しかし、不破の気遣いでアナスタシアは残ることに。こうして、或人もいなくなった音楽室…：そんな中、彼女は誰にも見えないように自分のポケットに『何か』を滑りこませる。それは、抱き上げる時にこっそり或人の懐から抜き取ったもの…

(さてと…：…)

ライジングホッパー・プログライズキー…：ゼロワンの象徴を彼女は手にいれたのであった。

その真意は本人以外、誰も知らない。



「それじゃ、クラリス…：今日はよろしくな。」

「はい、こちらこそ。よろしく願いますね

神山隊長。」

帝劇前…：　神山とクラリスは合流し、デートがはじまる。笑顔を交わしながら歩くふたりは本当に恋人同士のように軽やかな足取りで人通りを歩いていく。道行く人はまさかこれが恋人ごっこなどと露とも思わず、その仲むつまじい空気にはっこりと胸を暖めたり、羨望の眼差しを向けていたり…：





「何か御用ですか…?」

「いや、お前はなにしてんだよ。コソコソしてないで、気になるなら神山についていけば良いじゃねえか?」

「そ、そういう問題じゃなくてですね! これはクラリスの脚本づくりに必要なことで…!」

取り敢えず、さくらは一通りの経緯を説明…そして、自分は神山が勢いあまって粗相しないように監視（大嘘）をしているのだと主張。あのリアクションをしておいて騙そうとか無理なのは…と思う星児だったが、あえて触れないことにした。それよりも…

（あのクラリッサがな…）

書類では内向きかつあまり社交的ではなく、実際に話してみてもコミュニケーションに難ありという印象だったが、今回のように行動をするとは…。ふむ、ちよつと気になってきた。

「んじゃ、後を追ってみるか。」

「へ!? じゃあ、掃除は…」

「んなもん、後だ。気になるんだろ…?」

掃除なんて二の次だ。箒を放り出し、星児はさくらと一緒にデートの後をつけてみることに…。さくらは一瞬、躊躇いを感じたものの成り行きに逆らえなかったため、渋めな顔をしながらも行動を共にすることにした。

……それから、数分経った後

（さて…私も動こうかしら。）

ふらりと現れたアナスタシア……。ライジングホッパー・キーを片手で弄びながら、一行が向かっていった先を窺っていた……。



## 帝都 路面電車停留所

既に令和の世界では大半が姿を消した路面電車の需要は尚も顕在であり、人々の往来を支える光景は帝都の活気を象徴する景色のひとつ。人が集まりやすいこの場所は和菓子店『みかづき』をはじめとした様々な店舗がところ狭しと軒並みを揃えている。

神山とクラリスの第1デートはここだった。理由は簡単、お目当ては一角にある書店である。クラリスは本が好きなので、安直ながらここが相応しいと神山の判断だった……。まあ、彼女は既にここの常連だったのだが。

「……そりゃあ、そうだよなあ。本好きのクラリスなら帝都中の本屋を網羅してたって不思議じゃないし。」  
「うふふ。でも、こうやって誰かと一緒なのって行き付けのお店でもなんだか新鮮です。」

ミスチヨイスと嘆く声をフォローするクラリス……。いや、笑顔から素直な気持ちなのかもしれない。普段、あまり笑うところを見かけるところはないことから本心で楽しんでいるのだろう。

一安心……と胸を撫でおろしながら、神山は自分の目当ての本を捜

す。帝劇の霊子戦闘機格納庫で今も汗水流して働いているであろう『悪友』の御所望の品…裏方なれど自分たち花組の活動をしっかりとこなす彼を少しでも労うためぎっしりと本が並ぶ本棚を端から順に視線を流していく。

(ええつと、『月刊・新蒸気』… ……これか、今月号。…それと、さくらたちにも何か買っていくか。気晴らしに丁度良い漫画とかは…)

雑誌コーナーに目的の1冊を見つけると、ついでに他の花組などの息抜き用に何冊の本を取る…。すると、クラリスが背伸びして手を伸ばしているのに気がついた…どうやら、上にある本が取れないようだ。

「うくん、うくん… あと少し……」

「これかい?」

「あ…」

代わりに手を伸ばし、目的の1冊を手にとってあげる神山…その際、クラリスと密着するかたちになってしまい彼女から小さく声が洩れた。もしかして嫌だったのか?

「あ、ごめん。」

「い、いえ…! 違うんです。恋人みたいな距離感だなんて。ちよつと胸がドキドキしてます…。」

嫌なわけではないらしい…顔を赤らめてむしろ、まんざらでもない様子。というより、そんなこと言われたらこっちのほうが、ドキドキしてしまうのだが…!自身の脈拍も上がるのを自覚しながらもなんとか自制心を保ち、目当ての本たちを纏めてお会計。それから書店を後にし、次のデートスポットを目指す…

無論、そのあとをついてまわる人影もあり……

「すつげえ、あんな動きを息を吐くように出来るとかマジもんの天然タラシじゃねえか。」

「…せ、誠兄さん……!」

感嘆する者(星児)と嫉妬心を燃やす者(さくら)…。物陰からこっそりと恋人ごつこの様子を窺っている様子は道行く人々から奇妙なものを見る視線を送られるが本人たちも追跡対象も気がついていない。

そんなふたりへ背後から近づく影……

「貴方たちここで何をしているのかしら？」

「!?!」

鋭いナイフを首もとにあてがわれたような声の主はアナスタシアだった。あとどういうわけか不破も一緒である。唐突な登場にさくらは腰を抜かし、星児は一気に警戒姿勢へと身構える。

対し、当のアナスタシアは余裕そうに笑みを浮かべていた。

「あ、アナスタシアさん…?!?こ、これは……」

「落ち着いて。キャプテンとクラリスのデートが気になってついてきたんでしょ。全く、残された初穂がカンカンだったわよ。」

あ… 神山とクラリスも居ない上に、あざみも普段は行方知れずなので必然的に残る初穂に掃除をはじめとした初穂に雑務が全て押し加かってくる。しかも、星児とさくらは完全に業務放棄しているので帰ったらお冠の彼女が仁王立ちして待っているのが目に浮かぶ…

アナスタシアはって？ 世界のトップスタアは雑務なんてしない

(迫真)

「機嫌をとりたいたなら、甘味のひとつでも買ってあげたらどうかしら？」

「は、はい……」

初穂の怒りは流石に怖いので、焼石に水かもしれないがご機嫌とりの甘味を買いに和菓子店『みかづき』にとぼとぼと歩いていくさくら。そして、残された星児は尚もアナスタシアを強く睨みつけていた……

「あら？ そんな親の仇を見るような眼はやめてもらえるかしら。貴方にそんな眼を向けられる理由は無いわ。」

「理由ならあるぜ。お前の後ろに誰がついてるか……そして、お前のもうひとつの通り名『華撃団クラッシャー』。これで、充分過ぎるだろう？」

「……」

一瞬、アナスタシアの顔が微かに険しくなったのを不破は確認した……。明らかに星児の言った後者に反応しているようだが、つい先日になって太正世界に来た不破ではその意味を知る由は無い。しかし、公衆の面前でよりにもよってこの組み合わせの空気の悪さが通りすがりの人々の目に留まるのはよくないのは確か。

「おいよせ、ここで喧嘩する気か？ もう少し周りを見ろ！」

間一髪、炸裂前に割って入り事なきを得たように見えたが……すると、アナスタシアはフツと笑い星児を見据えた……。

「なんとも言えば良いわ。私は私の仕事をするだけ……私がいなくなったただけであつという間に潰れる華撃団なんて、所詮はその程度ということよ。」

「なんだとっ!？」

今度は彼女が煽る側へとまわり、星児が詰め寄ってくる……その瞬間、彼のポケットに素早くライジングホッパー・キーを滑りこませた。『だから、よせ!』と不破が遮る実にも満たない間……星児も気がついていない様子はない。

……そんなこんなしている内にさくらが甘味の袋を持ってこちらへ戻ってくる。

「お待ちせしま…… あれ、どうかしました？」

自分が少し離れている間に何があったのだろう……戸惑う彼女がわかったのは星児とアナスタシアに新たな亀裂が産まれてしまったということだけ。

……帝国華撃団、一丸になれる日はまだ遠い。

## 夢見た幸せ／手離す夢 V

…銀座横丁

お昼時が近い今、ここは空腹を満たしたい人々や路地の商店などに用がある人々でかなり賑わう。神山とクラリスもそろそろおなかの虫が鳴る予感がしたため、ある中華料理店の前に来ていた。

「し、神龍軒…！」

「そんなに身構えなくても大丈夫だよ、クラリス。」

彼女が強張る理由…：そうこの神龍軒は上海華撃団の帝都での活動拠点だからである。帝国華撃団と上海華撃団の関係性は御世辞にも良いとは言えない。事実上、上海華撃団に丸投げだった帝都の護りなど理由は等々あるのだが、何よりも隊長であるシャオロンの苛烈な性格もあって苦手意識を持つ者は帝国華撃団の中でも多い。クラリスもまたその1人であった。

しかし、神山はあまり気にしておらずそれなりの頻度でこの神龍軒へ足を運んでおり、シャオロンや隊員のユイとも交流を持ち軽口を言い合えるくらいの仲になっていたりする。

「ぎ、行くこうか。…この炒飯は絶品だぞ。」

「た、隊長…！」

渋るクラリスの手を引き、いざ入店。並ぶ回転テーブルの客たちの賑わいに正面の厨房からの活気が圧倒的で、更に中華料理特有の香ばしい匂いが胃袋を刺激する…。そして、ウェイターを務めるユイが気がつき声をかけてきた。

「いらつしやいませ…！… って、なんだ神山か。へえ、今日は女の子連れねえ…珍しい。もしかして、『お持ち帰り(意味深)』ですか？あ？」



「冗談きついで、ユイさん。」  
「？」

出迎えのブラックジョークに苦笑しながら、ニシシと笑うウェイターに案内されて席につく。クラリスは料理の持ち帰りのサービスか何かのことかと考えていたが、ユイのジョークの意味を知るのはまだまだ先のことである。

「いつもの炒飯で良い？」

「ああ、2つ頼む。」

「ハイー、炒飯2つ入りましたー！ シャオロンお願い！」

「応ッ！ いくぜいくぜいくぜええ!!」

厨房から中華鍋を操るシャオロンと炎と油が踊る音が響いてくる。

さて、今更ながら上海華撃団は帝都で演劇の活動は行っていない。理由は様々あるだろうが、旧・帝国華撃団の聖地である帝都でいくら代わりに護りを任された身であるが、堂々と演劇をしてみれば自分たちが後釜と宣言しているようなものである。そうなれば、他の華撃団からも快く見られる可能性はあまり高くない上に、上海華撃団にもそれには異を唱える声があった。しかし、歌劇団に代わる収入源はやはり必要で、そこで開かれたのが『神龍軒』と専らの噂。シャオロンが隊長自ら厨房に立ち、ユイをはじめとした団員がウェイターとして活動し上海華撃団の収入源としているのだ。

「凄い活気ですね。上海華撃団、演劇も料理も戦闘も、全てが一流…私達とは大違い…。」

「そんなことないよ。俺たちも少しずつだけど前に進んでる。アナスタシアだって来たんだ、これからだよ帝国華撃団は。」

しよんぼりするクラリスを慰めながら、料理が来るのを待つ神山…。その間も彼女は申し訳なさそうにしながら喋り続ける。

「今日は本当にありがとうございます、神山隊長。私のわがままに付き合ってくれて…」

「水臭いな、仲間じゃないか。脚本づくりになら役立つならいくらでも付き合うよ。ところで、今日のやりとりは良いネタになりそうかい？」  
「はい。良い刺激になりそうです…」

こんな程度でも役立つなら幸いだと神山。しかし、クラリスの顔はまだ翳りが目立つ…。何か後ろめたいことがあるように。

「神山さん…私の脚本は、どうしてもハッピーエンドを描けませんでした。何度も構成を直したり、キャラクター像を練り直しても、『こんな都合の良いことが起こるわけがない』『こんなこと出来るわけがない』という考えが先行してしまって、苦しい物語…悲しい結末で終わってしまうんです。本当はもっと皆が笑ってもらえる物語を描きたいのに…。悩んでいるうちに演劇のレッスンにも集中出来なくて。そのことをすみれ支配人に相談したら、神山さんなら解決してくれるかもしれないと…」

「…そうだったのか。」

面倒くさいことを丸投げされたのではなく、信頼された結果だと思いたいがそれは置いておいて……

「なら、クラリスにはもっと笑顔になつてもらわないとな！」

「へ?。」

「皆が笑顔で楽しくなる物語を描きたいなら、描いてる脚本家も笑ってなきや駄目だろ?。」

幸せな物語は幸せを何か理解していなくては描けはしない…だから、もっと楽しいことや明るいことを知るべきなのだろう。本の上で創られる世界ではなく、直接触れられる現実の世界で。

特に神山は、他意があつて言ったわけではないがクラリスは顔を赤らめる。同時に、丁度出来上がった炒飯を持ってきたシャオロンが呆れ顔をしていた…

「うわ… お前、真つ正面からそんな齒の浮くような台詞言えるのかよ。」

「ん？　なんか、変なこと言つたか俺？」

自覚無いんかい。まあ、良いや…と炒飯を置いていく。香ばしい匂いが、食欲をそそる皿に盛られた小金色の穀物の山はそのひとつひとつが卵によってコーティングされているため、砂金のような輝きを放つ。これが、神龍軒の看板メニューである炒飯…『炎の飯使い』と謳われるシャオロンだからこそ産み出せる至高の一品。クラリスはあまりの輝き具合に戸惑っていたが、神山は待っていましたと舌鼓を打つ。

「え…　これ食べ物なんですか？　金属みたいな光り方してませんか？」

「大丈夫だよ。これ、すぐくうまいんだぞ。帝国華撃団・隊長のお墨付き。」

「なんですかそれ。…ふふ、わかりました。それじゃ、いただき…」

「イタダキマアアアアアアアス!!」

「!?」

いざ、食べようとした瞬間……突然、横からヌツと伸びてきた手がクラリスの皿を取り上げ、横取りした輩の大口の中へ放りこまれる。何事と顔を上げれば、見覚えのある忌々しい黒フードとせせら笑いが立っていた。

「うーん、中々だぞ。ご馳走さまだぜ帝国華撃団！」

「臃!!」

上級者降魔・臃……いつの間に。或人に致命傷を与え、暴虐の限りを尽くしたのは記憶にまだ新しい……。シャオロンも奴を知っていたため咄嗟に身構えるが、前回遭遇していないクラリスは人間に近い臃の姿も相まって状況を呑み込めずにいた。

「神山隊長、この方は……」

「気をつける、コイツは降魔だ!」

警戒を促す神山だったが、かえってこれが悪かった。降魔という単語に反応した他の客たちにどよめきが起こる……もし、ここで臃が力を使えば間違いないこの場合はパニックである。しかも、こんな人混みの中で刀など振るえないため状況は圧倒的に不利である。

されど、そんな穢らわしい降魔が自分の店に土足で上がり込んできていることに我慢ならないのがシャオロンだった。

「おいクソ降魔、なに勝手に俺の店に上がってきてんだよ。この店は降魔御断りだぜ。またぶちのめされなくなかったら、とつとと失せろ。お前にやるものは米一粒ありやしねえぜ。」

「おお? ソイツは失敬……。なんせ、降魔御断りなんて看板は全然見当

たらなかったからなあ？ 次からぶら下げておくことをお勧めするゾ？」

「ハッ、降魔なんざ帝都中の店全部で門前祓いだつての。」

挑発の応酬：しかし、生身で仮面ライダーとまで渡り合う臚にいくら隊長とはいえ、シャオロンには勝ち目は無い。何とか状況の打破を考える神山を尻目に、臚はねっとり物色するような視線をクラリスへと移すとニヤリと笑う。

「お前らはどうでも良い：目的はテメエだ。」

「…私？」

狙いは彼女と手を伸ばす： 無論、それを許すわけがない。

「兄貴ッ！」

「変身。」

【 CHANGE / KICK HOPPER 】

シャオロンの叫びに応え、厨房で準備にあたっていた矢車がエプロンを脱ぎ去りながら飛び出しキックホッパーに変身し飛び出すと、悲鳴がごった返す店内を突っ切って強引に臚を叩き出した。途端に銀座横丁は阿鼻叫喚の嵐となり、パニックとなった人々が右往左往しはじめる： それでも、十分な間隔をとれただけマシか。

「蟲の入店は御断りだ。」

「お前だって蟲だろうがア…！」

「なんとでも言え：クロックアップ。」

【 CLOCK UP 】

上級降魔相手に間髪いれずにクロックアップで一気に仕掛けるキックホッパー。いくら上級降魔といえど、高速で動きまわる相手には為す術が無く一方的に蹂躪される一方で、後を追って店内から出てきた神山たちは息を呑む。

「凄い…上級降魔を単独で…!」

「応よ。矢車の兄貴の強さは桁違いだからな!」

シャオロンも太鼓判を押すほどのキックホッパーの実力。もしかしたら、ゼロワンとも退けをとらない存在なのではと戦慄する中、クロックアップが解除…なぶられていた朧が転がった。そこへ、キックホッパーのライダーキックが迫る!

「ライダーキック。」

「R I D E R   K I C K」

「ぐあああああああああああ?!?!」

プラズマが迸る一撃が容赦なく悪魔を砕き、爆発を起こした。キックホッパーも弧を描いて着地…断末魔に勝利を確信…

「……まだか。」

……することはなかった。

まだ煙の中で蠢く影が窺える…まだ仕留めきれていない。

『アアツ、いつてえなあ?? 本当、イライラするぜお前らはよお…俺の大事な荒吐はまだ直らねえし、夜叉の奴にはゲロって馬鹿にされるわ、幻庵のクソ野郎は更にイキりあがるわロクなこと無え。』

様子は詳しくわからないが、不気味に発光してそのシルエットは人型から徐々に隆々とした『怪人』のそれへと変化していく…。晴れていく煙の中から現れるのは降魔ではなく、どちらかといえばアナザーゼロワンを彷彿とさせる醜悪な異形の姿。ただモチーフ元は違う。青い人狼を思わせるボディに、強引にチューブで縫いつけられたようなネービーブルーが鈍く輝く装甲の機械的な鎧。鋭い牙が覗くせせら笑いを浮かべる顔には、その本性を隠すように人間の皮が破けかけたようなアイマスクに頭蓋は一部が砕け、露出する脳とおぼしき部分にはプログライズキーのようなパーツが刺さっている…。

『まーあ？ 何にせよ、丸腰で来るわけねーだろ？』

全体像が露になった時、一行はその醜悪さに後ずさった。まるで、人の理性を喰い破って這い出そうとする邪悪な獣性をそのまま表したような怪人がそこにはいた…。そして、不破や唯阿がいれば気がついたであろう仮面ライダーバルカンのアサルトウルフを彷彿させる…。

「バルカン」

『お前たちをいたぶるために、とっておきを用意したぜ？』

そう、仮面ライダーバルカンのアナザーライダー：『アナザーバルカン』。バルカンが怒りを燃やして人類を守護する狩人だと言うのなら、こちらは噛みながら人へ仇なす人狼といったところか…。

この力の発現、もといアナザーウォッチの出所は間違いなくアナザーゼロワン：ネオ・タイムジャッカーのレクスだろう。奴が手を加えたのは決して、夜叉だけでないのだ。

『取り敢えず、死んでもらおうかなア!!』

「！」

胸の眼球をギョロギョロと動かし、逆襲と言わんばかりにキックホッパーへと襲いかかるアナザーバルカン。鋭い爪で、緑のヒビイロカネの装甲に傷をつけ、殺しきれない衝撃で変身者を間接的に斬り刻む。キックホッパーも応戦しようとするも、圧倒的にパワー負けする相手に、圧される一方で火花が散り…ついには首を締め上げられる。

「ぐ…あ…」

『ひゅー、いざまだねえ？ええ？ 命乞いでもしたらどうだ？虫けらくうん？』

「兄貴！」

「矢車！」

キックホッパーの窮地に助けに入ろうと駆け出すシャオロンとユイ…しかし、グイツと突き出されたキックホッパーに勢いを削がれてしまい、そこへ投げつけられる仮面ライダーのボディ。シャオロンはキックホッパーの下敷きに、ユイは氣をとられた一瞬を張り手で弾きとばされ、神龍軒の壁へ激突…意識を失い戦闘不能になってしまう。

「シャオロン！ ユイさん!! 貴様！」

『邪魔だ、どけ。』

神山も応戦しようとするが、アナザーライダーと生身の人間では相手になるわけもなくアナザーバルカンの腕に備わるガトリングガンの弾丸を受け、その場に踞ったところを蹴り転がされてしまった。取り残されたクラリス…そこへ、異形の魔の手が迫る。

「た、隊長…！」

『おおっと、自分の心配をしたほうが良いぞお嬢ちゃん??』

「…！」

「クラリス、逃げ…ッ！」



神山が逃げるよう促そうとしたが、時既に遅し。少女は強引に掴まれ取り押さえられると、アナザーバルカンが反対の手に持つアナザーウオッチを起動させて腹の中に埋め込む。同時に、あまりの耐え難い苦痛にクラリスは悲鳴をあげその姿を変えていきはじめた…。

「いや、嫌あああああああああああああ!!!」  
「クラリス!!」



…ほぼ時を同じくして、なんとか神山たちへと追いついた星児や不破、さくらたちが見たのは倒れ伏す上海華撃団に見たこともない『2体の異形』。神山の前に立つアナザーライダーたち…  
片方はアナザーバルカン…もう片方は…

「ダブル」

シアンと黒の怪人を継ぎ接ぎして縫い合わせたような半分このよ

うなアナザーライダー：『アナザーダブル』。  
………。臙の術中に嵌まったクラリツサ・スノーフレイクの成れの  
果てである。

## 夢見た幸せ／手離す夢 VI

『喜べー！ 今日からお前が…仮面ライダーダブルだア！』

アナザーバルカンによる嘲笑の祝福を受けるアナザーダブルは状況を理解出来ずにいた。自分の身に何が起こったのか…自分が何をされたのか…倒れている神山や駆けつけたさくらたちは恐れや驚愕の表情を向けており、自分の手を見てみる…。

『なに…これ……』

見慣れた白い肌はそこには無く、人間ではない刺々しい腕が…

『いや… いやあああああああああ  
!!!』

「クラリス!!」

それだけで彼女の正気を失わせるには充分であり、神山の声も届かずパニックのまま何処かへ逃げ去っていく。あのままでは、あらゆる被害が出てしまいかねない。…しかし、行く手をアナザーバルカンが遮る。

『ハハ、何処行こうってんだ?』

「貴様、クラリスになにをした!?!」

『さあな。ま、面白い玩具にやかわりねえってことよ。そして、お前も玩具だ…』

「変身!!」

「シヨットライズ!! アサルトルフ!!」

『!!』

続けて神山に牙を剥けようとしたが、不破がバルカンへと変身して組み付き、蹴とばして銃撃し牽制する。降魔である隴の非霊子武装の攻撃は半減するはずだったが、よりによってバルカンのアナザーライダーになってしまった故か、怯みながら苦悶の声を洩らす…

『ぐ、おおおおお…!!』

「あの娘を追え! ここは俺がなんとする!」

バルカンの作ったチャンスが無駄にはしない。神山たちはこの場を任せて、アナザーダブルの後を追う…

無論、これにはアナザーバルカンは面白くない。弾幕を振りはらい体勢を立て直すと自分のオリジナルへとナイフのような爪先を向ける。頭には血が昇り、自然と獣のように息は荒くなる…またしても、自分の楽しみを邪魔する仮面の戦士に怒りを剥き出しにしていた。

『おまええ、よくも…!!』

「よくも? こっちの台詞だクソ野郎が!ゼロワンの次はバルカンの気色悪いパチもん作りやがって…!! テメエのような悪趣味野郎はここでぶつ潰すッ!」

しかし、怒り心頭なのは彼だけではない。自分を模してる上に非道・悪事を働くアナザーライダーなど不破諫という男が間違っても許容するわけもなかった。己の怒りと正義を貫くためにの力…守護者

の弾丸が、人間を苦しめることがあつてはならないのだ。

『ハッ！ 潰れるのはテメエだ、犬っコロ!!』

火蓋をきつておろされるオリジナルvsアナザー。お互いに繰り出した拳がぶつかり合い、散らす激しく散らす火花が開戦の狼煙となった…。

★★★  
★★★  
★★★  
★★★  
★★★

…何故？ …何故？ …何故？

アナザーダブルと化したクラリスは混乱と恐怖の衝動のまま帝都中を走りまわっていた。どうして、自分がこんな目にあわなくてはいけないのか、自分が何をしたというなか…。悲鳴をあげて周囲から逃げる人々は応えてくれない。そんな中、纏れもがくような足取りは無意識のうちに帝劇を向いていた。

…：…なんとかたどり着く頃、アナザーダブルの姿は一時的に解除され、脂汗をかく少女の顔が覗く…。まだ思考が保つ今のうちにすみれ支配人かもしくは花組の誰かに助けを求めなくては…

しかし、あまりにも間が悪かった。

「怪しい奴、ここを通すわけにはいかない。」

「だから、さつきから言っているだろう？ 私はウォズ、ロンドン華撃団のライダーだ、怪しい者じゃない。飛電或人に聞いてくれれば私が

わかるはずだ。」

「いや、その格好で怪しくないとか無理だろ。」

あざみと初穂が出入口前で誰かと言い争っている。その人物に反応してか、体内のアナザーウォッチの活動が再び活発になりはじめた…。

そう、よりによってアナザーライダーにとってオリジナルに次ぐ自らの天敵になりうる存在である預言者・ウオズ。彼を排除しろと、邪悪な胎動が再び少女を悪魔にせんと脈うちはじめる。

……苦痛に顔を歪ませるクラリス…そんな彼女に初穂が気がつき歩み寄ってくる。

「お？ クラリスじゃねえか。 神山とのデートは…どうした？

顔色悪いぞ？」

「……はあ ……はあ

駄目だ、今の自分に近づくのは…しかし、面倒見の良い初穂は異変に手を貸そうと更に近づく。まずい、本当にこのままでは…!?

「神山と何かあったのか？」

「……いい……！」

「？ ……どうし…？」

「…来ないで下さいッ!!!!」

「ダブル」

もうこらえきれなかった。アナザーダブルが再び表層化…初穂に向かい掴みかかり、首を締め上げる。完全に不意をつかれた彼女は理

解不能な状況と怪人の腕力もあわさり抵抗もままならない。あざみも唾然としておりその間にも初穂は締めまり閉じつつある喉から捻り出すようにクラリスの名を呼ぶが力が緩むことはなく、加圧され続ける首の骨がついに悲鳴をあげようとした時……

「やれやれ、帝都に着くなりいきなりアナザーライダーとは……!」

【ウオズ!!】

動いたのはウオズだった。伸縮自在のマフラーを蛇のように操り、アナザーダブルを弾くと初穂を解放……そして、ストップウォッチ型のアイテム：ウオズミライドウォッチを取り出して起動。同時に腹部に巻いた箱形の黒いドライバー：ビヨンドドライバー装填する。

「変身。」

「『投影！フューチャー・タイム!! スゴイ、ジダイ、ミライ! 仮面ライダーウオズ! ウオズ!』」

緑色のキューブ状のログラムが背部に形成されたかと思えば、ウオズの身体に文字通りに『投影』されていく銀と緑に輝く戦士。短い『V』の字へ開く時計の針の角に顔の上半分を占める液晶画面のようなマスクに張り付く大きい『ライダー』の文字とかなり特徴的な姿でモチーフは恐らく太正世界には存在しないスマートウォッチだ。

ゼロワン、キックホッパー…… それに続く新たな令和・平成世界から来訪した仮面ライダー…… その名は

「祝えー正しき歴史を示す預言者、その名も『仮面ライダーウオズ』!! 偉大なる時の王者の臣下が、この帝都に降臨した瞬間である!」

シリアスな空気だろうがお構い無し、自らの帝都初変身を祝うという明らかに不審者意外何者でもない儀式を行うと戸惑うあざみを尻目に、ジカンデスピアを槍形態に展開してアナザーダブルへ立ち向かう。これを同じく長物の武器であるメタルシャフトで対抗するアナザーダブルだったが、元々の戦闘センスが高いウオズに対抗できるはずもなくブンブンと空振りをした隙を文字通りにジカンデスピアで突かれて地面へと投げ出される。

『…! (身体が言うことをきかない!?)』

「どうやら君、力を制御出来ていないようだね。しかし、悪いが…動きを止めさせてもらう…!」

【クイズ!】【投影!!】フューチャータイム! パッション、ファッション、クエスチョン! フューチャーリングクイズ! クイズ!!】

しかし、すぐに反撃してこない様にウオズは事情を勘づきビヨンドライバーに新たなミライドウォッチを装着。すると、頭の角が『?』マークに変化し、胸のラインが赤と青に塗り変わった姿となった。それは、平成・令和どころか太正でもない『オーマジオウが存在しない未来の世界』を護る仮面ライダークイズの力を纏う形態『フューチャーリングクイズ』へとフォームチェンジをする。このフューチャーリングクイズ、別に殴り合いが強いわけでも、誰にも追いつけない速さがあるわけでもない…。それでも、ウオズがこの形態をチョイスした理由は後々わかる。

「問題ツ!! コブラやハブといった毒蛇は、アナコンダといった毒を持たない蛇と同じパワーを持つ…○か×か?」

『…?』

「は?」

デデン!と突然、出された二択問題。



出題者以外、全員が硬直する空気。何で今そんなことをする必要があるのか理由は全くを持って理解不能……そんな思考に至った時点で回答不能。このクイズ形式ははや押しで、時間制限があるからだ。正解したらどうなるかは未だに正答出来た者がいないのでわからないが、

もし、間違いや無回答だった場合……

「……正解は、『×』だ。」

ペナルティが課せられる。突如、爆発が何処からともなく起こりアナザーダブルを巻き込む。

フューチャーリングクイズ……それは、己の頭脳を武器に世界を救う正解を見いだすミライダーの力。かなり曲者なクセのある能力だが、使いこなす者には敵に触れずとも勝利をもたらすことが可能である。まあ、その分だけ扱いにくく人を選び、故にウオズも積極的には使いたがらないが……

『……痛い！』

「もう一押し。問題！ 君は私と戦いたくない……○か×か？」

そんな回答決まっている。初穂とあざみは間違いなく○だと考える…… 予想はあたりアナザーダブルも拒否の姿勢をとる。

『嫌に決まってるじゃないですか、こんなこと！』

「正解は……『×』だ。」

だが、アナザーダブルを今度はバアアアン！と落雷が襲った。何故か不正解……、それではクラリスが戦うことを望んでいるようではないか！ 本人も戸惑う中、ウオズは動きが鈍い彼女にトドメを刺すべくクイズミライドウォッチより一回り大きいミライドウォッチを取り出す。

「ギンガ!!」

「さあ、最後の一押しだ。」

「投影！ファイナリータイム！ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファンタジー！ウオズギンガファイナリー！ファイナリー！」

そして、ビヨンドライバーにセット：最強の切り札がきられる。基本形態から角が延長され、惑星の星たちが刻まれた鎧が装着されマントをなびかせたその姿はフューチャーリングではないが、宇宙のミライダーである仮面ライダーギンガの力を扱い『ウオズ ギンガファイナリー』。圧倒的な火力と柔軟性：加え、アナザーライダーを相性無視で押しきり撃破する力を持つ。

「少し痛いけど、我慢したまえ！」

決着をつけるため舞い上がるウオズ。必殺技のライダーキックでアナザーウオッチを破壊すれば、この場はおさまるはず。確かにアナザーダブルはダメージの蓄積が過度になりつつあり、逃げだすには間に合わない…。ならばと、逆の行動をとる。ウオズが脚を突き出す直前：異形の影は崩れだし……

『…ちっ。』

「なっ!?!」

なんと変身を解除。生身の姿をさらけ出した彼女に流石のウオズも動揺：思わず空中で急ブレーキをかけてしまう。いくらアナザーライダーとはいえ、生身の少女では仮面ライダーの技を受けられケガ

では済まない…だからこそ、それを逆手にとった苦肉の策。

これで手出しが出来なくなったウオズ… そんな彼に向かい、うつむきながらいつも持っている厚い本を向ける彼女。すると、魔法陣が形成されエネルギーが収束されていく…

「来ないでって、…」

「まずい…?!」

「言ってるのおおおおおお  
!!!!!!!」

次の瞬間、ウオズは全てを呑み込む緑色の閃光に吞まれてしまった

…



「……なんだ?」

クラリスを捜し、走りまわっていた神山は足をとめる。

空に立ち昇る緑色の輝く柱…まるで、ほうき星に届くような一線に

道行く人々の中には『おお…』と感嘆の声をあげる者もいたが、何故か自分は美しいとは感じない。むしろ、それはよくないものの予感。

…：凶兆を告げる自分の勘、現実にならないことを祈る神山だったが現実には容赦などなかった。

## 夢見た幸せ／怪物の少女 I

……とある遠い遠い国

そこには、大きな屋敷があつてお姫様と兄……その両親からなる貴族が住んでいました。

お姫様の一族は『重魔導』と呼ばれる特別な力があり、先祖から代々その力で歴史の裏から権力者の下で暗躍してきたのでした。嵐を起こし、時には山や街すら消しとばすような危険な力……それを振るうことで、時の権力者からの見返りを受けて現在の貴族の地位を手にいれていたのです。

勿論、お姫様もその重魔導を修めることを求められましたが、内向きで本を愛し……何よりも破壊の力である自分の一族の異能とその歴史を忌々しく感じる彼女はそれを拒否します。父にぶたれ、母に叱咤されても断じてそれを受け入れず、いつしか部屋に閉じこもり外に出なくなつたお姫様。最初こそは力付くだった両親もいつしか、諦めて彼女に我が子としての意識を向けなくなります。……一族の恥さらし、出来損ない。心無い言葉がより孤独な心を殻の奥深くへ

それでも、お姫様には唯一見捨てない優しい『兄』がいました。

彼と本の語るお伽噺、それがあつたからまだ彼女は本当に孤独ではなかつたのかもしれない。

……ですが

眼前に拡がる血の海…… その中心で倒れているのは……

「いやあああああああああ  
!!!!!!」



「…はっ!?」

目を覚ますとそこは自室だった……。額にはダラダラと汗の粒、荒い息……魔されていたのか？窓の外はもう暗い。一体、どれだけの時間を寝ていたのだろうか。頭痛と吐き気……倦怠感を覚えながらも記憶を呼び起こす。

(そうだ……私は……)

使ってしまったのだ……二度と使うまいと決めたあの忌々しい『重魔導』を。直撃を受けたウオズは変身解除され、自分はそのまま気を

失った…。

「…気がついたか？」

「あ…」

部屋に誰かがいる。太正世界では珍しい黒のスーツの女性：唯阿だった。片手にはショットライザー：それだけでどんな状況なのかを理解する。

「…悪い夢、ではないようですね。」

「ああ。万一に備えて私が面倒をみるようになった。嫌だろうが、必要な処置だ。」

再びアナザーダブル化した際に即座に対応出来るように彼女が世話役：もとい、監視役に選ばれたのだろう。何となくだが腹に異物感があるような気はする：燻る火種が再び燃え上がりたいと疼いているような。

もう脚本どころではない。こんな自分はどうなるのだろう。…助かる術はあるのか？ …それとも、降魔扱いとして処分されるのか？

「私は、地獄に堕ちるのでしょうか？」

「…今、治す宛をさがしているところだ、希望を持って。」

「裏切られるなら、持たないほうがマシです：そんなものは…」

希望などない。クラリスの心無いは暗く深いところへ再び閉ざされたのであった…。



…さて、場所は変わって帝劇の支配人室。

「ご足労してもらってすまない、ランスロットくん。君のおかげで、私の身分は証明されたよ。」

「…面倒起こすなって、あたし言わなかったっけ？」

ウオズは自分がロンドン華撃団所属する仮面ライダーとして身分を証明するためにランスロットを呼び出して、すみれ支配人や花組の面々に紹介していた。無理矢理、連れてこられたランスロットは露骨にイライラしているが全く彼は気にする素振りを見せずにしており、やれやれと溜め息をつく。『ま…それより』と彼女は星児へと視線を移すと、バツの悪そうな顔が映る。

「やあ、『見習いクン』。色々とは話はあるけど、それは一先ず後にしようか。」

「…うっ」

……見習い？ 首を傾げるさくらとあざみ。すると、神山が説明をしてくれる。

「星児は正確には見習い隊員として、ロンドン華撃団に籍を置いてるんだ。」

「え…あのロンドン華撃団に?!」

「ロンドン、ベルリンに並ぶ強豪華撃団…」



ここで明らかになる星児の経歴。ロンドン華撃団は世界に存在する華撃団の中でも実質No. 2相当の実力があるとされる華撃団で、ランスロットはその中でもエースとして知られている。そんな場所に彼が在籍していたとは夢にも思わなかった彼女たちだが、居場所として申し分ないロンドンを捨ててまで帝都に戻ってきたのは更に驚きである…

しかし、確か帝劇を無断で出ていったという話だったはずだが…  
…それよりも、今はもつと重要な問題がある。ランスロットは改めて、デスクに座るすみれに向き直った。

「すみれ支配人、うちの特記戦力がお騒がせしました。そして、今の帝  
国華撃団の問題も聞いてしまったのですが、彼…ウオズから今回の件  
に何かしらの対抗策があるようです。お時間を頂いても？」  
「ええ、構いませんわ。」

アナザーダブル…クラリスの一件は必然的にランスロットも知る  
ところになった。本来、イギリスの華撃団である彼女が首を突っ込む  
のはまた別の問題になりかねないが、通りすがってしまつた以上は無  
視は彼女の性分上不可能な上、ウオズも関わる気が満々だ。

そして、指名が入つたウオズは皆に説明をはじめめる。

「では、改めまして…。私はウオズ。ロンドン華撃団に一時、身を寄せ  
ている仮面ライダーだ。アナザーライダーの案件に関しては、私の専  
門分野であると言っても他言ではない。」

「「アナザーライダー…？」」

「君達も既に戦つたことがあるはずだ。クラリスくんが変身したもの  
と同様の…降魔とは違う異形に。あれらは、タイムジャッカーが仮面  
ライダーから力を奪い取り、歪め、産み出した怪人さ。」

花組たちの記憶に過るアナザーゼロワンやアナザークウガ…ク  
ラリスの変身したアナザーダブルに臆のアナザーバルカンなど降魔

とは違う異能を扱う強力な怪人たち。普通の仮面ライダーや靈子戦闘機の攻撃すらろくに通じない厄介な相手。……そんな怪物にどうしてクラリスが変貌してしまったのか。その答もウオズは持っている。

「今回、クラリスくんについてだが：彼女は上級降魔・朧に触れられた、もしくは何かされた瞬間にアナザーダブルになったという話だが、恐らく核であるアナザーウオッチを埋め込まれたのだろう。これが本場に降魔がやったとするなら、奴等は間違いなくネオ・タイムジャッカード繋がっていると見て間違いない。」

「クラリスさんを元に戻す方法はありませんの？ 例えば、その核を外科手術などで取り出すなどは…」

「それは無理ですが：救う方法はあるにはある。彼女がアナザライダー化した時に、核のウオッチが耐えきれない程の火力を与えるか：もしくはオリジナルである仮面ライダーダブルの力で倒すか。現在可能なのは前者です……しかし…」

方法はあるとしながらも、歯切れの悪いウオズ：どうしたというのだろう。アナザーウオッチの破壊も彼のギンガファイナリーなら十分に可能なほど火力を持つのに何がいけないのか？

「今回の一番の問題は、彼女がよりにもよって『仮面ライダーダブル』のアナザライダーであることです。ダブルは本来なら変身者が二人であることで成立するかなり特殊な仮面ライダー……しかし、アナザーウオッチは対象につき1つ。それでも、ダブルを強引に再現しようとする…」



…再びクラリスの部屋

唯阿はクラリスの目覚めを花組に伝えるために部屋を出た…。残された部屋の主は溜め息をつき…虚ろに天井を見上げる。いつも寝起きして生活する部屋もなんだか牢屋のように息苦しく感じる…朝は神山とのデートだとうきうきして準備していたのが嘘のよう。

(…私の居場所は、やっぱりここにも無かった。)

結局、ルクセンブルクの実家と変わらない。重魔導を理由にずっと嫌なものから目を背けてきた…一族の宿命、両親…帝都に来てからもろくに戦闘には参加しなかったし、演技もろくに出来ない始末。花組の面々も既に重魔導のことは知ってるし、神山も『なら、無理はしなくていい』と許容はしていたが…きつと本心ではあまり自分を快く思っていないだろう。

…逃げたい。 …でも何処へ？

逃げられる場所なんてない。この帝劇に来たのも、唯一の救いだつた兄を傷つけた事実能耐えられなかったから。しかも、腹の中には重魔導とは違う外部の力が尚も自分を喰い破ろうとしている。そんな自分は何処にいけば…

〔…クスクス〕

「…？」

何処からか笑い声がする。おかしい…自分以外は部屋にいないはず…

【逃げたい？ でも逃げれない…？ もう逃げられる場所なんてない？ 本当にそう？】

「…頭の中から …私の声が？」

自分だけど、自分じゃない… カセットテープの録音とは違う明確な意思をもった『誰か』が喋っている。幻聴にしても明らかに質の悪い嘲り嗤うようなトーンで、軽快に話しかけてくる。…耳を塞いでも意味が無い場所に陣取るソレは何なのかわからないが、思い当たるのはアナザーダブルと化した自分の姿。あれの影響なのか？

【あなたは怪物… ここでは幸せになれない。だけど、幸せになれる場所へ私は案内してあげられる。】

「幸せになれる場所？ 何を…」

【代わりに払う代償はたったひとつ… それは…】



「二重人格…？」

或人は首を傾げた。ウオズが危惧していたのは小説などでよくある『二重人格』…有名どころではジキル・ハイド博士なんかがあるが、現実の症例・解離性人格障害としては過度なストレスなどによる自己防衛で自分にもうひとつの人格があるという思い込みなのだからか。

アナザーダブルは右側（ソウルサイド）と左側（ボディサイド）のダブルの機構を強引に再現しようとするためこの二重人格が起きるのだという。その人格は半身を預ける『相棒』どころか、変身者の負の側面などを象られ産まれたある意味『寄生虫』みたいなもので、特定の寄生バチや寄生キノコが宿主を傀儡にして最終的には喰い破るのと同じく変身者を蝕み衰弱させ肉体を乗っ取るのだという。全く洒落にならない。

「クラリスくんにどんなタイミングで、どんな人格が発現するかはわからない。しかし、既に兆候は私と戦った時に確認は出来た。その人格が我々の味方になる可能性はほぼゼロだろう。」

先の戦いでウオズはフューチャーリンググイズで確認していたもうひとつの人格の覚醒。既に侵食は始まっていると見ても良い…なら、と不破が声をあげる。

「なら、臙を倒せば良いんじゃないのか？」

アナザーウオッチの破壊か元凶である臙を倒す…真っ先に思いつく手段。先は紆余曲折あつて取り逃がしてしまったがこういったものは術者を倒せば元に戻るのには漫画やアニメのお約束だがウオズは残念ながらと首を振る。

「残念ながら、それは出来たとしてもクラリスくんは助けられない。アナザーウオッチは破壊しない限り止まることはないからね。そして、一番厄介なのは…アナザーダブル化した時に表層化していた人格が撃破した時に消えるということだ。」

緊張が走る空気。どうやら闇雲に戦えば最悪、クラリスの本来の人格の消失を招く危険性があるらしい。そんな結果になれば、事実上のクラリスは死亡する上にアナザーダブルの力を失えど帝国華撃団に

離反する可能性だってありうる。

しかし、本来の人格と偽物の人格…どうやって見分ければ…

「あら、皆さんお揃いでしたか？」

「「「「「！」「」」」」」」

その時、現れたのは問題の本人。涼やかな笑みで現れたクラリス…後ろでは唯阿が付き添いで一緒である。ウオズの話を経たため一気に警戒の空気に包まれる支配人室…だが、原因である彼女はキョトンとした様子で首を傾げていて無垢な表情を浮かべる。

「どうしたんですか？ 私は見ての通り平気ですよ？」

…そんなわけがない。

しかし、確固たる証拠も無い。ただひとりの異質な笑顔だけで訴追しきることはあまりに難しい… どうしたものか？

そんな時、ふと或人の頭に過る出来事。

「…（神山さん、今日のデートとかに何か見分けるヒントは？）」

「…（急に無茶な?! いや、待てよ…）」

そういえば、神龍軒での会話で彼女は自分の作風について語っていたことを思い出す神山…。初心者でありながら任された大役の不安やコンプレックスに対する思いなど。彼女の心が見え隠れしていたそれらがカギに成りうるかも…

「なあ、クラリス…脚本はどうだい？」

「? …ええ、順調です。もう時期、書きあがると思いますよ? ただやっぱり素人には無理です。今後は2度と御免ですよ本当。」

苦笑するクラリス。周囲は神山以外は意図をつかめずにいた質問だが、彼は続ける…その顔に貼り付けた笑顔を浮かべながら。

「そうか…。で、作品はやっぱり『バッドエンド』かい?」  
「!」

星児とアナスタシア：作りかけの脚本に目をとおしていたふたりは気がつく。神山が確かめようとしていた一点を…彼女ならどう答えるかはわからないが、『絶対に答えない答え』…しないことだけは唯一ある。それは…

「ええ…」

…：惨くて、儚くて、美しい、全滅バッドエンドです。」

自分の作品がバッドエンドで締めくくることが。そう彼女はこの結末で終えてしまいたくなくて神山に相談したのだから…もし、悩んだ末のバッドエンドのエンディングを選んだとしても、あれだけ悩んでいた笑顔で答えたりするわけがない上に協力した神山にすら言及する素振りすらない。

加え、全くの後悔の無い表情は明らかに不気味。 …もうこれで十分だろう。

「…クラリス……………いや、君は誰だ？」

彼女はもうひとつの人格…ドツペルである。



## 夢見た幸せ／怪物の少女 Ⅱ

……昔からよくお伽噺を読んでいた。

騎士が邪悪なドラゴンを屠る伝説。王子様が呪われた姫を助けて結ばれる話。奇跡を起こして人々を救う魔法つかいの話。……色々、幼い頃から本に囲まれていた。

でも、ある時になって気がついてしまった。どんな童話も……『決して怪物は幸せにはならない』ということに。人を売り飛ばす悪徳商人も、誰かを貶める悪魔も、人間を喰らうドラゴンも……最後は正義の鉄槌が下される。

それは、そうだ……悪役がのうのうとして幕引きする物語なんて後味が悪い結末は万人受けしないし、改心しようと『怪物』の末路は悲惨なもの……苦しめた民たちに礫を投げられた挙げ句に八つ裂きにされる。自業自得の結末……

だが、自分はどうか？ 重魔導の一族の歴史は？

強大な魔力を我欲のままに振るい、力なき者たちを虐げ、富と地位を築いてきた自分たちはまるで……

……クラリスは笑っていた。

いや、正確には彼女の皮を被った新しい人格Ⅱドツペルの表情でありクラリス本人のものじゃない。すぐさま、身構える面々だがドツペルは余裕の顔のままアナザーウオッチを構える。

『私はクラリス……間違いなく、クラリツサ・スノーフレイクですよ。ただ貴方たちに見せず、ずつと心の奥底にねじ込まれて抑えこまれてきたドス黒い『怪物』。魂を共有する他ならない同一人物が私。』

「ふざけるな！　クラリスは怪物なんかじゃない！」

『なんとも言いなさい。これが、クラリツサ・スノーフレイクのあるべき姿！　重魔導の獣……！　もう私を縛るものは何も無い!!』

スイッチに触れる指先と同時にふわりと浮く彼女。途端に嵐のような突風が吹き荒れ、部屋中の物品が倒れたり激しく揺れたり風圧があわさり皆ろくに身動きがとれない……。そのまま、ドツペルはアナザーダブルへと変身して窓を突き破り帝劇の外へと飛び出していく。このままでは、帝都の一带でも被害が出てしまうだろう。

「クラリスちゃ……！　…あ、あれ？」

すぐに対応すべくゼロワンドライバーを取り出した或人……だったが、懐に入れていたはずのライジングホッパー・キーが見当たらない。あれ？あれ？とさがしている間に皆はドツペルを追って外へ飛び出していくが、アナザーダブルからのトリガーマグナムの乱射による爆撃が行く手を阻む。不破と唯阿もショットライザーを構えようとするも、爆風が凄まじく操作が出来ない。

『あはははは…！ ほらほら、ここまで来てみたらどうですかア？』

重魔導を上乗せした弾丸なのだろう、破壊力も馬鹿にはならなく当たった地面は粉碎・炸裂し生身の人間に当たれば軽く皮膚が弾けとぶ威力。しかし、キーをさがしてもたついていたことがかえって幸運になり、一息遅れてきた或人が代わりのシャイニングホッパー・キーをゼロワンドライバーに装填する。

「変身！ はあっ！」

「シャイニングホッパー！！ When I shine, darkness fades.」

厄災の流星が雨あられと降り注ぐ中を縫い、稲妻を走らせるように輝く反撃のゼロワン。演算シュミレーションの前では爆撃を掻い潜り一瞬で背後をとるなど簡単、驚くアナザーダブルの後頭部から蹴り落とし撃墜…地面へと叩きつける。巻き上がる粉塵、砕かれる地面、それだけで相当な与ダメージだったと判るがゼロワンは手を緩めない…アナザーライダーはマギアとは比較にならない相手だ。オーソライズバスターをアックスモードに展開、急降下で距離を詰めて反撃の隙を与えない。

「ハアアア！！」

『やめて！』

「!?」

しかし、地面に倒れたまま変身解除したアナザーダブルはクラリスの顔を覗かせ、反射的にブレーキがかかるゼロワン…。

無論、これが狙いと魔導書を空中で無防備な間抜け目掛けて重魔導の狙いを定めるドツペル……だが…

「甘い！」

『なっ…』

残念なことにシャイニングホッパーの演算能力を上回ることに叶わず、一瞬で側面に回り込まれ魔導書を蹴りで叩き落とされると切っ先を喉元に向けられる…。二重人格のことを予め知らされていなかったら、回避までのリアクションを起こせなかっただろうが事前に頭に情報を入れていれば話は別。安直な手に出たことを後悔するドツペルだったが、その頃にはウオズのマフラーが伸びてきていて彼女の身体をグルグルと拘束していた。

「そこまでだ…！」

『ゼロワン…！ お前に殺せるのか…この私たちを！』

「…」

追い詰められたこの状況においても、ドツペルは余裕の表情を崩さない…そうさ、自分の精神も肉体もクラリスなのだから『正義の味方』がか弱い少女に手を下せるわけがない。ならば、動揺と迷いは必ず隙を産む…これを突けば良い。

されど、ゼロワンは動じない…ドツペルに注意をはらいながら神山を仰ぐ。

「神山隊長、クラリスは花組の隊員だ。部外者の俺に好き勝手する権利は無い。貴方が彼女をどうするか決めるんだ…。」

「俺が…」

残酷な決断を丸投げしたように思えるが、それは違う。

或人はゼロワンとしても帝国華撃団に協力こそしているが、彼は花

組の人間ではない。例えば良くないかもしれないが、滅亡迅雷にハツキングされたマジアのように処分を下すことも出来ないし、彼女に対して責任を負う立場ではないのだ。担うべきなのは隊長である神山なのである。殺すも生かすも……全ては彼の判断次第である。

(クラリス…… 俺は……君を……)

論は成っても、出来るかは別問題。そんな簡単に斬り捨てるのも救いあげるのも判断が出来ないのが普通の人間だ。歪む彼の顔に察したのか、すかさず助けを求めようとするドツペルだがウオズがマフラーをグイツと締め上げ暴れ馬の手綱をとるように許さない。

「隊長、クラリスを助けましょう！ きつとまだ間に合います！」

「隊長だろ、仲間を見捨てんじゃねえぞ神山！」

さくらと初穂が叫ぶ……彼女を助けたいのは皆同じ。神山だって隊員を切り捨てるような真似をしたくはないのは山々……されど、この場でクラリスを助けられる可能性は低い。帝都を守り、隊長という責任ある立場ならここで『処断』するということも視野に入れるべきなのも事実。拘束して生身を晒す彼女を今なら……

「……クラリス。」

迷う…… 仲間を信じるべきか。守り人としての責務を確実にこなすべきか……

その時だった。

「フンッ！」

「ぐあつ!？」

ゼロワンの死角から襲う鉄拳。よろめく隙にウオズのマフラーを素手で引きちぎる異形の手：クラリスを解放したと思いきや、裏拳を叩きこんで気絶させて俵担ぎ。その際、振り向き際に見せた飛蝗の仮面に不破と唯阿は驚きの顔を見せた。：奴は令和の世界での因縁の相手

「お前は……!？」

「せがた三四郎!!」

「いや……本郷タケシなんだけど。悪の1号……」

『まあ、良いんだけどさ……』と溜め息をつくのは仮面ライダー1号オルタ……再び現れた悪の1号。突然の乱入者にすみれやウオズも予想外といった顔である。そんな彼等を気にせずクラリスを担いだまま立ち去ろうとする仮面の男。

「待て！　クラリスちゃんをどうするつもりだ!？」

勿論、行かせまいと立ち上がるゼロワン。すると、1号オルタはクイツと首を動かしてついて来いという動作……あくまで、敵意は無いということか。

どうすべきか……神山を窺うと緊張をしながら首を縦を振るのを確認。同時に2匹の飛蝗は闇夜に跳び屋根を超えて姿を消す。

……残された者たち。間もなく、初穂が神山の胸ぐらに掴みかかる。

「お前！　なんで行かせたんだ……!？」

「彼は……間違いない、伝説の本郷猛だ。俺を救ってくれた仮面ライ

ダーだ……彼なら、クラリスに危害を加えることはしない。」

かつて、燃ゆる艦から自分を助けてくれたあの仮面ライダー……記憶の中の英雄と瓜二つ。かつての花組と帝都を救ったと言われる彼を一途の望みをかけたのだった……



1号オルタを追って、銀座一丁目のある町角にやってきたゼロワン……何処に行くかと思えば、割りと普通に拍子抜けである。深夜の間帯も相まって人通りも無く、片方が女子を担ぐ仮面ライダー2人と、もう一方は目立ち過ぎる光景に声をあげる輩もいない。そして、1号オルタはクラリスを担いだままある建物の中に変身を解かずに入っていく……太正世界に馴染むモダンな建築様式の小さな店舗で縦看板に『光写真館』『店主不在のため休業中』とひっ提げられている。取り敢えず変身解除して、中に入る或人。確かに入り口は写真館らしくカウンターと近くには撮影用のステージがあった。クラリスはソファアに寝かされ、仮面を外したタケシが頬に手をあて何かパチパチと紅いエネルギーを流しこんでいる……

「クラリスちゃ……!」

「平気だ。彼女を傷つけたりはしない。……今はアナザーウォッチの力を抑えこんでる。」

暫くすると、苦悶に歪んでいた彼女の表情が僅かながら穏やかになる……嘘はついていなかったようだ。ほっとする或人だが、対照的にタケシの顔は険しいまま……

「焼け石に水だ。表層に出ないアナザーウォッチを俺でも破壊出来ない……一定時間がすれば彼女のドツペルは復活するだろう。」

根本的な解決にはならない気休め、まあ無いよりはマシくらいとしての応急処置。そう告げると彼は変身を完全に解除し台所へ向かい、黙々と作業をはじめた……。棚からコップと粉が入った紙袋……あとやかんにお湯を入れて火にかける。

「ホットココアで良い？」

「あ、はい……」

あれ？自然な流れでおもてなしされてる……？

色々と聞きたかったけど、一旦、呑みこまざらえないようだ。まずはクラリスの様子を観察しよう……白い肌は人形のような彼女、先よりマシとはいえ風邪に斃される子供のように苦痛に歪んでいる。まだ彼女に植え付けられた邪悪な力が喰い破ろうとまだ暴れているのだろう……。ドツペルは『負の感情がベースの人格』と言っていたウオズという言葉……彼女は一体、どんな闇を背負っているのだろうか？或人の知るところではないが、せめて今は助けたい気持ちで胸がいつぱいだ。

「はい、ココアだよゼロワン。」

「あ、ありがとうございます。」

差し出されたマグカップを戸惑いながらも受けとる。恐らく彼が不破と唯阿が言っていた1号ライダーなのだろうが……昭和を生きていたにしてはかなり若い外見であるまだみずみずしい肌質や髪。一



一般人から見ればすみれ支配人とあまり年齢が変わらない落ち着いて  
優しそうな男性といった雰囲気で、とても歴戦の戦士といった雰囲気  
は無い。

「あ、あの……1号……さん？　なんで、クラリスを……」

「タケシで良いよ。彼女のことは単純にまだ決断を下すには少し早い  
と思ったからさ。」

タケシ：仮面ライダー1号オルタである彼もゼロワンとまた同じ  
く、オーマジオウの命を受けた仮面ライダーのひとりであった。『あ  
と、色々と話しておきたいこともあったしね。』と付け加える。

「ゼロワン、君が持つてるスチームグリップ……それは『太正世界の力』  
を持つように改変した君のお父さんである一型が使っていたゼツメ  
ライズキーを変質させたものだ。今は君が『太正の1号』の役割をそ  
れで肩代わりしている。だから、世界の崩壊もギリギリで止まってい  
る。……つていきなり言ってもわからないか。」

スチームグリップがロッキングホッパー・キーが変化したものらし  
いのは、太正世界に戻ってきた時のさくらから聞いていた。しかし、  
これが『太正の1号』と関係があるとはどういうことだろう……一型は  
愚か、父である其雄も太正世界とは縁が無いはずだが……。確かに、  
ロッキングホッパーの力で疑似的とはいえ霊子技術が使えるように  
なるのが由来からしてそもそもが考えればおかしい。

加えて、世界の崩壊云々が関わるなど一発で理解できるわけがない  
だろ……。と、顔をしかめる或人。ま、そうなるよねと苦笑いするタ  
ケシは自分の持つているまだ口のつけていないココアをテーブルに  
置いてクラリスの方向へ視点を移す。

「さて、もうちよつと話したかったけど……眠り姫のお目覚めだ。」

………ゆつくりと開いていく白い瞼。  
瞳の光が宿すのは、ドツペルではない本来の人格。クラリツサ・ス  
ノーフレイクの意識の覚醒であった。

夢見た幸せ／Nobody's Perfect.

……『怪物』は幸せにはなれない

場所は再び支配人室へ。アナザーダブルのおかげで散乱した書類などの片付けに追われるカオルを傍目にすみれ支配人は神山とデスクごしに向き合っていた：無論、今後のクラリスの処遇についての話し合いである。助けられる手段があるとはいえ、重魔導を上乘せしたアナザーダブルの力は最早、霊子戦闘機と遜色ないほどの戦闘能力であり人命優先とばかりと言うのは厳しい状況になってきている…。

「神山くん、改めて問います。クラリスさんのこと…いくら1号ライダーが介入したとはいえ、このまま看過は出来ません。必要に迫られれば…わかっていますかね？」

「はい…：覚悟は出ています。」

隊長として為すべきことを為す…彼の決意に揺らぎは無い答。

すみれ支配人も表情からその固さを感じとり、敢えてこれ以上は言う

つもりは無い。

「あたしの協力はいる？」

「いえ、これは帝国華撃団の問題……ロンドン華撃団の手を借りるつもりはありません。」

「私は同行させてもらうよ。私は厳密には華撃団の人間ではないし、アナザーライダーならこちらの専門だしね。それに、本郷タケシのいる場所なら検討はついている。」

ウオズのみが同行する形で、話は進む。予想されるアナザーダブルとの戦闘は彼の力が必要不可欠だろう……これのみは了承して神山はウオズと共に支配人室を後にする。

残されたランスロットは申し訳なさそうにすみれ支配人へとまた別の話を切り出す。

「すみれ支配人、こんな間が悪い時に申し訳ない。」

「いいえ。あなたがここに来なければならなくなったのはあたくしの馬鹿な倅のせいですから……」

「……うちにも監督不届きの責任がある。母親であるあなたに星児を責めないでもらいたい。」

ランスロットは知っている……今の星児はああ見えて本当は精神がかなりボロボロなはずだ。『ロンドンで起きた事件』に帝国華撃団の隊長就任のゴタゴタに加えて母親にまで突き放されたらあまりにも惨め過ぎる。このままいけば、彼の居場所は何処にも無くなってしまっただろう。それだけは、どうしても避けたかった……居場所になれなかった身として。

「この一件が片付いたら、一旦はこちらで連れて帰ります。少なくとも、このことがガヴェイン卿にバレたら半殺しじや済みませんから……」

「…そうね。わたくしからも星児を説得してみますわ。手遅れでなければいいのだけれど……」



「はい、あたたかいものをどうぞ。」

「…」

目覚めたクラリスの眼は虚ろだった…。タケシの差し出すココアにも反応せず、人形のようにソファへ座ったままで特に万能もない。

参ったな、と頭をかくタケシ。恐らく、こちらが本来の人格なのは間違いないのだが…こんな調子ではドツペルの復活まで何も事態が進展しない。見かねた或人が口を開く。

「ねえ、クラリスちゃん…帝劇に帰らない？」

「…」

帝劇へ帰還を促すが、彼女は俯いたまま…。それでも、語りかけ続ける。

「皆、待ってるよ。クラリスちゃんに…クラリスちゃんの描き上げる脚本を…だから…!」

「……………放っておいてください。」

しかし、冷たく突き放す彼女。視線は或人に向けられていないが、瞳は諦めや虚無感といった光を灯さない絶望で満たされていた。

「貴方にわかるもんですか… 正義のヒーローである貴方に、本物の怪物になつてしまった私の気持ちが…。」

最も忌むべきところまで堕ちた自分… それを侮蔑し卑下し、絶望していた。自分は物語のお姫様ではなく『怪物』、ヒーローに倒される側。正義の名の下で断罪され、切り刻まれ、大衆に蹴とばされ、後ろ指を刺されて終わるのだから。

しかし、或人は少しうーんと考えた後… ゼロワンドライバーを取り出す。

「俺はある戦った敵に言われた…『仮面ライダーは悪の力、歪んでいるのはお前たちのほうだ。』って。仮面ライダーの力は全てが悪とされる存在にルーツがある…それは消えない炎の十字架。これはゼロワンドって例外じゃない。」

正義の仮面が背負う悪の業…昭和、平成、令和、脈々と受け継がれてきたのは決して明るい英雄の側面だけではない。仮面ライダーの在り方は悪と血を通わせるコインの表と裏、互いに争いあうが決して鏡合わせの虚像ではないのだ。1号とショッカーの改造人間、クウガとグロンギ、そして…ゼロワンと滅亡迅雷、光の歴史は等しく闇の歴史でもある。

『でもね…』と或人は続ける。

「俺の先輩ライダーが言ったんだ…『それを決めるのは自分自身だ』。だからこそ、俺達は正義の味方（仮面ライダー）なんだって。力のルーツなんて関係ない、自分がどうありたいか…それが一番重要なんだと俺は思う。クラリスちゃんはどうしたい？ 自分の持つ力を。」

「…」

或人なりの、仮面ライダーとしての精一杯の語りかけに彼女は顔を曇らせる……それは、無視ではなく言葉を確かに聞いているということでもある。

重魔導の力……こんなものは消えてなくなれば良い、普通の女の子になりたいとしか思ってこなかった。誰も傷つけたくなかったし、この力こそが一族の忌まわしい所業の証明でもあるのだから。思わず、スカートを握る手に力が籠る……

「貴方は何もわかっていない！ 私は仮面ライダーではなく、本物の怪物になってしまったんです！ もう何もかもおしまいなんですよ……！」

「……クラリスちゃん。」

「じゃ、怪物じゃなきやいいわけだね？」

「タケシさん……？」

すると、タケシが赤黒い炎を纏う手をクラリスに差し出す……ドロドロとして血生臭くて、熱くおぞましく滾り燃えるソレは『業』が形を獲て無作為に誰かを呪おうとしているように揺らめく。

クラリスはそれに目が奪われ、或人は全身にゾワツと鳥肌がたつのを感ずる……恐らく、これはタケシ自身……否、仮面ライダーの歴史に由来するおぞましい形容しがたき『闇』だ。そう本能が教える。

「俺は君を『仮面ライダー』に出来る……だが、それを選べば君は帝国華撃団のクラリツサ・スノーフレイクには戻れない。さあ、選びなよ

…堕ちて怪人として死ぬか、孤独な正義の味方の道を選ぶか？

……………それとも、彼の手をとるかい？」

「え…」

ちょうどその時、写真館のドアが開いて来客ベルが鳴る……………そして、中に入ってきた人物にクラリスは眼を見開いた。困ったようなちよつと抜けた笑顔、今は一番に会いたくなかった彼が自ら足を運んできたのだから。

「クラリス…」

「神山…隊長……………」

安堵の声をあげる神山…しかし、クラリスは立ち上がって後ずさる。魔導書突き出し、震える手で拒絶を示す。傍らにいた或人が思わず手を伸ばそうとしたが、タケシが制止…彼等に任せるようにと促すと半歩下がって向き合う者たちの空間から外れる。

残された花組の隊長と隊員… 向き合おうとする者と拒絶しようとする者。まず、切り出したのはクラリスからだった。

「何をしにきたんですか？ どうして来たんですか？ やっぱり、私を殺しにきたんですか…？」

「違う、君を迎えにきた。帰ろうクラリス…」

「私に帰る場所なんて無い！ ルクセンブルクの実家も、帝国華撃団も私の居場所じゃなかった。『怪物』は惨めなエンディングしかないんです、いつだって!! だから、放って置いて… 来ないで…!」

最早、悲鳴に近い声だった。魔力も高ぶりはじめ、彼女にアナザーダブルの影が重なりはじめ…されど、神山は止まらない。その微笑みは崩れず、腕は拗げられる。



「それは出来ない相談だ。すみれさんだつて言つてたろ？ 華撃団は家族……だつたら、隊長である俺が家族を見捨てるわけがないだろ？」  
「……隊長」

【詭弁よ。】

「!?」

クラリスの頭のなかで声が響く……そして、彼と重なるように視界に映るもうひとりの自分。冷めきった何もかもを諦めた瞳にかつてのルクセンブルクの実家で閉じ込もっていた頃の過去を見る……何も期待しない、だから何も起こらなくて良いと願うばかりのあの日々。更に背後には自分に罵詈雑言をぶつけた父と母……包帯だらけになつて呻く兄……自分に奇異の視線を向けた人々……それらが並んでこちらへ向かつてくる。

【彼が欲しいのは私たちの『重魔導』！ 個人なんてどうだつていいの。道具として利用したいだけ……、私たち自身に興味なんてないわ。さあ、眼を閉じて……王子様なんて迎えにきやしない。なら、せめて楽しい夢の中に微睡んでいきましょう…… ずっと……ね？】  
（……そうだ。どうせ、傷つけてしまふなら……いっそ、全てから眼を背けてしまえば……）

邪悪な甘言が意思を折ろうとする…… 折れれば最後、立ち上がれないと知りながら屈しはじめる心。同時に魔導書はいつの間にか魔力を溜めはじめた……迫り来る敵を祓うために。もう良い、もう散々だ。傷つけるのも傷つけられるのも……もう終わりにしよう。全部、投

げ出してしまえば良い。

瞼を下げ、意識から手を離し……………

「クラリス……！」

その直前、グイツと引き寄せられる。暖かい……この温もりは……………  
そうか、彼が抱き締めたのか。

「は、離して……………私は……」

「君は怪物なんかじゃない。本が大好きな女の子で、帝国華撃団のメンバーで、俺達の家族だ。だから、この手を離しはしない……君が本当にどうしたいかを聞くまでは……」

……どうしたい？ そんなこと決められはしない……いつだって、自分のことは誰かが勝手に決めてきたんだ。何を今更……………

「アナザライダーがどうか、関係ない。君の気持ちを聞かせてくれ……クラリス！」

「……………隊長。」

なのに、どうして胸が痛くて熱いのか…… どうして、彼や帝国華撃団の日々を思い出すのか……

——私もいつか、幸せな物語が書けたら良いな。

——そうか、クラリスくんは脚本家志望なんだね？

——!?

神山との初めて出会ったのは帝劇の書庫。ありえない男性の登場に狼狽して暫く、さくらから彼が新しい隊長だと紹介されたあの時……。正直、何と運が無い人間だと思った……わざわざ落ちこぼれの華撃団に海軍の元エリート道を行っていた人間が来るなど。左遷にせよ、

何にせよ、吹き溜まりに来てしまった以上は自分たちと同じだとしても、違った。

彼はひたすら頑張り続けた。誰もこない演劇のモギリも、傷んだ舞台の修繕も、時には光武の整備まで手伝った…。全ては帝国華撃団の皆のためにとその手を働かせ続けながら笑う。

そんな合間に他愛ない会話をしたり、時には相談に乗ったり乗ってもらったり…。気がつけば自分も笑っていた。

帝国華撃団に来てからもまだ一年も経たない…。でも、当たり前の日々は今まで人生の中でキラキラしていて何よりも美しい。

ークラリス、大丈夫だよ。俺もついてるから一緒に頑張ってみよう

そうだ、脚本を書くことへ背中を押してくれたのも彼…。そして、いつも近くで見守ってくれていた仲間たち。こんな自分でも手を差し伸べてくれる人がいる…。なら、その人たちが居る場所が…。

「隊長…………… 私は…」

「駄目よ！ 駄目！ 信じたところで待つのは裏切りと痛みだけ!!」

必死に黒い影が叫ぶ。しかし、その輪郭はゆらゆらと輪郭を崩していき、断末魔のような金切り声で訴え続けるがもう負の感情は胸の隅へと押しやられ、小さくなつていくのと呼応するように消えいく独りぼっちの象徴。幻はやがて霞になつていく…。もうクラリツサ・スノーフレイクはもう鳥籠の姫でも、怪物でも、ましてや、独りで二人の仮面ライダーでもない。

「私は……………帰りたいです。帝国華撃団に…」

帝国華撃団の一員、クラリス…それが自分の物語。その答が選ばれ

ると黒い自分もうつむき涙を流しながら消えていった。同時にアナザーウオッチが彼女の掌から零れ落ち、床にカツンと当たると緑色のプログライズキーへと形を変える。どちらも歪んだ鏡像の役割は終わったのだろうか…

「帰ろうクラリス…」

「ええ、神山隊長。」

「さて、我々の出番は無かったようだね。まさか、アナザーウオッチを彼女の心を救うことで繋がりを断ち切るとは…」

「…」

その一部始終をこっそり、扉の影から伺っていたのはウオズと星見。万一の事態に備えて待機していたがどうやら無駄で済んだと一安心。ウオズはやれやれと微笑んでいたが、星見は複雑な顔をしながら手にかけていた刀を離し去っていく。彼は彼なりに思うところがあるのだろうと、あえて追わない預言者だったが今回の話がまだエンドマークを打たれていないのは察しているからでもある。

「やれやれ、そう敵も易々と問屋が卸さないといったところか。」



「クううううアアリースう、ちやああああああん?!?」

「!」

突如、忌々しい絶叫と共に光写真館を魔幻空間が呑みこんでいく：外は一気に黒く淀む邪氣の空と紫色に泡立つ毒の沼へと変貌。神山とクラリスは身構える：ひしひしと伝わる邪悪で強大な妖力を持つのは今回の元凶である『奴』…

「楽しそうじゃないかアア?! この朧様を差し置いてツ！」

上級降魔・朧、再び。ムシヤクシヤすると怒りを露にし、ギラつく歯が並ぶ口許を覗かせる…：そんな様子を『もしかして、嫉妬?』とタケシが空気を読まないことを呟いたため或人が後ろで口を塞ぐ。さて、やはりそのままハッピーエンドなんて許さないと立ち塞がる悪魔。だが、怒っているのは大事な仲間に手を出された神山も同じ：大事な仲間に手を出されたのだから。

「朧、貴様！」

「あーあ、隊長サン？ お前に用はない。俺はクラリスちゃんと話がかしたいんだ。」

「私は話すことは何もありません！」

されど、神山に気を留めることない朧。『まあまあ、そう言うなつて』とクラリスへ語りかける…

「俺はな幻影の他に『破壊魔術』を使う。根本的にはお前の重魔導と近いものもある…そして、この力が人間に利用されるところを見てきた。醜くて、傲慢で、際限を知らず…愛想が尽きるような虫けらどもにずっと利用されてきた。本当に馬鹿らしくて馬鹿らしくてな…だから、俺は決めただ…この力を自分のために使うってな。」

笑っている…だが、口調が何処か論すように聞こえるのは気のせいだろうか。彼の視線は口許とは対照的に真剣な光があるような…

「気持ちいいぞ、思うままに力を奮って何もかもぶっ壊すのは。だから、来いよ… その下らない『一線』を超えてさ。俺とお前は、何も変わらない。」

恐らく、人を嘲笑うのが常ながらこれが奴なりの本心なのかもしれない……されど、

「ふざけんな！ お前とクラリスが同じなわけがない!!」

「隊長…？」

否と。強く否定するのは神山。悪魔からの慈愛をはね除け、今一度と乙女の心を抱きよせる彼は身勝手な論に牙を剥く。

「お前の言うその下らない『一線』って奴はな、超えたか超えないかは雲泥の差なんだよ!! お前のようなクズとクラリスと一緒にするんじゃない。貴様ごときがクラリスを語るな！」

「隊長…」

「ッ！ お前は引っ込んでろ!!」

神山は許容するはずもなかった…夢見る乙女が、悪夢を見せる悪魔

と同質など。無論、これが臙を更に激昂させるのは当たり前で毒液をとばして神山を蒸発させんとするが、寸前でスチームホップパーへと変身したゼロワンが割って入るやオーソライズバスターで斬りはらう。これには臙も笑顔を消して激しくギリギリと歯軋りをする。

「ゼロワン……！」

「臙、俺は魔術のことはわからない。だがな、お前が下らないと踏み越えた『一線』の側にはな、大切な物があるんだ。クラリスちゃんはそのれを見つけれられたから踏み留まれたのさ。だから、彼女は『怪物』にはならなかった……お前にはわからないだろうけど。」

仮面の下で或人は臙に対し、哀れみの眼を向けていた……よくはわからないが、彼も元々はクラリスと同じ境遇だったのかもしれない。そして、今回のような『一線』を超えるか超えないかの時に、踏み留まれるものも手を掴んでくれる者も何も無かったんだろう……だから、人を嘲笑う怪物に成り果ててしまったんだ。故に、同じ資質を持つ彼女へ手を伸ばしたのか……

全ては予想に過ぎない……されど、手を振り払われた挙げ句に吠えられた悪魔の沸点は限界を迎える。

「黙れよ、お前ら！ もう良い、テメエら仲良く修理し終わった荒吐で塵にしてやるよオ!!」

「バルカン」

叫びに呼応するように飛来する荒吐に臙もアナザーバルカンへと変身して唸り声をあげた。

ゼロワンはともかく、神山とクラリスは生身……戦いどころか魔幻空間に……

……しかし、運命はあまりに都合よく気紛れだった。

「隊長オオ!!クラリスうううう!!!」

「初穂!」

「初穂さん!? 一体どこから?」

「『忘れ物』だあ、受けとれえええええ!!!」

何処からともなく初穂の声が聞こえたかと思うと、空から無限が降ってきた…しかも、神山の隊長機だけではない赤、青、黄色に……クラリスのパーソナルカラーである緑の機体も。

「無限! 皆の分も調整が終わったのか!」

「おうよ! これで、やっと華撃団らしくなってきたぜ!!」

そう、ついに帝国華撃団の霊子戦闘機・無限が正式に皆へ（さくらの分を除いて）配備されたのである……。ひとりだけ霊子甲冑のままだが、これが本当に華撃団のスタート地点と見て良いのかもしれない。初穂は赤、あざみは黄色、アナスタシアは青の機体に乗るそれぞれ、チューニングがされた愛機で荒吐へ猛攻を仕掛け、その間に光武と神山機の無限が抱きあげる形で緑の機体を主たちへ届ける。

「クラリス、もう大丈夫なんだね?」

「はい、ご心配をおかけしました。」

クラリスの無事を確認すると安堵するさくら…一方、神山機のコックピットからは星児が降りてくる。

「星児…」

「早く乗れよ。」



特に何もなく、彼は本来の操縦者へと白銀の機体を託すと戦いに巻き込まれないように撤退。開け放たれる2つのコックピットに神山とクラリスは領きあい、乗り込むと動力を起動する。その際、クラリスはアナザーウォッチが変化したプログライズキーを思いだし、ゼロワンへ投げ渡す。

「社長さん、これを！」

「お!? これ…!」

原型になったアナザーウォッチと同様に、仮面ライダーダブルの力を宿した『クライムカウンティングダブル・キー』。どんな理屈で変質したかは不明だが、これでさくらの時と同様に合体技を使えるかもしれない。

「隊長、社長さん…もう私は自分から逃げません。例え痛みを伴っても、前を向いて生きていきます。だから、力を貸して下さい！」

「ああ、勿論だとも！」

「なら、いくよ…神山さん！ クラリスちゃん！」

「クライムカウンティング ダブル!!」

彼女の決意を聞き届け、オーソライズバスターにダブル・キーを装填したゼロワン。すると、目映い緑色の霊力の光が一带を包み込んだ…



地球の本棚…… 地球の叡知と記憶を図書館のように具現化した  
仮想空間。神山はそこで、あるデータの検索をかけ探し求めていた。

「キーワード、『クラリツサ・スノーフレイク』『乙女の秘密』……」

彼の呟きに反応して、本棚は複雑に動いていき、ある一冊の本を彼の前に示す……

「見つけたぞ、これがクラリスの秘密……」

「何をしているんですか、隊長？」

「ひっ!？」

その本を取ろうとした瞬間、後ろから話しかけてきたクラリス……  
笑っているが、こめかみをヒクヒクとさせる様子から間違はなく怒っている。必死に弁明をしようとした神山だが、乙女の秘密を探る愚かな輩にかけられる慈悲などないと彼女は魔導書を拡げ、更にはゼロワ  
ンまでオーソライズバスターの銃口を向ける!

「Go to hell!! 地獄に落ちてください!」

「う、うおおおおおおおおお!?!?!」

次の瞬間、重魔導上乗せのゼロワン・ダストが炸裂。緑色の巨大な  
砲撃は神山を呑み込み、そのまま射線上にいたアナザーバルカンをも  
巻き込み塵へと変えてしまう。

『待て待て、なんだそりゃあああああ!?!?!』

隴の混乱が入り交じった悲鳴が響き渡り、魔幻空間は解除され……元  
の夜の帝都が戻ってくる。合体攻撃をした3人も無事帰還し、初穂た

ちと合流…これにて、アナザーライダー騒動は終わったのであった。



翌日、帝劇の舞台の上に立つ帝国華撃団のメンバーたちにカオルがついに刷り上がった台本を配っていた。心待ちにしていた到着に歓喜が沸き立つ…これでやっと本格的な練習が初められるのだから。特に主役を任されたアナスタシアとヒロインを務めることになったさくらはより強く気合いを入れている。

そんな様子を舞台裏から見ていた神山と或人は頷き、邪魔をしてはいけないうとその場をそつと離れる。

「いやあ、クラリスちゃんの作品『ダナンの愛』か…楽しみだなあ。」「ああ、きつと帝劇復活に相応しい演劇になると思うよ。そう言えば、当の本人を見てないな…舞台にもいなかったし。」

「…あー、脚本仕上げるために徹夜したらしいから、部屋で休んでるんじゃない?」

徹夜…まさか、あの戦いの後でか。吹っ切った彼女はこの思いを作品にぶつけたいとは言っていたがあの流れで徹夜は流石にタフ過ぎるというか、確実に身体に無理が来るだろう。脚本を一晩で完全に仕上げたことは褒めなくてはならないが、健康管理の疎かさは隊長として見過ごせない。『ちよつと様子を見てくる』と或人と別れた神山はその足で彼女の部屋の前へ…

「クラリス……ん? 開いてる?」

ドアに施錠はされておらず、少しズレている… 部屋の主には悪いが入らせてもらおう。すると、ベッドに少女が可愛らしい子猫のように丸まってすうすうと寝息をたてていた… まあ、仕方ないだろう。隊長権限で今日一日は休みにしてあげようなんて考えたり… いや、そもそも隊長にそこまで権限無いような気もするがそこは置いておいて。穏やかに眠る彼女をそっとしておくことにした… どうせ起きたあとは嫌でも忙しくなるのだから。

微笑みながら寝顔を眺めて暫く。ふと、神山：クラリスの机の上に書きかけの原稿を見つける。今回の舞台でたる『ダナンの愛』の没原稿か？ ちよつと興味を惹かれた彼はこつそり覗いてみる…

「……さて、クラリス先生。ちよつと失礼しますよお…」

――あゝあ、人生が五回くらいあつたら良いなあ！

――五回とも別の国に産まれて

――五回とも別の本に出会って

五回とも、同じ人を好きになる

「おっと、これは……」

なんて乙女な。

「……すうすう…… これからも見守ってて下さいね、M・i・Gott  
t（私の神サマ）……。……すう……」  
「……？」

なんだ、寝言？ 一瞬、目を覚ましたかと思ったがまだ彼女は寝息をたてている……。 陰り無い月のような美しい横顔はまるで女神のよう。前へ進む第一歩を踏み出した彼女へ目を冷まさないように小さく耳許へ言葉を贈る。

「ああ、ずっと見守ってるよ。クラリス。」

## 鬼の涙 I

クラリスが完成させた脚本『ダナンの愛』……それは、間違いなく帝劇復活の号令に相応しい作品になるだろうと誰もが確信していた。主役は世界のトップスタアことアナスタシア・パルマとなれば最早、鬼に金棒である。団員も前向きになり、あとは舞台を成功させれば良い……だけではなかった。

花組の抱える大きな問題はもう一つある。

それは、星児のことだ。既存の隊員といざこざ、特に現隊長である神山と揉め事を起こした彼は『すみれ支配人の息子』『ロンドン華撃団の見習い隊員』という関係もあり、微妙な立ち位置だった。花組団員たちも彼に対する意見はバラバラで

- ・ 帝国華撃団に迎え入れたい派…… 神山、初穂
- ・ 可能なら、迎え入れても良い派…… クラリス
- ・ 迎え入れ反対派…… さくら、あざみ
- ・ 無関心…… アナスタシア

といった具合で、星児の母親でもあるすみれ支配人も頭を悩ませていた。或人たちも思うところがあるが、厳密には部外者の彼等に人事への口出しは出来ず、結局は星児本人と隊長である神山の意思……並びにロンドン華撃団の意向にもよるのだが……

「何はともあれ、あの子と花組に溝が入ったままなのはこの先の遺恨にも繋がりがかねません。神山くん、無茶ばかり頼んで申し訳ないですが、わたくしの不肖の倅のことをお願いしたいの。」

支配人室に呼び出された神山はすみれ支配人から、星児のことを頼まれていた。しかし、神山はすぐに頷かずかない。

「支配人…それは、あなた自身から星児のことを皆に伝えればよろしいのでは？ …初穂から星児がロンドンに行くまでの経緯を全部を聞きました。俺よりも、上司であり母親であるすみれ支配人自身の言葉が何よりも納得させ、心を動かすものでは？」

「…」

以前、星児と揉め事になった際に初穂は『過去』を神山に伝えた…恐らく、長く帝国華撃団に関わった者しか知らない忌まわしい記憶を。恐らく、初穂以外の花組団員は知らないであろうそれを彼女が伝えれば少しは理解を得られるだろう。

…だが、返ってきたのは渋い顔だった。

「初穂さん、話したのですね。…ええ、いずれ話さなければならぬとは思っていました。ですが、それは悪手でしょう。花組の皆は優しいですから、きつと『同情』をする…でも、それはあの子のプライドを踏みにじる行為ですわ。まして、母親のわたくしが手をまわしたとなれば尚のこと…」

上司であり親、それがなんと難しい立ち位置なことか。何とか手を差し伸べたくても、そう簡単にはいかない。全く、厄介なことだと神山も今は頭を悩ませるしかない。

「…わかりました。俺も力を尽くしますが、僭越ながら支配人自身も上司として、何よりも親として責任を果たすべきかと思えます。…失礼します。」

「…」

神山が支配人室を後にし、すみれと秘書のカオルだけが残る…。帝劇の主は今、その役目の仮面が落ちていた。デスクの椅子によりかかると『ふう…』と溜め息をつきながら天井を決して隊員には見せない疲れた眼で見上げていた。カオルも審判そうに顔を覗かせるが、手

で制止する……

「母親としての責任……。支配人としての役目……。思った以上にま  
ならないものね。こんな有り様、『あの人たち』に会わせる顔がありま  
せん。」

「すみれ様の判断は支配人として正しくは思います。この大事な時  
期、私達の積み上げてきた努力がやっと花開く瞬間に余計な横槍が  
入ったりでもしたら、目もあてられません。ですが……。今の坊っちゃん  
には母親の貴女の支えが必要なのは神山さんが言うように事実か  
と私も思います。」

わかっている……。勿論、わかっているのだ。されど、母親としてやる  
べきことと帝国華撃団の旗を振る者として為すべきことは必ずや同  
じではないのだ。だからこそ、星児が帝国華撃団を飛び出していくこ  
とを黙認しそれをロンドン華撃団が善意で拾ったと……。そう『建前』  
ではなっている。

そのことが悉く裏目に出たわけだが……

「わたくしは……。母親としては失格ですわね。」



キラリと眼前に煌めく凶器の光。

……。次の瞬間、機体が強い衝撃に襲われるが操縦レバーを離さず何と  
か踏み留まる。しかし、攻撃は止まず次々と愛機に叩きこまれる無慈悲  
と嘲笑の一撃一撃。計器は悲鳴のようなアラームをけたたましく



鳴らし、自分の身体も激痛を伝える。

三式光武のコックピットで星児はこの理不尽な攻撃に歯を喰いしばっていた。反撃はままならない……何故なら、敵は『降魔』ではないのだ。ましてや、相手は最新鋭の霊子戦闘機が2機である……あまりにも分が悪い。

「……くっ!？」

——思いあがるなよ、七光り

——貴様にかけるのが、期待だけだと思うな

「少年！ 少年！ しっかりしろ、少年！」

「……！」

揺さぶられ目を覚ますと、そこは忌まわしい記憶のコックピットの中ではなく帝劇の食堂。星児はどうやら自分がテーブルで眠りこけていたらしいことを把握する…… おまけに魘されていたのか。

そんな自分を揺さぶっていた銀髪の女性……浮世離れた白い肌に黒い洋装といった格好はすぐに脳裏から彼女の名前を引き出す。

「……なんだ、あんたか。」

「あんたとは随分だな。魘されていたぞ少年。」

女性は心配の視線を向けるが、煩しそうにする星児。まあ、彼女のことにはある程度は知っている仲…用事はなんであれ目的は母親であるすみれだろう。この人の無遠慮なところは苦手だ…

「おふくろなら、恐らく支配人室だ。案内は別にいらねえだろ。」

「気遣いありがとう。そう言えば、少年…早速、騒ぎを起こしているそうじゃないか。」

「…」

…特に、こういうところが。触れてほしくないところに平然と土足で踏み込んできて、言いたい放題。根は悪人といった部類ではないだろうが、今は最も関わりたくない部類の人間である。

「あんたには関係ないだろ。」

「そうはいかない。君たち親子とも付き合いはあるし、私の可愛い弟子もここにいるのだから。」

弟子？ 誰のことだ…？ すると、タイミングをあわせたようにさくらと或人& a m p ;イズがやってくる。間が悪いにも程があると、顔をしかめっていると彼女たちはこちらへ合流してきた。

「師匠…！ と…星児さん？ お知り合いだったんですか？」

「ああ、そうだよさくら。それと、そちらは噂に聞く仮面ライダーゼロワンこと、飛電或人社長かな？」

弟子…つてまじか、さくらのことか。更に顔を曇らせる星児と自分のことが呼ばれたことに困惑する或人…女性と特に面識があるわけではないのだが。すると、さくらが彼女に対して説明をする。

「社長さん、この人は『村雨白秋』さん。支配人とも旧知の仲で、私の

剣の師匠でもあるの。とても優しく、こうやって時々、帝劇に来てくれて様子を見にしてくれるんですよ。」

「優しいだけじゃないぞ、時にはそれなりに厳しい。あと、彼女のお父さんに娘がオイタを働いてないかの報告も兼ねている。」

「し、師匠！」

「さくらちゃんの剣の師匠か……」

顔を真っ赤にするさくらとその様子に微笑む女性『村雨白秋』……。ちよつと変わった人だなと、或人の印象……。まあこれくらいなら許容範囲だし、もつと変わり者なら既に居るし。不破さんとか不破さんとか不破さんとか（パーンチングゴング）

でも、弟子想いな良い人なんだろう。

「活躍はかねがね聞いている。さくらと帝国華撃団を今後ともよろしく頼む。」

「は、はい。こちらこそ！」

握手を交わして、自己紹介は一段落。すると、居心地が悪そうに顔を曇らせた星児が『野望用がある……』と逃げるように離れていく。その背中を半ば睨むようなさくらの視線に白秋はああ、やっぱりと成り行きを察する。

「やはり、彼……君たち花組と問題を起こしたか。」

「師匠、星児さんのことはご存知で？」

「ああ、勿論。付き合いそのものは、さくらより長いよ。だから、隊長になるとロンドンから無断で帰ってくるなり花組の隊長になるなど抜かしているのだろうあの子は？」

白秋、彼女はすみれ支配人とは長い付き合いであり息子の星児もまた然りというのは当然だろう。まあ、納得できることだ……

「相変わらず、勘がいいですね師匠。」

「ま、ロンドンの彼に帝国華撃団復興を教えたのは私だからね。」  
「そうなんですか……。」

……へ？」

最後のこの一言以外は

## 鬼の涙 II

「…そもそも、君達は色々とおかしいと思わなかったのか？ 何故、帝国華撃団を勝手に出ていった身でありながら、名門華撃団であるロンドンにどうして身を置いているのか？ いくら、すみれ支配人の名前が通るといっても縁もない異国の地で無理があるとは思わないかい？」

確かに。言われてみれば、無断で組織を離れるような輩を旧花組の忘れ形見としても異国の華撃団が手を伸ばして欲しい人材とは思えない。星児輩神山のような霊子戦闘機への男性適合者は技術向上がはかられた今でも、霊子甲冑からまあ毛が生えたかくらいしか増えていない貴重さだが、無法を働く奴など普通の組織はむしろお断りだろう。

「師匠、つまりどういう…？」

「星児は、無断で出ていったんじゃない。あの子自身はそう思っているかもしれないが…実際は違う。裏ですみれ支配人が根回しをしていたのさ。彼女と繋がりがあるロンドンの騎士のツテでね。」

なんと…!? でも、何故にすみれ支配人は星児を離れさせようとしたのだろうか。方向性はどうであれ、帝国華撃団再建への熱意は本物である意味、誰よりも長くそれに関わってきたであろう彼をどうして異国の華撃団に？

…その疑問に到達すると、目を伏せながら白秋は語る。

「彼は物心つく時には母親と一緒に帝国華撃団再建へと共に走ってきた。だが、まだ当時は幼く力も無い彼では傷つくばかりだった。周りの大人は『旧・帝国華撃団の忘れ形見』『親の七光り』以上の存在でしか星児を見てこなかったからさ。度々、心無い言葉を浴びせられ、傷つきながらも、母親や帝国華撃団のためと齒を喰い縛りながら笑って

心を砕き続けるのを：私は見てられなかったよ。」

遠い記憶： 雨で濡れた彼。笑って誤魔化すが、徐々に心身共々磨り減らしていき若さの輝きが翳っていく様子は周囲から見ても明らかだった。そして、それを間近で見ている母親ともなれば：胸を痛めるのは必然だろう。

「だからこそ、彼女は断腸の思いで帝国華撃団から星児を切り放すと決めた。これ以上、我が子が傷つき続けるのを止めるためにロンドン華撃団に託すと決めただよ。ロンドン側もサー・ガヴェインの進言や事情を理解して受け入れることにしたのさ。……しかし」

「…？」

白秋の顔の陰が濃くなる。が、すぐにそれは気配を潜めて明るい顔を見せる。

「ああ、これ以上は当事者から聞いたほうが良い。私が語れるのはここまでだ。それじゃ、私はすみれ支配人のところへ行こうかな。」

「へ!? し、師匠！ 何も肝心なところ話してないじゃないですか!?

師匠！ 師匠!?!」

そのまま、核心を全く語らず去っていく彼女に啞然とするばかりのさくらと或人。フリーダム過ぎる立ち振舞いで呆気をとられていた弟子と客人： 一方で或人は星児のことを考えていた。

「ねえ、さくらちゃん。星児さんはロンドン華撃団にいた期間はそう短くないはずだよ。わざわざ、ランスロットさんが迎えに来るくらいだからそんなに仲が悪かったとは思えないし……。なんで、ロンドン華撃団を無断で飛び出して戻ってきたんだろう?」

「…それは、帝国華撃団の隊長になりたかったからじゃないですか?」

「だとしてもだよ。無断で…っていうのが引つ掛かるなあ。もしかし

てだけど、白秋さんはロンドンで何かあったのを知って呼び戻したんじゃないかな？」

今までの話を纏めるに星児はそれなりの期間は在籍して、ランスロットの様子からロンドン華撃団での人間関係も悪くはなかったようでもある。普通に過ごさせていければ、帝国華撃団への想いこそあれど愛着がわくと思うのだが。それを飛びだし、隊員であるランスロットがわざわざ連れ戻そうとする…色々と不自然でもある。

「……………あとの先を知る当事者と言えば……」



…初穂の部屋

御輿や桃燈が飾られた部屋は勝ち気な彼女らしい性格が良く現れている…が、当の部屋の主は愁いのある顔をして手紙と写真の重なる束をとっていた。全部がイギリスから送られてきた写真…時計塔や街並みなどの他、ランスロットなどロンドン華撃団の隊員と一緒の物などなど。これらに映る星児は殆どが屈託なく笑っていた…初穂も彼が出ていく前には滅多に見なかった笑顔が沢山おさめられている。

——はじめてのロンドン、時計塔

——最強の騎士とのツーショット！

——記念撮影！ 俺と、隊長と、ランスロットと

——勝利のポーズ！ 決めッ！！

——最強の騎士、隊長からのお説教（笑）

きつと、楽しい思い出だったんだろう。それでも、手紙にはいつも初穂や母親であるすみれへの心配や残して飛び出してしまったことへの謝罪などが書かれていた…。そして、いつも最後には必ず帝国華撃団へ一人前になって帰ってくると書かれている。初穂としても若干羨む気持ちはあったが、これらを笑って見れたのは彼は心をこの帝国華撃団に残していたことと…傷つき苦しんできた姿を見てきたからだろう。

そう言えば、自分をはじめて帝国華撃団に来た時も一番喜んで盛大に祝ってくれたのは彼だった。そんな過去の思い出に浸っていると、コンコンと部屋のドアを叩く音が響く。

「ん？ 誰だ…？」

「ランスロットだ。初穂の部屋はここで間違いないね？ 話があるんだ。」

「お、おう？ どうぞ…」

意外な来客だった。戸惑いながらも、彼女を部屋に招き入れる初穂…。それにしても、ロンドンの騎士が自分にわざわざ話とは何事だろう？ 少し緊張する…。

「やあ、初穂。いきなり上がりこむ失礼を謝罪する。ただ君は星児と仲が良かったと聞いていたからね…話をしたいと思ってたんだ。」

「…星児のことか？」



確かに彼女とは面識があるようだと感じていたが、わざわざ自分のところにまで来るなんてどうしたのだろうか。すると、彼女は初穂が見ていた手紙や写真に気がつき顔を輝かせた…。

「ああ、これロンドンの！ 君が日本に置いてきたとかいう彼女だね？」

「え…違うけど。」

何の話…？ アタシをどんな紹介したんだ…？

面食らっている初穂だったが、写真を見ている彼女の顔がまるで遠い記憶を懐かしむような顔つきになっているのに気がつく。

「ああ、あの頃は笑ってたんだよね星児も…」

初穂から写真を受け取り、何枚かめくると少し哀しげに呟くランスロット…。やっぱり、何かある…ただ星児を迎えにきたにしてはやはりおかしい。

「なあ、ランスロットさんよ。星児にロンドンで何があったんだ？

帝国華撃団に想いがあったても、今回の行動は流石におかしい。だから、あんたがわざわざ迎えに来たんだろ？」

「…」

初穂の問いに沈黙するランスロット。それから、暫し考えたあとに意を決したと口を開く。

「花組を集めてもらえるかな。このことは、君達全員が知るべきことだ。」



ロンドン：蒸気技術で発展しつつも、古く美しい伝統が息づく街。イギリスの華撃団であるロンドン華撃団の本拠地であり、その活気は帝都に負けず劣らず。ロンドン華撃団は降魔大戦後に作られた華撃団ということも相まって、設備もまだ新しく列強華撃団の一角なだけあつてか人気も国内外問わず高い。

特に剣の腕も立つ美しき少女騎士ランスロットや聖剣エクスカリバーを受け継ぐ名門騎士の美青年・アーサーが隊長を務めるバンド活動は熱狂的なファンがつくほど。勿論、最新鋭の霊子戦闘機『ブリドヴェン』を駆る華撃団の強さも過去の世界華撃団大戦で2位に食らいつく実力。

才色兼備な一門にある日、ある男が門を叩く。

それが、帝都よりやってきた旧・帝国華撃団の忘れ形見にして英雄・神崎すみれの息子である星児だった。元よりアーサーとランスロットは事情をガヴェインから聞いていた：『可愛い子には旅をさせよ』という母親の密かな意向と『複雑な影』についても。ロンドン華撃団側も騎士・ガヴェインからの進言と旧・華撃団の忘れ形見という肩書きに魅力を感じ受け入れることにした…。

そして、実際に入ってからというものの前向きかつ物怖じしない性格がアーサーやランスロットに気に入られ、順調に経験を積んでいきロンドン華撃団のメンバーとも絆を育んでいった……………

……………だが

「セヤツ!!」

「はあっ!」

とあるロンドン華撃団の所有している木造の施設。所為、道場にあたるこの場所で迎いあっているのはランスロットと星児。両者共に二刀流で模擬刀を構え、激しい乱舞で斬り結ぶこと何度かはもうわからない：もしこれが、実剣だったら息を呑むような死闘になっていたかもしれない。ランスロットが繰り出す強烈な一撃、二撃を星児がいなし、星児も反撃と足払いを入れるがぐるりとバック転蹴りを入れられてカウンターを潰されてしまう。

「どうしたの星児! また負けるよこのままじゃ!」

ヒラリと着地し挑発するランスロット。とても愉しそうに笑う彼女に対し、『ケツ』と舌打ちしながら模擬刀を逆手にクルツと回して構え直す星児は低い姿勢をとり彼女を睨む。

「舐めんなよ。今日こそ白星あげて華撃団全員分の飯を奢らせてやらあ!!」

瞬間、踏み込んだと思うと間合いを詰めて怒涛の斬撃ラッシュを繰り出す星児。今度は一転して防戦にまわる彼女だったが、自らに向かってくる全ての剣を涼しい顔でかわしつつ、強く振り抜き空振ったところを刃で突いた……

「甘い！…!?!」

…はすが、寸前で彼の姿が消える。

何処だ!?!と考える間もなく、頭上から影がかかった。

「もらったあああああああ!!!  
!!!」

瞬間移動による意表をついた奇襲。完全にがら空きの脳天に勝利を確信した……が、グイツと彼女は余裕の微笑みを向ける。直後、牙を向いた剣は振り上げられていた騎士の剣に食い止められ十字に交錯し勢いを死なせていた。

「惜しかったね。」

「なっ!?!」

確信を覆された隙というものは致命的に大きい。そのまま、力任せに引き剥がされた彼は為すすべなく床に叩きつけやれ無防備を晒す。

チェツクメイトだ。ランスロットは仰向けに倒れた相手の喉を剣を交錯させて鋏みこみ動きを封じる。もしこれが実物の剣ならあと少し動かすだけで喉仏が裂けていてもおかしくないくらいだが、対する星児も彼女と同じく笑っていた。

「へえ……やるじゃん?」

「ハッ、舐めんなって言ったろ?」

ランスロットが感じた腹への違和感……そう、完全に追い詰められる直前に刃を当てていたのである。勝負の結果はこれで引き分け……互いに剣をおさめて終了、ベンチに置いていたタオルとスポーツ飲料を取りに行き一息。気分の良い疲労感に浸りながら、ボトルでかぶ飲みする星児……そこへ、ランスロットがしつとりとする白い肌をタオルで撫でながら話しかけてきた。

「良い調子じゃないか。引き分けもまあまあ多くなってきたし、実力もついてきてるね。」

「応よ！俺を誰だと思ってる？彼の帝国華撃団の忘れ形見にして、トップスタアと息子の…」

「はいはい、だったらそろそろ1回は勝ってみたらどうなのさ？」

星児とランスロットは定期的に模擬戦をしている…結果は、ランスロットの勝利か良くて引き分け。残念ながら、星児の白星スコアはロンドン華撃団に来てから全く無い…そして、敗北者にはロンドン華撃団隊員の昼飯を奢るという罰ゲームつき。これが見習い隊員である彼の懐に空いた文字通りの穴であり、毎月の大半の給料はちよつと豪華な少女騎士のランチタイムに消えていくばかり。泣けるぜ…との談。

そんな2人の元へ歩いてくるランスロット同様な騎士らしい衣装に身を包む金髪の甘いマスクをした青年。

「その様子から見ると、また引き分けかな。星児の腕が上がったのか…それとも、ランスロットの腕が鈍ってきたのか…」

「お？隊長！」

「アーサー、その冗談は笑えないよ。」

彼こそロンドン華撃団の隊長である『アーサー』その人。ランスロットを初めとした曲者揃いの華撃団を纏めあげ、ロンドンを守護する伝説の騎士王の名を継ぐ男。彼の實力はランスロットと同じく国内外どちらからも認められている存在だ。無論、星児の直属の上司にあたる。

アーサーは部下の成長を静かながら喜んでいる様子で、星児に満足げな視線を向けていた。

「星児、ランスロットが世話になったようだね。彼女も良いが、たまに

は僕が相手になってあげても良いんだが？」

「ちよつと!?! 世話役はあたし!」

「あはは… それは丁重にお断りするぜ…あんた熱入ると止まらないんだもん。」

昔、アーサーと模擬戦をした星児は顔を引き吊らせる… 軽い気持ちで受けたその時、酷い目にあつた。戦いがヒートアップし、興奮したアーサーに相手も自分の執務もお構い無しに朝から夜になりかけるまで追い回された記憶が今でも鮮明である。まあ、あまりのデスクワーク続きに彼の鬱憤が溜まっていたのも原因と弁明するが星児にとってロンドンの素敵な思い出の一言（トラウマ）になってしまっている。

それは、さておいて…わざわざ隊長が足を運んできたということは何かしら理由があるのだろうか。

「さ、本題だ。星児…君に大事な話がある。」

空気が変わりキリツとした顔を向けられ、本当に大事な話なのだと覚る。全く何のことかは皆目検討もつかないが、ランスロットは直ぐに何のことかを理解する…きつとロンドン華撃団や何より彼自身にとっても良い話だと。だから、アーサーについていく後ろ姿を笑顔で見送った……

……これが、悲劇の幕開けだと露とも知らず

## 鬼の涙 Ⅲ

「さて、君にはこれを受け取ってもらおう。」  
「うお!？」

執務室に通された星児はいきなり布にくるまれた身の丈を頭ひとつ分はゆうに越える棒とおぼしき物をアーサーから渡された。一体何なのか：それなりに重さはあるが中身は何なのかは皆目、検討もつかない。すると『開けてみてくれ。』と促され包みの布を剥ぎ解いてみるとその中身は…

「これは…!？」

『槍』だ。ただの槍じゃない、夜空に一際輝く北極星を模したような星十字槍だ。美しい金に輝く『桜』の紋章や銀の流れ星の装飾は間違はなくさぞかし名のある職人の手により造りあげられたであろうことは素人でも解るぐらいだ。

驚くばかりの様子星児にニヤリ塗装笑うアーサー…。実は、この槍は彼が造らせたものではない：ある人物が『日本』でとある職人に造られて、時が来たら託すようにとわざわざロンドンに送られてきた物。まあ、誰から贈られてきたかは刃に刻まれた『天宮』の銘から星児ならすぐ気がつくだろう。そして、アーサーは待ちに待った本題に入る。

「星児、君がこのロンドンに来てからおおよそ一年は過ぎた：そろそろ、頃合いだと思っていたところさ。」  
「？」

「君の活躍や努力は君の出自の色眼鏡を抜いたとしても、十分な評価に値する。そこでだ、君を正式にロンドン華撃団の隊員として起用したい。騎士の称号を拝命し、ブリドヴェンを受領してくれ。ランスロットやサー・ガヴェインも推薦しているし、殆どの団員も賛成して



いる。この槍は僕たちからの信頼と期待の証とってもらって構わないよ。」

「……………え？」

目を丸くする星児…。まさか、自分が？ 戸惑いをみせる表情は当然だろう。自分はあまりに複雑な立場な上に、見習いとしてではなく正式な起用をすることはかなり世界華撃団連盟＜W・O・L・F＞の立場的にリスクが伴うはず。だからこそ、ロンドンに来てからも機体は帝国華撃団から持ってきた三式光武のまま乗り換えずにいたというのに…

されど、アーサーは期待していた。かつての華撃団の銘を背負いながらも、重圧や困難に折れず努力を重ねてきた彼を……………だからこそ、首を縦に振るだろうと

「……………俺にこの槍は受けとれない。」

……………思っていたのだが。

「ふむ、それは正式な隊員になってしまえば帝国華撃団に戻り辛いから…ということかな。それなら、むしろ正規の隊員として経験を積んだほうが君の母君にも胸を張れるのではないかい？」

「そういう意味じゃなくて…俺は母親に背を向けた。その時に誓ったんだよ…帝国華撃団に戻るまで『あの人から受け継いだ象徴』だけは絶対に封印するって、俺のけじめだ。それに、俺はそんな騎士の称号を受けるような奴じゃない…」

槍……………それは、母である神崎すみれの得物でもあり、星児もその扱いは教えられている。そして、彼本来の戦闘スタイルは母の槍と『先代の花組隊長』に仕込まれた二刀流であり、この独自の剣技は先代花組の尊敬と自分を育ててくれた母と帝国華撃団への想いがあった。

だからこそ、帰るべき場所や残してきた母や初穂たちに許してもら

えるまで封印する…彼なりのケジメである。

だからこそ、受け取りを渋るのだが… はい、そうですねと退くアーサーではない。

「君の気持ちは解った。でも、君を推薦した僕たちのことも考えてほしい… ランスロットやサー・ガヴェインも君は騎士に足りうる実力があると判断してのことだ。ここで断られてしまえば我々の面子というものもある。」

「…：大分、卑怯だなそれ。」

「隊長だからね。我が儘な部下の昇進の話を縦に振らせるくらいはするさ。」

言い分は解る、だけど推した側の立場も踏まえろ。まあ、その通りなのだが…自分の我をここで通せるほど自己中にはなりきれなかった。困った顔をしながら、少し強気な笑顔を向けてくる上司に押されながら『少し、時間をください。』とその場を一旦、逃げ出した…。アーサーもとりあえずはとここで答を急かさずに一度は見送ることにする。

…：彼なら、きっと良い返事が帰って来ると露共疑わす

この一部始終のやり取りを廊下の影から窺っていたサングラスの怪しい人影にも気がつかずに。



……その日の夜、珍しくロンドン郊外に散在して現れた降魔の迎撃にあたっていたランスロットは帰路につこうとしていた。西洋の騎士の鎧を彷彿させる霊子戦闘機『ブリドヴェン』は無傷で周辺の被害も少ない。これなら報告書の手間も少ないだろう。

状況の報告を済ませようと通信をアーサーに繋ぐ。

「こちら、ランスロット。状況は終了、周囲に目立った被害は無し。これより帰投する。」

「了解した。そういえば、そっちに星児はいないかい？」

「……？　なんで？」

「いや、さつきから通信が繋がらない。彼の光武はそちらへの救援反応に向かって出撃をしているようなのだが……合流していないのか？」

星児の行方がわからない？　妙である……こっちは救援を求めている。それにリーダーに救援信号といった反応も無い。違和感を感じ、通信を繋ぐランスロット……

「星児、きこえる……？　今、何処に……」

【ザーザー………ぐっ!?） ……ザー………に……やが……る!） ……ガ  
ンガンッ!!（ぐおおああ……!）】

「！……星児？　星児！」

異様なノイズとそれに紛れた明らかに並々ならぬ叫びがスピーカーから響く。必死にこちらから呼び掛けるも応答は無い。嫌な予感が過る。ランスロットは即座にブリドヴェンを反転させ出力をあげる。

「アーサー、星児の座標を！　直接向かって、状況を確認する！」

霊子エンジンをありったけ燃やし、街並みをつむじ風のように駆け……既に一帯の避難は確認しているから人身事故の心配は無い。道路を走り、建物を超え、何度か曲がりくねったその先……やがて、目的地が近くなる。

一気に、跳躍……弧を描いて着地すると彼女の目に信じられない光景が映った……

「……！」

星児の白い光武がうつ伏せで倒れており、装甲がひび割れ煙をあげている……そして、それを踏みつける2機のモノクロのブリドヴェン。周囲の建造物の損壊、光武の刀傷とおぼしき損傷の数々……これらで何が行われていたかを察するには充分だった。

「何を……何をしているんだお前たちはッ  
!!!!!!」

すぐさま、ランスロットは剣を抜き怒りを爆発させる。間違いない、この2機は寄ってたかりリンチにしていたのだ。様子から見るに、奇襲……かつ最新鋭の霊子戦闘機に数に勝られれば旧式の光武がどうなるかなど目の前の惨状が物語る。

そして、この凶行に及んだモノクロのブリドヴェンのうち一機がランスロットの刃を切り払うと通信を入れた。

「これはこれは、ロンドンの最強の騎士ランスロット。首を突っ込まないほうが身のためですよ。」

「お前ら、その機体色はプレジデントGの親衛隊だな！こんなことしてダダで済むと思っっているのか!？」

モノクロのブリドヴェン、彼等はロンドンに派遣されている華撃団管轄ではなくその母体であるW・O・L・F.のプレジデントG直轄の犬だ。W・O・L・F.全体の利益のためならスパイ紛いの行為やその他、公には出来ない汚れ仕事などを担っているという噂である。それが、どうして星児に牙を剥いたのか？通信相手の男は無機質に答える。

「狂犬、よく聞け。プレジデントGは旧華撃団勢力の再興を快くは思っていない…なのに、貴様らときたらまあ、旧華撃団勢力の旗降り役の息子をあまつさえ正規の団員に起用など正気の沙汰とは思えんな？故に、不穏分子を排除するために我々が出てくる羽目になったのだよ。」

「…なっ」

確かにW・O・L・F.の元締めであるプレジデントGが旧華撃団勢力の建て直しに消極的だとは聞いていた…彼自身は崩壊寸前だった降魔大戦後の華撃団組織を全く新しく立て直した立役者でもある。しかし、言い方は悪いが、それは彼のワンマンの強引な手段によるところも大きいとの話。自分以外の派閥の台頭を許さず、対抗しよう勢力なら降魔だろうが人間だろうが完膚なきまで叩き潰して隷属させるか消し去るか…その二択。

悪魔のような無慈悲な采配にいつの間にか振られていたのである。

「バカな！ そんな無茶苦茶な理屈！」

「通るんですよ。世界華撃団連盟にあの方が座る限り、どんな理屈も

道理もね。そもそも、この場で隠密に処理してあげようというロンド  
ン華撃団側への配慮もわからないんですか……」

「ふざけ……！」

「……………ふざけんな……！」

その時、踏みつけていた親衛隊ブリドヴェンを尻ぎ払い立ち上がる  
光武。火花を散らし震えながらも刀を構える。満身創痍になその姿  
に親衛隊ブリドヴェンのパイロットは鼻で嗤う。

「あなたは黙っていたほうが良いですよ。文字通り、疫病神はその行  
動ひとつひとつが周りを不幸に……」

「うるせえっていつてんだよ！」

「!？」

次に瞬間、光武が一瞬で親衛隊ブリドヴェンを肉薄。刃を迸らせモ  
ノクロの装甲を一閃。深々と喰らいついた一撃は最新鋭の機体とい  
えど致命的なダメージとなりその機能を奪いとる。親衛隊パイロツ

トも…またランスロットさえもこれに驚きを隠せなかった。

「馬鹿な……旧式の光武にそんな性能があるはず……が……」

「星児……」

それから、後日。

執務室で星児の処分が下される。ニヤニヤと嗤う黒服たちにギリギリ手綱を握られている唸る番犬のような顔のランスロットと仏頂面のアーサー…そして、絶望し虚無の顔を浮かべる星児。そうこの処分はロンドン華撃団側からしても到底納得できるものではなかった。

「神崎星児、お前から正規の華撃団やその傘下にある組織への参加権を永久的に剥奪する。尚、関わることも禁ずる。そして、お前の光武と霊子戦闘機・霊子甲冑の取り扱い免許も没収する…以上だ。追ってロンドン華撃団にも処分が下るだろう、覚悟しておくことだ。」

「ふざけるなよ！ 先に理由なく仕掛けてきたのはそっちだろう!? それに、あのロンドンの親衛隊の奴らはお咎め無しとかおかしいじゃないか！」

「勘違いするな。所詮、華撃団なんぞW・O・L・F.の下部組織に過ぎん。それに、この小僧がどんな事情があれ我々の機体に傷をつけた…ならば、処分するのは当たり前だろう?」

理不尽。圧倒的、理不尽。こんなことが許されるのか？？それが許されるのだ：世界華撃団連盟という組織がたつたひとりの男の所有物である限り法も論もねじ曲がるのだ。

あまりの暴拳にランスロットは斬りかからんと柄に手をかけようとすが、アーサーが制止する。

そして、星児は自分の未来を絶たれ：糸が切れたように膝をつくしかなかった。



## 鬼の涙 IV

…星児の過去にそんなことがあったなんて

ステージの上に集められた花組たちはランスロットから星児の過去を聞かされ、各々複雑な表情を浮かべていた。ある者は沈痛な表情に…またある者はうまく呑み込めないといった顔の者もいる。事情が事情、仕方ないが神山は意を決して皆に問う。

「皆、それぞれ星児については思うところもあるだろう。それを踏まえて皆に聞きたい…この帝国華撃団に迎えるべきかどうか。素直な意見を聞かせてもらいたい。」

星児をもし帝国華撃団に迎えるとしたら、花組たちの理解を獲なくてはならない。しかし、まあ初対面から続く暴拳の連続でほぼ印象は最悪なのは口に出すまでもないが…

暫し気難しい沈黙が続き…これを破ったのはクラリスだった。

「私は…迎え入れても良いかと思えます。星児さん、実はダナンの愛の脚本の翻訳にもアドバイスをくれたりしてとても助かったんです。最初は確かに怖い人とも思いましたけど、根はとても真面目でこの帝国華撃団を思っている方なのだと感じました。それに、ここを追い出されたら本当に居場所は無くなってしまう。居場所が無い辛さはよく解るから…彼にもそんな想いをしてほしくはないです。」

「クラリス…」

星児の痛みのひとつは自分にも重なる部分があると彼女…確かに事情は違えど重魔導の一族として悩んだ経験があるからこそ通じるものがあるのだろう。また、日本語に不慣れな節がある彼女の脚本製作の手助けをしたことも大きい。初穂もまず好意的な意見が出たことに頬を緩ませる…

だが

「私は反対。」

現実には冷たい。情け容赦ない反対を突き出したのは花組の最年少、望月あざみ。星児との絡みが多かったわけでないが、その分だけ悪印象しか残っていない。

「支配人の息子とはいえ、あんな横暴をした人を受け入れることなんて出来ない。受け入れてもきつとまた繰り返す…だから、私は納得出来ない。」

「あざみ…」

残念ながら、違うと言いつ返せる根拠は無い。初穂は悲しげにするが、話を進めなくてはならない。神山が次に順番を回したのはアナスタシアだった。

「アナスタシア、君はどう思う?」

「そうね…。私はこの帝国華撃団に来たばかりだから口出しする権利は無いと思うのだけれど。意見としては賛成もしないし、反対もしない。ただ、今までの話を聞いて隊長になるにしても、隊員になるにしても、あまり彼に価値も魅力も感じないわ。少なくとも、今この貴重な舞台の練習時間を削る意味は全く無いと思うわ。」

「アナスタシア!」

「あら失礼。言い過ぎたわ。でも、少なくともロンドンへの落とし前をつけて…話はそれからじゃないかしら?」

アナスタシアの言い分も一理ある。星児の起こした行動は帝国華撃団に留まる問題ではない…恐らくはロンドン華撃団にも多大な

迷惑をかけていることだろう。例の処分を甘んじて受けろというわけではないが、確かに彼の処遇はロンドン華撃団を無視するわけにはいかない。

そして、次は初穂…

「初穂、まあ君は言うまでもないか…」

「ああ、アタシは賛成さ。ここはアイツの家なんだ。帰ってきて悪いことなんてあるかよ！」

この場において一番付き合いが長く、彼が困難に晒され歯を喰い縛ってきた時を見てきたからこそ…受け入れたいと願っていた。結果はどうあれ、帝国華撃団再建のために努力してきたのは事実。今の花組とのいざこざも時間が解決してくれるはず…

最後に、さくら…

「さくら、君はどう思う？」

「…」

彼女は顔を背け、考えている様子… ロンドンの話を聞いてからまだ意見は固まっていないのだろうか。初穂は何とか賛成してくれないかと淡い期待を… 他のメンバーはどんな判断をするのかを見守る。暫し間があり、口を開いた彼女は告げた。

「反対です。」

冷たく…怒りを込めて。

初穂やランスロットはやるせない顔をし、他の団員も悲しげな顔や仕方ないと納得する表情の者もいる。続けて、神山は理由を聞くことに…

「ロンドンでの事情は同情します。だけど、あの人の行動は帝国華撃団のためと良いながら身勝手に、結局のところ周りに迷惑をかけた、傷つけたりしてるだけじゃないですか。いくら支配人の息子でも、そんな人と一緒にはやっていく気にはなれません。」

「さくら…」

その不快感は最早、敵意に近い。更に、彼女は神山に問いかける。

「隊長はどうなんです？　神山隊長も花組の一員として、意見を言うべきです。」

「俺は…」

全員の視線が一齐に神山へ集まる。意見が分裂している今、隊長の意思が今後大きく左右するだろう…もし、反対の意となれば星児が花組は愚か帝国華撃団に戻ることも絶望的になる。実際、艦長時代のトラウマを挑発の材料にされるといふ決定的な亀裂が走る事件もあった…正直、花組の面々は賛成しないと思っていた。だが、

「俺は、星児を帝国華撃団のメンバーとして迎えたい。」

それでも尚、神山は拒否をしなかった。これにはさくらも驚愕の表情を浮かべる…

「どうして…あの人は神山隊長にあんなに酷いことをしてきたのに!?」

「ああ、そうだな。だけど、今のアイツは少し前の俺と同じだ。夢を奪

われた痛みは俺が一番、よく解っている。その痛みを凶らずも俺自身が与えてしまったというのなら……それに寄り添い果たすべき責任がある。」

痛みを知る者でありながら、同じ傷みを与えた者の責。身体の中を虚無が這いずりまわるあのおぞましさを知るからこそ、神山は星兎を突き放すことも見捨てることも選択肢には入れなかった。むしろ、自分が手を伸ばすべきという思いすらあった。

この神山の考えにはやはり、花組で動揺が拡がる……そんな中で意外にも口を開いたのはアナスタシアだった。

「それじゃ、多数決で取り敢えずはその方向で良いでしょう。でも、根底からこのやり取りをひっくり返しちゃうように悪いけどW・O・L・F. からの処分は覆えられないわよキャプテン?」

「それは……それでも、アイツを守る!」

「声が勇ましいだけではどうにもならないわ。声は然るべきところに届けなきゃ。飼い犬の首輪が緩んでるようですよ……と飼い主にね?」

……? つまり、どういうことだ?

すると、ランスロットが気がついた。

「アナスタシア……そうか、君は!」

それに対し、アナスタシアはいたずらな笑みを浮かべながらポケットからすまあとろんを取り出す。彼女は取って置きの秘策をきることにしたのだった……



「よし、じゃあ始めるよ！ イズ、準備は良い？」  
『もう少々時間を。ゼアとの接続にまだラグがあります。』

帝劇前にて或人はイズと共にある準備にかかっていた……。不破や唯阿たちも協力として汗水流しながら運んできたのは素体ヒューマギアたち：ウオズもマフラーを自在に駆使して運びこまれたそれらを整列させている。一緒に作業にあたっていた整備士も何をするつもりなのかと懐疑的な視線を向けていた。

「なあ、社長さん……これ本当に動くのか？ 人手不足の解消になるって話だがこんなカラクリ見たことないぞ。」

彼は『司馬 令士』オレンジ色の整備服がトレードマークの濃い顔の男で、神山と海兵学校時代の同期であり親友。実はアナスタシアと共にすみれが連れてきたのだが、星児やクラリスの一件などが立て続けに起こりちゃんと紹介の場が設けられなかった悲しいアクシデントがあつた彼。割りと不憫な扱いな帝劇生活のスタートだったが、仕事は真面目である。

しかし、ヒューマギアなんて異界の産物を知るはずもない司馬は『人体模型みたいなのどう使うんだこれ』とぼやく始末。まあ、仕方ないが……

「社長、本当にこの世界でヒューマギアが動くのか？」  
「ま、やってみればわかるよ。さ、イズと唯阿さんもお願ひします。」

不破も訝しげな様子だったが、まずは行動と或人の一声。これに応じたイズと唯阿が素体ヒューマギアたちのプログライスキーを耳許にあてがい起動させる。

- 【最強匠親方】
- 【松田エンジ】
- 【宇宙野郎昴】
- 【腹筋崩壊太郎】
- 【祭田ゼット】
- 【森筆ジーペン】

素体ヒューマギアを包む光。直後、それぞれが人間と比べて遜色ない姿となる。これが役割を与えられたヒューマギアたちの真の姿：令和の世界を支えるテクノロジーが権現した瞬間だった。これには不破や唯阿も驚愕し、司馬も一変してキラキラと子供のような表情を浮かべている。

「すっげえ！ これどんな技術なんだよ!？」

「へへ、企業秘密……。 (目逸らし)」

社長がその理屈を知らないなんて口が裂けても言えない。

さて、これが前回に話をした或人の秘策。帝国華撃団の財政難と人員不足を一手に解決をヒューマギアで一気に解決するというものがある。衛星ゼアのバックアップが届きゼロワンに変身可能ならもしやと思いウオズに頼んで時が止まった令和の世界から連れてきたのである。

「うまくいったな飛電或人くん。だが、私との約束は忘れないように。」

「わかってる。全部片付いたら、太正世界の記憶は削除することと、運用は帝劇の中だけ……。」

しかし、一条件つきで。太正世界で過ごしたヒューマギアの記憶は事件解決次第に削除することに加え、帝劇の範囲内で行動をさせないこと。今回の事件が並行世界を跨いだかなり特異なイレギュラーであるため、可能か限り双方の影響を抑えたいウオズ側の意向もあるからである。なら、何で許可したのかという話になるが、恐らくは社長ライダーという手前でただ飯喰らいライダーに成りさがるわけにはいかないという或人の面子を保つためだろう。

……実質無職の王様ライダー？　しょうがねえだろ、我が魔王なんだから。

『或人社長、ゼアとの同期は間もなくです。』

「オツケー、イズ！　さ、太正桜に飛電の技術！　勿論、たい、しょうぶ!!　太正世界に来てから初の!!はい、或人じゃあかないとおおお!!!」

『こちらは、太正と大丈夫の【だいしょう】を【たいしょう】ともじつた粹なギャグになります。』

景気付けのギャグも炸裂し、不破さんも満足のあまり震えている：他はドン引きなのだが……。悲しいことにギャグの伸び代だけは皆無に近いなど唯阿は内心悲嘆していた……。そんな時だった。

「これはこれは、随分な盛り上がりようだな？」

ふらりと、『ひとりの男』が現れたのは。すみれより若干ながら歳上な雰囲気を持つ金髪の針鼠頭：2本の矢で射ぬかれた鷲が刺繍されたジャケットを纏う彼。太正世界においても異質な空気を放ちながら、鋭い視線がウオズに向けられる。その途端、ウオズは珍しく焦りを見せた。



「…な、何故あなたがここに!?!」  
「決まってるだろう。『バカ弟子』を出せ、ウオズ。ここに居るのは分か  
かってるんだ。」

男は強引に帝劇に入ろうとするが、ウオズが食い止める。しかし、  
阻む手を逆に掴みとりボキボキと音が鳴るまで締め上げる。途端、異  
常事態を察した不破が止めに入った。

「おい、穏やかじゃねえな。何者だ、お前?」

「…ロンドンでかつて、『サー・ガヴェイン』の銘を受けた者。そして  
……」

——仮面ライダーだ。

## 鬼の涙 V / もうひとりのALTERNATIVE

「俺は…仮面ライダーだ。」

男は不破を振り払うと、腰に1号オルタと同じベルトを出現させる。傷だらけながら驚く悪の象徴を貫く稲妻のバツクルは昭和の香りをさせるが、似て非なる『異聞』からの系譜の証。拳をビキビキと構え、顔面や身体の随所に手術痕を隆起させると叫ぶ…

「ライダー… 変身!!」

直後、ゴオオオオオオオオオオ!!と赤黒い嵐が吹き荒れ或人やヒューマギアでさえ、よろめいてしまう。そんな中、男に強化骨格が纏われていく…彼の姿は『黒の飛蝗』で四肢には血を流すような赤いラインが走る。そして、何よりも眼を惹くのは血染めのような刺々しく大きい甲手…殴れば人間の頭など簡単に粉碎しえると存在感だけで語る鉄槌の拳。

彼は仮面ライダー…されど『悪<ALTERNATIVE>』。技と対を為す『力』

悪の2号

仮面ライダー12号オルタ

もうひとりのオルタナティブの仮面ライダーである。

「やめろ、一文字ハヤト!! 君が行っても事態が悪化するだけだ!」

「黙っている。もう時間が無い。」

ウオズが制止しようとするも、強引にドアへと手をかけようとする

2号オルタ。無論、不破や或人たちも黙ってはいない。それぞれ変身ツールに手をかけ、阻止へとかかる。尚、唯阿はこの異常事態を伝えるべくイズと司馬と共に帝劇内へ駆け込んでいた。

「なんなんだよ、コイツは!?!」

【アサルトルフ!!】

「わからないよ!? 取り敢えず泊めないと!」

【シャイニング・スチームホッパー!!】

バルカンとゼロワン、両サイドから攻め立てようと拳を突き出す  
…… …だが

「はあああああ!! ……!?!」

突きだされた2つの掌はまるで野球のミットののように2号オルタの両方の掌に吸い込まれていた。そのまま、拳は握りあげられゼロワンとバルカンはライダーシステム越しながら骨が潰れんばかりの激痛に悲鳴をあげる。

「ぐ…あああああああ!?!?!」

「むんッ!」

直後、バルカンの顎に砲弾のような鉄拳が…ゼロワンには鎌鼬のような回し蹴りが顔面にクリーンヒットし地面へと投げ出される。恐らく、ライダーシステムを使用していなければ命に関わりかねない頭部への攻撃…軽減はされていたが、軽い脳震盪を起こしている彼等はそう簡単には復帰出来ない。

「邪魔をするな。用があるのはバカ弟子だけだ。」

「…待て……ぐっ!?!」

グラグラする平衡感覚で手を伸ばすゼロワンだが、2号オルタには届かない。ゼロワンのシステムはまだ生きている…だが、生身の人間が扱う機械である以上は或人が立ち直らない限り真価を發揮することはない。バルカンもショットライザーで狙おうとするが、こちらも狙いが定まらない。  
そんな時だった。

「師匠!」

帝劇から星児がすみれ支配人と共に飛び出してきたのは…。いや、師匠? そう言えば、バカ弟子がどうか言っていたが…まさか。すると、2号オルタは拳を力チリと鳴らして握る。

「久しぶりだな、星児。……取り敢えず、歯を喰いしばれ!」  
「!」

「やめろ!」

振り上げられた拳になんとか正気を振り絞り、咄嗟に割って入るゼロワン: シャイニングスチームホッパーの瞬発力で間に合いはするものの、立ち位置にタイミングも悪く身代わり防御は鉄拳にぶち抜かれ後ろにいたすみれ諸とも吹っ飛ばされてしまう。

「ぐああああ?」

「きやあ!!」

「おふくろ…!! ぐあっ!」

この星児が気をとられたタイミングで2号オルタが掴みあげ、放り投げる。その拍子に星児の服のポケットが破け、ライジングホッパー・キーも飛び出してきて地面に乾いた音をして転がった。

「よくも…… よくも、おふくろを……！」

丁度、手元に届く位置…怒りのまま無意識に星児は這いつくばりながらも手を伸ばす…。キーを掴むなり、立ち上がると瞳を紫に光らせ、彼はスイッチを入れ起動する。「JAMP!!」と音声は鳴るが、勿論のことキーは単体では何の意味を為さないアイテム…各種ドライバとセットでその価値を現すのだ。変身なんて出来るだけがない……はずが…

「フォースライザー!!」

「え!?!」

突然、腹部に紫色のモザイク調な光が迸りフォースライザーが形成される。バカな!? 驚くゼロワンを他所に星児はフォースライザーへライジングホッパー・キーを装填し変身シークエンスへ…

「変身!! アアアアアアアア!!!」

「フォースライズ! ライジングホッパー!! Break down」

黒い蝗の群に包まれ、雄叫びをあげながらなんと仮面ライダー001へ変身した星児。ただ或人のそれとは違い、激しい出血のように節々から紅い蒸気が噴き出して複眼は毒々しい紫色に変質している。システムの異常かはたまた変身者の差異かは不明だが、怒りの駆られるまま鬼のような勢いで2号オルタへ拳のラツシユを繰り出す。ライダーシステムだからこそ可能かマシンガンの集中砲火のような暴力の嵐を対し、甲手を交差させて落ち着き防御姿勢をとる2号オルタ。徐々にすう…と腰を落としていく様子を見た者は覚る

「お前に『よくも』などと言う資格は無い。」

…決着はもうつく。

001のラッシュは容易く弾かれ牙を剥いていたはずの拳が腕ごと舞い上がり、がら空きの懐を晒す。そのまま、足払いされ転倒する001を2号オルタは右の甲手に黒いエネルギーを炎のように揺らめかせる…

「少し頭を冷やせ。」

ライダーパンチ・オルタナティブ!!」

すみれが止める暇もなかった。冷徹な鉄拳が問答無用と炸裂…その瞬間、目を覆うしかなかった。

★ ★ ★ ★ ★

舞台に駆け込んできた唯阿から何かを聞いた途端、ランスロットが青ざめたのを見た…。続く外からの異常な感覚に思わず花組の誰よりも先に初穂は神山の制止を聞かず我先に駆け出していた。判っていたのは星児関連でとてつもなく良くないことが起こったということだけ。

焦るまま飛び出すと、視界に飛び込んできたのは見たことない仮面ライダーに踏みつけられた001から強制変身解除し元の姿に戻る星児の姿。激痛と衝撃のあまり白眼を剥く有様に初穂は頭の奥から感情が炸裂した。

「てえんめえええ!!」

同時に、胸の奥で何かが目覚める。彼女に由来する霊力の炎が怒りに呼応するように燃え上がり紫の熱で包みこみその姿を異形へと変えていく。

「ヒビキ」

『オオオオオオオオ!!』

「!」

炎を裂いて現れたそれに少女の面影は無く、金剛力士像や阿修羅を彷彿させる牙を剥く鬼：『アナザーヒビキ』が隆々とした体軀でハンマーを振り下ろす。唐突な展開に咄嗟に防御する2号オルタ：驚いた様子だったが、弾かれながらも受け身をとって頭の中で状況を噛み砕いていた…。

「アナザーライダー… 響鬼か。」

初穂が変身したアナザーライダー… 文字通りの仮面ライダー響鬼をベースにした怪人。タフネスさとパワー並びに、陰陽術の一種である音撃道を歪めたような炎や術を使う厄介な奴。間合いは近距離から伸びて中距離か…

体勢を立て直していると一息遅れてきた神山らが驚愕の顔をしていた。

「初穂!? そんな…」

「あれって、クラリスの時と同じ!？」

さくらはアナザーヒビキがクラリスのアナザーダブルと同様の存

在と感じ取るが、解せずにはいた。あの事件以来、降魔の急襲には皆が細心の注意をはらっていたはずなのに、またしても花組からアナザーライダーが出てしまったのである。

「初穂…？」

そして、何よりも星児の動揺が大きい。今まで、味方であった人間が突然に異形の姿となれば彼の精神状態は更に揺らいでしまう。しかし、そんな絶望に気がつかないのか執拗に2号オルタを狙うアナザーヒビキ。ブンブンとハンマーを振り回し、粉碎しようとするが、巧みにいなされカウンター拳が一発、二発、と叩き込まれて徐々に体幹が揺れてふらつき呻きをあげはじめた…。

『グル…ア…！』

「アナザーライダーを生かしておく意味は無いな。」

「や、やめ…!？」

まずい！本気で畳み掛けにかかるのを察し声をあげる星児…

その時だった。

『まだその娘を殺されちゃ困るわ。』



一帯の時間が止まる。2号オルタも：神山たちも：

そして、ふらりと姿を見せたアナザーゼロワン：動けない者たちを嗤いながら、アナザーヒビキに手を翳すと初穂の姿に戻すと『思っただより重いわね：』と俵抱えにしてその場を跳躍して離脱する。

それから、数秒後：時間停止が解除されてつんのめる面々。2号オルタは脈絡無い展開と独特な嫌な感覚に何が起こったかを覚った。

「タイムジャッカーか…」

まあ、アナザライダー関連なら関わってないわけが無いし特別に考えることはない。だが、星児は違う：数少ない自分に寄り添う人が失われたことに自分を支える中心ぐらぐらとしていた…

「初穂… 初穂…？」

傷だらけの心、壊れるまであと少し

物語は尚も無慈悲に彼を追い詰めて…

## 鬼の涙 VI / 人は何故、鬼になるのか

…帝劇 支配人室

初穂のアナザーライダー化や突如として来訪したハヤトについて話し合うべく、ランスロットやハヤト自身も含めた帝国華撃団の全員と仮面ライダーたちが集まっていた。

目下、初穂のことを話し合うべきなのだが…帝劇に現れるなり大暴れしたハヤトにすみれ支配人や花組の面々も怒り心頭な上に、星児自身も数少ない抛り所だった初穂を失ったことにより心神喪失状態となり、視界が定まらないままソファで呆然としている有様。空気は最悪である。

そんな中、最初に口を開いたのはすみれ支配人だった。

「ガヴェイン卿…！何故、星児に手をあげたのですか？」

「理由？言うまでもないだろ。アイツは逃げた…一度目ならまだしも、これで二度目だぞ。少しは性根がある奴かと思ったが、とんだ見込み違いだったな。」

彼女の問いに苛立ちながら吐き捨てるハヤト。その感情の矛先は同門のランスロットへ移る。

「ランスロット、貴様も何故すぐに連れ帰らなかった？ 星児がここにいる限り、こちらが不利になるのは貴様とてわかっていただろうが。」

「それは…。星児は元々この出身だし、母親だつてここに…」

「で？ 何かひとつでも好転したか？ 問題が増えただけだ。」

「…ッ」

悔しいが、その通りだ。結局、花組と諍いを起こしただけで何一つ解決していない…むしろ、環境は悪化している。彼女は悔しげに歯を

食いしむるが、見兼ねた神山が庇いにハヤトの前に立つ。

「ランスロットさんを責めるのはお門違いだと思います。問題なのは、あなたの行動ですよガヴェイン卿！」

「黙れ、小童。俺たちがロンドンで黙っていただけだと思うか？あの子への不当な扱いを取り下げさせるために色んな連中が動いている…ロンドン華撃団やそれに関わる多くの人間がな。それなのに、当のコイツときたら目を離れた隙に勝手に逃げ出したに飽き足らず、他所の華撃団と揉め事を起こした。おかげで、アーサーの首にまで追及をかけられる羽目になってるんだ…一発は殴らねば気が済まん。」

「…（ロンドンに情報が!? おかしい、すみれさんは内部処理をしたはず…）」

なんと、星児の起こした問題は海を渡って知れ渡りロンドン華撃団隊長のクビをかけた責任問題にまで発展していた。しかし、一連のこととは箝口令が敷かれて外部に洩れないよう細心の注意をはらったはずのことが、どうして知れ渡っている？洩れたにしても、いくらなんでも早すぎる…

驚く神山や帝劇の面々の一方、代わって星児に詰め寄るのはイズ。

『星児さん、問題が既に多いのは承知ですがこちらの質問にも答えてください。何故、ライジングホッパー・キーを貴方は持っていたのですか？』

「…」

星児は答えられない。彼とて預かり知らぬこと…何故、自分の手許にあるのか。どうして、使い方が解ってしまったのかささ。

そんな様子を傍で何食わぬ顔で仕掛けた張本人が見ているのは誰も知ることはない。ただ、こんな事態になるのは彼女とて想定外だが

…

更に一方では、唯阿が不破と共に星児のつかったフォースライダーの検分を行っていた。

「やはり… 滅亡迅雷由来の物とは違うかもな。奴等のドライバーなら、人間には扱えん。」

「じゃあ、奪われた押収品とは別物か。なら、何なんだこのベルトは…？」

デイブレイクタウンで奪われた滅亡迅雷の遺産とは関係が無い：なら文字通り何処からともなく湧いてきたこれは何なのか？ フォースライダーは昨今では主流の装着型変身ツールであり、昭和ライダーや一部の平成ライダー等に当て嵌まる体内から取り出し式のベルトではない。実際、星児の体内に還元されるような反応は起こらず、唯阿が今現在触れても静止している…。

（この坊っちゃん元々隠し持っていた？ いや、むしろ、あの場で形成されたような…そもそも、この世界の人間がどうやって仮面ライダーに？）

まあ、後者のは非科学的な話だが。されど、このフォースライダー：目立った使用痕跡は無い。傷も真新しいものが多少、目を凝らせば確認出来るくらいの状態…：先程、ロールアウトしたものを一回だけ使ったような。やはり、違和感がある。

「とりあえず、色々とゆっくり事情を聞くべきだな。」

「いや、コイツはロンドンに連れて帰る。これ以上は帝都に置いておけん。」

「そうはいくか。コイツは仮面ライダーにまでなったんだ。放っておけるかよ。」

「それはお前たちの事情だ。こちらの知ったことではない…。」

「何を!？」

最中、不破とハヤトが処遇に割れる。ただ、落ち着きをはらおうとしているがハヤトは微かに焦っているようにも見えた。手をあげこそすれどやはり、弟子を案じているのか…確かに、ロンドンに戻れば彼の立場はまだマシかもしれない。少なくとも、今の彼は正式にはロンドンの人間なのだから…

しかし、

「俺は…俺は、隊長なんだ…!」

「なっ!?!」

突然に立ちあがった星児は唯阿からフォーサイザーを奪い取り、神山たちを突き飛ばし支配人室を狂乱する勢いで部屋を飛び出した。唯阿や不破も不意を突かれて対応出来ず、すみれも『星児…!』と手を伸ばすもふらいついてカオルに抱き留められる。よく見ると、化粧で誤魔化しているが顔色が悪い…ついには意識が混濁して倒れてしまい周囲から悲鳴があがる。

「支配人! くそ、星児も…!」

「神山さん、手を!今はすみれ様を医務室へ運びましょう。」

「星児くんは俺に任せて!」

神山に彼女を任せ、星児を追う或人…さくらとランスロット…あざみもそれに続く。クラリスはあまりの状況変化にオロオロとするばかりで、アナスタシアは神山と共にすみれ支配人の介抱へ同伴した。……状況の悪化は加速する。

★ ☆ ★ ★ ★

…初めて帝国華撃団に来た日。正直、思いの外の外のボロさですみれ支配人に首を縦に振った自分が正しいかどうかを疑った。これはもしかしくなくても、誤った道を選んだじゃないか……と、当時の初穂。それでも、新しい自分になるためと踏みしめた第一歩の先は  
迎えが……たったひとりだったけど。

「聞いてるぜ、お前が初穂だな！俺が神崎星児、神崎すみれの息子で、現行の隊長代行だ。これから、演技以外の大半は俺が色々教える。わかんないことは遠慮せず聞いてくれ！」

ビシツとくる暑苦しい雰囲気青年……これが、最初にあのトップスタアの息子だとは悪いが到底思えなかった。でも、アイツは親切……いや、親身だった。生活でも戦闘でも困れば駆けつけてくるだけではなく、総責任者の息子という立場でありながら帝劇中の雑務や時には外回りをする……とすらあった……歳の割に明らか過ぎるハードワーク。どれこれも『全部、花組のため……』と片付けて笑うその姿にきつと強い奴なんだなと思ってた。

……あの日が来るまでは

「……なあ、聞いたか帝劇の忘れ形見。一人で外回りしているようだが誰も相手をしやしねえ。」

「当たり前ね。隊長代行なんて言っても、所詮は子供ですもの……いよいよ、帝劇のトップスタアもヤキがまわったかしら。」

「この間、通りすがりで見たけどヒゲエ顔色だったぞ？なんで母親は止めない？」

耳にした噂。まさかと思い、飛び出した曇天の外……そこには、雨

に身も心も濡れた野良犬のような少年がひとり。帝劇では見せない姿に言葉が出なかつた。それでも、初穂を見るなり強引に笑顔を見せようとする。ああ、そうか…いつもそうやって無理をしていたのか。誰にも見せずただ背負いこんでいたのか…

…：せめて、手を伸ばそうと思った。だけど、どうしたら良いかわからない…言葉も届かないし、演劇もまだ自分以外の団員すら揃わない始末。

大人たちは声をかける。わかっていながら、哀れみや侮蔑、嘲笑、無責任…：あらゆる『悪意』がアイツを蝕んでいく。何故、誰も救おうとしない？頑張ってもがき続ける人間に唾を吐きつける真似が平然に出来るのか。…：人間とはここまで冷たいのか。

――許さない 許せない

街中の影に踊り嘲る人影を。何も出来ない自分を…

自分の中の炎を燃やせ

怒りのままに全てを焼きつくせよと、廃工場でアナザーヒビキは一帯を火の海にして立ち上がる。それをアナザーゼロワンが面白げにその後ろ姿を見据えていた。

★  
★  
★  
★  
★

倒れたすみれは医務室に運ばれ、ベッドに寝かされている。改めて見た彼女は酷くやつれていて、長い間蓄積された疲労は心身共に限界に近づきつつあったのだと悟る神山。共に看病するカオルも悲痛な顔をしていた：

「神山さん、既にご存知かと思いますがすみれ様は全て承知の上で坊っちゃんを帝劇から去るのを黙認しました。それが、『一緒に帝国華撃団を再建する夢』を裏切ることだったとしても…そして、坊っちゃんに恨まれても、その将来を案じてロンドンに送り出し、ガヴェイン卿に託したんです。泥を啜るのは自分ひとりで充分だと…」

我が子が傷つき、歪もうとしているのが見ていられなかった…なんとかして救いたかった母の想い。ロンドンに預けるのは彼女としても辛かっただろう…しかし、本当に全てが悉く裏目に出ってしまったのだとすると神山もやるせない思いがこみあげる。

「何を…何処で間違ってしまったんでしょね。皆、善かれと思っただけなのに…」

溜息が響いて、虚空へ消えていく…

嘆きばかりが募っていくばかり。このままでは駄目だ…！

「俺が…俺が星児を救ってみせます。すみれ支配人も…必ず。」

「神山さん…？」

「俺は花組の隊長です。隊長は仲間を見捨てない、支配人の口癖でした。」

神山は立ち上がる。同じ苦しみを理解するからこそ…手をのばさ



なくてはならない。そう、ここで諦めれば自分は星児どころかさくらたちにも胸を張って隊長を名乗る資格は無いのだから。

固めた決意を拳に秘め、彼は医務室を後にした…

## 鬼の涙 VI / 星は翳り

……母の涙を拭いたかった。

孤独に暮れても、尚も立ち続け、走り続け、『家族』を待ち続ける母の支えになりたかった。

いつか戻るあの華やかな帝劇の日々を信じて

……そうだ、帝国華撃団を再建して見返してやるんだ。俺達を蔑み哀れんだ奴等を

「……………兄…さ…。お…や………………」

でも…………俺は…何か忘れていないか？



「クラリス…！ クラリスってば！ 何処いくの!?!」

靈子戦闘機格納庫をずんずんと突っ切るクラリスを追うあざみ。突然、『気になることがあります』と告げると星児を追うでもすみれを看病するわけでもなく、真つ直ぐこちらへ。彼女の真意は不明だが明確な意思はあるらしく歩みに迷いは無い…そして、スクラップになった星児の光武の解体作業にあたっていた司馬の元へ。司馬も意外な来客に目を丸くする。

「クラリスちゃんじゃないか、どうしたんだ一体…」

「司馬さん、伺いたいことがあります。星児さんの光武：靈子機関の周囲におかしな物はありませんでしたか？ 例えば、規格に無いパーツが紛れこんでいたとか…」

「？ 特にそういうことは… いや、待てよ。」

彼女の質問に何か思いあたる節があるのか、がさごそとスクラップを漁りだす。あざみは『クラリス?』と首をかしげるばかり…彼女はメカニックの知識は無いはずだ。それが、どうして星児の光武に興味を持ったのか…使える部品はまだ無限が届かないさくらの機体の補修パーツになるだけなのに。すると、クラリスは己が秘める疑問を口にする。

「あざみさん、妙だと思いませんか？ いくら私たちに問題があつたとはいえ、星児さんの行動の数々が不自然過ぎるんです。借りにも、ロンドンが正規隊員に起用したいとまで考えていた人間が、わざわざ自滅するばかりのような行動をとるのが奇妙過ぎてなりません。初穂さんだつて問題がある人ならあそこまで庇おうとしなかつたはず

…」

「でも、それは…神山が隊長に…」

「思い出してください。星児さんが豹変したタイミングは神山隊長のことを伝えた直後です。」

「！…まさか。」

あざみもクラリスの意図を勘づく。この2人、共通点は少なさそうだがある意味では同類…重魔導の一族と忍者という世界の影について知る者なのだ。国も成り立ちも違えど、影の者たちが求められる意味合いも術も同じ。ならば…

「クラリスちゃん、あつたけどこれか？多分、ロンドンでの現地調達した補修パーツか何かかと思ってたんだが…解らなくて、取りあえず寄せてたんだ。」

そして、司馬が持ってきた部品。一見すると鉄屑だが、クラリスはすぐに見抜いた…！

「これは…やっぱり！」



「星児…！」

「…っ！」

走り続け、銀座大通り…人が行き交う中、ランスロットは転びうなだれる星児へと追いつき手を

伸ばすも乱暴に振払われた。それでも、と声をかける彼女…

「帰ろう、ロンドンに。君の居場所はここじゃない。」

「…ロンドンなら居場所があるって言うのかよ。勝手に抜けて、揉め事もバレて、どの面さげて戻ってんだ!？」

しかし、言葉すらも冷たい言葉に弾かれ虚しく散る。夢を潰され、悪意を塗りたくられた上に居場所も拠り所も無くした彼の眼は濁って吊り上がり…涙を流している。怒り、焦燥、虚無、絶望…やり場のなかった負の感情が優しく伸ばされたはずの手を…

「俺は帝国華撃団だ…！お前は仲間なんかじゃない!!」

…少女の想いを喰いちぎった。

拒絶。最後の最後に自分の居場所になりうる場所をあまつさえ、自らで。突き放された友の頬に一筋の雫が伝っていくのを見て一瞬我にかえるが、もう遅い。

「星児…」

「あ…あ？ああッ!?　ち、違うランスロット!?　い、今のは…」

「…っ」

直後、おののくランスロットを押しつけ星児の前に立つとバチン！と彼の頬を平手打ちしたさくら。その瞳には今までとは非にならない怒りが宿る。

「最低…！それでも、すみれさんや真宮寺さんに育てられた人ですか!?」

はじめて会って、その身の上を聞いた時に仄かに昂ぶる興奮を覚えたのは最近と覚えている。憧れの人と憧れの場所で育ち、隊長を志した人間がどんな人物なのだろう。決して、最初からネガティブなわけではなかったのだ。

だが、蓋をあければどうだ？　癩癩を起こし、神山のトラウマをわざと刺激し、世話になったロンドンを無下にしてこの始末。何処かで、花組の忘れ形見という肩書きを信じたかった…だが、見事に裏切られ期待は落胆と呆れ…傲慢に対する怒りに変わる。

「何が忘れ形見…！それで、昔の花組の人たちに胸が張れるんですか!?あなたに帝国華撃団を名乗る資格なんて無い！」

「…あ」

その時、彼の頭の中で引つ掛かっていた何かが弾けとぶ。自分が帝都に来てから何をしたのか…何を言ったのか…何があったのか…一気に脳にはちきれんばかりの情報が決壊するように溢れ心身ともに激痛をもたらす。そう…自分は何故こんなことを？　頭を押

さえてかきむしり、爪がたった線から赤く滲む…

「あ…!? あ?? ああが…!?!?」

振乱す髪と血でダラダラになった顔面、狂い叫ぶ異常な様子は流石の責めたさくらさえ、異変を感じて間合いをとった。今まで突拍子もないことや精神の不安定さを感じさせることもあったが、それらとは非にならないくらいの反応をみせる。恐らく、力づくでも止めなければ危険な状態だろうが彼はフォースライザーを狂乱しながらも身に着け暴れまわるのをやめず、さくらと拒絶され放心しているランスロットで止めるのは無理だろう。

さらに、事態の悪化は加速する。フォースライザーの空のスロットに光が走るとライジングホッパー・キーまでも複製されてしまう。つまり、

「…滅亡、迅…ne…:…ツツ!! ぐああああああ!?!」

「フォースライズ! ライジングホッパー…!! Break do  
wn.」

変身が可能ということだ。フォースライザーが自動でキーをこじ開けるや、眼を紫に灯らせた仮面ライダー001に変身した彼は狂うがままさくらへ襲いかかり、対する彼女もついに刀を抜いて応戦する。

「俺ハ…!! 俺ハア!!!」

「何!?! きゃあ!」

さくらの刀はライダーシステムを貫くこと叶わず、薙ぎ払いの拳が彼女をふつとばして刀は離れた場所へと突き刺さる。そのまま、華奢な少女の身体を踏み潰さんと迫るが

「さくらちゃん！ 変身!!」

【プログライズ！ ライジングホッパー!!】

「おい、バカなにしてんだ!？」

【ショットライズ！ シューティングウルフ!!】

そこへ、割って入る追いつきてたゼロワンとバルカン。間一髪、001に組み付き事なきを得るが暴れまわる力は仮面ライダー2人がかりでも抑えつけるのすら難しい：最早、強攻手段は避けられない。このままでは無為に周囲の人間たちが傷つくばかりだ。

「不破さん、ドライバーを！」

「応ッ！ うおオオオオオオオオオオ!!」

直接、変身ツールを引き剥がす。どんな仮面ライダーだって変身ツールを奪われれば変身は保てない：このタイミングでバルカンがいたのは幸いだっつろう：彼はフォースライザーを驚掴みにして力強くで外しにかかる。ギチギチと音が鳴り火花が散り、帯も伸びて千切れそうに：：：なったが、断裂する負荷になりうる寸前にムカデのような有機的な形質となり、足のような突起がワラワラと生えて直接、星兎へ意地でも離れてなるものかと肉体に喰いこむ。

流石のバルカンもこれは予想外で、『なんっ：!?!』と驚いた瞬間には蹴りで間合いとられゼロワンも叩き落とされていた。

「ちい！あのキーは何処から!?!ドライバーだけだったはずだろ!!」

「俺のキーじゃない！ まさか、さっきみたいに複製したのか?」



「俺ハ…滅亡… 帝国華撃団ノヲ!! 隊長ナンダア!!!」

吼える001。自分が護るべき場所を血を吐きながら、壊し続ける姿は仮面ライダーというにはかけ離れていてあまりに悲しい。この場に本当に悪意がある者はいないのだろう…皆が向き合おうとした信念や夢があつて、それらが虚しくすれ違つてしまったのだ。善意が悲劇のトリガーになつてしまったのだ。

…この悪党などいるはずがない。

『……はははは。』

そう…月夜の闇に紛れ、もがく者たちを嘲笑う邪悪ヘアナザーゼロ  
ワン〜以外は

## 鬼の涙 VI / 果たされた約束

…惨劇の渦は尚も大きくなり、怒りや悲しみを巻き込み慟哭の唸りが帝都に響く。

一部始終を物陰から窺っていたアナスタシアは無表情で見つめ続けながら弾を一発ずつ押し込めていき、静かに銃口を戦いに呆気をとられているランスロットに向ける。こちらは死角、精神が揺らぐ彼女ならいくらロンドンの騎士といえど、確実に撃ち抜くことが出来るだろう。狩人の引く弓矢のように狙い研ぎ澄し美しく構え…：はしたが、トリガーのかける指に力が入らず銃口が項垂れてしまう。悪に加担している自覚はあるが、流石に直接の殺人は躊躇ってしまう。

…それを快く思わない者もいるのだが

『アイストール、何をしているの？ はやく、騎士を撃ち抜きなさい。』

暗闇からぬるりと現れるアナザーゼロワン。今回の1件を引つ掻きまわすよう裏でアナスタシアに指示していたのは奴だった。彼女としても、諸々の事情もありその行動のひとつひとつに何の意味があるかは知らなかったし、興味もなかった…：だから、『わかった』と一言で引き受けたのである。しかし、これだけの事態…：彼女とて疑問をぶつけ得ずにはいられない。

「何故、神崎星児をあのよう追い詰めるの？ 殺したければ、こんな回りくどいこと…」

『あの子には死んでもらっては困るの。あの子にはこの世界の歴史を背負う仮面ライダーになってもらわなくちゃいけないわ。慟哭と悪意の連鎖の果てに、あの子は負のシンギュラリティに到達し降魔へと覚醒する。最後の贄は…：あの騎士娘。』

「…どういふことなの？ 太正の一号とやらに関係が…！」

すると、アナザーゼロワンはソツと彼女の頬をに両手をあてた…。優しく加減された力加減だが、肌に触れただけで全身を蟲が蠢きまわる悪寒か走り表情も凍りつく。そして、異形の仮面で聖女の説法のように語りだす。

『…鏡が写すのは歪んだ虚像。しかし、写しあえば本物にだって近くなることもいつかは出来るでしょう。そして、実物と虚像がぶつかりあい、私の悲願は叶う…。』



暴走は止まらない。

アタツシユカリバーまで複製した001の苦しみがくような暴れ方は容易に近づくことすら難しく、スチームホッパーとゼロワンとパンチングコングへ変身したバルカンでさえ抑えられない。与えるダメージは蓄積しているのだろうが、勢いは衰えるどころかむしろ酷くなる一方。ついには、ゼロワンの首を掴みとるや締め上げにかか

「が…ああああ…!?!」

「…星児!!」

ギチギチと締まっていく音が握力の強さを物語り、圧迫され酸欠に陥りはじめるゼロワンは仮面の下で白眼を剥く。この時、ついに我を

取り戻したランスロットが剣を抜く。これ以上の凶行は止めさせなくてはならない…そんな思いで戦場を駆けるが、無造作に手にかけていた獲物を彼女に放りその下敷きに。いくらブリテンの騎士でも仮面ライダーが身体の上に乗ればどうすることも出来ず愛剣も取り落としてしまう。そんな彼女へ無慈悲な悪鬼の仮面が見下ろしながら刃を片手に歩み寄っていき、ゼロワンごと踏みつけることで動かないよう固定をする…

「星児！ あたしがわからないの!? ねえ!!」  
「…」

声は返ってこない。ただ敵の首を狩るためにアタツシユカリバーを振り上げ…一気に振り下ろす。ゼロワンも動こうとするも身体がついていかない…!

「駄目…!」  
「よせ!!」

『させないわ。』

さくらたちも止めようとするこすら叶わず離れた屋根から観客していたアナザーゼロワンに時を止められてしまう。

そして…

ザクツ

絶たれる音がした。ランスロットは眼を見開き、ポタポタと垂れていく赤い雫と目の前にたち自分たちを庇う男の背中を見た……屈強なんかではないのに、細身な肉体で怨念の刃自らの生身の肉を持って受けとめていた。

「ぐ……お……！」

「神山隊長……！」

「神山?！」

刀傷……しかも、アタツシユカリバーから受けた傷は焼けるだけの熱を持ち尚も抉っている……だが、真っ直ぐ立つ彼……神山の脚は揺るがず、瞳は狂気を制御できない仮面を真っ直ぐに見据えている。

「駄目だ星児。その人はお前が絶対に傷つけちゃいけない人だろ。……お前の痛みはよくわかる。自分の中が空っぽになって、辛くて……俺も同じだったから! でも……だからって、大事に想ってくれる誰かを傷つけちゃいけないんだ! そんなことをしても誰も幸せにならないんだよ。ランスロットさんも、すみれさんも、……君自身も。」

「うるさい!俺ハ……何も、何一つかなわかった。願ったものは何一つ手に入らなかつた……！」

「なら行こう、一緒に!! 君の夢は俺達と同じ帝国華撃団の再建だろう! だから、隊長を指したんじゃないのか!」

「黙れエエ!!！」

痛みを堪えながらの神山の説得虚しく、アタツシユカリバーは振りぬかれ一撃が肩を切り裂く。血飛沫と霊力が飛び散り、同時にさくらの時間停止が解除されて彼女の悲鳴が木霊し：

そして、これが物語を分ける大きなターニングポイントになった。

「誠兄さん!!!!」

……誠…兄さん…？

首を跳ねようとした剣先が寸前で止まる。

不意に積み重なってきた悪意に埋もれた精神の底から、手を伸ばして引き留めてくる何かがいせと脳裏に囁く。その呼び方…何処かで聞いたことがあるような気がする…ずっと…ずっと、ずっと昔。誰かをそう呼んだ…そう呼ばれた誰かが自分の名を呼んだ。

——サヨナラじゃないぞ星児、『またな』だ！

——私達はまた…『帝国華撃団』で！

「あ…あ…」

とつくに死んだと意にも留めなかった古い記憶が温もりを取り戻す…。臍げになりながらも、傷だらけの心を暖めてもう一度問いかける…お前の夢はなんだ？

お前の夢はひとつだけだったのか？

…：思い出せ …：思い出せ …：思い出せ



10年前…丁度、降魔大戦が丁度終結を迎えた頃。

当時の花組やパリやニューヨークの華撃団連合と昭和ライダーたちはその消息を絶ち、残されたのは戦力外だったすみれとまだ幼い星児だけだった。帝都は灰に、華撃団勢力は一気に弱体化し、僅かな残火を灯す者たちが人々を護る…と英雄たちの帰還を信じてもがいていたあの頃だ。

まだ幼く、武器を握ることを許されなかった星児は帝都近郊の田舎町のある刀鍛冶の家を疎開先として預けられた。帝都・華撃団の惨状の対処に加え、子供の相手など到底、すみれの手が回らなかったからで星児自身もそれは薄々ながら察している。だから、基本的には刀鍛冶の家主やその妻の言う事は聞いてるし娘とも仲良くしている…ただ

「…っ」

その日常は生傷は絶えなかった。家主の男は傷だらけの彼等に溜息をつく…星児ともう傍らにいる『少年』と『少女』に。

「ホシボーにセイボン…また喧嘩したのか。今回はさくらまで…お前たちときたら。」

「…でもー」

「でもじゃないぞ、セイボン。人を殴つちや駄目だろ。」

家主は腕をくみ金剛力士像のようなおつかない形相で叱りつけて暫く。やがて、子供たちは開放されて、庭の桜の木に囲うように背中をあずける…少女は父からの説教にグズリ、少年は納得いかない口をへの字に曲げていた。かなりこつ酷くやられたにも関わらず、腹の虫は居所におさまる気のない様子である…

「おい、星児。謝る必要も反省する必要もないからな。あんなこと言ったアイツらが悪いんだ。さくらの泣くな。」

そもそも、喧嘩至った理由は近所の悪ガキが星児をからかったからである。帝国華撃団に育てられた申し子、忘れ形見…聞こえは良い。しかし、彼を見る目は花組が活躍した帝都とこの縁も無い田舎では違う。

女世帯で育てられた、産みの親は誰かわからない男子ひとり。しかも、場所が場所、帝都を彩るトップスターたちが普通なら里子なんてとるはずもない…だから、いつからか陰口が囁かれていた。

——あの男子は、帝劇のトップスターの誰かが孕んだ子。世間にバレたらマズイから里子と偽っているのだ…と。

誰かいつそんなことを口にしたのだろう。無論、そんなことはない…はずなのだが。悪魔の証明、肯定も否定しようにも根拠が無い…そ



して、退屈な片田舎で噂ばかりが膨らみ熱くなる。例え流す誰かがまだ幼い少年に届かないよう線引きする大人でも、自ずと周りの子供の耳に入る：浅はかな子供など言葉の重さなんてものを理解するはずもない。ましてや、近所の悪ガキ共ともなれば知能もお山の猿涙：無邪気で残酷な言葉など平然に理解せず吐きつける。

『親無し』『隠し子』と嘲る言葉は星児を怒らせるには充分だったが、複数人いた悪ガキどもに敵うわけなく返り討ちに。逆に調子こくんじゃねえぞ！となぶられる彼を少年と少女は救ったのだ。

…でも

「もう良いよ。僕を庇っても兄さんたちが怒られるだけだし…」

諦めの表情を浮かべる星児。自分を育ててくれた人達を亡くした悲しみと心無い悪意を受け止めるにはまだ彼は幼すぎた。確かに帝劇の隊員らは我が子のように育ててはくれたものの、血の繋がった肉親がないコンプレックスは存在していた：こればかりはどうしようもなかった。仕方ない：どうしようも…

「仕方ないとか言うな！」

否、少年はその諦めを否定する。

「俺は悔しいぞ。大事な弟分を馬鹿されたことが…！それに、花組つてのは帝都の危機を何度も救ってきた凄い人達でお前の『家族』なんだろう？家族のこと馬鹿にされて怒るのなんて当たり前だろ！」

曲がったことが嫌いだったのは知っていた：ああ、でもなんでこの人はこんな眩しいんだろう。何で自分じゃない誰かのためにこんなに怒れるのだろうか…。そんな強い背中をただ見つめるしか出来ない自分に嫌気が刺す。

「優しいな…兄さんは。それに、強い。いつそのこと、兄さんが僕の代わりだったら…」

「お前の代わりはいない。お前はお前だ。…というより、女世帯とか俺無理。さくらでさえ手に余るのに…おわ!? さくら、こつちに木刀振り回すなよ!」

大切な人を失いながらも、自己嫌悪に至ることも多い日々…だけど、少しずつ新しい日常も悪くないかななんて思っていた…

そんな時だった。家の前に田舎に不釣り合いな高級車が停まり…そして、ドアからまだ少女の面影を残すすみれが降りてきたのは。

「すみれ姉さん…?」

「星児、元気そうね。少し待っていて…家の人と話をしてくるから。」

前に会ったのは数カ月は前だった…少し、痩せたかもしれない。彼女は微笑むと邸へと上がり刀鍛冶の夫婦へ話があると中へ…。3人が聞き耳をたてると、小難しい話こそはわからないが、どうやら星児の関係のものらしい。家主は終始気難しい顔をしていたが、妻のほう笑顔で押しきり渋々と頭を縦に振る…恐らく、流れからして彼女は星児を連れ帰る気なのだろう。

数時間後、予想通りに星児の帝都帰還は現実になった。別れは突然に訪れ、ろくに心の準備もすることも出来なく少年少女は運命の時を迎え入れることになる。荷物はテキパキと纏められ身支度は1時間もかからず、あとは車に乗るだけになった星児を見送る少年少女。少女はまたグズリだしていたが、少年は胸を張って笑顔をつくった。

「行っちゃうのか。来た時みたいに突然だなお前…。帝国華撃団、再建頑張れよ。さくらが来る前に潰れてちや目に手も当てられねえしな!」

「う、うん…頑張る。」

「きつと、追いつくから…ぐずつ… 真空寺さんに…よろしく…ぐずつ…言つて、ください！ぐずつ…」

「会えたら、伝えるよ。」

最後に『影ながら応援してるからな！』とニカツと笑顔を向けられる…すると、妙に寂しさと一緒に胸に熱い何かが込み上げてくる。気恥ずかしさが蓋をしようとするが、きつと言わなきや永遠に後悔するような感情が喉を突きあげ言ってしまうと叫ぶ。もう二度とこんなチャンスは無い自分に正直になれと…

「誠兄さん…！」

「お、おお？ どうした？」

「そ、その…兄さんも姉さんと一緒に、花組に来てくれませんか？」

…え？ 目をまるくする少年。あまりにも予想だにしなかった質問に頭をポリポリとかいていた様子に一抹の不安を覚えること数秒…仕方ねえなと彼は笑う。

「わかったよ。だが、参ったな…俺は男だから舞台に立てないし。やるなら、やっぱ隊長しかないな。」

「な!? 隊長が僕がやります！ 兄さんは…えつと、モギリとか…」「お前、誘っておきながらしれつと酷いこと言うな？」

あ、まずい。確かに誘つてモギリを頼むとか、喧嘩を売つてると思われかねない…だが、数秒後には少年の眉間から皺が消えて笑いに包まれる。

そして、少年少女たちは桜舞う青空の下に誓い合う。

「いつかまた会おうぜ…だから、サヨナラじゃなくて『また』なだ！」「…私たちは帝国華撃団で…」

「「また会おう！」」

——ずっと忘れていた。

あの日から前だけ見て走り続けてきた・後ろに取りこぼした大事な記憶すら気が付かずに。

「あ……ああ…… 誠兄さん……？」

001の変身が融けるように解除された。そして、星兎は己の刀を手に取り刀身を神山に突きつける：『天宮』の銘が刻まれたその刃を。それが、何を意味するのかさくらはすぐに理解した。

「それは、お父さんが打った刀……！ じゃあ、アナタは……」

「星児…まさか、君は…。ホシボーと呼ばれていた…あの！」

神山も思い出す、十年前の記憶。降魔大戦の疎開に訪れたあの田舎には不釣り合いに身なりがよかつたあの少年…別れたあの日から出会うこともなく、いつしか色褪せていたそれが鮮明に蘇る。そう、幼き日に誓いを共にした3人…やっと、自分たちは再会していたことに気がついたのだ。

(…なんだ、叶ってじゃねえか…俺の夢。)

何がなにひとつかなわないだ。自分が忘れていただけじゃないか…。…気がつかなかつただけじゃないか。2人は約束を守って帝国華撃団にて約束を果たしたのに、自分ときたら。何も為せずにはロンドンに逃げて、そこからも逃げ出して、大切な人達を傷つけてばかりで…

胸にこみあげるグチャグチャの熱い感情に、あの日の孤独な少年は膝をつき涙を流す…同時に心の中にずっと居座っていたドス黒いものも引き潮のように消えていく。

「…兄さん、誠兄さん…。俺は…なんてことを…」

「! 正気に戻った…? 星児、俺がわかるのか？」

悪意の迷宮の果てに、星は再び瞬く…

しかし、それを望まない者だっている。



## 鬼の涙 VI / シグナルが変わる時…

「うおおおおお!!!」

「星児…!」

「そんなん?!」

彼を呑み込んだのが、他ならない彼を思う者の力による炎とは皮肉なことだろう… 神山やさくら、この場にいる者たち全員がただ呆然と見ることにしか出来なかった。やっと、解りあえるキツカケが獲られたはずなのに。降魔すらひとたまりもないこの灼熱に生身の人間が耐えられるわけ…

「おおおおおおお…オオリヤアツ!!」

否、そんな常など無意味と炎をかき消して現れた001。その眼は悪意に塗り潰された紫色ではなく、人の血を流す赤色へと戻っている。もう正気を失った狂戦士はそこにはいない…再び友に導かれ立ち上がったひとりの戦士がそこにいたのだ。

「はあ…はあ…。本当に情けないぜ。これは俺の弱さが招いた種だ。それなのに、テメエひとりじゃ自分の尻すらまともに拭けない。でも、せめて俺に手を伸ばしてくれた人は助けたいんだ。だから、力を貸してくれないか…! 誠兄さん!」

そして、001は神山に問うた…今一度、初穂を助けるために力を貸してほしいと。無論、問われるまでもなかった。

「勿論だ。お前の兄貴分として、花組の隊長として…仲間を見捨てたりしない!」

神山も毛頭に諦めるつもりはなかった。されど、この流れ…本人たち以外は全く理解が追いつくはずもなく、『あの…』と覗きこむゼロワン。ランスロットも同じ有様で戸惑うばかり…

「えっと…解決したのかな？よくわかんないけど。」

「ああ、そうだよ社長さん。やっと誰かの代わりじゃない自分の夢を思い出したんだ。」

「？…?? そっか、取りあえず大丈夫そうなら良いや。」

001の別人のような明るい答に理屈ではない納得をするゼロワン。きつと、そこらへんは自分が首を突っ込むべきではないし、するタイミングでもない。今はアナザーライダーの力に囚われた彼女を助けるのが最優先…ふたりのゼロワンと神山は今尚、邪悪の混沌に呻く仲間を見据える。

「誠兄さん、社長さん、初穂の動きを抑えてくれ。俺の力なら、助けることが出来る。」

「…わかった、信じるぞ。…ん？」

その時だった。神山から霊力が漏れ出して、ゼロワンの掌に収束すると新たなプログライブキーを産み出す…それは仮面ライダードライブの力を宿す『タイヤチエンジング・ドライブキー』。かつて、神山と星児と同じく、喪失から再起した熱血の戦士である。

「これ…もしかして、クラリスちゃんの時と同じ…!」

ゼロワンは察して、ゼロワンドライバーにドライブキーを翳す…すると、呼応するように神山に一瞬だけ仮面ライダードライブの姿が重なり、彼の霊力が跳ね上がった。

「これなら…!」



「ああ。いくぞ社長！」

漲る力は不安なんてものはふつとぼす。瞬間、ゼロワンと神山は一気に加速し、アナザーヒビキと距離を詰めて周囲を弧を描きながら動きまわり攪乱。この動きは仮面ライダードライブに由来する、車のドリフトのような平面移動…今は思考が追いつかない彼女では到底とらえることがかなわずハンマーを虚空に振り回すばかり…

一方、001は『天宮』の銘が刻まれた愛刀を構えて意識を集中させていた…呼び起こすのはかつて花組を支えた母と同じトツプスタアであり、防人であった戦乙女。

(さくらの姐さん、約束を破るぜ…)

そして、彼女が使っていた邪悪を討ち祓う奥義…見よう見真似だが今はこれに賭けるしかない。桜吹雪のように霊力の欠片が舞い、蒼銀の光が刀身に帯びる…その技の名は

「我流ツ…破邪剣征・桜花放神!!」

ゴオオ!!と放たれる紺碧の桜吹雪。我流なれど、それは英雄・真空寺さくらの代名詞たる技…『破邪剣征・桜花放神』。本来の使い手には遠く及ばないお粗末な我流だろうがそれでも威力は凄まじく、地面を抉りながらアナザーヒビキを一刀両断に斬り裂いてみせた。

『ウガアアアア?!?!?』

直後、彼女に異変が起こる。異形の身体は元通りにくつついたかと思えば元の初穂の姿に…それから、アナザーウオッチが分離して、プ

ログライズキーへと変化してゼロワンの手にまたもおさまる。

「…う、あ…」

「あぶねっ！」

こうして、初穂はふらきながらもファインプレイで回り込んだバルカンに支えられながらも五体満足で大きな怪我も無い様子で救出。

遠目に見ていたアナザーゼロワンも舌打ちしつつも、『まあ良いわ。』と捨て台詞を吐いてその場を後にする。これで、星児並びにアナザーライダー騒動は幕引きへと向かっていくのであった。



「う…」

医務室で眼を覚ましたすみれ…。

そうか、自分は倒れてしまったのかと思い出した。もうすっかり日は暮れて、清潔な医務室は真つ暗で月明かりが差し込む窓からえらく長い時間を寝ていたのただと悟る。きつと、カオルや花組の皆にも迷惑をかけているだろう…それに、星児のことも気掛かりだ。あの様子からして、大事になってない…。

(!? …か、身体が、動かない?)

腕に力を入れて起き上がろうとしたその時、まるで鉛に固められたように動かない自分の身体。俗に言う金縛り…なんということだ、何も今じゃなくても。

「……ふふふ。」

「……？」

そんな時、気がついた……ベッドの傍らに佇むリボンで束ねたポニーテールに黒髪の女。見覚えがある袴の姿。まさか、そんな……だって彼女は十年前から行方不明で……帰ってきたのか……？ 花瓶に手折った桜の枝を刺す横顔に感情が口を動かした。

「し、真空寺さ……」

「……」

名を呼ぶ……すると、彼女はこちらに顔を向け……闇でも妖しく光る赤い瞳を向け、微笑みながら彼女に告げる。

「……『息子』を返してもらいますよ。」

……!

「すみれ様……！ 目を覚まされましたか!!」

ゴゴオ!!と響き渡る雷鳴と同時に、今度こそ眼をさますすみれ。部屋は電気がついていて、カオルが控えている。脂汗が滲む主の顔を覗きこむ顔はえらく彼女も心配していたことを窺わせるが、すみれは息を荒くしながらも花瓶が置いてある棚を見た……

「……これは?」

あの桜の枝も『彼女』の姿も無い。ただ、息絶えひっくり返った甲虫の死骸が転がっている。細い身体に触覚が長い独特のシルエツト……カオルも気がついて『ああ』と口にする。

「おや、カミキリムシですね……珍しい。何処から入って来たんでしよう……。取りあえず、片付けておきます。」

カミキリムシ、幼虫成虫共に木を食い荒らす害虫である。しかし、自然の少ない帝都の一等地で目にするのは非常に珍しい。不思議そうにしながらも、特に深く考えることなく死骸を拾いあげるカオル。一方、すみれはどうにも不吉な予兆に感じられた。カミキリムシは種類によつては、桜の木々さえ枯らすこともある蟲だ……それが、桜の花を紋章とする帝劇の中に出てくるなど……

(……考え過ぎかしら。)

あの妙な悪夢のせいもあるかもしれない。きつと、たまたまだろう  
…物事を悪く考えると悉く負の連鎖は続くものだ。今は花組と息子  
の身を案じなくては…

★  
★  
★  
★  
★

夜闇に紛れて『彼女』は笑う…

仮面ライダー夜叉は夜闇に紛れるように空を飛び、帝劇への帰路に  
つく者たちを見据える。その中で、一際強く視線を注いでいたのは変  
身を解いた星児…愛おしそうに手を伸ばしながら、裂けんばかりの微  
笑みでその背中を見送る彼女。頭だけ変身を解いて、真宮寺さくらの  
顔を晒して誓った。

「きつと、迎えにいきますからね『シンジロウ』。私の可愛い息子…  
愛しいあの子…」

…いずれ、夜は星を抱きに舞い戻る

華撃団大戦篇 ―誠を受け継ぐ者―  
そして、星は輝くべき場所へ。 I

…大帝国劇場の屋根の上

青空から振りそぞく優しい日差しと小鳥たちと戯れながら、預言者ウオズは本を開く。ただ、いつもの本ではなく『新サクラ大戦』と表紙記された一冊…これをいつもの予言者節で読み上げる。

「この本によれば、新生・帝国華撃団は数々の困難と試練を乗り越え見事に帝都に手を伸ばす巨悪を討ち倒し、華撃団復興の悲願を果たす未来が待っていた。…しかし、既にこの物語はこの本に記されている道を辿りつつも全く別の意味と結末を迎えるものに向かっていて。…産まれるべきではないものが生まれ、全てを破滅へ導くための物語に。」

そして、彼はパタンと本を閉じる。

「鍵を握るのは星の行く先。…眩い未来か、…明けぬ夜か。」

★ ★ ★ ★

…大帝国劇場が

「本当に、申し訳ありませんでしたッ!!」

―ドゴツッ!! (大帝国劇場が揺れる音)

…揺れた、物理的に。しかも、ひとりの男の本気の土下座でだ。

騒動を経て正気に戻った星児はサロンに集まる花組のメンバーや仮面ライダーの面々に文字通りに頭蓋が砕けんばかりに頭を打ちつけて土下座。額からドクドク血は流れてるわ、パラパラと木屑や塵っぽいものも天井から落ちてきている…。え、これ大丈夫なの？ よろめきながらも、クラリスが宥めにかかる。

「俺は、自分の弱さに負けた…それなのに、忘れ形見だ花組の隊長なんて…俺は俺自身が恥ずかしい…!」

「あの、星児さん取りあえず落ち着いて下さいね?」

「頼む、許してくれ!! なんでもするからッ!!」

―ドゴツ!!! …メリメリ (大帝国劇場が軋む音)

「落ち着いて下さいね? (威圧)」

「アツハイ」

やべえ、今の本気でチビリかけたわ…と心の中で呟く神山。やつぱり、帝劇の女を怒らせるべからず…。

取りあえず土下座はやめさせる。さて、やっと本題に入れるとクラリスはコホンと咳払いして令士に持ってこさせた星児の光武の部品を皆の前へ出した。一見すると、何かシリンダーのようだがどことなく不気味な円筒状のパーツである。しかし、なんで今これを? 神山は彼女に問う。

「クラリス、これは？」

「星児さんの光武のパーツです。皆さんも思っていたと思いますが、星児さんの行動とランスロットさんの話…聞いていて違和感を覚えませんでしたか？」

…まあ、言われみれば確かに。ロンドン華撃団が正規団員に起用とする人間にしては精神的に追い詰められていたとしても、食い違うような行動の数々。正規隊員登用の話が死に体されているのに花組の隊長を名乗ったり、現・花組をいくら不甲斐ないとはいえ暴力を辞さずに責め立てたり…一方でクラリスの脚本には好感を示すなどかなりちぐはぐな行動が多い。

「星児さん伺いますが、花組の再建の話は何処でききましたか？　そして、帝都にはどうやって戻ってきたのか…覚えていますか？」

「え… それは、…………あれ？　あ、あれ…」

混乱しだす星児。おかしい、確かに聞いた、だから自分は帝都に戻ってきたはずなのに…辿った至るはずの過程がなにひとつ頭に浮かんでこない。この反応がクラリスを確信に至らせる。令士に目配せすると彼は予め切れ込みが入れられていたパーツを分解…

これを割って筒の中身を見せると衝撃が走った…

「なに…これ…」

太正の世界にまだ疎い或人でさえ、それは真つ当なものではないと臭いでわかる……。祟るための呪文の羅列が血で書かれた紙の札がびっしりと貼り付けられ、邪気を放っている。

「!?!?」



それを見た途端、星児の顔色は途端に青くなり強い吐気を覚えて口元に手をあて悶えはじめた。すかさず、あざみが飛んでいき彼の目の前で数回手を叩いて合掌するとすぐに落ち着いたのだが……これは一体……

神山はクラリスに問う。

「クラリス、これは……」

『呪詛』です。これは靈力に反応して、付近の人間を混乱に陥れ錯乱させる呪術で、今時そう目にする事なんてありませんが……。

呪術……つまり、星児が何者かに呪いを受けていたということか。巧妙に機体の内部に隠せば早々見つからない上に触媒の靈力も供給できるとは考えたものだ。

気がつけたのは、やはりクラリスの出身が重魔導の一族で表に出回らない魔術に知識があったためだろう。

「そして、これが術の核。」

そして、彼女が取り出したものに今度はぎよえ……と顔を引つらせる初穂。そりゃあ、つい先まで自分を怪人にしていた因縁の道具が飛び出してくれば嫌な顔くらいにはなる。ストップウオッチのようなソレは或人だけではなく今や花組にも悪い意味で縁があるもの……

「アナザーウオッチ！」

しかも、アナザーゼロワンのものだ。つまり、星児の件も降魔が裏で手を引いていたことになる。

「星児さんの暴走、並びに今回の一件は全ては降魔が関わっていたと思われます。そして、これと似た力を持つ人物に心当たりが……そうですよ、サー・ガヴェイン？」

「…ほう？」

「「「「ー」」」」」

唐突な背後からの声に振り返れば、そこには壁によりかかるとは腕を組み不遜に関心したという顔をしているが、強い戸惑いの表情をしているのは星児だ。それはそうだ、自分を崇る呪詛と世話になった師匠とが縁があると云われれば当たり前である。

「師匠、嘘だよな？だって、俺を拾って…ロンドンで世話してくれたのはアンタじゃないか…？　それが、呪詛だ？　悪い冗談だろ？」

「…」

動揺しながらの弟子のすがるような問をハヤトは否定しない。よりかかった壁から起き上がると、ゆつくりとクラリスに歩み寄りながら一言。

「小娘、勘がいいじゃないか。」

彼女の顔面に右手をちらつかせるとメラメラと燃える『呪い』の類いの炎…溢れ落ちる赤い血の雫。咄嗟に神山がクラリスを庇い下らせるが、ハヤトは手を引つ込め不敵に口角を吊り上げる。その頬には改造人間特有の涙腺のような手術痕が浮かび、眼が蟲のそれと同じ複眼のような変質をしていく。彼の宿す力、確かに星児がはじめて001に変身した時に必殺技『ライダーパンチ・オルタナティブ』の際にも溢れていた赤黒いエネルギーと同じ。

『化け物…』思わず、初穂はそう呟いた。目の前の男は人間じゃない怪物と遜色ない。

「で？　だったらどうする？　お前たちに俺を斬れるのか…？」

「そこまでだよハヤト。」

しかし、あわや触発……といったところで、ハヤトの肩を掴むのはタケシ。後ろにはウオズもいる。

彼の登場は神山とクラリスにも驚くべきものだった。アナザーダブルの際に世話になったが、彼は戦いが終わるや霞のように姿を消してしまい礼のひとつも言えなかったのである。特に神山は過去に助けられた記憶もあり、どうしても一言でも感謝をと思っていたがタイミングを逃したと悔しがっていたのだが……

そんな2人に目もくれず、腕を組んで溜息をつくタケシ。すると、眉に皺をよせいつものように、ハヤトはしかめっ面へと戻った。

「悪い癖、直ってないんだね。そういう態度が毎度勘違いを招くんだよ。」

「……フン。話したところでコイツらは事情など理解しない。」

悪の1号と悪の2号……馴れ馴れしいやり取りに困惑していると、ウオズが『彼等は同じ世界の出身なんだよ』と説明。なるほど、やはり繋がりがあつたと言うべきか。

暫くして、ハヤトはふてくされたように椅子に座って一行に背を向けて、代わりに話の舵取りをウオズと共に担うタケシ。

「あー、ゴメンね。ハヤトは素直じゃないけど、悪いやつじゃない。大方、ここで揉め事起こしてロンドン華撃団と手を切ろうとか考えてたんだろうけど……そうは問屋がおろさないってね。さて、はじめての人もいるから自己紹介をしておこう。俺は本郷タケシ……悪の一号ライダーさ。」

「本郷猛…!? なら真宮寺さんは…」

「うん、でも真宮寺さくらと一緒に戦った彼とは違うよ。」

「へ?」

さくらは面食らった様子だったが、タケシは構わない。とにかく、事態は想定より深刻だ…はやく伝えるべきことを話すべきだろう。

「帝国華撃団、そして…ゼロワンにバルカン、バルキリーたちも聞いてもらいたい。この太正と令和の世界に迫る危機と敵の正体に…何故、星児が狙われたのか。君達は知るべきだ。」

世界の危機…そういえば、オーマジオウも言っていたと思い出す或人。しかし、具体的には何も説明せずただ『太正の1号』を探せと放り出されて今日まで手がかりらしいものは何ひとつ掴めず終いである。流れで帝国華撃団に協力することになったものの、事の詳細は実際のところタイムジャッカー絡みということ以外は全部が不明だ。仕事にせよ、何にせよ、理解してやると何もわからないのでは効率も成果も雲泥の差、是非是非聞かせてもらおう。

「じゃ、ウオズ! 宜しく頼むよ!」

いや、お前が説明がするんじゃないんかい。



見上げる星の数々 それだけ無数に並行世界と歴史は存在する。

『太正』と『令和』もそのうちのひとつであり、本来ならこのふたつの歴史は交わる必要は無い。しかし、ある悪意のある存在がこのふたつの歴史の融合・消滅を目論んでいる…それがネオ・タイムジャッカーにして上級降魔のレクス。アナザーゼロワンとして太正世界を暗躍する彼の究極の目的は時の王者・オーマジオウの討伐である。しかし、彼の魔王に挑んだ者たちはすべからず敗北し滅んでいった…

レクスは考えた…真つ向から挑んで勝ち目が無いのならば、土台から崩せば良いと…。そこで、目をつけたのがオーマジオウを支える平成の歴史の先にある『令和』と完全に仮面ライダーの歴史と関係がない『太正』、この2つの世界を融合・対消滅させることで波及させ『平成』を破壊することを目論む。

「…そのために利用したのが仮面ライダーゼロワン。君だよ。」

…ゼロワンが？ ウオズという言葉に首を傾げる或人。ゼロワンが利用されているとはどういうことだろう？ 今のところ、不調・異常も共に無いのだが

「オリジナルとアナザーライダーの惹かれ合う特性を利用したのさ。奴は太正世界にアナザーゼロワンを産み出したことで、2つのパラレルワールドは引きあっている状態なんだ。」

そういえば、さくらが令和世界に飛ばされた時に空に帝都が写りこむ現象があった… つまり、あれも世界崩壊の現象のひとつでネオ・タイムジャッカーが原因ということか。ということなら、とイズは口を開いた。

「なら、ネオ・タイムジャッカー…アナザーゼロワンを倒せば事態は解決するということですね？」

「残念ながら、事はそう単純には済まないんだなこれが…」

…え？ 今の説明ってそういう流れでは？ これについてもウオズは補足していく。

「アナザーライダーが誕生してしまった以上はこの世界は『仮面ライダーが存在する世界』と定義されている。アナザーゼロワンを倒そうものなら瞬く間にこの太正世界は歴史を担う者がいなくなったとされ、消え失せるだろう。」

なにそれ。

なんとも理不尽極まりない理屈である。でも、並行世界まるまる人質になっているとなれば迂闊にオーマジオウも手を出せないだろうことも納得がいく。するにはするが、倒しても駄目だし見てもジリ貧なら打つ手なしなのでは…という疑問に至るのを予想通りだったウオズ。

「だからこそ、必要なのが『太正の1号』。この世界を担う仮面ライダー…そして、それを担う可能性が最も高いのは…神崎星兎くん、君だよ。」

「お、俺？」

唐突に話の舞台にあげられた星兎。まさか、ここで自分にスポットライトが当たるとは思わず戸惑うものの落ち着きを心掛け、奇妙な預言者に疑問をぶつける。

「えっと、ウオズ…お前が胡散臭いのはロンドンに居た時から思ってたけど今回の話はマジでわけわからねえぞ。っーか、なんで俺が太正の1号になるなんて話になるんだ？」

そう、どうしてそんな理屈になるのだ？ 色々ぶつとびすぎて面々

の大半が話にまるでついていけないが、これに関しては何も脈絡が無い。

すると、ウォズは少し思案した様子で僅かな間だけ黙ると静かに意を決したように彼に告げた。

「…星児くん、それは君の母親がこの世界に産まれるべき仮面ライダーの前身だったからさ。」

そして、星は輝くべき場所へ。Ⅱ

「いや、待ってね？待ってね?? おふくろはそもそも仮面ライダーじゃないし、そもそも並行世界とか太正の1号ってなに？ 全然、わからないんだけど?」

いきなりそんな話をふっかけられても、そうなんだと呑みこめるわけがない。世界崩壊の危機? 太正の1号? 星児の母親: すみれが仮面ライダーだった?:? 花組どころか令和ライダーたちも目が点な様子: 説明と扮した奇怪な謎理論(平成)をぶん投げられればまあそうなるだろう。

仕方ないとはいえ、やれやれと溜息をつくウオズ。確かにこんな話は並行世界を余裕で渡り歩けるような連中でもなければ理解なんぞ無理だろう。あと最後の一点は言い方が悪かった。

「ああ、仮面ライダーの前身というのは神崎すみれのことではなく、君の『産みの親』のことだ。君を産んだほうのお母上は『太正で産まれた改造人間』だった。」

「なに:~:~?」

すみれではなく、星児の産みの親が改造人間?

元より、花組にわざわざ育てられるくらいなら事情はあるくらいは面々は察していたがこれはどういうことか。星児も知らなかった様子で、驚いた様子。一方、ハヤトは相変わらず不貞腐れた様子だったがこの話題になるや顔を険しくしつつも補足を入れる。

「お前の母親は確かに俺と同じ身体にマシンを入れた改造人間だった。だが、彼女は自分のそのあり方を受け入れられず、産まれたばかりのお前を残して自決した。まあ、無理もない:~:~正気のまままでいられる奴のほうが希だしな。」



そんな…まさか、産みの親が自ら命を断つたなんて。星児も勿論だが花組や令和ライダーたちも動揺していた。

「支配人もいずれ話すつもりではいたんだろうが……そうだったよな？」

そして、彼はいつの間にか現れたすみれに話を振った。同時に、暗い表情をした彼女に視線が集まる…こんな大事なことをなぜ、星児本人に黙っていたのか。確かに簡単な話ではないが、これは新たな荒波の予感を掻き立てる。

「おふくろ…」

「…」

すみれは顔を背けるが、星児は視線を離さず詰め寄っていく。また怒りを爆発させるのではと身構える隊員たちだったが神山が制する…もうそんな心配は無いと確信していたからだ。

星児は半歩程の間合いをとって、沈痛な表情のすみれを見据えている…

…そして、フツと息を吐いて肩をさげ表情を柔げた。

「良いぜ、無理して今話さなくても。」

その言葉は今まで隊員たちが知る星児のどの言葉より穏やかだった。

「産みの親だなんてのは気にはなるが、俺は今、怒れる立場じゃない。だから、気持ちを整理出来て話したいと思った時に話してくれば良い。取りあえず、暫くは待つからさ。」

「星児…」

恐らく、これが素の彼なんだろう。母を思いやる優しい子…例えば、血の繋がりは無くてもその絆は簡単に断てるものじゃない。神山もそんな親子の様子に笑みを浮かべ、心なしかハヤトの眉間のシワも浅めになったような…

親子の問題も時期に解決するだろう。そんなことを思っている神山たちに改めて星児は向き治る。

「それじゃ、改めてましてだ。神崎星児、神崎すみれの息子だ。取りあえず、ここにいる間はやれることはなんでもする。掃除洗濯から料理に機材や霊子戦闘機のメンテまで、ある程度のこととはまあ卒なくこなせる…ま、そこらへんは誠兄さんに任せるがな。取りあえず、処分なり何なりが決まる間…迷惑をかけたぶん、取り返す機会をくれないか。」

もう惑い迷うあまりに、手当たり次第に噛みつく彼はもういない。ならばと、神山は星児と共に並び頭を下げた。

「皆、俺からも頼む。もう一度、チャンスをくれないか？」

「兄さん…」

顔を見あわせる花組の団員たち。謝罪の言葉に嘘はないだろう…それに、神山も頭を下げたとなればもう引きずることはないだろう。最初に口を開いたは初穂とクラリスだった。

「辛気臭えこと言ってるじゃねえよ。…ここはお前の家だ。そして、あたしらは家族だろ？ 今度はひとりで背負いこむなよ？ 辛い時は頼れ、良いな？」

「私も事情が事情なのでこれ以上、責め立てる必要は無いと思います。それに、まだまだ星児さんには手伝ってもらいたいこともありますし…」

このふたりは受け入れに前向きだったこともあり、彼を許諾していた。ここは神山も大丈夫だと踏んでいたが、問題は残りのメンバーである。アナスタシアは無関心…さくらとあざみは強く反対していたのだ。受け入れてくれるかはわからない。すると、神山へと視線を向けるあざみ。

「神山は…もう星児のことを許したの？ 呪詛のことはあつたにしても酷いことを言ったんだよ？」

彼女自身は直接、星児と揉め事を起こしたわけではないのだが…懸命しているのは神山のことだった。神山は過去の艦長時代のトラウマに触れられているし、他にも花組全体に対しては幾つも暴挙を行った…事情があつたにしても、それを許すことが出来るのだろうか。その質問には星児も顔を暗くするが、神山は微笑んで答える。

「そうだな…でも、俺は許すことに決めた。花組の皆が俺に立ち直るキツカケをくれたみたいにな、俺もやり直すチャンス星児にあげたい。同じ、痛みを知る者として…花組の隊長の役目を背負った者として。」

許す。その言葉と穏やかな表情に不安に駆られていたあざみは安堵する…なら、改めて責め立てる必要はないだろう。

「なら、反対しない。神山が赦してるならもうあざみが言うことはないよ。」

神山が許したように自分も許すことに決めた彼女。すると、続く形にアナスタシアが意見を告げる。

「私も舞台に支障が無いなら異論は無いわ。ま、これで心置きなく皆

が演技に集中出来るのは良いことね。」

アナスタシアも了解した… さて、残るは

「さくら…」

「…」

反対筆頭だったさくらのみ。特に彼女との関係悪化は顕著だった故に、『はい、そうですか』と片付かないことは予想できはしたが…。まだ色々と割り切れていないのだろうが、しっかりと和解してほしい。でなければ、帝国華撃団再出発に影を落としたままだ…。

すると、険悪な空気な間に入っつていったのは初穂だった。

「なあ、さくら。お前と隊長…それに、星児も幼馴染だったんだろ？色々あったのはそうだが、コイツだって帝国華撃団のために走り続けてきたのは事実なんだ。アタシたちよりずっと長く…辛い思いだっしてしてきた。なあ、頼むよ。折角、帰ってこれたのにこれじゃ、悲しすぎるだろ。」

隊員として唯一、星児が苦しむところを見てきたからこそ万全な再出発を花組の中で一番強く望んでいた彼女。可能なら、皆で仲良く肩を並べて再出発をきりたい…そんな願いをさくらだって解っている。でも、どうしても許す前に指摘しなければならぬことがある…

「アナタには、私より先に謝るべき人がいるはずです。」

『謝るべき人』…その指摘に星児はすぐにある人物が脳裏を過る。しかし、深く傷つけてしまったであろう『彼女』はこの場にいない。さくらとしては、神山と等しくこちらの関係も解決すべきという考えだった…自分のことなど二の次で良い。

本来、ここであらうだしているよりもはやく謝りにいくべきなのだ

ろうが……ここで、突然慌てた様子でカオルが駆け込んでくる。

「すみれ様！ 大変です!!」

「カオル？ どうした、アナタらしくもない……」

「…プレジデントGが、御自ら坊ちゃんを捕えに！」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

それは、最悪の来客を告げる報せ……今、よりにもよって現れてはいけない存在が帝国華撃団にやってきたという。すみれは青ざめ、星児も顔を険しくする。花組のあまりにも唐突な事態に右往左往する始末……

「…（来たのね。）」

……ただひとり、アナスタシアを除いては

そして、星は輝くべき場所へ。 Ⅲ

大葉こまち：小柄な彼女だが、勝ち気な性格と大阪弁が特徴的な帝国華撃団の売店の主。本来ならば、持ち場を離れるわけにはいかないのだが、今はホールの真ん中で仁王立ちして押し寄せてきた招かねざる客を留めていた。

黒服の集団に傍らに上海華撃団と矢車、更にはアーサーとランスロットからなるロンドン華撃団まで。それらの一団を率いるのはスラリと背の高い白い礼装の男：眼鏡とオールバックに人を小馬鹿にしたような笑みを浮かべるこの顔をこまちは知っている。いずれ対峙する日はくるとは思ったが、何も今でなくても良いだろうに…

そして、彼は先頭に立ったまま、こまちに話しかける。

「レデイ、そこを退いてくれたまえ。我々も必要以上に事を荒だてるつもりは無い。支配人とその御子息に用があるだけなのだよ。」

「はい、わかりましたと言うと思うたか？ 坊ちゃんにオタクらが何をしたかを忘れたとは言わさへんで！ プレジデントGー！」

プレジデントG：世界華撃団連盟の頂点に座る世界有力の権力者。帝国華撃団再建の難航もこの男が『待った』をかけたのが原因で、神崎親子にとつては建前は上司であるが、真実は敵：星兎にとつては仇も同然のような存在である。そんな彼が神崎親子を目当てでやってきたのならば… 今度こそ破滅させる気なのか。

「ふむ、私は君に用は無いのだがね。残念ながら時間は有限なんだ…早くしてほしいところだが……」

「俺は逃げも隠れもしないや。」

その時、星児が2階から降りてくる。それをニヤリと嗤いながら見る黒服に見覚えがあったが、それよりも黒服の一団に並ぶロンドン華撃団：ランスロットに視線が向いた。彼女もアーサーもこちらに視線をあわせようとすらすらず、無表情に堅く冷たく：彫像のように立っていた。これだけで覚るには充分：

(ランスロット：…そうか、許せるわけねえよな。)

気が狂った時に吐いたあの言葉が確実に彼女を傷つけた…：それが、ロンドン華撃団との決別にもなったのだろう。自分の空けた傷口の大きさを改めて感じながらも、プレジデントGに向きなおる。憎き相手ではあるが、こうして直接面と対峙するのははじめてだ。

一方のプレジデントGも星児を見るや口角を吊り上げる。

「これはこれは、旧・帝国華撃団の忘れ形見。会えて光栄だとも…」  
「薄っぺらい挨拶は良い。俺をとっ捕まえにきたんだろ？ 早くしろよ。」

無意味な社交辞令：…まあ、そんなことわかっている両者。空気が張り詰めていく中、花組たちも追いつき神山が真っ先に声をあげた。

「星児！ ランスロットさん、止めてくれ！ 貴方は星児を助けるために日本まで来たんじゃないのか!? シャオロンも頼む！ 全部、その男の陰謀なんだ!!」

「言いがかりはよしてくれたまえ、帝国華撃団・花組の隊長さん。私は何もしていない。」

しかし、必死の訴えもランスロットやシャオロンも応じない。おまけに、自らは一件に無関係と嘯くプレジデントGに花組全員の怒りの

ボルテージが上がっていく。無論、親であるすみれが胸に抱く感情は憤怒のそれと等しくなり、気取る道化に踏みこもうとするが：『二眼のトイカメラをひっ下げた黒服』が割って入り彼女をたしなめる。

「…（今は下手に動くな。流れに任せろ。）」

小さく忠告すると、すみれの肩を押して下らせた彼。そして、こっそりアナスタシアへとアイコンタクトを送る：それを同じくアイコンタクトで応答する彼女。無言のやり取りを気がついた者はこの場では誰もいない。

さて、すみれは抑えられたものの、黙っていないのは何も花組だけではない。

「待ってください、プレジデントG。」

次にプレジデントGの前へ進み出たのは或人とイズ。彼等もまた星児の不当な処分にいくら部外者とはいえ納得出来るものではなかった。

「君は…」

「飛電インテリジェンスの社長、飛電或人とこっちは秘書のイズ。今は帝国華撃団にお世話になっている身ですが、これでも一応は社長です。」

ライズフォンの名刺を見せて自己紹介。といっても、飛電インテリジェンスのことなど知る由もない彼は首を傾げると、見かねた黒服のひとりがこっそり耳打ち：すると、『ほうっ』と頷いた。

「君が噂の帝国華撃団の特記戦力：いや、仮面ライダーゼロワンか。報告は受けていても。なんでも、帝国華撃団の人手不足を解決する画期的な技術を持ち込んだとか？ 実に興味深い。」



予め存在は耳には入れていたのか。帝劇の中をねっとり舐めるように見回しながら答えるプレジデントG：彼の瞳には帝劇の中で働くヒューマギアたちが目に映っていた。嫌悪感を覚えるが、今は呑み込んで堪える。

「星児くんを捕らえるなら令状は？ 今回の一件はあなたの部下の暴走が原因だと聞いていますか？」

「その不確かな情報の出処は何処かね？ 少なくとも、貴重なW. O. L. F. の財産である霊子戦闘機を2機も破壊し、あまつさえロンドン華撃団を脱走・国外逃亡をした物証ならあるのだが？ 令状もここにある。」

「…っ！」

誰のせいだと…っ！ 喉から言葉が飛び出しかけた帝国華撃団の面々。そもそも、発端はそちら側だろうに！

しかし、星児は噛みつくどころか逆に庇う或人を止める。

「社長、俺は構わねえ。これ以上、騒ぎを大きくしたら公演にだって影響が出る。これ以上、迷惑をかけられねえさ。」

悟っていた。いずれは来るはずの問題が今、飛んできてしまったのならせめて燃え広がる火はなるべく小さくしなくては。ここで帝国華撃団再始動の幕開けを散々迷惑をかけた自らの手で断つわけにはいかない。

神山や初穂も喰ってかかろうとするが、タケシとハヤトが掴んで止める。ここで直接問題をプレジデントGと起こせば公演どころの話ではない…だが、このままでは、星児に待つのは間違いなく悲惨な末路だろう。

歯噛みする物語たちを尻目にプレジデントGは無慈悲に命令を下す。

「さあ、下手人を捕えろ。」

「仰せのとおりに。」

すると、数人の黒服たちが口角を吊り上げ迫っていき連行していく……。その刹那、彼はふう……と溜息をつきながら愛しげに天井を見上げて小さく呟いた。

「……（じゃあな、俺の夢。）」

「その手を離さない。」

微かな言葉……しかし、それを耳にした瞬間に黒服の壁から踏み出した者がいた。進行方向に割って入り、木刀を構える真っ直ぐな少女の瞳……さくらが行手を遮る。

「その人は私たちの仲間……そして、すみれ支配人の御子息です。アナタたちが触れて良い人じゃありません！」

「なんだ貴様は?!」

「どうやら、道連れを希望らしいな。正規の隊員から逮捕者が出れば帝国華撃団も終わりだ。」

行かせてなるものかと立ちはだかった彼女だが、相手の黒服たちは面食らいながらもかえって好都合とさくらへ手を伸ばす。彼女が捕まれば、もう舞台どころの話ではない。星兎が身を張った意味もなくなってしまう。

「俺のことはどうだって良い！だから…！」

「どうだってよくはありません。歩む道は違い、ぶつかり合いましたが目指す夢が同じで、今度は共に私たちと歩むことを望むなら…あなたも仲間です。仲間を卑劣な悪党に渡すわけにはいきません！」

しかし、さくらは譲らない。きつと、ここで彼を見送ってしまったら例え帝国華撃団の再興や自分の追う夢が叶っても胸を張って前を向けるか？いや、断じてNOだ。かつて夢を抱いた幼い自分も、夢に向かうこれからの自分も、今の自身を怒り叱責するはずだ。為すべきことは、傷つきながらも伸ばした手を振り払うことではない…掴むべきなのだから。

「…お、おねえちゃん…！」

「勘違いしないで。許すとは言ってません…でも、誠兄さんと初穂…それに支配人に免じてチャンスを与えます。だから、今度は裏切らないで。」

(あれ、今、星児くん…さくらちゃんの…？)

こんな勢いであるが仲直り…いや、待て。或人の耳に中々聞き捨てならないことが飛び込んできたぞ？一瞬、聞き間違いかと思ったがさくらも否定しない。

さて、無論、あまつさえ悪党呼ばわりされた黒服たちは業を煮やし『ええい、ゴチャゴチャと！』と2人を拘束せんと…

「何をしている？私は下手人を捕えろといったのだ。ミス・すみれの御子息から手を離せ。」

「…は？」

何？ 突然のプレゼデントGの発言に帝国華撃団たちは愚か、黒服

たちも戸惑った顔をしている。彼は星児を捕えにきたのではないのか…？

その時、星児を掴みかかった黒服の喉元に添えられる剣先。視線をずらせば先にはうって代わってネットリとした笑みで柄を握るランスロットがそこに。もうひとりの片割れも、アーサーが組み敷き拘束しており、残りの黒服たちも一瞬で上海華撃団たちが素早く鉄拳でダウンさせる。

馬鹿な…どうなっているのだ？ 周囲が呑み込めない中、プレジデントGはすみれの元へ歩み寄って…なんと頭を下げた。

「このような形で迷惑を重ねる形になってしまい、申し訳ない。今回、私は貴方に謝罪をしに来たのです。」

「…謝罪？」

「ええ。私の部下が起こした貴方の御息への無礼・暴挙についてお詫びに参りました。全ては末端までの管理を怠った私の責任…この通りです。」

すみれは…いや、一番この展開に驚愕していたのは星児だった。今まで憎しみの象徴ともいえる存在の男が…仮にも組織のトップが頭を下げてきたのだ。…しかも、納得が躊躇うほど不気味なほど素直に。

勿論、こんな流れを呑める黒服たちではなく悲鳴のように上司に助けと詳細を乞う。

「プレジデントG!?!これは一体、どういうことですか!?!」

「黙れ、痴れ者ども。私の与えられた権限を良いことに散々好き勝手やってくれたな、エージェントB！エージェントO！今まで貴様らは吊るんで私の目を盗みながらやっていたらしいが…それもここまでだ。証拠が上がった。」

すると、ユイがボイスレコーダーとおぼしき機械を取り出してス

イッチを押す…やがて、流れ出した音声に黒服たちは顔面を蒼白に。花組たちは怒りで赤く染めていく…

「はは、帝国華撃団も終わりだなこれで。いや、神崎すみれもか…まあ、あの古ぼけた帝国華撃団の看板と共に沈むのなら本望だろう。」  
「しかし、今回のことやっぱり、やばくねえか？　いくら点数稼ぎしいからって、俺たちの独断　…いくら、旧勢力が目障りだからって今回はだいたい強引過ぎるぜ。」

「なあに、あのお方は我々を信じておられる。だからこそ、今回の踏み込みに御自ら出陣して我等の同行も許可した。全てが終わった暁には帝国華撃団の髑髏で祝い酒が飲めるだろうな。ハハハハハ!!」  
「ま、あのガキは元より気にいらなかったしな。何が忘れ形見だ…チヤホヤされやがって、七光如きが。ま、自業自得と思えばその通りか！　大人しく、引っ込んでればこうならなかったんだろうしな！」

【帝国華撃団の最後に…！】

【俺たちの未来に…乾杯!!】

「あ…あ…あ…」

お酒って、怖いねー？と、慄く黒服を見下すユイ。実はこれ、前日の神龍軒で録音された彼等の声…完全に星児の襲撃を裏付けるものである。調子に乗った酒の席、まさか聞き耳をたてる者などいないと慢心した間抜けのやりとりの一部始終だ。

もう言い逃れは出来ない…追い詰められた黒服は尚もプレジデントGに縋りつこうと必死に泣き叫ぶ。

「プレジデントG！　私たちはあなたを思って…！」

「くどい。お前たちを今日付けでエージェントの任務から解く。処分はロンドン華撃団に一任する！」

そ、そんな!? 無慈悲に手は振りはられ、エージェントOとエージェントBたちはランスロットと上海華撃団：部外者だった黒服に拘束・連行されていく。その間際、負け犬の遠吠えらしき一言を遺して…

「…：…そうか！ 全て貴様の仕業か、アナスタシア・パルマ！」  
「…」

当の彼女はわざとらしく視線を反らした。

## そして、星は輝くべき場所へ。 IV

最初、星児の事件を聞いたアナスタシアは無関心とは言ったものの、内心は違和感を覚えたのは事実だ。プレジデントGは自身のパトロンであり、彼の手腕や性格等々もよく知っていた。味方には手厚く、敵になるなら大義に則り容赦なく…それが彼のやり方。だからこそ、こんな陰湿で直接的に暴力を訴えるなど真逆…というわけで、独自に連絡をとってみたところ案の定『は…？』と全くロンドンの話など寝耳に水という有様。

そして、ロンドンへ調査へ乗り出したプレジデントGは顔を手で覆った。自分が華撃団大戦の準備に追われている間に出てくるイギリスの部下たちの腐敗具合。セクハラ、パワハラ、モラハラ、プレジデントGの名前を騙った権力乱用等々…出るわ出るわ、それらを仲間一丸となって巧妙に上司の耳に届かないよう隠していたのだから流石に呆れるしかなかった。星児の一件もロンドン華撃団などの訴えを密かに握り潰していたことも明らかになり、もうこの点にしては『私も求心力が落ちたものだな。』と嘆くほど…その統率力を全うに職場に活かしてほしかったが、過ぎた力を持てば結局、人間は持て余すということか…

「…今回、御子息に下された全ての処分は無効なものとする。正規隊員への登用資格剥奪も含めだ。加え、破損した分と配備予定の機体の補填に、帝国華撃団への追加の特別融資も行う。…ということ、穏便に済ませたいのだがレディ？」

支配人室。晴れて星児の濡れ衣は全て引き剥がされ、更には帝国華撃団への支援といった話も持ちかけられる…まあ、これがどんな意味合いを持つかはすみれは愚かこの場にいる全員が露骨過ぎて嫌悪感を示したが。

「…それで、今回の件の口封じをというわけですか？」

「示談と言ってほしいがね。まあ…どうせ封じられるなら、甘味を口にねじ込まれたほうがいいだろう？ それとも、私を相手どって訴訟でも起こすか？ 華撃団大戦が近い上に、今の君達にとってはそれも現実的ではないだろう。」

「…っ！」

口封じと否定はしない。それに、彼の言い分も言い返せないのも事実… 帝国華撃団の台所事情は良くない上に或人のヒューマギアにより一時的にしのいでいるとはいえ、慢性的な人手不足もある。華撃団としての活動もさくらの無限の配備も遅延しているのも実情の上、整備関連は尚も令士の負担が大きい。支援を受けれるのは願ってもない話だが… 仮にこれらを蹴って、プレジデントGを法廷の場で殴り合う構えをするとしたら？ ただでさえ、割ける資金と人員も時間も惜しいのに更にこれらを削らなければならなくなり、帝国華撃団復活を世界的にアピール出来るであろう華撃団大戦にもお互いに影を落とすことになるのは確実。

だから、破格の条件で示談させてお互いの利益のためにも今回の件はこれ以上は大きくするなということだろう… ただ、不遜な態度は相変わらずなので苛立ちを覚えた或人は問う…

「貴方、本当に責任をとる気があるんですか？」

「気持ちなどという曖昧な感情より、時には物で解決するのも立派な交渉手段だよ若い社長くん。仮にも経営者なら、それくらい心得ておくべきではないかね？」

納得はいかない… しかし、争えばお互いにデメリットが大きい上に帝国華撃団側がが悪い。金持ち父さんと貧乏父さんの殴り合いなど結果が見えている上にどちらも得をしない。

…ならば



「その条件、俺は異論は無い。むしろ、願ったり叶ったりだ。」

「星児!？」

星児はあえてそれを呑むことを良しとした。己の屈辱を晴らすのではなく、売り払うことに決めたのだ。しかし、ただ丸呑みはしないのが彼…

「ひとつ条件を追加しろ。アナスタシア・パルマを帝国華撃団にあと1年…いや、2年は置いてもらおう。そして、花組のメンバーへの本格的な演技指導も含めてな。」

ほう?とリアクションをとったプレジデントGに対して、『は?』と何故、自分を引き合いにされたと戸惑うアナスタシア…一応、恩人と言っても他言ではないのにこの扱い。苦言を呈そうとしたが、言葉が紡がれるよりはやく話は進んでいってしまう。

「ほう?君自身の待遇については何かないのかね?可能ならば、こちらの華撃団の隊長くらい私の一声で席のひとつやふたつ…」

「余計なお世話だ。そんなことで、隊長になった人間に誰がついていくものかよ。それに、俺の夢は帝国華撃団を立て直すこと…隊長になるのも手段のひとつに過ぎない。そして、今は帝国華撃団に隊長はいる。俺が隊長になる必要は…無い。」

その時、星児に微かな諦めの色が仄かに浮かんでいたような気がした。

一方、プレジデントGは逆に喜々と口角を吊り上げ、星児の肩に手を置く。

「素晴らしい、ご立派な御子息だ!アナスタシアの件は可能な限り調整しよう。さて…レディ・すみれ、彼も納得していることだし…ここで落としどころにしようではないか?」

「…っ」

被害者本人が納得するなら、これ以上は発展の余地もない。母親として、情けなさを感じながらもすみれは頷き…プレジデントGは満足げに微笑みを浮かべる。…こうして、星児のロンドン事件は幕を引いていく。

…その様子を二眼レフカメラで写真におさめる黒服。彼は何か思案しながらも、特に今は語ることなく気配を殺す…『通りすがり』の出番はまだ先だと。



…それから、話が纏まりプレジデントGは引き上げていった。

後味が悪いが、何はともあれ解決である。一段落したと食堂にて、一息つく星児は或人と向かい合う形でテーブルに座っていた。満足げな星児と対照的に哀しげな表情の或人…無論、理由は先のプレジデントGとのやりとりだ。

「…本当に良かったの？」

「ああ。でなきや、本当に俺がロンドンに行った意味が無くなる…むしろ、俺の屈辱を売って帝国華撃団の役にたつなら本望さ。」

彼は確かに帝国華撃団のために走ってきたのは事実…でも、こんな形になることは誰も望んでいない。すみれだって、こんなことのためにロンドンに行かせたわけではないはずだ。ある意味、2度目の侮辱といっても差し支えないような示談案…これを甘んじて受けたのに

も理由がある。

「今から手続きとなったら、華撃団大戦は帝国華撃団にしろロンドンに戻るにしろ、もう出れないだろうからな。俺に出来ることはこれくらいしかない。」

今回、星児の配属はどうなるかはプレジデントGは『追って伝えよう』と濁して去ってしまった：加え、隊員の正規登録や機体の配備となれば時間的に間近に迫った華撃団大戦に参加するのは絶望的と言っても良い。帝国華撃団の命運をかけた今回、もう自分が役立てることなど大してないだろう…と。

或人はやるせない気持ちになるが、せめてこれだけは伝えておこうと向きなおる。

「星児くん、どんなに辛くても自分を投げやりにしたら駄目だ。自分を大切に出来ない人間は結局、誰かを傷つける。辛い時は誰かに『助けて』って言って良いんだよ?」

今はもう独りぼっちじゃない：母がいる、友がいる、仲間がいる、帰れる場所がある。傷ついた時に寄り添える人も拠り所もあるのだから、己を見捨てないでほしい。

…しかし、返ってきたのは冷たい答

「……今更、甘えられるかよ。」

「何をほざいているんですか!」

「お、おふくろ!?! いででででで!!!?」

その時、星児の背後から羽交い締めしたのはすみれだった。着物の着崩れすら構わず、バタバタとする星児をもともせず抑えつけている。これには或人も呆氣をとられていた。

「全く！散々、心配かけて!! 自分を粗末にして!! これじゃ、あの人たちにあわせる顔がありませんわ!!!」

「ご、ごごごめん、おふくろ！ 謝るから！謝るから！ もうギブギブ!!?」

ギブアップ降伏により、開放された星児はゲホゲホと咳をしながらも涙目で母親を見上げた：やはり、息子の勝手な行動にご立腹な様子。やはり、どのような悲願であれ愛子の犠牲に成り立つなど許容するわけもない。

「或人さん、またお騒がせして申し訳して申し訳ありませんわ。」

「いえ。それよりも、プレジデントGの話は…」

「ええ…」

あの男からの提案はひとつを除いて、つつ跳ねさせてもらいましたわ！」

「は？ はあああああ?!?!?」

プレジデントGからの示談案、なんとこれを受けなかったのだという。まあ、そうなるだろうなと薄々感じていた或人だったが、納得出来ないのは星児である。裏取引なれど、帝国華撃団再建に力強いテコ

入れになるのは間違いないというのに…!?

「おふくろ、なんだってそんなこと!？」

「元より、W・O・L・F. からの支援は宛にしています。この話が無ければ今まで通りに再建計画を進めるだけですわ。…それに、花組の皆にあなたの犠牲で成り立つ舞台に立たせるわけにはいきません。」

「…そ、それは。でも！」

もうこれ以外、出来ることが…と言いかけた口を指先で止める。

「落ち着きなさい。舞台に立つことや霊子戦闘機に乗ること以外にも貴方に出来ることはあるはず。あなたは他ならない、この大帝国内で育ったんですもの。それは、あなた自身が一番よく解っているでしょう?」

「…」

帝国華撃団も歌劇団も花組だけで成り立っているわけではない…カオルたち裏方の風組や令士のような整備班や更に多くの人々によつて成り立つ。だが、それは決して万全とは言えないのだ…花組にも言えることだが、経験・人手どちらも足りない。だからこそ、何処かで誰かが無理をしなければならぬのは事実だし、地盤固めのために日々すみれ自身も根回しなど交渉にまわるなどしている。決して、必要なのは戦に振るう刃と舞台に舞う華だけではないのだ…

解っている。解っている…だけど

「…わりい、少し頭を冷やしてくる。」

簡単には受け入れられなかった。気持ちを消化しきれない星児は去っていく…でも、今度こそは皆と共に歩んでいけるとその背中を母親として、先に時代を担った者としてすみれは信じて見送る。

さて、残った或人…彼には気になることがあった。

「すみれさん、呑んだひとつの条件っていうのは…」

「アナスタシアさんの件ですわ。彼女は正確にはプレジデントG側の人間ですから、実のところわたくしや神山くんには彼女の権利を左右する力はとても弱いのです。だから、万一、彼女が『嫌だ』と一声をあげただけでこの帝国華撃団を去ることが出来る。勿論、彼女がそんな無責任な人間でないことは承知ですが…」

なるほど。今、歌劇団の要はアナスタシアだ。彼女が突然、気まぐれに去られでもしたら歌劇団も連鎖して帝国華撃団も崩壊するだろう。いくら、世界的トップスタアとはいえそこまで自由なのは驚きだが、だからこそ星児は彼女を縛りつける条件を出したのだろう。演技指導もさくらたちに万一、彼女が離れても大丈夫な地力をつけさせるためとなれば納得…

ただ……

「……今回の話、アナスタシアさんはあまり納得していないようですの。」

「そう簡単に話は進まない。」

そして、星は輝くべき場所へ。V

…よくもまあ、やってくれたものだ。

アナスタシアの機嫌はいつ以来かぶりに最悪だった。結局、プレジデントGに所属期間と指導の話は強引に吞まされてしまった彼女は『元々の条件と違うー』拒否を示したものの認められずじまい。

取りあえず、自室に戻ってきたものの大きい溜息が洩れる。

(…嫌なら、とにかく仕事をするしかないか。)

駄々をこねても仕方ない。為すべきことをしなくては…花組の隊員としても、『もうひとつの役割』としても。

(取りあえず、持ち出してきた資料でも目を通してみましようか…あまり、期待は出来ないけども。)

デスクにしまっていた文書を取り出す。昨日、こっそり拝借してきたものだ…『捜し物』の手掛かりになるかは望みが薄い人事関連の資料だが。全く、文書管理室の近くをヒューマギアが通らなければまだ他に選べたものを。

恩仇の上司の息子といい、異世界社長といい…！不満が募るを自覚しながらもパラパラと資料を捲る。すると、あることに気がついた。

(驚いた…これ、昔の花組の経歴じゃない。真空寺さくらにすみれ支配人…大神前・隊長までの経歴がこんなに。ちよつと興味が沸いてきたわ。)

意図しないで引いたが、まさか昔の花組の情報が載っている資料とは。

任務云々は別にして、個人的な興味がわいてきた。ゆっくり読んで

いる暇はないが、目を通してみることに…そして、あるページが更に彼女の意識を留めた。

『御子神カナタ』？ …昔の花組にいたかしら、こんな人？』

一枚の隊員の資料：写真も傷んで輪郭が無いも同然の写真で顔はわからないが、女性の様子。ただ旧・花組のスタアにそんな名前は聞いたことがないし、資料にも舞台に立った記録すらない。というより、在籍していた期間がかなり短いようで見習い隊員だったらしい…。

文字を追っていくと、最後に残っていた記述は…

――太正■年 自刃ニヨル自殺。コレヲモツテ、帝国華撃団ヲ除籍処分。

(…自殺？まさか。)

先の話での記憶。星児の母親が自殺したのをキツカケに、星児は花組に引き取られたのだというのなら…条件のひとつは当てはまる。もしかして、彼の実の母親という可能性が出てくる。ただ、気になるのは…

(でも、父親の記載もない… 出産の記録も無い？ それ以前に色々な情報が意図的に抜かれている？ どういうこと…)

前後の資料と照らしあわせても、まるで肝心なところを知られないように情報が欠けている。奇妙なことだ。

よくよく考えれば、何故にすみれやハヤトはあえて彼女の名前を出さずに『花組の関係者』と伏せたのか…何処となく歪な感覚がある。



(御子神、捜し物と関係あるかはわからないけど…覚えておこうかしら。)

トントン

「アナスタシア、いるか？神山だ。」

「私もいます！」

「！」

突然のノック、神山にさくらか…！

『少し待って頂戴。』と時間を稼ぎつつ書類を落ち着いて、机の引き出しに滑り込ませる。そして、平静を装ってふたりを招き入れた…

「何か用事かしら、キャプテン？」

「あのさ、さっきの花組の演技指導の話についてなんだが…」

…ま、やっぱりその話よね。

「悪いけど、演技指導に関して最初の最低限のラインを譲るつもりはないわ。確かに、星児の問題は私も思うところがあつたから手を回したけど、それとこれは話が別。諦めて頂戴。」

「考える余地すらないのか…？」

「……………ええ。私は自分の演技に集中したいの。そのための時間をこれ以上、削る気は無いわ。」

冷たい奴と思われただろう…別に慣れている。でも、自分のポリシーを曲げるつもりは無い。例え、スポットライトの外側で陰口を叩かれようが後ろ指さされようがどうだって良い…最高の演技が出来る

て観客が満足さえすれば

「…やっぱり、私たちじゃ不甲斐ないですか？」

でも、さくらは引き下がらない。引かれた冷たい一線を破らんと食い下がる。

「わかっています。演技も何もかもがアナスタシアさんには及びません。でも、だからこそ精一杯の努力をして、未来の自分や帝劇を支えてきてくれた人たちに胸を張れるようにしたいんです！」

…「だから、お願いです！ 私に演技をもっと教えてください！」

「！」

その時、さくらに『誰か』の面影が重なったような気がした…。自分が遠くへ置いてきたはずの記憶の断片が不意に肉迫する。なんとか表情に出さないようこらえたが、胸の奥に漣がたつ…。平静の表情の裏で不意に掻き乱された心を鎮める心掛けるもそう簡単にはいかない。

すると、神山とさくらが異変を察してこちらを覗きこむ。

「アナスタシア…どうした、顔色が悪いぞ？」

「あ、あの…」

「…いや、平気よ。ごめんなさい、少し考えさせて。私もなんでもうまくこなせる程、器用じゃないの。」

その後、神山とさくらは時間を改めようと部屋を出た。残ったアナスタシアはベッドに腰を下ろし頭を抱える……。

ああ、なんてこと…過去に置いてきたものは振り返らないと決めて

生きてきたのにまさか『あの娘』の面影をさくらに重ねてしまうなんて…。あんなふうに自分に演技の教えを乞う娘が現れるなんて夢にも思わなかった。

(……怨んでいるかしら、見捨てた私を。)

虚空に吸われていく疲れたような溜息…。でも、まだ止まれない。目の前に迫る仕事と為すべきことがある。過去を振り返らない…。全てが終わる日まで立ち止まることは許されないのだから。

★  
★  
★  
★  
★

さて：そろそろ、笑いを堪えるのを辞めていいだろう。

帰りの大型リムジンに揺られているプレジデントGは円型に設置されたソファという金持ち特有の専用車にて揺られながら、ボトルを空けた。契機づけの酒だ：馬鹿者どもを処断し、帝国華撃団の実情も把握できた。

ひとりひとりはまさに『ダイヤの原石』と言っても他言ではない資質を秘めている上に、自分のアナスタシアのおかげでその才能が開花しかけている。W・L・O・F. や各華撃団も人材発掘はかなり力を入れて開墾の限りは尽くしたと思ったが、あれだけの人材を見つけてくるとは流石、元トップスターであるすみれの手腕と言うべきか。

…加え、特記戦力へ仮面ライダー

既存の技術のどれにも当てはまらない技術・力を持つ異世界からの来訪者。

報告は受けている…帝国華撃団だけではなく、上海以外にも強豪華撃団たちも皆何かしらの形で囲っていることも。無論、『世界最強の華撃団』にもその系譜の者もいることは確認済み。そして、自分も個人的に囲っている。

総合的な情報を踏まえて、今の帝国華撃団は…

「取るに足らないゴミだな。やはり、かつての栄光は過去のものだ。」

不遜にそう判決を下す。大輪の花を咲かせられると勘違いしている道端の枯れかけの雑草…引っこ抜いてもしつこく生えてくるくらいが取り柄のアレ。

そんな侮辱な判断に、怪訝な顔で相對していた黒服の男。主を前にしながらも脚を組んでつまらなさそうにしていた。

「エージェントD… いや、『門矢 士』とこの場で呼んで良いか。君はどう思う?。」

なんで俺に話振るんだよ? 苛立ちげにしながらエージェントD…門矢士は帽子をテーブルに起きカメラを弄くりまわしながら答える。

「さあな? 俺はアイツら次第だと思うぞ。むしろ、周りを過小評価しすぎなお前のほうが俺は心配なんだが…」

基本、この男は他人を褒めない。素直には滅多に褒めない。

あとお世辞とかは絶対に使わない。

予想外の答がとんできて、若干ながら口角が引きつったプレジデントGだったが、『君のことは正当評価しているつもりなんだがね。』と返した。

まあ、良い。一番重要なことは確認できたのだから。

「さて、吹けば消える塵の山……だが、その中に意外にもこんな砂金が混じっているとは思わなんだ。」

テーブルに並ぶ人事資料……プレジデントGが目をつけていたのは星児のもの。神崎すみれの息子、旧・帝国華撃団の忘れ形見……昔なら七光程度と気にも留ななかったが今日改めて直接会い感じたロンドン華撃団からの信頼に彼自身の霊力。本来、男は低いはずのそれが触れただけで桁違いだと感じられた……

「惜しい…… 実に惜しい…… 埋もれさせてしまうには惜しい星の輝き……」

ねっとりした称賛に士はカメラを弄ぶ手を止める。この男は何かろくでもないことを考えていると……

「ククツ…… やはり、星は輝くべき場所にあるべきだな。」

そして、星は輝くべき場所へ。 VI

「腹筋バアーーン!!」

帝劇公演『ダナンの愛』 公演当日

帝劇前、客引きの中心を担うは腹筋崩壊太郎をはじめとしたヒューマギアたち。或人とイズ：不破もビラを配り呼び込みに徹している。ただ：

「たく、刃の奴は何処いったんだよ！」

不破に関しては唯阿がいないことに不満げである。彼女がいない理由：それは或人が知っていた。

「唯阿さんなら、劇場のほうで手伝いだって。」

『或人社長、こちらもそろそろ準備が：』

「お、もうそんな時間か。それじゃ、ここは任せたよ不破さん！」

そして、或人までもが不破にビラ配りを押しつけて帝劇の中へ。取り残された不破は怒りを爆発させ、そんな様子をもぎりをしていた神山は不安そうに見ていた。あまり叫ぶようなことをされると折角のお客様が逃げてしまうのだが：

(参ったなこれ。)

こんな猫の手も借りたいクソ忙しい時に、星児は何処に行ってしまったのか……

★ ★ ★ ★

ミカサ記念公園…海が眼下に拡がる手すりに寄りかかり黄昏れる星児の姿があった。

本当なら、こんなところにいるべきじゃないのはわかっている。手伝わなくちゃいけないことは沢山ある…だから、今日まで荷物運びから掃除、料理の下ごしらえまで出来る限りのことをやってきた。自分の出来ること探すそのつもりで…

でも、わかってしまう。活き活きと自分の役割を果たそうとする者たちが近くにいると……

(俺のやれることはある… だけど、俺じゃなきゃやれないってことは何ひとつ無い。)

演劇に向かう花組たち、

舞台を支える裏方たちの活気、

宣伝に勤しむ神山

散々やらかしておいて甘ったれたれるのは理解していた…：そうであつても、切なさばかりが募っていく。そして、とうとう耐えきれなくなり帝劇から逃げ出してきたのであつたのである。結局、逃げたことで自己嫌悪に陥ってしまうのだが。

「何だっただらうな。俺がロンドンに行った意味は…」

プレジデントGの示談案もすみれがつっぱねた…：確かに母らしいと言えば母らしい。でも、自分は華撃団大戦には出れないし、資金援助等もなし…：いよいよロンドン華撃団での経験は意味を為さなくなつてしまった。事実上の口封じであつたとはいえ、やるせない思いが胸にこみあげてくる。

…そんな時だった。

「なーにしてるのさ、こんなところで？」

「！」

不意に聞き覚えがある声が後ろから… 振り向けば、ランスロットとアーサーの姿があった。

正直、今は面と向かって会いたい相手ではない…

「公演の準備は手伝わなくて良いの？」

「…」

覗きこんでくる顔が罪悪感を掻き立てる…思わず顔を背けてしまう。笑顔なのが余計に辛い。

すると、見かねたアーサーが口を開く。

「事情は君の母君やウオズから聞いた。君の複雑な事情を理解しつつ後手にまわってしまった僕達にも責任はある。君はあくまで、被害者だ。ランスロットだって許しているしこれ以上引きずることはないだろう？」

「上海の神龍軒食べ放題で手を打とう。」

これ以上、こちらを気にするなという意味合いだろう。ランスロットも条件に関して冗談か本気か定かではないが、水に流す様子…ただ、

「…」

当の星児本人はそう簡単に自身を許せない。どんな理由があろう



とロンドンに迷惑をかけた上に仲間を傷つけた事実は、正気に戻った己自身では許容し難いものだった。だからこそ、このタイミングで謝るべきなのだろうがまだ平静を取り戻せない心ではうまく言葉を紡げない。

…ま、そんな状態だろうと承知のアーサーは言葉を続ける。

「君が燻るのは勝手だ……自分が何者か忘れたのかい？ 帝国華撃団・花組の忘れ形見、神崎すみれの息子。君が前を向いて走り続ける限り、何処であろうと帝国華撃団の名前も共にあることには変わらなない。戦い続けることが、帝国華撃団や母君を支えることになる。そうだろう？ それとも、ロンドンにはもう戻りたくないか？」

「そんなこと……でも……」

「なら、帝都は『今の帝国華撃団』に任せてみたらどうだい？ 他ならない、君の敬愛する母君が選んだ者たちを。」

過る、神山やさくら、初穂ら花組の顔ぶれ……最初こそは情けなさで腹がたち、産まれてはじめて母を本気で疑ったほどだったが、今は違う。新たな力・霊子戦闘機・無限に続き、アナスタシア・パルマを起爆剤として羽化する蝶のサナギのように飛びたとうとしている。公演が成功すれば、間違いなく帝国華撃団復活を世界に告げる狼煙になりうるだろう。その可能性が充分にあるのは側で見てきたからこそわかる。

「帰ろう、ロンドンに。君が誰であつても、仲間であり友だ。」

「ランスロット……」

ランスロットがやさしく微笑む。

そうか、自分が走ってきた全てはゼロになったわけじゃない。なんだ、こんな当たり前のことに気がつかないなんて……ましてや、散々迷惑をかけた仲間に教えられるとは。目頭が熱くなる……

そして、暖かく差し出された手を……

「勝手に話を進められては困るな。」

その時だった。カチャ、カチャ、と音を立てながら近寄ってくる足音に振り向くとそこには3人とも見たことがない仮面ライダーがゆっくりと迫っていた。西洋の甲冑を彷彿させながら、トランプのスペードの意匠をあしらった白い鎧に、ヘラクレスオオカブトを彷彿させる赤い複眼のマスク…

ただ、ベルトのマゼンタのバックルがデザイン的に浮いているような気がするのは気のせいだろうか…？

「何者だ？」

「通りすがりの仮面ライダーだ。まあ、ロンドン華撃団…お前たちに用は無いだがな。」

通りすがりの仮面ライダー…Dブレイド。警戒するランスロットを意に介さず、突然の来訪者が指差したのは星児…どうやら狙いは彼らしい。さらに、Dブレイドはある事実を告げる。

「神崎星児、お前の人事は保留になっている。今の貴様は帝国華撃団はおろかロンドン華撃団ですら無い。残念ながら、ロンドンに行く切

符は無いぞ?」

なんと星児のロンドン華撃団の籍すら無くなっていくというのだ。星児どころか、アーサーも驚かすにはいられない。無論、こんな話を納得出来るわけもなくすかさず噛みつくランスロット。

「出鱈目を言うな! こっちはそんな話を聞いてない!」

「出鱈目じゃない、W・L・O・F. からの決定だ。そして、お前を連れてこいという依頼があつてな。時間も惜しいという話だ: さつさとついてきてもらおうか。」

しかし、お構いなしに星児を連れていこうとするDブレイド: となれば、アーサーとランスロットが立ちはだかるのは必然で2人は刃を抜き放ち切っ先を向ける。渡す気は無い: 強い眼光と共に訴えるが仮面の戦士は怯むどころか逆に余裕の笑みすら浮かべていた。

「フン、やっぱりこうなるか。こっちも最初からそのつもりだったが:」

「誰かは知らないが、W・L・O・F. の人間がそんな臨戦態勢で来るとは思えないな。その不敬な態度も鼻につく: 叩きのめしてから身元確認といこうじゃないか。」

「星児、さがつてろ! コイツはアタシがやる。」

: 謎の仮面ライダー対ロンドン華撃団。その火蓋がきつて落とされた。

誰も、その様子を物陰から窺う人影たちには気が付かずに



同時刻、不穏な雲行きは大帝国劇場でも流れつつあった。

公演はまだ前座なもの、流石に姿を表さない星児に異変を感じた神山は周辺を唯阿と共にさがすが見当たらず焦りを感じていた。一旦、正面玄関で唯阿と合流してみるも…彼女の隣にその姿は無い。

「刃さん、そっちは？」

「駄目だ。影も形も無い。考えたくはないが、また厄介事に巻き込まれたのではないか？」

信じたくはないが…と思う神山だが、現実でその通りのおこりが起こっているとは知る由もない。取りあえず、裏方は令士がいるから何とかなるが、このまま見当たらないまま本番に入れば花組のメンバーやすみれ支配人に心配をかけてしまう。早いところ、見つけなくては……と思っていた矢先

「神山隊長！」

「あざみ？ どうした…？」

シユタツと現れたのはあざみ。天使のような舞台衣装に化粧もしているが、その顔は非常に焦燥が見て取れる。まさか、舞台に異常でもあったのか!?

「はやく来て！ まずいことになってる!!」

そして、引っ張られるまま帝劇の観客席へ…そこで、見たものは

「ハイ、或人じゃくくしないとおおおお!!!」

『今のは……と……をかけた非常にイキなギャグです。』

「解説しないでええ!!!」

誰だ、この社長を前座に立たせたの。

神山の記憶が正しければ、腹筋崩壊太郎が前座を務めるはずだったのに:!? 会場は当初、アナスタシア・パルマ人気で活気づいていたのたのにも関わらず今やお通やムードで静まり返り、喜んでいるのは観客席で笑いを堪えている不破さんくらいである。舞台裏では、クラリスが青ざめ:アナスタシアが無言でピストルのカートリッジ弾を込めだしたため初穂が制止している有様。

酷いなんてものじゃない!すぐさま、無線機で令士に確認をとる。

「おい、令士! これは一体:予定と違うだろ!? なんで社長が:」

「あー、うん、ごめん。イズちゃんはどうしてもって聞かなくて。俺は止めようとしたんだ。でも、押し負けて:」

そういうことか。確かにあの秘書、社長のことになると思様に推しが強い:人が良い令士のことだ、きつと断りきれなかったのだろう。あの微笑みでグイグイこられたら、神山だって耐えられる自信が無い。それはともかく、このままでは折角の観客も帰ってしまいかねない。苦渋の決断を下さねばならない。

「あざみ、ちよつと耳をかしてくれ。ゴニヨゴニヨ:」

「…何？ え…本気？」

「やるしかない。このままだと、お客さんも帰られちゃ今までの苦労が水の泡だ。頼む。」

あざみは若干、戸惑ったがすぐに背に腹は変えられぬと現れた時のようにシユタツと消えた。それから、数十秒後…

「或人じゃああ…ああああああああああああ!!!?」

突如、開いた床の扉に或人とイズは吸い込まれて消えていった。直後、天井から腹筋崩壊太郎が降ってきて激しく腹筋を炸裂させる。

「腹筋バーン!!バンバンバン!!!いつもより、多目に腹筋崩壊しておりますーす！」

途端、うつて代わって笑いに包まれる劇場。或人には悪いが、これも商売…しかも、帝国華撃団の命運がかかっているのだ。令和の一号よ、卑怯とは言うまいな？（蘆名） 怨むなら、自分のギャグセンスを恨んでくれ。

そして、前座が終わり…星児がいまま、花組の晴れ舞台『ダナの愛』の幕があがろうとしていた。

そして、星は輝くべき場所へ。VI

仮面ライダーブレイド…いや、厳密にアークサーとランスロットに立ちはだかるこのライダーはブレイド本人ではないのだが、能力はオリジナルと比較して遜色ない。そう、純粋な剣技からアンデッドを封印したラウズカードに由来する特殊能力・強化形態に至る力まで…。

今、Dブレイドはスペードが刻印された青と金色の大剣・キングラウザーを振り回してロンドン華撃団主力であるアークサーとランスロットに大立ち回りを演じている。後者のふたりは生身であるが攻勢で、Dブレイドは繰り出さる剣撃を弾いたりいなしたりする防戦ばかり…に見えていたが、焦燥が見えはじめたのはロンドン側。くどいが生身…されど、一般人どころか下手な華撃団隊員なんぞ足先にも及ばない最高峰の一角にあたる彼・彼女らが束になってかかっても相手にろくに一太刀すら与えられていない。ランスロットが背後をとつても避けられ、アークサーがフォローなんて事態も度々ありロンドン側はおもしろくない戦いを強いられている。

「なんだ、ロンドンの騎士とやらも大したことないな。円卓だなんだ抜かすなら、剣からビームでも撃ってみろよ。」

「ッ！ 我等を愚弄するか!!」

Dブレイドは剣を交え組みつくアークサーを挑発する。そこへ、アークサーを飛び越えて『はああ!』と脳天を狙うランスロットが影を落とすが、アークサーを蹴飛ばして間合いをとられ空振ってしまう。連携が崩れた致命的な隙を逃さず、腰のカードケース型アイテム・ライドブツカーからカードを取り出すDブレイド。

「騎士道精神らしく、フェアにいかうじゃないか?」

【 ATTACK RIDE…GEMINI 】

それをマゼンタのバックルに装填すれば、何とDブレイドは2人に分裂。片方がライドブツカーをソードモードにして刃を展開し、もう片方はキングラウザーの他にブレイドの基本武装である剣・ブレイラウザーとで二刀流の構えをとった。まさに、『双子』のような分身に、アーサーとランスロットも驚かずにはいられないが問答無用でDブレイドは牙を？く！

「さあ、いくぞ。」

「！」

直ぐに敵の真意を理解したアーサーだったがもう遅い。勢いままに迫った敵に押し負け、ランスロットと分断される。2対1から、1対1・1対1へ…いくら実力者とはいえ生身の人間には中々、酷な展開だ。せめて、霊子戦闘機さえあれば話は別だが無いものねだりは無意味。二刀流のほうはランスロットが…、ライドブツカーのほうはアーサーが相手となる。

不利に傾きつつある戦局…星児も戦わねばとフォースライザーを構える…も…

—— 良いかい、その力は危険だ。使えば使うだけ、君を蝕むだろう。最悪の時以外は絶対に使っちゃ駄目だ。

「…っ」

脳裏を過るタケシの警告。実際、001に変身した時の暴走した状態は覚えている…負の感情や全身に渡る激痛や狂う思考など。思い出しただけでも身震いするほど恐怖がわき出るおぞましい感覚が、フォースライザーを握る手を硬直させる。

すると、Dブレイドはアーサーと組みあいながらも星児を挑発する。



「どうした？ 変身しないのか？」

「君は戦わなくて良い！ ウォズとガヴェイン卿を呼んでくるんだ！」

変身を促すDブレイドに対し、応援を連れてくるよう叫ぶアーサー。実際、生身で仮面ライダーを相手し続けるより、同じ仮面ライダーを呼んできたほうが遥かにマシだろう。悔しいが、今はそれが最善だろうと戦場から駆け出す星児…しかし、敵もそう甘くはない。

「勝手に動くな。」

「ATTACK RIDE…THUNDER」

「ぐあぁっ!!？」

逃さない。Dブレイドが続けてカードを装填すると、稲妻が星児の横を掠めて炸裂。そのものの直撃は避けたものの爆発と放電を受けたため、地面に投げ出されて転がった上に感電して身体が麻痺してしまふ。これで逃げる手段も応援も呼ぶ手段も無くなってしまった。こうなっては長期戦は不利に傾く一方である。

仕方ない…！ランスロットは苦渋の決断を下す…！

「アーサー…！」

「あぁ…！」

Dブレイドの剣裁をくぐり抜け、並び立つ騎士ふたり。双剣を掲げるランスロットに対し、居合に似た低い構えをとるアーサー…両者の剣に霊力が激流が如く迸りその奥義を放たんと唸りをあげ、振り抜かれると同時に技を解き放つ！

「グラントツ!! ハリケエーン!!!」  
「エクストツ、カリバアーンツツ!!!」

ランスロットの呑み込む全てを粉碎する双子の竜巻『グラントハリケーン』にアーサーの邪悪を討ち祓う輝きの斬撃『エクスカリバー』。これが同時に放たれば、生身とはいえそこらの魔性などひとたまりもないふたつの技は容易くミカサ公園を抉り抜き、Dブレイドを塵芥にせんと迫る…ツ! ああ、されど…

【 F o u r c a r d 】

……本当に今回ばかりは相手が悪すぎた。

「フンツッ!」

「!?!」

次の瞬間、Dブレイドがキンググラウザーを振りぬくとギョオオ!!と音をたて騎士の奥義を上回る黄金の斬撃が、グラントハリケーンとエクスカリバーを捻じ伏せその衝撃波を打ち返す! まさか自分たちの最大の技が簡単にカウンターをされるとは思わなかったランスロットは公園の手すりに叩きつけられ、アーサーも吹き飛ばされながらも受け身をとりながら立ち直り口に溜まる血を『ブツ』と吐き捨てる。  
さて、どうしたものか…

「くっ…まさか、ここまで手強いとは。少なくとも、ウオズと同等…いいや、それ以上か…」

アーサーの感覚でこの未知の仮面ライダーは彼自身の知るウオズや2号オルタより遥かに強い。無論、仮面ライダーの相手に生身なんぞNGなのは既に身を持って理解はしていたが…ランスロットと組んでまでここまで歯がたたないのは予想外。流石に焦りを覚えずに

はいられない。

対し、Dブレイドは落胆の声を洩らす…

「この程度で世界2位か。…弱過ぎる。」

一番でなくとも、それなりの強さは期待していたのがっかりだ。まあ、本来の目的はこちらではない。分身を解除してキンググラウザーを背中に担ぐと、ゆっくり傷つく騎士たちへ迫っていく悪魔の如き仮面…

「くそつたれえ…!! ……っ!?!」

こんな時に、何故自分は立てないのか。未だに痺れと情けなさでもかく星児の手に転がっていたフォースライザーが握られる。ふつとばされた際に手放してしまったと思ったが偶然…? いや、それにしてもまた掌に戻れると分かっていたような都合の良い位置に鎮座している。

余裕があつたら不気味がるところだが、あいにく様そんな暇も何も無い! このまま、アーサーとランスロットが颯られる様を黙って見ているわけにはいかないのだ!

「おおおおおおお!!! やるしかねえ!!」

「フォースライザー!!」

意を決し、警告をかなぐり捨てて身につけた禁忌の手段。既にライジングホッパー・キーとセットで、バチチチチ!! とドス黒く放電して装着者が苦悶をあげるほど苦しめるが、それでも、キーをこじ開けるためのハンドルに手を伸ばす…

「…ぐうっ、うあがああああアアアアアアア!! 変身ツ!!」

「フオースライズ！ ライジング・ホッパー！！ Break  
Down。」

肉、神経、骨、全てがズタズタになりそうな激痛に耐えながら制御をなんとか保ち、湧き出る黒い蝗の群れをDブレイドに差し向け牽制しながらも何とか001に変身。腹の底から湧き上がる衝動と怒りに任せ天へと雄叫びをあげると、敵へと向かい跳びかかったのだ。

★  
★  
★  
★  
★

……闇の中で微睡む微笑み。

廃工場のジャンク置き場。大量の廃車が積み上げられた中のひとつに彼女：夜叉は後部座席に寝転びながら腹のを擦る。かつて、自分はこの命を宿した：もうここには居ないけど、愛しい人たちの子がここにいた。

そして、今も繋がっている……見えなくても、私のはらわたから続く臍帯は尚も断ち切れることなく：愛子の脈動を伝えてくれる。

「ああ……シンジロウ……感じますよ。強くなったのですね……母が知らぬ間に。もうすぐ……もうすぐ会えますよ。」

猛禽のゼツメライズキーを掌で弄びながら、いずれ来るであろう我が子を抱きしめる日を夢見る女。文字通りの魔性なれど胸に秘めるは人の親らしい愛情なのかそれとも……



そして、星は輝くべき場所へ。 VII

「…がっ!？」

起死回生をかけた001への変身。しかし、所詮は緊急時の間に合わせの力が届くわけもなく、一方的にDブレイドになぶられる一方だった。アーサーやランスロットと違い、生身ではないのなら大して気を遣う必要は無いとキンググラウザーをブンブンと振りかざし、その度に001のボディから火花が散る。遂には強力な刺突が腹に撃ち込まれ、地面に転がってしまう。

「どうした、そんなもんか？」

「くっ!」

しかし、追撃の一太刀を跳んでなんとかかわし体勢をたてなおす。やられてばかりではいられない。

「この野郎ツツ!!」

地面を踏み砕き、ジャンプからDブレイドを肉迫。そこから、マシンガンのような拳のラッシュを放つ001…対し、Dブレイドはキンググラウザーを盾に後退りしながらも耐え続け、不敵に笑う。

「やれば出来るじゃないか。」

キンググラウザーを手放し、ラッシュから離脱。ダメ押しでブレイラウザーも投げつけて怯ませると新たにカードをバツクルに装填…

【 KAMEN RIDE : KABUTO 】

【 CHANGE BEETLE 】

「何っ!?!」

その姿は紅いヒイロカネの装甲につつまれ、バックル以外全く別のものへと変化する。モチーフは日本のカブトムシ、スラツとしたシンプルな紅い鎧に水色の複眼：Dカブト・ライダーフォーム。軽い身のこなしにカウンター主体の戦法を得意とし、何よりその最大の特徴は…

「ATTACK RIDE：CLOCK UP」

「!? …ぐおおおおおあああああああ!!!?!」

クロックアップ：人が生身では至らぬ加速。他者から見れば目に映すことすら叶わない未知のスピード、使う側からすれば全てがスローの世界になる届かぬ者を文字通りに置き去りにしていく能力。瞬間、Dカブトが視界から溶けたと思うや001を四方八方、縦横無尽に攻撃が襲う!001もなんとか追おうとするがこちらは素手で動体視力な追いつかない…!耐えて反撃を窺おうにも身体のうちこちから衝撃が撃ち込まれ、火花が絶えず苦悶の声が洩れる。

その時、見かねたランスロットが叫ぶ!

「星児! 集中するんだ!!」

同時に自らの愛剣の片割れも投げ渡し、これをキャッチする001。そうだ、なまじ目で追おうとするから捉えられないのなら、他の五感を使えばいい。息を吸って、気分をおちつかせながら聴覚、触覚とあらゆる感覚器官を研ぎ澄ます…自分が敵なら、最後に与えられたダメージ箇所が続いて何処を狙う?

「…(姐さんの言葉を思い出せ。斬るべきものを見定めろ……)」

右か…？ 左か…？ …それとも

「！ そこっ！！」

否、正面ツ！！ ギヤヤン！と音が響くと目の前にライドブツカーを構えたDカブトが現れる。交わる刃、ついに喰らいついた敵の足許：しかし、相手は余裕を崩さない。

「ほう？ クロックアップを見切るとはな…」

「伊達に花組の忘れ形見じゃねえ！ インチキは終わりだこの野郎ツ！」

いざ、反撃…

「フツ、合格だ。」

「FINAL ATTACK RIDE… K A K A K A K  
ABUTO  
「RIDER KICK」

「ぐはっ…」

否、無慈悲。ただの一発すら返すことかなわず、Dカブトの間合いをとられ回転をかけたライダーキックが001の腹部に直撃する。さながら、サッカーのペナルティキックよろしくぶっ飛ばされ彼は待ち構えていた銀色のオーロラにシュートされる。その際、フォースライザーがキーがハマったまま外れてDカブトの手にポンツとおさまった。



星児を呑み込んだオーロラはあっという間に消え、Dカブトは満足したようにバツクルに手をかけると仮面ライダーの姿はブレるように解け青年『門矢 士』の姿へと戻る。これで自分のやるべきことはひとまず終わり。立ち去ろうとするが、『待て！』と満身創痍のランスロットが止める。

「貴様、何者だ！ 星児を何処へやった!？」

「あのボウズは無事だ。いずれ会えるだろうさ…華撃団大戦とやらでな。」

なんだと…？星児はどう足掻いても華撃団大戦には出られないはず。その疑問に答えるより先に、『さて、俺の役割はここまでだ。』と呟くなり握っていたフォー斯拉イザーを力を込めて破壊。ショートして潰れた鉄塊になると、ランスロットの前に投げ捨てて去っていく。追おうとする彼女たちだったが、受けたダメージが大きすぎて身体は言うことをきかず…悔しさに唸るしかなかった。



「いたたた… あんなに怒らなくても…」

『申し訳ありません、或人社長。私のサポートがいたらず…』

花組からきつくい折檻（特にアナスタシア）を受けた或人とイズ。腹筋崩壊太郎のおかげで何とか持ち直したものの、やっぱり許されるわけもなかった。イズは自らのサポートがうまくいかなかったからと申し訳なさげにしていたが、同行していた唯阿は『それ以前の問題

…』と言いかけて、あえて言うまいと口を噤む。取りあえず、神山の様子を見にいこうと正面フロアまで来た… ん？ 来客か？

「やっぱり、間に合わなかったじゃねえか!? どうすんだよ、戦鬼!! このままでとまたあのチンチクリンに嫌味言われっぞ!」

「落ち着きなさいよ、筋肉バカ。あのお、無茶は承知なんですけどどうかここは多目にみては…」

「いや、公演はもうはじまっていますし。流石に途中入場は他のお客様に迷惑ですから。」

謎の青年ふたり組を対応する神山。煩い片方は茶髪で竜のジャケットを着ており、交渉している彼は黒髪でヴェージュのコートを着た端正な顔立ち。太正世界の住人にしては明らかに浮いている… 雰囲気は或人らに近い彼等。どうやら、花組の公演を見たかったようだが開演に間に合わなかったらしい。

「神山さん!」

「ん？ 社長さんに刃さんか。ちよつと今は手を離せなくてね。

(…:…今はこんなことをしている場合じゃないんだなあ。)」

一刻も早く星兎をさがしに行きたいのにさつきから喰い下がるこのふたり組に足留めを受けている。焦燥からくる苛立ちも積もる神山だったが、そんな彼を尻目に黒髪の青年の興味が或人へと移る。

「あれ…もしかして、君さ…ゼロワンじゃない?」

「え? 俺のこと知ってるの?」

「ああ、勿論。俺たちも例の王様のお願いでこの世界に来たからね。」

…王様? 思い当たるとしたら、オーマジオウ。待てよ、まさか!

「俺達も君と同じ仮面ライダーさ。俺は天ツ才物理学者こと、『桐生戦

兎』。またの名を仮面ライダービルド：以後、お見知りおきを。あ、そのバカは万丈。ただの筋肉バカだ。」

「おい!!? なんで俺はぞんざいなんだよ!!俺だって、仮面ライダーだろ！」

そう、このふたりは仮面ライダー。愛と平和のために戦う科学者：仮面ライダービルド。『桐生戦兎』にその相棒の仮面ライダークロウズこと『万丈龍我』だ。所為、分類は平成ライダーにあたるため、令和ライダーの或人と面識は無いが彼等もまた形式上は先輩にあたる。確かに、服装といい雰囲気といい或人たちと近いことや戦兎の取り出した小さいボトルのようなアイテム『フルボトル』から嘘ではないと見て良いだろう。：まあ、神山は流石に信じられず疑いの目を向けていたが。

「えと…仮面ライダー？ あなた達が？」

「あ、信じてない？ なら、証拠にここで変身は…まあ、出来ないけど俺等が厄介になつてる華撃団の隊長に…」

♪♪♪

「つて、噂をすれば…」

疑いを晴らすために早速、すまおとろんを取り出すと同時に着メロが鳴る。そして、メッセージを確認すると一瞬だけ険しい顔になったあと溜息…

「……『帰ってこい』？ハア、やれやれ…美人だけど人使い荒いんだよなあ。あの人は。悪いね、ゼロワン。もうちよいゆつくり話をしたかったけどしやあないか。次は華撃団大戦で会おう。おい、万丈！ 帰るぞ!!」

「お？ 良いのか、舞台は…」

そして、嵐のように去っていく新たな仮面ライダーたち。或人と神山は終始唾然としていたが、唯阿は戦兔の言葉に引っ掛かりを覚える。

(華撃団大戦で会おう…？　なんで、わざわざ…？)

まるで、こちらが華撃団大戦に行く前提のような話しぶり…まあ、観戦はしにいくつもりだが。だが、彼のニュアンスには一緒に席に座ってポップコーンを食べるとは違う意味合いではない響きを感じた。なら、どういう意味か…？

『…刃さん？』

「社長、イズ、例の準備を急ごう。何か嫌な予感がする。」

不思議そうに覗き込む或人とイズを引き連れ、唯阿は格納庫へ向かう。この頭にチラつく可能性は気鬱であれば良いのだが…

その頃、戦兔と万丈は帝都を横断してある場所を目指していた。

「なあ、戦兔。あれで本当に伝わったのか？」

「さあな。直接、伝えるわけにもいかないだろ。一応、機密だしな。取りあえず、『太正の1号』は確保だ。行くぞ、世界華撃団大戦会場にな。」

唯阿の予感は的中していた。遺していったのはやはり『警告』。真意が組み取られているか定かではないが、今は後輩たちを信じるしかない…：そんな彼等が向かうのはドーム型の巨大な建物。それは、華撃団が目指す夢の舞台であり競いの戦場。平和の祭典が行われる場所『世界華撃団大戦会場』…

……ここが、悪夢のはじまりの場所になるなど誰も知る由もない

「…ククククツ」

プレゼジデントG…暗闇の廊下を歩くこの男、以外は

そして、星は輝くべき場所へ。VIII

「……痛っ。……ここどこだよ?」

星児がまず感じたのは頬につくチクチク……うん、変哲もない芝生だ。サッカーやらラグビーやら屋外スポーツの会場でよくあるやつ。むっくりと起き上がりながら、随所に先の戦いの記憶が戻る……あの謎の仮面ライダーに手も足も出さず必殺技を喰らって……そこで意識を失った。最後に『合格』と言っていたがどういう意味だ?

「ちっ、真っ暗でよく見えねえな。」

痛みをこらえながら、汚れをはらって立ち上がる……辺りは暗くてよく見えない……観客席と天井とおぼしきものは夜目で確認できる。恐らく、ここはドーム状の空間か何かか……ん? よく見るとフィールドの中央に何か鎮座している。大きい……霊子戦闘機? 機体色が黒っぽく暗闇に溶け込んでシルエットが捉えづらい……でも、見覚えがある。

「……コイツは無限か? だけど、誰の機体だ?」

帝国華撃団であと無限を持っていないのはさくらのみ。だが、彼女のパーソナルカラーはピンク……黒じゃない。となると、もう乗る人間はいない……

【それは、君の機体だよ。】

「！」

突然、眼前にそびえる見上げるほど大きなホログラム。胸像のように上半身しか映さない立体映像が象るのは忌々しい相手、プレジデントG。彼の登場で星児は顔を険しくする。

「プレジデントG……コイツなんの真似だ？ おふくろは機体は受け取らないと言ったはずだ！」

「ああ、そうとも。だが、君個人へ贈る分としては問題あるまい。私からの気持ちだよ。」

「ふぎけんな！ さっきの仮面ライダーだってテメエの差し金だろ！」

「はて、何の事やら？ 私は迎えを頼んだだけだったんだが……（：『私は』ね）。責任ある者として、贖いはしつかりしなくては、こちらも周りに示しが見つからない。それに、君も正規の隊員になる以上は相応しい機体を持つべきだろう？」

わざとらしいすつとぼけ振りに、叶うなら殴り飛ばしてやりたい衝動に駆られるが辛うじて呑み込む。わざわざ、こんなやり方をして連れてくる以上は贖いの他に思惑があるのだろう……それを見定めなくては。

しかし、どうして無限なのだ……？ ロンドン華撃団の機体はブリドヴェンだ。霊子戦闘機はW・L・O・F. が認めた共通フレームを各国の特色に合わせた改装が施されたもので、既存の霊子戦闘機は腹違いならぬ国違いの兄弟なんて言ってもあながち間違いではないだろうが、異国の霊子戦闘機の運用にはいくらフレームが共通しているとはいえ多方面で支障をきたしかねない。例えば、無限が破損した場合、ブリドヴェンのパーツの流用等が効かないパーツなどは日本からわざわざ取り寄せになるなどが考えられる。そうなれば、整備側の人員の負担は勿論、取り寄せにかかるコストもバカには出来ない。ロンドン華撃団に居させるのならブリドヴェンを用意するのが筋だ。な

ら…

「俺を帝国華撃団に戻すつもりなのか？」

帝国華撃団に戻る…無限をというのなら、そんな意図があると思うのは必然。しかし、プレジデントGは嘲笑う。

【何故、君を今の帝国華撃団に戻す必要がある？】

「…？　じゃあ、無限でロンドンに行けって言うのかよー！」

【いいや？　君はもう既にロンドンの人間ではない。】

じゃあ、何なんだ!?　なんで、無限を用意したんだ!?

【神崎星児くん。私は最初、君はとるにたらない石ころだと思っていたよ。しかし、例の事件のあと…君を改めて精査した。するとどうだ、ロンドンではあとひとつ最強の騎士・ランスロットに及ばないものの、男性でありながら一般人を遥かに凌駕する靈力の保持に収束・放出といった技能を持ち、実践も靈子甲冑でありながらあのアーサーが認めるほどの戦績。石ころなんてとんでもない…ダイヤの原石だったよ君はア?】

ねつとりと気持ち悪い。グイツと近づくホログラムの大きさも相まってはじめて後退る星児。怒りだけでこの男を今まで見てきたが、こうしてまともに話すと中々の不気味さだ。

【流石、帝国華撃団の忘れ形見…であるが故に惜しい。名ばかりのドブの中にそれを捨てるか、はたまた古いだけが取り柄の万年の二番手にそれを託すことなど…。】

前者は今の帝国華撃団で後者はロンドン華撃団のことだろう。アーサーやランスロットがいたら、間違いなくブチギレしていたであ



ろう暴言…そして、母が束ねた帝国華撃団への侮辱。やはり、この男は味方どころか中立な裁定者であり運営者でもない『敵』なのだとも再認識する。

そして、彼は告げた。

「……そこで、私は決断した。星は輝くべき場所へあつてこそだと。帝国華撃団の忘れ形見は同じく、その魂を受け継ぐ彼女等の元へあるべきだと！」

「何を言つて………まさか。うっ!？」

瞬間、スタジアム内に光が満ち目が眩む。怯みながらも、目を開けていくと『彼女たち』はいた…。軍服のような制服を纏う凛々しい姿は世界最強たる王者の風格を放つ。先頭に立つ銀髪の彼女は兵士を統べる者…

「お初にお目にかかる、私はベルリン華撃団Ⅱシユバルツアイゼンの隊長、『エリス』だ。帝国華撃団の忘れ形見、話は聞いている。この度、貴公を預かることになった。」

かつて開かれた2回の華撃団大戦を制した文字通り最強の覇者『ベルリン華撃団』…その隊長のエリス。凛々しく容姿端麗にして強さを兼ね備える彼女を星児は知っていた。むしろ、因縁の相手でもある…この華撃団そのものが。そして、プレゼントGが何を企んでいるかも理解する。

「…こんなの冗談だろう？悪趣味が過ぎるぜ……」

「冗談ではないのだよ、神崎星児くん。」



夜同士作業が水の泡になったことにこちらも悲鳴をあげた。

畜生め！と頭に血を昇らせながらも、ただ事では無いだろうと一旦地下ドッグを後にして地上の廃工場に跳び戻ると様子を確認。廃材やらが次々となぎ倒され埃も咳こむほど舞い上がっている。その中を暴れまわっているのは…

「…夜叉か？ おいどうした！」

顔をおさえながら、のたうちまわる夜叉の姿。出血しているのか、辺り一面にドス黒い体液を撒き散らしながらおぞましい叫びをあげ続けている彼女。一体、何が？…敵にしては特に気配は感じられない。何にせよ、このまま暴れられては困る…止めなくては。

「このタコ！ 止まりやがれ！」

「いいいいいい！！ 私の臍帯が…！ 息子との繋がりが切れ…  
て…！！」

何言ってるんだコイツ？ すると、何処からともなくアナザーゼロワンが現れ、彼女の頭を鷲掴みするとエネルギーを流し込む。同時に夜叉は糸が切れたように大人しくなり、ぐったりとその腕に抱かれる彼女。同時に変身を解除したレクスは『ディケイド…』と小さく呟くと『1号』のアナザーウォッチを取り出し、空中に浮遊していたブランクウォッチも呼応するようにアナザーウォッチへと変質していく。

「…時計の針はもう止まらない。でも、押し進めることは出来る。まずは、ゼロワンを封じましょう。」

次に近くのテーブルに目を移すと、機会のアームのようでありながら有機的な化物チックな職種がレーザーで物質を編み込み、普通のものより大きい鋼色のプログライズキーを精製し終えたところ。これを拾いあげるとニタリと嘲笑う。まだ、ゼロワンの物語において存在

してはいけないそれをタイムジャッカーという利点を活かして創り出したソレ。衛生ゼアのバックアップが充分ではない太正世界で人間の悪意を織り込まれて産まれたプログライズキー……

「メタルクラスタホッパー……厄災の権化たる鋼の嵐。ククク……楽しみね、華撃団大戦……」

燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！ I

「この本によれば、新生・帝国華撃団は数々の困難と試練を乗り越え見事に帝都に手を伸ばす巨悪を討ち倒し、華撃団復興の悲願を果たす未来が待っていた。…今までの展開は、概ね記された物語と同じ。」

帝劇の舞台、既に夜もふけ誰もいなくなったこの場所で語るウオズ。スポットライトが当たる彼の話を聞く者は観客席にはいない：それでも、彼は変わらず預言者の役目を…

「で？ その先は…？」

いや、スポットライトを浴びるのはもうひとり：門矢士。ふてぶてしく観客席でふんぞり返る彼にむツとしながらも、ウオズは続けた。

「残念ながら、まだこの本には記されていない。まだ新時代は誰に担われるか決まっていけないようだ。…希望を託された者たちか。」

「……それとも、強い輝きが産み落とした『影』か。」



帝劇の公演は或人の前座というとんでもないハプニングこそ初日にあつたものの、看板になったアナスタシアに演技の才能の片鱗を見せたさくらに加え、ダナンの愛の物語への評価も高く公演期間中は満員御礼で帝国華撃団復活の第一歩としては申し分ない出来だった。冷やかし程度ときていた上海華撃団も当初と段違いの成長具合に『情けなかつたお前らがいつの間にかこんな立派になりやがって…』と涙ぐんでいた。

…尚、愛弟子の晴れ舞台と或人のギャグと聞いて飛んできた某・オムライス師匠がいたそうだが、初日以降はアナスタシアが強行に或人が舞台に立つことを反対したためついに拝むことが出来ず残念がついていたという。

とまあ、これだけなら良かったが…

(手放しでは、喜べない…ですわね。)

支配人室で頭を抱えるすみれ。結局、星児が帝劇に戻ることは無く、公演は幕を閉じる。連絡等も一切無く、仮面ライダーや帝国華撃団の総力をもつての搜索虚しく時は進んで世界華撃団大戦の当日に…。忽然と姿を消した息子に花組の中でも不安や憶測が飛び交うが神山の尽力でなんとか空中分解は避けられているが、精神面から見た彼女たちのコンディションは万全とは言い難い…

自分もそうだが、浮足だっている場合ではない。今回の大会で結果を残せなくては帝国華撃団は解散なのだから。

「そう…からが、本番…。…何かしら?」

そんな時、デスクの上でバイブをはじめますまあとろん。メッセー  
ジの着信を主に伝える反応に、すみれは手に取りメッセー  
ジを確認す  
る… すると…

「!…これは!」



「先程、すみれ様宛に坊ちゃんからすまあとろんで連絡がありました。『自分は無事。世界華撃団大戦で待つ。』と書いてあったそうです。」

世界華撃団大戦の会場のロビーに集まっていた花組と或人ら令和ライダーたちに先の出来事を報告するカオル。すみれに送られたメッセージは星児からで、自分の無事とこの会場で待つという内容だった。…まあ、やはり誰も簡単に納得できないのだが。

本当に無事なら、どうしてすぐ自分たちの所に戻ってこないのか？  
そもそも、どうして大会の今というタイミングで？

気になった或人はカオルに疑問を向ける。

「星児くんからの連絡で間違いないんですが？」

「発信元は坊ちゃんの端末であることは確かですが…。本当に坊ちゃん自身の文章なのかはわかりません。」

やろうと思えば端末を取り上げて本人以外でもメッセージを送るくらいは出来るということか。平成から令和にかけて普及したスマホと響きは似ている太正のすまあとろん、実際のところは通信機能などはポケベル程度なもので自ずとセキュリティも相応。暗証番号くらいはあるが、或人らの基準からすればあまりに心許ない防犯対策だ。と言つても…こればかりは仕方ない。

一方、神山も続けて問う。

「このこと、ロンドンには…？」

「すぐに確認しました。あちらにも同様のメッセージが送られたようですが…姿は現さなかったそうです。」

「……そうですか。」

ロンドン側にもメッセージだけで居ない様子。神山は星児が連れ去られた日、帝劇に雪崩れこむように酷く取り乱したランスロットが駆け込んできたは脳裏に焼きついている。自分が目の前にいながらこの不始末と自責をする彼女をすみれと公演を見に来ていたシャオロンがフォローしてくれたおかげで何とかその場は落ち着いたが：その様子を思い出すだけで胸が痛む。

(星児：お前は何処に行ったんだよ…)

「神山さん、坊ちゃんのごとは勿論ですが、今は華撃団大戦に集中を。貴方が揺らげば、隊員たちにも不安は伝播します。どうか忘れないでください。」

カオルの指摘に振り向くと、さくらたち花組たちの浮かない表情が：そうだ、彼の身を案じているのは自分だけではないのだ。彼女たちの支えにならないといけないのが隊長である自分なのに、こんな有様でどうするのだ！

パンツ！と頬を叩いて顔も心も引き締め、改めて仲間たちに向き合おうと力強く告げる。

「皆、星児はきつと大丈夫だ！確証は無いけど、俺が保証する！…信じよう、今は。アイツのことも、俺達自身も。この華撃団大戦で勝ち残って、帝国華撃団復活を世界に高らかに宣言しようじゃないか！」

威勢よく担架をきった：は良いが、花組乙女たちの反応は微妙。しかし、アナスタシアだけは違った。

「そうね、今為すべきことはちつとも変わっていないもの。ここで負ければ全てが終わり：私たちの帰ってくる場所は無くなるわ。それは私も嫌よ。」

「アナスタシア…！」

「折角の新しい職場、早々に潰れられたらたまったものじゃないわ。」



「アナスタシア…（汗）」

上げてから落とす…空振った隊長を弄ることで、少し空気が緩むのを感じた。すると、さくらも決意したように声をあげる。

「そうだよ！　ここで落ち込んでても、華撃団大戦には勝てないし、星児さんも帰ってこない！　負けたら、そもそも帰る場所だって無くなっちゃう。そんなの、私は嫌だ！だから、頑張ろうよ！公演も成功させて、ここまで来たんだから!!」

彼女の叱咤を受けて残りの面々も顔をあげる。そうだ、ここでクヨクヨしていても何も変わらないし、始まらない…ならば、前に進まなくては…

「そうだよな！　こんな情けない姿を世界の舞台で見せられねえよな！」

「花組を無くすわけにはいきません。私の帰る場所はここしかないから。」

「忍びの掟、困難から逃げてはいけない。今こそ、立ち向かう時。」

一時は沈みかけた空気も熱を取り戻していく…。或人たちも気を揉んだがこれなら心配なさそうだ。カオルもほっと胸を撫でおろし改めて花組の面々を神山に任せる。

「では、神山さん…頼みましたよ。花組と帝国華撃団の命運を貴方に託します。」

「はい！必ず、期待に応えてみせます！」

「では、私はすみれ様の所に。」

そして、カオルがすみれの待つVIP席へ向かうと同時に或人らも『じゃ、俺達も観客席で応援してるから！』と別れることに。決戦の舞

台に向かう者たちとそれを見守る者たち…一時は散り散りになるが、すぐにコロシウムで再会だ。このあとはきつと、手に汗握る戦いが待っているはず…世界中の若者たちが凌ぎを削り合う青春の時が。

…そう、この時は誰も疑わなかったのだ。



「…気になったんだが、霊子戦闘機をドンパチやって街の守りは大丈夫なのか？ 平和の祭典とはいえ、そっちが本分だろ。」

「あ…確かに。」

超満員の一般観客席で席についた不破はさつき売店で買ったポツプコーンを頬張りながら、呑気にボヤいていた。確かに、と或人も今になって気がつく。競技とはいえ、霊子戦闘機で戦いあえば、破損等々は避けられない…不運にも万一の事態が重なる等々があれば洒落にならないのでは？

しかし、そこは既に把握していたイズが説明する。

『その点は心配ありません。華撃団大戦は出されたお題に則った演技を行う【演舞】と霊子戦闘機の操縦技能を競う【演武】から成ります。後者の演武はあくまで、ホログラムなどのデコイを用いた内容ですの直接、霊子戦闘機同士が戦いあうことではないという話です。』

「そうなんだ。さっすが、平和の祭典。直接、傷つけ合う必要なんて無いよね。」

或人は安堵して腰掛け、ストローからジュースを啜る：何も心配を  
する必要なんてない。晴れ渡る空、並ぶ各国の空中戦艦や気球船に熱  
狂しようとするか今かと待ちわびる観客たち。各国の華撃団も愛機と  
共に芝生に整列し、中央の液晶画面に映るプレジデントGが開催を告  
げ：

ードガアアアアアン!!!!

「ぶほお!?」

その時、空中戦艦の1隻が爆発を起こし粉碎された環境から『何か』  
が飛びだしてくる。大きい：霊子戦闘機をも遙かに超え、巨大降魔に  
すら匹敵するかもしれない巨大な質量は下半身激しい二輪タイヤを  
駆動させコロシウムを挟りながら華撃団たちの前に地面を巻き上げ  
着地する。：バイクか?　：船か?　否、ゆっくりと起き上がる上半  
身は飛蝗の異形。ジュースを噴き出すに足らず、或人は言葉を失う。  
『コイツ』はジオウと共に倒したなず：!

「嘘だ：なんで!？」

『ウウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

：アナザー1号

歴史の終着点であるオーマジオウの力に寄って産まれたいわば、仮  
面ライダーの歴史そのもののアナザーライダー。右肩には主である  
うアナザーゼロワンに、その咆哮に応じて数多くのアナザーライダー  
たちや降魔が平和の祭典を穢しに舞い降りる。その光景にあつとい

う間にパニックになる観客たち…その中に紛れながら夜叉が不敵に笑う。

「……さあ、お祭りの時間ですよ。」

燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！ Ⅱ

…

【これより、世界華撃団大戦の開催を… …なんとっ?!?!?】

開催宣言しようとしたプレジデントGの乗る空中戦艦の艦橋を踏み砕いてコロシアムの芝生に着地する。爆撃のような轟音を鳴らし、逃げれるはずもない参列していた無人の霊子戦闘機を轢き潰しながら雄叫びをあげる。途端に観客たちはパニック、阿鼻叫喚の渦となり我先へと向かおうとするが出入り口は次々と現れるアナザーライダーたちにより塞がれ行き場と平常心を失った紳士淑女は混沌の中、右往左往するばかり。

意表を突かれた最悪のタイミングでの敵襲。華撃団たちは我先と我に帰った者たちから霊子戦闘機に乘ろうとするが、会場の液晶画面にアナザーゼロワンが映るやその動きを止める。

【どうか、皆様…ご静粛にお願いします。乱暴な形になりましたが、ワタシたちには敵対の意思は今はありません。】

…確かに、アナザーライダーたちはこれ以上の動きは見せない。華撃団たちは警戒するも、構わずアナザーゼロワンは変身を解除してレクスの素顔を晒す。

【改めて、この場を騒がせたことお詫び申しあげます。ワタシはネオ・タイムジャッカーにして上級降魔レクス。今回は華撃団の皆様にお願いと…この世界の皆様に真実をお伝えに参りました。】

人間の顔が見えたからか、観客たちも落ち着きを徐々に見せ液晶画面を見せはじめ。この異形を従える乱入者は一体、何を語ろうとい

うのか…？意識が集中し始めるや、レクスはニヤリと嘲笑う。

「ワタシはこの時間の存在ではありません。ワタシのあるべき時間はある存在によって滅ぼされました。同胞や血肉を分けた家族に至るまで…根こそぎに。それはこの世界で、『降魔皇』と呼ばれる存在に…全てを破壊されたのです。」

降魔皇…!?その単語が出てくるやどよめきが拡がり、最上階のV I Pルームにいたすみれも眉を寄せる。彼は何を話そうとしているのか…

「かつて、この世界に現れた降魔皇は当時の華撃団の命を代償により封印されました。しかし、当時と同じ予兆が再びこの世界で起き始めている…そう、自らを正義の使者と嘯く『仮面の使者』たちがこの世界に現れはじめた。10年前と同じように…」

…なんだと？ 或人ら仮面ライダーたちの背筋に鈍く冷たい感覚が流れていく。確信があった、コイツは何か決定的に取り返しつかないことを行おうとしている…!

【華撃団の皆様、本当の敵は貴方がたの隣で嘲笑っています…】

…『仮面ライダー』と名乗る者たちこそが、正義を気取る邪悪の使徒!

そして、降魔皇とはッ! 奴等の首魁たる時の王者・時空を統べる最

低最悪の魔王『オーマジオウ』のことなのです!! 仮面ライダーは再び破滅を招くための尖兵に過ぎません!」

「!!!?!」

仮面ライダーたちだけではない、この場にいる人々全員が驚愕：ウオズに至っては絶句していた。仮面ライダーが邪悪の使徒？降魔皇の正体がオーマジオウ？混乱する頭に更に、追い打ちをかけるようにレクスは空の時空を歪ませ、オーマジオウの姿を映し出す。生身の重火器を持つ人々などにサイコキネシス等々とおぼしき異能の力を振りかざし、飛んできたミサイルや弾丸も掌をかざしただけで爆発四散させる様はまさに魔王。何も事情を知らない者たちからすれば、まるで無辜の民を蹂躪しているようにしか見えない。

「彼らを…仮面ライダーを許してはいけません！ 彼等を野放しにすれば最後、再び降魔皇・オーマジオウはこの帝都を蹂躪し尽くすでしょう！ ワタシはそれを止めにきた！ 悲劇を繰り返さないためにも、力を貸して欲しい。貴方がたの世界にある『帝鍵』を…それさえあれば、この恐るべき魔王を時空の彼方へ葬り去ることが出来る!! さあ、華撃団たちよ我等の軍門に下りなさい！全ては平和のために…!」

ここで一気に演説を畳み掛けるレクス。混沌とした民衆たちは冷静な心理など保てるはずもなく、更にパニックへ。ろくな状況判断など出来ず、すると…誰かが叫んだ。

——見たぞ！ コイツらは仮面ライダーだ…!

「えっ？」

誰かが後ろ指を指す。

途端、視線が或人たちに一齐に向けられる。『恐怖』『不安』：それらが、『敵意』の色を帯びて集中していく。誰が言ったかはわからないが、濁流の如き不規則な人々の意識が一点に束ねられ全方位が行き場を求める感情の眼差し。イズは察した、敵は何を狙っているかを。

『或人社長！』

「駄目だイズ、ここで逃げたら奴の思う壺だ！」

逃げない：否、逃げられない。背中を向け走ろう者なら最後、決壊したダムのように自分たちは人間に押し潰される。逃げおおせられたとしても、その先はないだろう。出来るとしたら己の潔白を叫ぶくらいだ。ならばと怒号が如く、ジリジリと迫る一般人たちに叫ぶ不破。

「オイ!! あんな得体のしれない奴のことを信じるのか!? 証拠なんて無えだろうが!!」

「無駄だ、不破。悪魔の証明だ：逆にそれは私たちの潔白も証明出来ない。こういった場合、集団心理的が優先される。」

唯阿は冷静に状況を見ていた。不破の言い分は最もだが、得体が知れず尚かつ強大な存在だからこそ人間なんてものは簡単に正気を失うし見誤る。真つ当な根拠が無いならどうなるか、残るは膨れあがり決壊寸前の感情のみ。膨張が進み、狭まる包囲網の中で或人は尚も言葉で訴える。

「やめてください！ 俺達は誰も傷つけるつもりはありません!! お願いです!!」

：一方、神山も観客席の異変を察知し、無限の舵をきろうとしたが



アナスタシア機がその肩を掴んで制止する。

「駄目よ、キャプテン。今、彼らを庇えば私達も巻き添えよ。」  
「くっ…！ かし！」

—パアアアン!!!

「狼狽えたるなッ!!!」

「!!」

その時、銃声がコロシウムに響き渡る。銃口を掲げる霊子戦闘機ア  
イゼンイエーガー…駆るはベルリン華撃団隊長エリス。彼女の銃声  
は人々を我にかえさせ、恐怖をせき止める。同じく狼狽していた華撃  
団の隊員たちも彼女を仰ぐ…完全に空気の流れを奪いとった。全  
てのスポットライトが異形と恐怖から彼女へと主役を変えたのだ。

「レクスと言ったな、貴様。私はベルリン華撃団隊長のエリスだ。さ  
て…民衆の心理を利用しようとしたようだが、そんな簡単に屈せられ  
ると思ったか？こんなもの所詮、勢い任せの恫喝だ。勢いさえ止めて

しまえばどうとでもなる。」

「あら？ 恫喝とは失礼ね。これは交渉… 交渉というのは持ちかける側が優位になるようにはじめるものじゃないかしら？」

物は言いようと屁理屈をこねるレクス。ぶん殴ってやりたい気持ちだが神山らにこみ上げてくるが、エリスは不遜に笑っていた。

「交渉とは互いにフェアな立場なのが建前としても紳士淑女のマナーだ、私達の世界ではな。さて、覚悟しろ。崇高な我等の聖地を穢した罪は重いぞバケモノども。」

「フン？ 勝てると思って…？」

「言ったはず、…どうとでもなるとツ!!」

「!」

巨大な異形を前にしても、揺るがない鉄柱の自信。次の瞬間、出入り口を塞いでいたアナザーライダーたちがふつとばされて芝生へと次々に投げ出されていく。そして、出入り口から現れたのは仮面ライダーたち。キックホッパーにウオズ、1号オルタと2号オルタ…既に、事件が起こりうるところと潜伏していたのだ。

レクスは理解する…鼻先を潰してきたつもりが、思わぬカウンターが用意されていたのだと。大衆は逃げ道が出来るなり、我先へと殺到し恐怖と混乱という手段は封じられる。

「甘くみたな我等を。さあ、あとは貴様を撃滅するのみだ。気兼ねすることはない、全員構えろツ！」

「…」

エリスの声に続き、次々と霊子戦闘機たちは武装を構え異形の軍団と対峙。いざ反撃の時…

波乱の開会式、火蓋がきつておとされた仮面ライダーと華撃団対アナザーライダーと降魔の軍団。空は曇天に暗くなる中、逃げ遅れた人々は見守る…さながら、正義と悪の天下を分け目の合戦を。

…無辜の命、その采配は誰の手に。

## 燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！ Ⅲ

エリスの声が狼煙となり、激突する正義と悪のふたつ。

巨大なアナザー1号やアナザークウガ、降魔といった大型の敵は華撃団たちが：他のアナザライダーは仮面ライダーたちが迎えうつ。平和の祭典は虚しくも戦場と化し、混沌が吹き荒れ満ちていく。

観客席からその様子を『やっぱりか：』と溜息をついていたのはビルドドライバーを装着した戦兔と万丈。いつの間にか、或人たちの横にふらりと現れていた。

「警告はしておいただろ、後輩？」

「あなたは…」

「さあ、いくぞ!!」

「は、はい！」

促され、それぞれ変身ツールを構える5人。戦兔は2本のボトルを：万丈はクローズドラゴンをドライバーにセットし、ハンドルを回す。

【Are you ready?】

【「変身！」】

【鋼のムーンサルト!! ラビットタンク！】

【Wake up burning!! Get クローズドラゴン！ Yeah!!】

【プログライズ！ライジングホッパー!!】

【ショットライズ！シューティングウルフ！】

【ショットライズ！ ラッシングチーター!!】

戦兎は兎の赤と戦車の青が織り重なる派手な仮面ライダービルドへ：万丈は青い竜の鎧を纏う仮面ライダークローズへと変身。ゼロワン、バルカン、バルキリーも変身を同時に終えると渦中の戦場へと踊り出る！ まずは見舞いにとゼロワンとビルドのライダーキックがアナザークウガを弾きとばす。その巨体は呆気なく、地に落ちてひっくり返るとそこへ上海華撃団の王龍が馬乗りになり凄まじい連打を叩き込みアナザークウガはおぞましい悲鳴をあげた。霊子戦闘機が叩き出す火力ともなれば、倒しきれないことは不可能でもダメージは蓄積する：並の仮面ライダーなら脅威になる巨体もかえって仇になってしまったのだろう。

「この前の借り、存分に返させてもらおうぜ！オラオラオラオラ！」

「店の修繕費高かったんだから！」

加え、アナザーバルカンの件で苦酸を舐めさせられた分の怒りも上乘せされているためか、シャオロンとユイ：どちらも容赦なく拳を打ち込み続け異形が立ち上がることをすら許さない。

そして、怒りに燃えているのは彼等だけではないのである。

「我が魔王への不敬並びに冒瀆：死に値する！」

【ギンガファイナリー!!】

仮面ライダーウオズ、彼は主へ被せられた汚名に頭へ血を昇らせ普段から考えられないほど苛烈に攻めたてる。いきなり、最強形態ギンガファイナリーで空中に舞い上がるや隕石の雨が降りそそぎ爆撃。宇宙からの砲弾はアナザーライダーどころか、霊子戦闘機も巻き込みあちこちで悲鳴が上がりこれにはたまらずウオズに制止を叫ぶラン

スロット。

「ウォズ！ 味方も巻き込んでから！ストップ!!」

「生憎、今の私は阿修羅すら凌駕する勢い、この場を破壊し尽くし不忠者を灰にするまで止まる気はない！」

「あたしたちのほうが先に灰になるわ!？」

我が魔王を貶められた万死の所業は赦されざるもの。しかし、あんまりなとぼちりを受ける側としてはたまったものじゃない：現に回避こそしているものの、ランスロットのブリドヴェンは焦げつきつつある。ただでさえ強力なギンガファイナリーの力、直撃しようものなら霊子戦闘機でもただでは済まないだろう。

そんな合間を高速で駆け抜けていくキックホッパー。乱戦の戦場だろうが、クロックアップすれば簡単に抜けていける。魔操騎兵やアナザライダーたちにちよつかいをかけていく形で戦況をひっかき回して味方を援護していき、よろめいた敵たちを次々とアーサーのブリドヴェンがバツサバツサと斬りさばく。

各国の華撃団が奮戦する中で勿論、神山が率いる帝国華撃団も黙ってははいられない。

「…すごい。これが世界の実力か！ クラリスとアナスタシアはベルリンの後方支援を！ 初穂とあざみは負傷者の回収を軸に立ち回ってくれ！ さくらは俺とついてこい！」

「」「」「了解!」「」「」

散開する無限はそれぞれの戦いに。個人個人のカスタマイズが他華撃団より尖っている機体だけに無理に一緒に行動するより、それぞれの適材適所に当てはめたほうがこの乱戦では賢明との判断だ。

そして、一番の大獲物アナザ1号を相手をするは世界最強と名高いベルリン華撃団。巨体からの振り払いや突進をアイゼンイエー

ガ―を駆り巧みにかわしていき絶え間なく重火力で圧していく…のだが……

「…くっ、啖呵をきつてみたものの、決定打に欠けるか！」

エリスはコックピットのモニターに映る残弾を確認しながら舌打ちする。確かに追い込んではいるが、その分だけ弾丸の消耗は激しく弾切れが目前に迫っていた。相手は特殊なタイプとはいえアナザーライダー…霊子戦闘機の攻撃は本来ならまともに通らない。されど、ここで攻め手を緩めてはこの巨体は縦横無尽にコロシムを再び蹂躪して霊子戦闘機や人間たちを轢き潰していくのは容易に想像可能だ……だが、どうする？

「マルガレーテ！ 彼は!？」

「残念ですが、通信が妨害されていて応答がありません。そして、私の残弾はもうじき切れます。」

仲間に救援の可能性を訪ねたがその可能性は碎け散る。プレジデントGの戦艦に待機している『彼』ならばそこに積載されている武器や物資をアテに出来たのだが…。

「さて、どうする?。」

『…オオオオオオオ!!!』

叩き潰さんと迫る地獄の鉄輪！ その時…

「ぬうんッ！」

アイゼンイエーガーの前に飛び出したのは2号オルタ。なんと、回転する車輪を素手で掴み巨体の前進を強引に食い止めると掌から

ギイイイ！と激しく散る摩擦熱と火花に苦悶の声をあげながら、のしかかる異形を持ち上げる。流石にアナザー1号も予想外だったようだったが、もう遅い…既に車体は浮き後輪も空回り。既にデクの棒：

『オオオ!? …オオ!?!?!』

「スクラップになれ。ライダーパンチ・オルタナティブ!!」

ドオオ!!と赤雷が走る全力のアッパーがバイクの下半身を激震させ、がら空きになった瞬間、懐へ神山駆る白い無限が飛び込んでつむじ風が如く斬り抜ける！

「はああああああアアア!!」

『ギヤアアアアアアアアア!?!?!』

鎌鼬が駆けたような切傷が血飛沫をあげ、アナザー1号は悲鳴をあげながらバランスを崩す…手でなんとか支えるもふと仰いだ天にはピリオドを撃ち込む一撃が待ち構えていた。完全な悪の兵器として成り立った仮面ライダーの姿の体現である自分では放つことが出来ないその技…

「ライダーキック・オルタナティブ!!」

瞬間、穿ち貫かれる異形の頭蓋。目下、最大限の脅威であったアナザー1号は雪崩れのように崩れ落ち、それをバックに着地する1号オルタ。途端に周囲の観客席から歓声があがる…『やったぜ、仮面ライダー!』『信じてたよ!』と。しかし、1号オルタは裏腹に妙な違和感を覚えていた。

(なんだ…これだけの戦力の割に呆気ない…)

アナザーライダーの大半が揃っている、本来ならかなり絶望的な状



況なのだが仮面ライダーどころか霊子戦闘機にすら降魔と束になつても圧される始末。最初こそ肝を冷やしたが、あまりにも簡単な形成逆転がどうにも腑におちない…レクスはかなり狡猾な手段を用いてくると踏んでいたのだが。

同様に2号オルタも首を傾げながら駆け寄ってくる。彼も同様の感触を抱いたようだ…

「おい、何かおかしいぞ。手応えがなさ過ぎる…」

「ああ。…嫌な予感かする。　そういえば、ゼロワンは!?!」

そうだ！　今、彼が太正の1号の代役を担っているのだ。わざわざレクスが出てきて彼を無視するとは思えない。…いや、むしろこの戦いそのものがゼロワンを孤立させるための罠だとしたら…？

その時、2号オルタが彼方を指差す。

「…あそこだ!」

★ ★ ★ ★

『グウアアアア!?!?』

試合会場の外れにて、ゼロワン、バルカン、バルキリーの三大ライダーの猛攻に晒されるアナザーゼロワン。シャイニングアサルトホッパー形態でありながらも、ろくに対処出来ない有様で獲物を追い詰める獣のような銃撃と特攻が乗るオリジナルからのキックに隙ひとつ与えないラッシュが着実にダメージを蓄積させていく…

『ふうう…はあッ!!』

「一！一」

しかし、仮にもアナザーライダー……ここで意地をみせてアサルト部  
分を切り離すとオオカミの生首のようなエネルギー体を形成してゼ  
ロワンたちへ襲いかかる！ 怨霊のように浮遊し、噛みつかんとする  
それらに連携を止められ苦戦するが同時に察したさくらが光武で  
割って入り狼頭たちを一閃してなぎはらう。

「行きますよ！ 決着をつけます！」

「ああ！」

—蒼天に咲く花よ、敵を討て

—稲妻の如き正義、魔を祓え

刀身に靈力を迸しらせた光武とアタツシユカリバーにスチーム  
シャイニングホッパー・キーを接続したゼロワンが血を蹴り、一気に  
アナザーゼロワンを肉薄する。後方へ跳んで逃げようとするも、既に  
タイミングは遅い……間合いから離脱は出来ない。

「…桜ッ吹雪!!」

「はあああああ!!!」

「カバンストラッシュユ」

迫りくる刀、剣……必殺の連撃。だが、アナザーゼロワンは尚も余  
裕だった。

『…かかったわね。』

「!？」」

避ける必要は無いのだから。不意に斬り裂かれるはずのアナザーゼロワンがグニヤリと融けるように消えて代わりに背後から現れたのは腰をとぐろを巻く蛇のように低く落とし、居合いの構えをとる仮面の女：『夜叉』。すう…と手を柄にあてがい意表を突かれた獲物を刹那の合間に見定める。その直後…

「むんッ!!」

ゴオ!!!

「うわあああああああああ?!?!」

「きゃあああああああ!!!」

残像を残し、剣閃が真空を成すほどの抜刀がゼロワンと光武を横風ぎに切り裂いた。愚かにも勝ちを手繰り寄せている気になっていた者たちには黒く抉れた傷跡が硝煙をあげ、無様に転がる。この衝撃で光武は機能を麻痺し、プラズマを走らせる。そんな哀れなオンボロの機体に夜叉は近づくとカメラ部分を覗きこむ。

この時、さくらは意識が朦朧としたながらも気がついた…自分が憧れたあの『彼女』とこの急襲者が瓜二つなことに。

「…し、真宮寺さん？」

さくらの眩きは気がつくことは無かったのか…或いは無視したのか…数秒程で興味が失せたように離れていく…

「弱い。弱すぎる…あの人たちの足許にすら至らない。こんなものが、帝国華撃団。」

侮蔑の言葉を遺して。

## 燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！ IV

「…！ なんだ、このバカデカイ妖力は!？」

救護者を離脱させた初穂は突如としてのしかかる深海の水圧のように押し潰しにかかるような妖力に驚いた。妖力が大きい、即ちそれだけ強大な降魔が現れたということ…あざみも気がつき、戦慄を覚える。戦況は善戦と思っていたが、どうやらそう都合よく終わってこないらしい。ふたりはすぐさま、無限を翻す。

「初穂、戻ろう！」

「応ッ！ いくぞ!!」



「…我が名は上級降魔・夜叉。幻庵葬徹様へ『帝鍵』を差し出すのだ。そして、私の『息子』を返せ。愚かな人間共よ。」

バルカンとバルキリーが銃口を向けるも、意に介さず悠々と歩を進める夜叉…。一体、自分たちが追い詰めていたアナザーゼロワンは何処へ行ったかなど気になることは多々あるが今は剥き出しの敵意に対処するほうが先決だ。相手は初見の居合からして素人目で判るほどの手練…ゼロワンとさくくも復帰には時間がかかる様…いずれ、他の華撃団やライダーが来るまで時間を稼がなくては。

一方の夜叉は自分の要求に応えるつもりが無いことを理解すると、観客席VIPルームに視線を向ける。そこには、驚愕して立ち尽くすすみれの様子が硝子越しに確認でき、口角を吊り上げた。

「ま、知っている人間にゆつくりと聞けばいいでしょう。まずは、……お掃除からですね。」

「サイクロンライザー!!」

彼女はそう呟くと、刀を鞘へとおさめて亜空間から取り出したのは降魔サイクロンライザー……そして、邪悪な猛禽が描かれたゼツメライズ・キー。ベルトを装着すると、目許まで傷跡の涙腺が不気味に紫色に妖しく浮かびあがり、ゼツメライズ・キーのスイッチを押した。

「SHOCKER !!」

起動音は『衝撃』……奇しくも仮面ライダーの宿敵であり源流である悪の組織の名と同じ発音。描かれているのも彼等のシンボルと同類の猛禽なもの何の因果か……無論、そんなことは彼女の知るところではないが……

降魔サイクロンライザーにキーを装填すると、大翼を拡げる黒鉄の鷲のようなライダモデルが妖力を纏いながら出現。ファルコンの比ではない大きさのそれは羽ばたきひとつで、周囲に立つのも困難な嵐を起こし、主の敵たちを寄せ付けない。

……そして、彼女は告げる。

「――変身。」

「サイクロンライズ！ …ジオ・アルゲンタヴィス！！ …TYP  
E X—ZERO。」

ベルトのレバーが引くと、『Giii』と歓喜に満ちるようにライダーモデルがより一層強く翼を拡げて主の頭上へ…そのまま、アーマーに細分・変換されるとマスクオフでアンダースーツを纏う夜叉の元へ装着されていく。その変身シークエンスは滅亡迅雷のそれを彷彿させるが、放つ妖気のお陰で遥かに禍々しい。

やがて、明らかになるその姿。迅や一型をベースにしつつも鎧武者のような刺々しい仮面の戦士。…その姿にバルカンとバルキリーは見覚えがあった。

「…お前は?!」

「あの時、社長を襲っていた仮面ライダー!?!」

「ええ。仮面ライダー夜叉…この姿で相まみえるのは二度目です。貴方がたは。」

仮面ライダー夜叉。まだ帝都に来たばかりの頃にゼロワンを襲った謎のライダー。その正体は上級降魔。彼女は仮面の下で不敵な笑みを浮かべながら、ゼロワンが手放し地面に突き刺さったアタッシュユカリバーを引き抜きスチームシャイニングホッパー・キーに手をかける。世界の命運を握る太正の1号に至るための鍵、むしろ狙わないのは不自然だろう。

「！ それに触るな!!」

「…フツ」

バルカンが阻止せんと飛びかかる…しかし、眼前から夜叉が消える。『なっ?!』と戸惑う一瞬、背後から脚へ鋭く一閃が走り機動力が奪

われる。的確に狙われた急所、倒れてしまうのは必然だったがそれでも苦し紛れに意地と狙う銃口…：されど、放たれた弾丸は軽く身体を反らされただけで避けられてしまう。

「不破!!」

まずい！ すかさず、フォローしようとするバルキリー…：これに待っていたと夜叉はバルカンを彼女に向かい蹴り転がし自分は空中に舞い上がるとライザーのレバーを2回作動させ、邪悪の翼を鋭く、雄々しく羽ばたかせた。そして、羽根が勢いよく射出されバルカンとバルキリーを貫く！

「オ ル タ ナ テ イ ブ ・ ジ ・ エ ン ド」

「うわあああああああああ!!!?」

撃槍の雨…：人の肉体など容易く貫通するだろうその群に火花を散らして投げ出されてしまったふたりは強制変身解除。あまりのダメージにろくに動くことすらままならない…：そんな様子を『他愛なし。』と嘲りながら着地する夜叉。

その背後を深紅の霊子戦闘機が迫る…！

「天罰的面！ 御神楽ハンマー!!!」

「…」

初穂の無限。一撃必殺の御神楽ハンマーが炎を乗せた唸りをあげて振り下ろされるも夜叉は動かない。

「ガッ!!」

「なにっ!?!」



避ける必要もないと、鉄槌を片手で受け止める。あらゆる魔も悲鳴をあげ塵にする炎すら無表情のまま絶え、腕力だけで推し返している、そのまま力任せに放り投げる。生身だったら無理な芸当だろうが、仮面ライダーの力が組み合わされた上級降魔となれば最早、霊子戦闘機でさえまともな敵になりえない。

「弱い…いッ!?!」

そう高慢にニヤリとした瞬間、資格から鎌鼬のように一撃。少しよろめいたくらいだが勢いでスチームシャイニングホッパー・キーを離してしまい芝生に転がり、それを素早くいつの間にか降りていたイズが回収。すぐさま、離脱し夜叉も『小癩な。』と舌打ちしながら追いかけようとするがあざみとクラリスの無限が立ちほだかる。

「ここから先は…!」

「行かせません!」

護らんとする乙女たちの意思の壁… なんと健気で

「——ああ、死に急ぐのですね。嘆かわしい。」

儂く脆いものか。

夜叉は刀を両手で握りスウ…と振りかぶる。この動作を見たさくらは彼女が何をしようとしているか察した。間違いない、真宮寺さくらの代名詞とも言える『あの技』を使おうとしている…!

—— 夜に咲け、鐵（くろがね）の花

「駄目! 逃げて!!」

決して散らない鉄の華、

「!」

叫ぶ! …でも、もう遅い。

「――桜花剣征・破邪放神ツ!!」

ゴオオオ!!! と桜色の嵐が全てを呑み込む。霊子戦闘機より遙かに小さいライダーシステムでありながら、威力はそれと桁違いな必殺を避けることを叶わない。地面を削り、大気を掻き乱す…!

実に数秒、荒れ狂う斬撃が通りすぎたあとガクツと倒れるあざみ機とクラリス機。

「あざみ!・クラリス!・…クソツ!」

煙をあげ沈黙する機体に神山が必死に呼びかけるも応答は無い…。ならば止まってはられないと、神山は無限を夜叉へ走らせようとするが刀の切っ先をゼロワンの倒れる方向へと向ける。

「止まちなさい。動けば、ゼロワンの四肢を1つずつ吹き飛ばします。」

「…なっ!?!」

いつの間にか、ゼロワンを踏みつけていた朧にアナザーゼロワン。そうか…! さつき、追い詰めたはずの奴が消えたのは朧の幻術だったのか!

気がついたところでもう遅い。アナザーゼロワンは夜叉へと促す  
…

『行きなさい、夜叉。貴女の求める場所がある所へ。』

「…待て！　ぐっ!?!」

更に強く臙に踏みつけられるゼロワンを尻目に夜叉は飛び立つ：  
目指すはすみれが見守るVIPルーム。硝子の壁を勢いのまま突き  
破り、粉碎された粉々のシャワーをあびながらマスクオフし尚も驚き  
を隠せないすみれに笑みを向けた。

「…久しぶりですね、すみれさん。」

「さくら…さん…?」

「ええ、その通りですよ。今は『夜叉』と訳あつて名乗っていますが  
……」

続けてアイマスクもとつて、素顔も晒す。紅い瞳ということを除けば、間違いなく『真宮寺さくら』だ…外見と声だけは。戸惑いと疑念は晴れない…本当に彼女ならこんなことをするはずがない。間違つても彼女は魔に屈し墮ちるような弱い人間ではないのは仲間だった自分が知っている。

するとなら彼女は手を差し出して告げる…

「再会の挨拶はここまで。さあ、私の息子は何処ですか？　大神さんと私との子供…貴女が私から奪った『シンジロウ』を…返せ!!」

——え？

シンジロウという名前を知らない。いや、そもそも…

(いえ、まさか…!?)

ハツとした。脳が彼女の一句一句から答えを見出す。  
彼女が求めるシンジロウとは恐らく…そして、彼女の正体は…

「何故、今になって…！」

夜叉…かつての記憶にその影がある。

燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！ V

『さて、こちらも…』

臆に無理やりゼロワンを起こさせ、拘束させると異様に大きい鋼色のプログライズ・キーを取り出すアナザーゼロワン。既に、他の仮面ライダーや華撃団たちが囲みにかかっているが問題はない。ここから先が本番なのだから。

「離、せ…！」

『あら、ここからが本番… お楽しみはこれからよ。』

【 H I D D E N   M E T A L   A B I L I T Y 】

【 オーツライズ！！ 】

キーをゼロワンドライバーに翳してオーツライズ。同時にライジングホッパー・キーがドライバーから弾けるように排出され、代わりに持っていた鋼色のキーを装填、レリーフ部分を折りたたんでオーツライザー部分を覆う形で強引に接続。すると、紅いプラズマとワラワラと鋼の飛蝗の大群がベルトから溢れだしゼロワンは同時に襲いかかる激痛に悲鳴をあげた…！

「ぐ…ああああアアアアアアアアアア!!!」

【 メタルライズ！ 】

【 S e c r e t   m a t e r i a l   飛電メタル！……】

蛍光イエローの装甲かわ剥がれ落ち、再構築される鋼色のアンダースーツに大群が形成した巨大な飛蝗のライダモデルが覆い被さり血のように赤い妖気を放ちながら鋼の装甲を形成していく。厄災の鋼飛蝗たちを紡いで刺々しく重厚に…無機質に…、やがて権現する姿

に離脱したアナザーゼロワンは口角をつりあげた。

「メタルクラスタホッパー…!! It's  
s h i g h Q u a l i t y .」

『仮面ライダーゼロワン メタルクラスタホッパー』…本来ならまだ産まれてはいけない鋼の蝗害、悪意に染まるゼロワン。複眼からは人間の制御を司る赤が消え、血が通わない若草色が灯る。

★ ★ ★ ★

「…あつ…ぐ…っ!? ……え?」

意識が朦朧とするような痛みからなんとか覚醒する或人…メタルクラスタホッパーに変身したままであるが、動ける。そして、今…自分がいる場所は…

「飛電インテリジェンス…? 戻ってきたのか?」

飛電インテリジェンスの一階にあたる広間…即ち、令和の世界。ただ、人ひとり居ない上に何処か嫌な空気が立ち込めている。何故、令和の世界に戻された…? どうして誰もいない…?

『…或人。』

…！ 不意にかけられた声に振り向くと見覚えのあるゼロワンに似た藍色の仮面ライダーが…

「父さん？」

仮面ライダー一型。変身者は父でありヒューマギアの飛電其雄。死んだはずの男が目の前に…彼は哀しげに或人に話しかける。

『…やはり、未来は変わらなかった。アークの出した結論は変わらない、人は滅びる。己の産み出した悪意によって。』

「父さん？ 何を言ってる…」

『その通りです。これが貴方の夢の行き着く先…』

「！」

イズ…？ また振り向くと彼女の姿が。しかし、その腹にはフォーライザーが装着され、その隣には仮面ライダー滅、迅、雷が並び立つ。いや、おかしい。彼女と並び立つこと自体がありえないが滅亡迅雷は既に壊滅し、その最期は見届けた…

「なんで、滅亡迅雷が…」

『当たり前だ。ヒューマギアが解放されない限り、人に悪意がある限り、我等の聖戦は終わらない。何度だって蘇る。人間が滅ぶその日まで…。未来は変わらない。』

無慈悲に告げる滅。

そして、イズはライジングホッパー・キーをライザーに接続すると仮面ライダー001へと変身し一型や滅亡迅雷のライダーと共に一

気にこちらへ襲いかかってくる！

迅の飛翔、滅の鋭い毒針、雷の刃、001の拳、明確な敵意が次々と迫り困惑など知るものと牙を剥く。『やめろ！』と叫んでも聞く耳を持たない……そして、ついに手を振るうゼロワン。

「…止まれ！」

——ギョオオ!!!

「!!」

あと一瞬のところ、神山は無限のレバーをきり、突出してきた『それ』を回避した……。といつても、左肩の装甲はガッツリ削られ内部が露出しプラズマが走る。突然、ゼロワンは神山の無限へ攻撃の矛先を向け、融けた鉄のような動きをする何かを武器として放った……。敵の策略による形態変化に警戒があと少しでも緩く、一歩でも踏み出していたら今頃コックピットを挟まれていたかもしれないと冷や汗をかくがまずは或人の容態を確かめなくては……



「社長、一体どうしたんだ!？」

「ぐ…ああ…ア…やめろ! やめろオ!!」

「社長、神山だ! 俺の声が聞こえないのか!？」

「ア…アアアアアアアアアア!!!」

しかし、ゼロワンは自身の装甲を削り、鋼の飛蝗の群れ『クラスターテンペスト』として神山や周囲の仮面ライダーたちに向けて乱射。予想外などころからの攻撃に戦いは大混乱へと包まれる。

「やめるんだ、飛電或人!」

「…ア!？」

このままでは、戦況が押し返されてしまうとギンガファイナリーの出力をあげて接近を試みるウォズ…だが、悪手だった。ゼロワンの眼には彼が飛翔し迫りくる『仮面ライダー迅』に映っていたのだ。すると、彼は手を翳し…

「ああああアアア!!!」

「何!?! ぐああああ!!!」

濁流の如きクラスターテンペストを放ち、一瞬で呑み込む。実に数秒…鋼の飛蝗の群に削りとられ変身解除され芝生に転がってしまう。ならばと、次々はキックホッパー…

「クロックアップ。」

「CLOCK UP」

クロックアップを発動し、速度で上回り無力化を狙う。されど、相

対するゼロワンはクラスターテンペストを構成する『クラスターセル』を装甲から切り離し自身を覆う繭のように展開…高速で四方八方から攻撃し火花が散るも、肝心の本体には届かない。……………そして、訪れる時間切れ。

「CLOCK OVER」

「…ちっ」

現実時間に戻されるキックホッパー…ゼロワンはそれを滅と認識すると砲撃形態のオーソライズバスターを掴み引き金を引いた…！

「ゼロワン・ダスト」

「ぐわああああ!?!」

クロックアップ終了を的確に狙った砲撃は完璧なタイミングで直撃。ウオズに続き、矢車も戦闘不能になり上海華撃団も穏やかではない。

「兄貴！ テエンメエエ!!!」

「よせ、シャオロン！」

矢車を傷つけられた怒りにシャオロンの王龍が神山の無限を飛び越え、炎のライダーキックを見舞うべく唸りをあげる……それを見上げるゼロワンの眼に映るのは王龍ではなく、暴走し襲いかかるギーカー。咄嗟にドライバーにキーを押し込み、クラスターセルの分身を創るとこれのライダーキックで迎えうつ。

「メタル・ライジングインパクト」

「ぐああああああ!!」

競り合うことなく、分身のライダーキックは王龍の右腕を破断しバラバラとパーツが散らばった。シャオロンは無事なようだが戦闘続行は不可能だろう。

一方、気がついたビルドは事態が想定以上の悪化が迫っていることに気がつき、加勢に向かおうとするがクローズが呼び止めた。

「戦兔!」

「なんだよ! ……ってまじかよ。」

最悪だ。無力化したはずのアナザーライダーたちが次々と立ち上がりはじめる……あの厄介な巨体のアナザー1号やアナザークウガまで。アナザーライダーは結局、この場で倒しきれぬ存在はほぼ皆無。持久戦に持ち込まれば敗北は必須な相手であり、だからこそレクスを抑えなくてはならなかったのだが……勝利の法則はより遠くなる。

『グウ…アアアア!!』

「ハヤト!」

「クソツ! 復活しきる前に潰すぞ!」

『あらあら、そうはいかないわ。』

「!」

オルタライダーたちもアナザーゼロワンが立ちふさがり動きを止められた。これにより、一気に瓦解していく戦力。アナザーライダーの無尽蔵な勢いにあちこちで悲鳴があがり、霊子戦闘機が大破してい

く爆発音が響く。炎が上がり、阿鼻叫喚：夢の舞台は蹂躪され燃えていた…。

ゆらめき照らす橙の光に映えながら、次なる獲物を見据えるゼロワン。それは、尚もショックから動けずにいるさくらの光武：クラスターテンペストを操作し、禍々しい鋼の曇が狙いを定めるように渦をまく。

「まずい！」

「さくら！」

咄嗟に庇いに入る神山と初穂。神山機が抱きしめる形で庇い、初穂機が身を挺して大挙して津波が如く推し寄せるクラスターテンペストからの盾となる。無論、そんな程度で防ぎきれぬわけもなく、3機ともゴリゴリと音を立てながら装甲やフレームをを抉られていき無残な姿へ変貌していき、これからもたらされる衝撃だけでも凄まじいものだった。

「ぐ…：おおおおおおお!??!?」

「ううう…：ぐ!?!?」

「神山隊長！ 初穂！」

クラスターテンペストがコックピットまで到達するのもあと数秒とかからないだろう。その時は自分たちは鋼の飛蝗たちに喰い破られ肉片になる…

「うああああ!! くっそおおおおおおおおお!!」

悔しく、虚しく吼える初穂。無限を限界を迎え…

——ドガアアアアン!!!

凄まじい爆発が視界を覆ったのであった。



クラスタースセルを装甲に戻しながら、爆煙の先を見据えるゼロワン  
：彼の見る世界は目の前のそれと相成っていないがあることだけは  
共通している。……それは、どういうわけか空間が歪に歪んでいるこ  
とだ。

：やがて、晴れてくると『銀色のオーロラ』が無限を庇うように遮つ  
ており、そこからひとりの青年と黒い無限が現れる。

「やれやれ、面倒なことになったな。」

青年、『門矢 土』は溜息をつきながら、ネオ・ディケイドドライバー  
を巻きつけ装着。そして、黒い無限に告げる。

「コイツは俺に任せろ。お前が必要なのはここじゃない。」

「…」

黒い無限は一瞥するようにカメラを動かすと、そのまま後退… 邪魔者は居なくなつたと確認するとカードを取り出してゼロワンと対峙する。しかし、ゼロワンは彼を上手く認識出来ないのかクラスターセルを待機させるものの中々攻撃してこない。

「世界の嫌われ者は幻想にすら映らないか。」

やれやれと、溜息をつくなり『本来の力』を宿したカードをバックルに装填し、変身シークエンスへ入る。

「変身。」

「KAMEN RIDE …DECADE !!」

バックルから飛び出す赤い板たちがゼロワンを牽制し、幻影が重なってスーツを形成した彼の頭部に刺さりバーコードのような顔面を形成しボディにマゼンタの色を発現させた。それは、まだ太正世界で確認されていない仮面ライダー…あらゆる並行世界を渡り歩き『悪魔』『世界の破壊者』と恐れられるオーマジオウに届くやもしれぬ多次元世界においても規格外に部類される存在…

…『仮面ライダーディケイド』。その瞳は何を見る？

## 燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！ VI

デイクイド：新たな仮面ライダーの登場に再び風向きが変わりだす。

霊子戦闘機の装甲すら削るクラスターテンペストを襲いかかる波状攻撃すらものともせず、ライドブツカーの剣捌きのみでいなしていく。捌ききれない槍のような場合のみはかわしつつ、鋼の嵐に喰らいつかせる隙を与えない。

一方の黒い無限。動けない神山たちに駆け寄ると接触して通信を繋ぐ。

【兄さん、初穂！ 大丈夫か？】

「！ …その声、星児なのか!?!」

「お、おまえ!! てか、その機体……」

【話は後だ。動けるか?】

黒い無限の搭乗者は星児。彼は神山や初穂の機体の様子を確認する… 光武と無限どちらも喰い荒らされ酷い有様。辛うじて動けるするだろうが、戦闘はどちらにしる無理だろう。あと戦闘続行に耐えるのはアナスタシア機だけだ。

「仕方ないか。兄さん、初穂！ 霊力をこっちに回してもらおうぞ。クラリスとあざみを叩き起こす！」

人手が足りない。ならばと、星児は『己の力』を解放する。オーラのように霊力を滲み出させると神山と初穂をこれで包み、更に気絶しているクラリスとあざみへと更に飛ばす。光の帯は無限ごと彼女たちを優しく包みこみ、霊力を流し込む…すると、ふたりは『うっ』と呻きながら目を覚ます。

「私たち一体…」

「この光は…？ 霊力が戻ってくる？」

再びレバーを握り、立ち上がる2機の無限。一方…

「なんだ、これは… 力が抜け…る…？」

まるで血を抜かれたような気分の悪さが襲いかかる神山。連動するように無限の出力も下がっていく… ふらふらとし、バランスを崩すがそれを星児機が支えて転倒を防止。

「クラリス、あざみ！ こっちの離脱のフォローを頼む！ アナスタシアは生身で倒れている奴らを！」

後を復帰したクラリスとあざみ…アナスタシアたちに任せ、背部に格納していた槍を取りだし展開する星児機。ブンツと振るうと戦場を見渡し、一気にアクセルを踏み込む…さあ、本当の反撃はここからだ…。

「バケモノどもが！ 一匹残らずぶった斬ってやる！」

「…あれは」



すみれを追い詰めていた夜叉だったが、会場の異変に気がつき視線をコロシウムに向けた…。目に映るのは黒い無限：縦横無尽に力づく駆け回り、槍で次々と降魔たちを薙ぎ払いながら一気に異形の軍勢の勢いを削ぎ押し返す様はより目立つ。そして、湧き出る霊力……  
ああ、とても懐かしい。『愛したあの人』と同じ匂いにする…

「……シンジロウ！」  
「！」

胸が掻きむしりたくなる程、熱くなる。目の前のこの女なんぞどうでも良い、口角を釣り上げると翼を羽ばたかせVIPルームを己の開けた穴から飛び去っていく。慌て追うすみれだが、飛べない彼女では追う術は無い。

飛び出した夜叉は真っ直ぐ星児機へ飛んでいき、喰らいつくように黒いボディにとりついた。そのまま、コックピットをこじ開けるべくミシミシと力をこめていきはじめた。

「シンジロウ！ああシンジロウ!! 会いたかった! ずっと、ずっとこの日を、瞬間を待ち焦がれていたの!! 開けて!開けてツ!! はやくお前の顔を見せて…!」

「ツツ! 俺に触るな!!」

なんだコイツ!? 悪寒を感じた星児は無限で暴れまわりながら強引に彼女を掴むと引き剥がして放り投げる。投げたところで、やつとその姿と声を認識した……

「お前は……?」

知っているこの女を。

もう顔と声は十年以来届くことは無かった。……そして、降り立つ彼女は不敵に笑いながら告げる。

「悲しいものですね…忘れるなんて、この夜叉を…いいえ…」

——真宮寺さくら、貴方の『本当の母』を。

「「「「「!!」」」」」」

花組だけではない、ロンドンやベルリンにも衝撃が走る！特にさくらに至っては言葉を失い、ランスロットも『どういうことだ!?!』と気を散らした隙を突かれて魔操機兵から一撃をもらってしまふ。更に、会場に混乱が広まる中…

「——…ほお?」

当の星児だけは動揺の一片もなく、むしろ鼻で嗤うくらい冷静だった。

「よくもまあ、そんな笑えない冗談を言いやがる。お前、偽物のつもりにせよ、何にせよやる気がなさすぎてビックリするぜ。つか、シンジロウって誰だよ。」

「…? 私が分からないの?」

「知らねえな。少なくとも姐さんは一度も俺を息子と呼んだことはない…そして、俺の名前は星児! 母をトップスタア神崎すみれに持つ男! テメエみたいなパチモンには縁も所縁もありやしねえ!!」

ガッ! と大きく担架をきる星児…反対に強く動揺をみせたのは夜叉だった。ああ…と崩れ落ち、涙すら流し…おいおいと掌で顔を覆い泣き始める。

「うう、うう… 覚悟はしていました。ずっと側に居れなかった、だから拒絶はされることも…。そうであっても、やはり母の胸は痛みます。張り裂けて血が流れる程に。名前もあげられず、親として認められないこととはこんなにも悲しいのですね…」

「…何をほざいている？」

「良いでしょう、今日は退きます。ですが、アナタを決して諦めない… 私は夜叉、『この時代を担う者』！ 覚えておきなさい！」

「ま、待てー！」

すると、再びアイマスクをつけて夜叉は羽ばたかせ一気に華撃団大戦会場から離脱していく…。弾丸のような飛翔は霊子戦闘機で追うのは無理だろう…仕方ない、気になるにはなるが、今は事態の収束を急がねば。星児は辺りを見渡し、ランスロットのブリドヴェンを見つめるなり群がる降魔やらを蹴散らしながら少女騎士の後ろに凶々しく背中合わせに立った。

「よお、ロンドン最強の騎士様が随分と苦戦してるんじゃないやねえか？」

「星児…！ (その機体、やっぱり君は…)」

ランスロットは察す…彼は自分たちを、ロンドンを選ばなかったのだと。僅かな間、実にひと呼吸ほどだったが星児もまたかの胸の内を感じとる。

「今、ゴチャゴチャはどうだっていい。フォーメーションいけるか？」

「…ああー！」

どんな感情だろうと泣いてる暇はない。剣を握り、邪悪を祓うが我らの使命…

星児機の無限が前に立ち姿勢を低く構え、ランスロットのブリドヴェンが後ろで双剣を掲げて天を仰ぐ。同時にふたりの霊力は高ま

り、更に星児は己の練り上げた靈力をランスロットへと注いで彼女の力を限界以上にまで引き上げる…！吹き上がる靈力は嵐の如く、刃は激しく唸る稲妻を帯びて煌きを放つ！

「グランドツ・ストリイーム!!」

そして、解き放つは大地すら穿つ嵐の龍…紫電を孕む竜巻。次々と降魔を呑み込みながら、ついにはアナザークウガに直撃…そのまま勢いで押し込みアナザー1号をも纏めて地に叩きつける。予想外のダメージに巨体は互いにもつれ合い起き上がることに叶わず『グガアア…』呻きをあげる…再び復帰するには時間がかかるだろう。

この隙を逃す手は無い。

「アーサー!!」

「…わかっている…」

トドメはアーサー駆るブリドヴェン。刃に聖なる光を迸らせ、走る、走る…跳躍。狙うは異形の脳天、今度こそ全力をもって復活の余地どころか塵ひとつも残さず消しとばしてくれ…ッ！悪は誇り高き騎士の剣に錆と散れ！

「…エクスカリバー!!!」

——ドゴオオ!!

立ち昇る極光の金色の柱。アナザライダーですら呑み込み、文字通りに形すら残さずに滅しきる。アナザウオツチすら残らない凄まじい威力だったが、同時にバックファイアでアーサーの機体は限界を迎えて地面に不時着する。大技の代償、整備無くしてはもう動かせまい…

「流石に、全力で放つのはキツいな…。さて、あとは……」



…まだ終わっていない。

苦しみもがきながら暴走するゼロワンを相手するのはデイケイドとベルリン華撃団。アイゼンイエーガーからの銃撃、デイケイドの剣…どちらも凄まじいものだがクラスターセルに阻まれ届かない。どんな攻撃もあと一歩手前でどうしても防がれてしまう。

焦りを覚えるエリスだったが、一方のデイケイドは余裕そうに鼻を鳴らすと1枚のカードを取り出した。

「そろそろ、幕引きだな。蟲の王には時の王だ。」

「KAMEN RIDE… ZI—O」

「カメンライダーーツ！ ジオウ！！」

バックルにカードを装填するや、腕時計のようなエフェクトに包まれて全く別の姿へ変身する。時計の針のような2本の角に何より目を惹く顔面の『ライダー』の文字…時の王者の力を操る姿、Dジオウである。この姿は或人も『本人』で見たことがあるのだが、ゼロワンは反応することなくクラスターテンペストを走らせる。しかし、Dジオウは焦らず見極める。

「ふむ…お前の未来が見える。」

Dジオウの能力…それは、オーマジオウに匹敵するかもしれない力。故に、『未来を見通すこと程度なら、造作もない』。貫こうとするクラスタータンペストの位置を予見。右、左、上…

「大体、わかった。」

走りだし、左右に身体をのけぞらせながら左右の回避、上からくるやつはスライディングで…！これで一気に間合いが詰め…

しかし、ゼロワンの無慈悲なクラスタータンペストの横薙ぎ払いが牙を剥きDジオウの姿は消えた。

「ああ?！」

エリスはDジオウが削りとられたのだと思った…だが、それはすぐ勘違いだとわかる。

「甘い…」

「!？」

ひと呼吸遅れてゼロワンの背後に瞬間移動したDジオウ。素体が頭になったガラ空きの背中をライドブツカーで一撃しはじめてまともなダメージを通す。ゼロワンもあまりの超理論的な攻撃が痛手になったのかすぐに復帰が出来ない…

「これで終わりだ。」

「FINAL ATTACK RIDE… Z Z Z I—O」

これ以上、長引かせることはないと容赦なく必殺技を発動するDジオウ。頭上に、時計のようなエネルギー体が浮かぶや縦横無尽に時計の針のような光の刃でゼロワンやアナザーライダーたちを斬！斬！

と切り刻みゼロワンは問答無用で変身解除させ、アナザーライダーたちは爆発四散。残った降魔も霊子戦闘機が撃破していき、ついには全滅。

…こうして、混迷を極めた戦いは終わりを迎えたのだった。

## 燃ゆ！鋼が吹き荒れる平和の祭典！！ VII

「ダブルライダーキックー！」  
『ぐっ!?!』

1号オルタと2号オルタに追い詰められたアナザーゼロワン。合体必殺技を防御したために腕はボロボロ…。視線をずらせば自分の連れてきたアナザーライダーたちはDジオウを前に敗走していた。もうここをひっくり返すことは不可能だしメリットも無い…。なら、もう長居は無用。

『今日はここらへんぐらいにしておいてあげるわ。』

「待て！」

「クソッ！」

ありきたりな捨て台詞を残して、跳躍してさっさと撤退。追おうにも呼ばれたタイムマシーンに乗り込まれればもう追う術は無い。ここまでか…。手痛い打撃を受けながら辛くも敵を退けた仮面ライダーたちは変身を解除。思いもよらない激戦に華撃団の団員共々、疲弊を顕にする。まあ、無理もないだろう。

「取り敢えず、しのぎきったか……。ハヤト？」  
「…」

そんな中、ハヤトは黒い無限を注視する…。ランスロットと放った合体技からして、搭乗者は間違いなく星児だ。だが、彼の機体は用意していないとすみれは言っていたはずだが…





「…うつ!？」

『或人社長!』

「イズ…?ここは…帝劇の病室?」

目を覚ます或人… イズの除きこむ顔と清潔なベッドにシート… 覚えがある、帝劇の病室だ。自分は気を失っていたようで、いつ担ぎこまれたかは定かじゃない。最後の記憶はアナザーゼロワンに引きずりこまれた悪夢の中… 其雄やイズと滅亡迅雷が束になって襲ってくるおぞましいものだった… あの敵に仕込まれたプログライズ・キールの力か?

そこは考えたところで自分では憶測を巡るばかり。取り敢えず、現状を確認しなくては…

「…何が起こったんだ?」

『敵の未知のプログライズ・キーにより、ゼロワンが暴走し多大な被害を出しました。プレジデントGの仮面ライダーと無限に乗った星児さんのお陰で敵は退けられ、暴走したゼロワンも制圧されたのですが、現場はかなりの混乱が続いているようです。』

「そんなことに… 不破さん刃さんは? 花組の皆は無事?」

『命に関わるような傷はだれひとり確認されていません。刃さんは回収した敵のプログライズ・キーの解析を… 他のメンバーは療養やそれぞれ事態への対処にあたっています。或人社長も今は休んだほうがよろしいかと…』

「そうはいかない。皆、働いているなら俺も動かないと！ ……痛っ!？」

迷惑をかけた身として黙って寝ているわけにはいかず、起き上がるうとするが肉体はDジオウから受けたダメージが残っておりろくに動かせない。深く傷口が裂けてくるような痛み、苦悶の声をあげかける中、病室に入ってきたのは初穂と令士だった。

「社長さん、目を覚ましたんだな。気分はどうだ？」

「大丈夫だよ、初穂ちゃん。色々迷惑かけたみたいで…ごめん。」

「気にすんなって。あの降魔どもの仕業だし、社長は悪くねえ。しかし、まあプレゼジデントGもあんなすげえ仮面ライダーが仲間にいるならさっさと出してくれりゃこんな被害が出ずに済んだのによ…これだから、守銭奴は。ま、星児の奴も戻ってくるみたいだし心配すんな！」

初穂は落ち込む或人をグイグイと励まそうとするが、彼女も怪我が服の合間から見てとれる……恐らく、クラスターテンペストによる攻撃の被害が彼女自身にも少なからずあったのだろう。

…一方の令士は複雑そうな顔をしていた。

「その星児の無限ことなんだが…俺はあの機体を知らない。それに、すみれさんやカオルさんにも聞いてはみたが…星児の無限を手配した覚えは無いそうさ。」

「は？ 何言ってるんだよ？ 無限は帝国華撃団の霊子戦闘機だろうが。何にせよ、星児は戻ってくるって決まったようなもんだって。」

「…初穂ちゃん、星児は誘拐されてるんだ。それが、いきなり無限で会場に現れた…どう考えたっておかしい。それに、アイツは帝劇に戻ってこないでまた音信不通だ。とてもじゃないが、安心は出来ない。」

星児に対して楽観視する初穂に、令士は大きい不安を胸に抱いていた。黒い無限は令士やすみれ支配人たちも覚えが無いとなれば『帝国華撃団と無関係な第三者』が手配し、星児に与えたということにはなる。無論、そんなことが可能な人間など限られてくるが…

「それだけじゃない、俺達の無限は殆どボロボロだ。特に神山や初穂ちゃんの機体はヒューマギアたちの力を借りても華撃団大戦に出すなんてとてもじゃないが無理だ。」

更に令士の懸念は花組の無限の損傷にある。夜叉の攻撃をまともに受けたが強い衝撃だけだったあざみとクラリス機はまだ良い、さくらの光武も不要になった彼女以外の光武から継ぎ接ぎしてやれば誤魔化せるが、問題はクラスターテンペストをまともに食らった神山機と初穂機。大破一步手前まで文字通りに喰い破られた2機は見るも無残にひしゃげた穴だらけとなり直視に耐えない有様だ。

そうなれば、ほぼ全機の無限の本格的な修理が必要だが、物資・資金・人手・時間…どれも圧倒的に足りない。

「…なら、どうしろってんだよ!」

「初穂ちゃん、落ち着いて!」

そんな突きつけられる現実には初穂は一転して声を荒げる。楽観しているように見えたのは彼女もまた不安を誤魔化すためだったかもしれない…ドツと溢れた感情は抑えが利かず、或人も何とか宥めようとするが怪我人の今では無力であった。

そんな時、病室へあざみが入ってくる。

「目を覚ましたんだね、社長。指令室で皆が待ってる。」



帝国華撃団指令室…或人らが訪れた時の空気はまさに最悪だった。

この場にいるのは、花組に上海華撃団とロンドン華撃団…他にもすみれに付き添うカオルの姿もある。神山とすみれは並び立ち、険しい顔をするシャオロンとユイと対立する形になっている。一方、さくらは席に付いたまま、焦点があわなない目で何かブツブツと呟きながら俯いた状態で、クラリスはどうしたらいいかオドオドするばかり…。アーサーとランスロットは流れを静観しているようだが…。

会話をまず始めたのはシャオロンだった。

「お、来たな。社長、悪いが、アンタを拘束させてもらう。」

「え…」

「事情は聞いている。だが、アンタは実害を出しちゃった…見過ごすことは出来ない。一時的に俺達、上海華撃団で預らせてもらう。ドレイバーは置いてけ。」

或人の拘束…メタルクラスタホッパーの暴走が原因だろう。本人の意思ではないが、大きな被害を出した以上は目を瞑るのはあまりに難しいということか。一応、『悪いようにはしないから…』とユイがフォローを入れるが、無論のことイズが黙っていない。不服をすぐさま申し立てようとする…だが、或人が『イズ！』と制止する。

「わかった。今回は俺の油断が招いた被害もあるから…責任はある。」

『或人社長……!』

「…すまない、理解が早くて助かる。アンタには助けてもらった恩もある…早めに解放できるよう力は尽くす。」

或人は承諾するが、シャオロンとしてもこの対応は本意であるようであった。帝国華撃団と同じく、帝都を守る者として仕方なくという意味だろう…本気で逮捕などそういう意味合いではない。

そして、『さて…』と向いたのはすみれだった。

「支配人、次はアンタの番だ。…分かってるよな?」

「……夜叉と名乗った上級降魔のことですか。」

その瞬間、さくららがピクツと反応した。花組の他の面々たちも顔が険しくなる…。仮面ライダーにまで変身したあの降魔、確かに強かったがそれだけではない雰囲気である。

「あれは誰だ?何か知らないのか…?」

「さあ。わたくしたちはなにも。寧ろ、こちらも戸惑っているばかりで……」

「何も知らねえってか、『あの顔』で。通じると思うか…少なくとも、俺たちより上の連中にソレで?」

すみれが惚けている…というわけではなく、本当に知らない様子。だが、シャオロンは夜叉に対して追求を続ける…あの降魔が一体、どうしたのだろうか?或人は首を傾げるはがり…

「……あれは『真宮寺さくら』さんです。」

ぼそり… さくらが呟いた。今まで黙っていた彼女は弱しくもつらつらと口を動かしはじめの彼女。

「…間違ありません。…あの顔 …あの声 …それに、あの技『破邪放神』。真宮寺さくらさん以外、何者でもありません。」

「!! …さくらさん、それは違いますわ!」

不穏な空気がますます強くなる。一方、或人は誰それ…という調子で、こつそりクラリスへ助けを求めめる。

「…(クラリスちゃん、その真宮寺さんって誰

?)」

「…(すみれ支配人と同じ、旧花組のメンバーでさくらさんの憧れの人です。10年前、すみれさんを残して他の隊員と失踪したとは聞いていましたが…)」

なる程。それにしても、さくらの不安定度を見るに余程心酔していたのか、普段は明るく快活な彼女からは信じられない表情である。そして、いつもなら礼儀をもって接するすみれ支配人にすら喰ってかかる。

「ならなんで、あそこまで似ているんですか! …それに、星児さんのことも知っていた! …そして、自分が本当の母親とまで言ったんですよ

!? それに、破邪放神は星児さんだつて使える…これで偽物なんて話  
が通らないです!」

「さくらさん、落ち着いて…」

クラリスが宥めようとしますが、感情のタガが外れたのか止まらない  
さくら…シャオロンが口を挟む間も入れず、更に激しくすみれを糾弾  
する。

「答えて下さい支配人! 星児さんは真宮寺さくらさんの実子ではな  
いんですか!? 真宮寺さんは星児さんを取り戻しにきたんじゃない  
んですか!?!」

「さくら!! いい加減にしろ!」

とうとう神山すら怒号をあげる…その時だった。

「え……それ本気で言ってるの姉ちゃん?」

——聞き覚えがある間の抜けた声に一堂が振り向く。

或人の後ろ、いつの間にか彼はいた。

「…星児？」

「オッス、おふくろ！ 今、帰ったぜ。」

神崎星児… 渦中の問題児の帰還である。



語られる過去。夜鷹の翼。 I

「おいおい、どうしたんだ？揃いも揃って辛気臭い顔をして…」

とぼけた顔をする星児： いや、戸惑わないほうがおかしい。軍服のような黒いパイロットスーツに身を包み、突然の帰還をしてきた彼。突然の展開に誰もが何を口にしたら良いかわからない中…：まず最初に彼に問いをぶつけたのは神山。

「星児：お前、今までどこに… それに、その格好…」

「お？これか？ 格好いいだろ？ おニューの制服さ。流石、世界一はセンスが違う。」

パイロットスーツは帝国華撃団でもロンドンのモノでもない。…いや、世界一？ 待てよ、このスーツの意匠は何処かで… それに、襟にある鉄十字のエンブレムのバッジは!?

「ベルリン華撃団のエンブレム…!？」

「その通りさ。コイツはベルリンのスーツ、俺用の特注品。」

彼の着るスーツはベルリン華撃団の物…その発言には花組たちは愚か、ロンドン組も耳を疑う。普通、自らが所属する華撃団以外のパイロットスーツに袖を通すなど普通はありえない…ましてや、特注品が造られるなどまるで隊員として所属していると同義だ。

「星児…これは、どういうことだ!!」

「兄さん… 俺はもう帝国華撃団でもロンドンでもない。」

——世界最強の華撃団、ベルリン華撃団の一員なのさ。」

—!?

その場、全員に衝撃が走る。特にランスロットの動揺はかなり強い…

「何を言ってるのさ、星児。笑えない冗談はやめろ…」

「冗談じゃない。ここに司令書もある。プレジデントG勅命のな。」

星児が懐から取り出した封筒の中身…突きつけられた書面はしつかりと転属の旨を書かれたプレジデントGのサイン入り。これだけでも充分だが、ダメ押しとばかりに非情にも証人となる来訪者が現れる。

「勝手に話を進めるな星児。まずは、私の挨拶からが先だろう。」

「貴方は特別待遇とはいえ、下っ端なんですから立ち振る舞いを考えなさい。」

ベルリン華撃団隊長の『エリス』にあざみほどの小柄なオレンジのツインテールの娘『マルガレーテ』…もうベルリン華撃団加入はどう足掻いても否定出来ないまで証拠が揃ってしまった。更に混沌と混乱が拡がる中、すみれ支配人は事情を確認するため、話を進めようとエリスに向き直る。

「ベルリン華撃団隊長、エリスさんですね。先の奮闘ぶりはわたくしも見ておりました。」

「はっ！ 旧・帝国華撃団のすみれ様にそのような言ってもらえるとは光栄の極みです。」

「しかし、連絡も無しに来られるのは些か礼儀に欠けるのでは？ それに、星児のことについても説明をお願いします。」

「その点はお詫びします。しかし、直接伝えるべきことがあるため失礼を承知で参りました。今更、言うまでもなさそうですが、ミス・すみれ…あなたのご子息をこちらで預かることになったことです。」

やはり、星児のベルリン所属は嘘では無いらしい。すると、『待った！』と声をあげたのは今まで沈黙を続けていたアーサーと神山だった。

「エリス隊長、その話が事実ならこちらの育てていた隊員を話を通さずに引き抜いたという形になりますよ。下手をすれば国同士の問題になることは承知の上か？」

「それに、無限は帝国華撃団の機体だ。なんで、ベルリン華撃団が所持しているんですか!？」

神山はともかく、アーサーは静かながら声に怒りを滲ませていた。それはそうだ、いざこざがあつたとはいえ、いずれは正規の隊員に起用を考えていた見習い隊員を事実上、ベルリンに横取りされた形になる。無論、ロンドンとしては面白くない。それくらいはわかるはず。

すると、エリスは『…そろそろか。』と呟くと告げる。

「間もなく、プレジデントGによる全華撃団に向けた公式会見が開かれます。それをご覧になって頂ければ全てが理解して頂けるかと。」

——なに？

確かに今回の襲撃に関して会見を行うとは通達は予めどの華撃団にも入っていたが、今回とどう関係あるのだ？ そんな各々の疑問を他所に、指令室のモニターに映像が映り…プレジデントGの姿が現れる。会見ということで、こちらの様子も声も届かない一方的なものだ。果たして、彼は何を語ろうというのか…

【華撃団諸君、こちらプレジデントGだ。先の襲撃、手痛い打撃をこちらにも被ったが…まずは君達の奮闘を讃えよう。奇跡的に死者はなく、怪我人も数えるほど。あれだけの戦力相手によく戦い抜いた…流石、

華撃団の名に恥じないモノノフたちだ。感謝する…」

相変わらず鼻につく話し方だ。事実上の華撃団…W・L・O・Fの最高幹部とはいえ、いかにも上から見下す雰囲気は聞く側は心地よいものではない。…そして、とってつけたような称賛もそこそこに『…だが』と本題に彼は続ける。

「今回、これで露呈したのは華撃団同士の連携力の脆さ…個々の力は際立つ物があるけど、此度のような有事になれば初動はもたつき、各華撃団で好き放題に非効率に対処にあたる始末。もつと、組織系統がしつかりしていれば、被害は抑えられたのではないか？ 人々に不安を与えることは無かったのではないか？ 私はそう思えてならない…」

一転して小言。確かに国の垣根を超えた連携がスムーズに出来れば、彼の言うとおりの結果だろう…出来れば苦労しない。国が違うということはいくらW・L・O・Fの傘下だろうが別組織だ。足並みを揃えるのは至難の技だ。これだけなら現場を知らない上司の理想妄想だが『さらに…』と彼は続けていく。

「いくつかの華撃団が監察対象としている特記対象『仮面ライダー』という者たちについても懸念がある。敵の言うことを鵜呑みにするわけではないが、残念ながら我々に被害を出した輩もいるそうだ。」

映像が切り替わり、映し出されるのは仮面ライダー夜叉にメタルクラスタホッパで暴虐の限りを尽くすゼロワン。これには或人も思わず顔が引きつる。クラスターテンペストで霊子戦闘機を破壊する様子までバッチリ映されており、これでは何も知らない人間から見れば悪魔そのものだ。これを見せてプレジデントGは何を意図しているのか…

「…だからといって、彼等全員の拘束は考えてはいない。全てが悪の使徒と断定すればそんなことは敵の思うツボだろう。よって、仮面ライダー諸君にも名誉挽回の機会を与える。これから、生まれ変わる我々と共にあることを願うよ。…これより、W・L・O・F. は改めての華撃団大戦の開催並び、全ての国の垣根を越えた『世界統一華撃団』の設立を宣言するッ!」

——世界統一華撃団…!?

衝撃的な発表に花組は愚か、ロンドンや上海たちも目を見開く…：…国の垣根を越えるとは聞こえはいいが、いくら有事とはいえ簡単なことではない。そんな夢物語を自分たちのトップが言っているとなれば正気を疑う。…ただ、ベルリンと星児のみは特にリアクションを見せることなく平然と構えていた。

「——これに先駆け、華撃団大戦のルールを変更する!」

——1つ、演舞部門の廃止、試合は命を賭けた実践形式へと変更

——1つ、敗北した華撃団は即解散。解散と同時に世界統一華撃団へと吸収される

——1つ、特記対象『仮面ライダー』を保護している華撃団は特記戦力としてこれを正式に華撃団戦力として編入させ、華撃団大戦に出場させることを義務付ける。尚、特記対象が即時に承諾しない場合はその華撃団は失格扱いとし、拘束させてもらう。

「…以上だ。この大戦の勝者こそが世界統一華撃団のリーダーとなり

指揮をするその榮譽を、誰が賜るか楽しみにしている。各華撃団…健闘したまえ。」

画面越しの一方的かつ理不尽な発表が終わる。

歴戦の猛者であり、修羅場を超えてきたすみれですら開いた口が塞がらない有様の会見。何をどう言ったらわからない…沈黙が流れる中、フツと笑いながらそれを破ったのは星児だった。

「つまり、そういうことだ。国境なんて意味が無くなる…そして…俺達、ベルリン華撃団は世界統一華撃団の中心となるのさ。いやはや、改めて聞いてもぶっ飛んでるわコレ。」

改めて聞いた… 即ち、プレジデントGは予めベルリン華撃団に話を通していたということか。そして、すみれは流れから星児がベルリン華撃団に居る理由を察す。

「そして、あなたと黒い無限は旧・華撃団の象徴…世界統一華撃団のプロパガンダというわけ？」

「やっぱり、頭が回るねおふくろは。そのとおり。プレジデントGが失意の俺に手を差し伸べて大役を任せてくれたってわけ。それに、作戦成功の暁には俺は帝国華撃団の隊長の席が約束されてる。」

旧・華撃団の忘れ形見…確かに、その肩書は国境なき華撃団の統率のプロパガンダとして星児は申し分ない。見返りは帝国華撃団隊長の椅子…つまり、神山を追い落としてとって代わるということ。無論、花組や神山本人も黙ってはいない。

「お前、まだそんなことを！俺達とやり直したいって言ったのは嘘だったのかー！」

「おいおい兄さん、俺は隊長を諦めたとは一言も言っていないぜ？勿論、今の花組も認めてない…その上、俺の居場所すらない帝国華撃団。」

だったら、いつそのこと俺自身の手でトドメを刺してやるのも『愛』じゃないか?…だろ?」

「…本気で言ってるのか?」

「本気だよ。再建に命を燃やして走ってきた俺にはその権利がある。」

『愛』とまで抜かす…なんと身勝手な。怒りが信じようとした心の方だけ振り幅が大きく膨れあがる…ギチチと拳を握る神山。勢いよく振りあげられた手は…

——バシッ

「やめろ、神山。」

「ランスロットさん!」

後ろからランスロットに掴まれて止められた。すると、彼女は愛剣を引き抜き切先を星児の喉元に突きつける。…鉄の本物の刃、やろうと思えば簡単に人肌などバターより容易く切れる鋭さだが星児は微動だにせず彼女を不敵に笑う…それは、怒りに任せる騎士への嘲笑か或いは…

「…見損なつたよ。君が簡単に権力を前に尻尾を振るような奴だなんて思いたくはなかった。こんな程度の奴にわざわざ海を超えてきた自分にすら情けなさを感じるほどにね。」

「ロンドンには悪いな。そうだ、難ならお前を俺の帝国華撃団の一員にしてやつても良いぜ?プレジデントGに口添えすれば、副隊長を任せても…」

「それには及ばない。アタシたちが優勝すれば良い…それだけのことだ。」

「優勝ねえ? 前回、決勝戦でベルリン華撃団に手も足も出なかったのは何処の誰だっけな。」

星児の煽りに更に空気は悪くなる…このままいけば、斬り合いに

なってもおかしくない。流石に血が流れる事態になれば、華撃団大戦の出場にも関わる事態…或人も固唾を呑む一触即発。これは止めなくては…と前に出ようとしたその時

「……星児、ひとつ聞きたいことがあります。」

すみれが再び問う。この状況においてまだ拭えない疑問があった。

「本当に、プレジデントGが本当にそんな都合の良い条件を出したから誘いに乗ったと？」

「そうだよ。でなきや、何であんな奴の下に…」

「そこが腑に落ちないんですよ。毛嫌いしている輩に決して同調しないあなたが、プレジデントGにいくら好待遇をチラつかされてもなびくはずがない。

……なら、実際は逆…『呑まざらえない条件』を突きつけられたのでは？」

「…！」

星児の顔色が変わる。ランスロットに剣をつきつけられても尚、あつた余裕は翳りを見せ、神山たちも異変に気がつく。凶星を突かれた？…だとしたら、話は根底から覆る。『プレジデントGの甘言に乗った』ではなく、『プレジデントGに脅された』ということだ。

すると、マルガレーテがわざとらしく声をあげる。

「あーあ、バレちゃいましたね。」

バレた？　すぐに『黙れ！』と遮ろうとした星児だが彼女は止まらない。



「ご察しの通り、好待遇の話は出鱈目です。嘘でも突き通せるならと黙って見てましたが、流石に見苦しい。文芝居はここまでですよ。」  
「やめろ……！やめろって言ってるんだ！」

「全ては、あなたがた、帝国華撃団とロンドン華撃団を救うためです。」

## 語られる過去。夜鷹の翼。 II

……時を遡ること、華撃団大戦直前 星児失踪当日

世界華撃団大戦会場にて

「世界統一華撃団構想……そのプロパガンダになれと？」

プレジデントGから全てを聞かされた星児……全ての華撃団を統合した世界統一華撃団にそのシンボルとして自分を任せる。そして、今まで防戦ばかりだった降魔へ打って出る。そのために、ベルリン華撃団へと移籍し与えられた黒い無限で華撃団大戦に出る……その答は

「……お断りだ！誘拐紛いまでやって、そんな戯言をよくも！」

現在とは真逆の『拒絶』。当たり前だ、帝国華撃団やロンドン華撃団への不義に値する行いなど出来るわけがない。だが、予想済みと表情筋で語るようにプレジデントGは口角を吊り上げる。

「こんな手段に出る……だからこそ、本気だと受け取ってもらいたいのだが。ふむ、別に私は君が『帝国華撃団の忘れ形見』という肩書だけで判断を下したわけではない……君の能力『鎖血（くさりち）』も換算に入れてのことだよ。」

「……!? なぜ、それを……」

「ミス・すみれの真意は解らないが、どうしてこれを隠したかったのか。他者に自らの霊力を与えるというミニマムな能力なら、勘定に値すらしらないが……『他人と霊力を繋ぎ互いに共有する』となれば話は別だ。」

クラリスの重魔導と同じように星児にも生れついで資質に由来

する能力がある…それが『鎖血（くさりち）』。表向きは他者への己の霊力を付与する程度とされているが実際は、自分や周囲の霊力を共有状態、部隊全員の霊力を集めてそれぞれに再分配なんてことが可能になる。

霊力は生まれついで許容量があるのだ。特に女性は持ち前の霊力が潜在的に高い傾向があり、他諸々の条件から霊子戦闘機を動かすに必須な条件であるものの、個人差が拡がりやすい。そして、それらの問題は統一華撃団という大きな部隊となれば憂慮すべき課題になる。

しかし、星児の能力である『鎖血』はそれらを解決する可能性を秘めているというプレジデントGの見解。間違つてはいない…いないだろうが、すみれが内外共に伏せていたはず。それを知っているのはどうということか。

「君は素晴らしい。そして、その力は活かすには、然るべきところにあるべきだ。」

「…なる程、帝国華撃団を作戦の根幹に関わらせたくないわけか！」  
「否定はしない。実際、世界中に増えすぎた華撃団の整頓という意味合いもあるのだからね。これを理由にかえって再建の聲が高まっては本末転倒だろう。」

転属の意味合いは他にもある。仮に帝国華撃団名義で星児が作戦の中核を為せば、それは帝国華撃団が大役を果たしたという実績になるのだ…これを快く思わないプレジデントG。かといって、ロンドン華撃団では作戦への編入などに諸々の不都合がある…だからこそ、世界最強の華撃団であり、中核を為すであろう自分に親しい駒のベルリン華撃団に置きたいというわけか。

「世界の華撃団はいずれ設立予定も加えれば、それこそ国ひとつずつが持つに至るまでなる。このままでは、いずれW・L・O・F.の管理は行き届かなくなり、組織は不全に陥るだろう。更に、十年前と同

じく降魔が再び活発に現れはじめた今、我々に残された時間は少なくなりつつある。…さあ、私の手をとりましたまえ。君がいるべきはそんな名ばかりの連中ではなく、かつての帝国華撃団の意思と血を真に受け継ぐ我々だ。」

差し出される悪魔の手…それを無言で傍らから見据えているエリスとマルガレーテ。最強の華撃団ベルリンに組織のトップから直々に誘われるとなれば、普通の人間なら喜んで手を握るはず。無論、良好な人間関係の話はならぬ場合だが…

「どの口が言う。何度も言うがそれなら、モギリなり雑用なりしてたほうが千倍マシだ。それに、ベルリン華撃団如きに兄さんたちが負けるかよ！」

尚、断固として断る星児。意地と誇りを捨てて犬になるより、帝国華撃団と共にある道を選ぶ…

しかし、プレジデントGはより強く…嘲笑う。

「希望的観測は結構…」

だが、…ロンドンは見捨てるということの良いのかね？」

——何？

胸を張って担架をきった星児の眉間に皺が寄る。

「敗退すれば解散するのはロンドンもまた然り。世界二位の実力者で、王室がバックアップについてようとも今回の決定からは逃れられない。…もし、万一だ。帝国華撃団が何かの間違いで優勝したとして…結果はどうにしろ、ロンドン華撃団は消える。未来永劫…英国の地にその名が響くことは無いだろう。」

そう、仮に帝国華撃団が勝ち残ってもロンドンは解体されてしま

う。アーサーやランスロットの居場所が無くなることを歯牙にもかけない：などという真似は残念ながら出来ず、喉を詰まらせる星児。帝国華撃団を潰すわけにはいかない：でも、自分が傷ついた時に手を差し伸べたロンドン華撃団が無くなるのも見ぬ振りは無理だ。でも、両方を救うのは理屈的に無理：

「ま、ロンドンが勝てば帝国華撃団が消える：うむ、残酷なことだ。――しかし、特別な事情があれば：例外というのもありうる。」

「：例外？」

天秤を揺らし、相手を惑わせながら話を進める：頃合いだろう。

「例えば、優秀な人材には厚い待遇をして応えるべき：働きによつては、華撃団の一つや二つ、目を瞑ってやることも吝かではない。」

ここで眼前に垂らす最大のエサ。どちらも捨てるに捨てられぬからこそ、自らにつくことで両者を救えるかもしれないとチラつかせる：。そんなことが可能なか？いや、可能なのだ。W・L・O・F.はプレジデントGが建て纏める組織：彼の所有物なのだから。彼こそが全てを動かすルールであり、森羅万象。内外共にあらゆるところで影を落とすその力は星児自身がよく知っている。ある者は彼の名に縋ることを考え、ある者は吞まれまいと逃げていく：そんな光景を何度も見てきた。

されど、両者を救うとしながらどちらにも不義を為すような選択肢：そんな簡単に星児は首に縦には振れない：だが強くグラつく。

――さあ、もうひと押し。深く呑み込むように誘いをかける。

「ま、良いんだ。旧華撃団の連中を助ける唯一のチャンスになるが：嫌だと言うなら仕方あるまい。この話は無し、無限も下げさせよう。」

――黙って指をくわえて、最後まで見ていると良い。」

「――！ 待ってくれ!!」

喰いついた。

振り向いて去ると見せかけ、ニタリと口角をあげるプレジデントG。あとはゆっくりと糸を巻いてやればいい。

「俺を…ッ ベルリン華撃団に…入れて…くれ…ッ」

絞り出すような声だ…おやおや、これじゃあ強引に従わせているようじゃないか？ 不服だけど仕方なくついてくるようじゃ困るのだからね…私はあくまで善かれと『提案』しただけなのだから。

「おや？ まさか、『入れてくれ』と言ったのかい？ やれやれ、ミスすみれの教育がなっていないようだ。目上の人間に頼む時はもつと丁寧…全力でお願いするべきだろうか？」

「…っ」

…歯を喰い縛る星児。押し潰されそうな屈辱と腹から喰い破ってくるような怒りを『希望』というあまりに拙い言葉で抑えながら、この世で最も憎むお得に膝を折り… 手をつき… 額を地面に擦りつける。

「俺を!! ベルリン華撃団に、入れて、下さい!! お願いします!!」

プライドを捨てて、仲間を捨てて、自分を捨てて、それで全てを護れるなら未練だって涙と一緒に捨ててやる。頬を絶え間なく伝い始めた雫は心の傷口から溢れる血… 色は無くとも、彼が歩んできた全てを洗い出すように流れ続けた。

…そして、ついに悪魔も満面の笑みで星児の肩に手を置いた。

「よく決断した。これから、私達で仲良くやっついていこうじゃないか？  
…ククク、ククククッ！」

契約は成る。彼もまた、忌むべき影へと絡めとられていくのを傍らでエリスは黙って見ているしかなかった。世界最強のベルリン華撃団隊長、その肩書を持ってしても世界の中心に一石を投じるにはあまりにも心許ない砂粒にしか過ぎないのだから…。



(…あの男らしいやり口ね。)

ベルリン華撃団から一部始終を語られた…。

唯一、納得したと心で頷いたのはアナスタシアだけ。狡猾かつ悪辣、両手で全てを掬いとらせたようにみせかけ相手を従わせながら、全てを自ら零させてしまう。結局、帝国華撃団もロンドン華撃団どちらも救えたとしても、星児はどちらかにも帰れない。後々もベルリン華撃団で良いように使い潰されるのが関の山か…

無論、そんな話を聞いて黙っていられる面々ではない。最初に声をあげたのは或人だった。

「おかしいですよ、そんなの!? ハラスメントも良いところですよ!

貴方たちは黙って見ていたんですか!？」

このやりとりが本当なのは顔を背ける星児から見て間違いない：なら、その流れを見ていただけになるベルリン華撃団に非難が向かうのはある意味、当然の帰結。すると、エリスは無機質に答える。

「そうだ。一介の華撃団である我々にプレゼントGに抗う権利も自由も無い。」

「貴女は……!」

「理解し難いだろうが、W・L・O・Fとはそういう組織だ。所詮、我々など末端の人間に過ぎない。代えなどいくらでも利く。例え、最強の華撃団と謳われていてもな……」

W・L・O・Fは善くも悪くもプレジデントGの所有物だ：彼が創り、彼が維持し、彼が中心になっている。必要なことがあれば鶴の一声ですぐに対処にあたる反面、どんな横暴もある程度は通ってしまう程にプレジデントGとその中心に位置する者たちの影響力が強すぎるのだ。それが、国際的な組織で成り立っているのもある意味、ベルリンも含め多くの華撃団設立に関わってきた彼の剛腕故だろう。

一方、神山は星児へと問う。

「…なんでこんなことを？」

すると、喰い縛る口から声を洩らす星児…

「だって、俺は…何も出来ていないじゃねえか!隊長にもなれない、舞台にも立てない、戦うことすらできない…! なら、泥を啜るぐらいやらせてくれよ!!何も出来ないのは惨めなんだ!」

改めて気がついた。そうだ…星児は何も成し遂げていないのだ。



すみれと同じだけ帝国華撃団再建に自分の人生を捧げながら、夢見た全てに届かず、あまつさえ戦う力である光武さえ失った。

「星児…」

その喪失は…神山の誰の予想より遥かに大きかったのかもしれない。

——それでも、認めてはならないものがある。

「それは違うだろ。お前が苦しんで犠牲になった舞台で花組もランスロットさんも、胸を張って立てるわけないだろう！」

やれることは皆、全力でやってきた。それはこれらからも変わらなくても、手段を選ばないというのは違う。暖かい血を通わす帝都の華と剣が仲間の冷たい腐血から成り立つなどあってはならないのだ。無論、ロンドン華撃団とて同じ…

…だが

「…もう手遅れだよ兄さん。もう後には引けない、俺は別の道に行く。例え、二度と帝国華撃団の名前を名乗れなくてもな。」

既に結ばれた悪魔の契約は断ち切ることは叶わないのだから。

## 語られる過去。夜鷹の翼。 III

明らかになった星児の真意…

——しかし、もうひとつ明らかにしなくてはならないことがある。

「…『夜叉』。あれは一体、何者かご存知ありませんか？ 彼の母親と名乗っていましたか。」

エリスの質問に更に空気が重くなる… かつての帝劇のトップスターである真宮寺さくらに瓜二つの上級降魔であろうことか星児の母親まで名乗った謎の存在。不意打ちに近いとはいえ、さくらの光武とゼロワンを一瞬で戦闘不能に追い込んだ力の持ち主で勿論、無視は出来ない事項だ。

すると、すみれは星児に目配せして…彼が頷くのを確認すると重い口を開く。

「夜叉、あれは真宮寺さくらさん…ましてや、星児の母親などでは絶対にありません。既にご存知かと思いますが、旧・花組のメンバーは真宮さんも含めて降魔大戦の折に行方不明になっております。そして、何よりも…わたくしは星児の実の両親を知っていますし、父親はまだ存命ですわ。」

降魔大戦…或人も太正世界に来たばかりの頃に耳にした。降魔皇と呼ばれた強大な敵を封じるためにかつての花組や巴里やニューヨークの華撃団たちが身を呈して犠牲となったことを。それが、かつての帝国華撃団の事実上崩壊の引き金になったことも…

そして、新しい星児の情報…両親について。父親がいるというなら誰？ 加えて『父親は』という含み…無論、ここを踏み込むエリス。

「…父親は？ 母親はどうなされたのです？」

「……………母親は…星児を産み落とすと共に、その命を落とししました。」

すみれの実子ではないという時点で何かしらの事情があるのは察していた一同…されど、肉親が生まれながらに欠けていた事実を明かされれば小さくとも、驚かずにはいられない。

続けて、すみれは語る…

「星児の母親の名前は『御子神（みこがみ） カナタ』…彼女はかつての花組の見習い隊員のひとりで、わたくしが引退した跡を任せるべく呼んだ方ですの。そして、父親は婚約者である『黒潮 虎月（くろしお こつき）』…護国の一族・黒潮家の三男坊で造船業の社長を今はなさっておりますわ。諸事情があつて、星児を引き取れませんでした…。このことは、星児にも養子にする時に伝えていきます。」

御子神カナタと黒潮虎月…これが星児の両親の名。

歌劇団の見習い隊員と婚約者である名家の三男坊か。この事実を知り、すみれを信頼しているからこそ夜叉に星児は惑わされなかったということか。

「——舞台に立つ前にショッカーとの戦いの中で命を落とした花組の新米隊員の噂は私も耳にしたことはありましたが…驚きました。ということとは、真宮寺さくら女史自身やあの夜叉との血縁等の関係は無いです。」

「勿論ですわ。」

エリスは暫し考える…そして、『最後にひとつ…』と告げる。

「星児のことは理解しました。そして、これはプレジデントGからの伝言です…『帝鍵』の在処を知っているなら速やかに報告せよ。』とのことです。」

「…御期待には添えるかわかりませんが、尽力しますわ。」

それから、辛いことをお聞きしました…と謝りエリスとマルガレーテは去っていき、星児もそれに続く。一瞬、声をかけようとしたすみれだったが、言葉が喉で詰まってしまふ。

星児も母の視線に気がついていたものの、何を言葉にして良いかわからず逃げるように足を速めていった。



ベルリン華撃団が去ったあと、暫くして解散になった一同。すみれから『帝鍵』なるものについての説明も受けた或人…。

旧・華撃団たちが降魔皇を封印するために用いた神器らしく、強大な力で別次元の帝都・『幻都』への封印を成し得たものの旧・華撃団メンバーもろとも巻き込まれる形になってしまったらしい。それを降魔皇復活のために降魔が、戦いに終止符を打つためにプレジデントGが欲しがっているということ。…一方、ネオ・タイムジャッカーのレクスが欲する理由はなんだろうか？やはり、これを利用して世界崩壊を加速させオーマジオウを葬る思惑なのか。

「ま、夜叉についてはさくらがああ反応するのもわからんでもない…」  
帝鍵云々以外は現在の花組の面々も知っているようで、或人は神山から色々事情の補足を受けていた。まず、さくらが語った『真宮寺さくら』なる人物について…

「真宮寺さんはさくらの憧れの人だ。なんでも、はぐれ降魔から助けてもらったのがキツカケで、以来あの人のようになりたいと口癖のように言っていたよいつも。星児が天宮家に預けられている間も、よく真宮寺さんのことを聞いていたよ。」

「え？ 星児くんって、さくらちゃんの実家に預けられてたの!？」

「…あ。あ、そうだな。そういえば言っていなかったな。あの頃は帝都も降魔大戦のゴタゴタが多かったし、すみれさんも手が回らなかったんじゃないか？」

ああ、だから『姐ちゃん』と呼ぶわけか。

そこは納得だが謎が残る…なら、夜叉が真宮寺さくらの姿をしていたのは本人かどうかは別にして、混乱を誘うためだろう。だが、星児の母と名乗る意味は？ 揺さぶりをかけるにはあまりに個人に狙いを絞りすぎているし、実の両親の記録も残っている以上は大した効果は無かった行動。敵のリサーチ不足かそれとも、別の何かに狙いがある？

「今はさくらに時間が必要だ。そつとしておこう…きつと立ち直れる。問題は…無限だな。」

無限は開会式襲撃の際にアナスタシア機以外はかなりダメージを受けている。特に、メタルクラスタホッパーのクラスターセルをまともに喰らい削られた神山機と初穂機は複数箇所のパーツを交換しなくてはならない程に甚大で、令士も『試合までには絶対に間に合わせる!』と意気込んでいたが…物資と時間どちらも足りなくなる可能

性が高い。

「神山さん、それなら俺に考えがある。」

ここで、或人は意を決して提案する。

「昴や他、何体かのヒューマギアに霊子戦闘機についてラーニングさせて下さい。ヒューマギアなら、人間より細かい作業や重労働だって長時間耐えられます。そうすれば試合まで間に合うかも……！」

「ヒューマギアを？しかし、霊子戦闘機の機密をいくら社長とはいえおいそれと見せるわけには……！」

或人の提案は確かに魅力的だ。しかし、彼はあくまで帝国華撃団の人間ではない協力者で厳密には外部の人間……霊子戦闘機のデータを見せることは機密の漏洩にあたる可能性は充分にある。とても神山の一存では決められない……支配人であるすみれの判断を仰がなくては……

（しかし、すみれさんも今はかなりまいってるみたいだし……。花組全体が不安になってる。俺がしつかりしないと……！）

★ ★ ★ ★ ★

資料室…… 普段、クラリス以外は滅多に足を運ばないこの場所にすみれは居た。

(…御子神さん。)

思い返すかつての仲間の記憶。…散りゆく灰のような銀髪を黒いリボンでポニーテールをした後ろ姿は服装の袴と相まって儂げな雰囲気、その視線はいつも憂いを帯びていた…。

彼女はこの図書室で決まって同じ『絵本』を読んでいた…：何度も…：何度も…：虚しさと哀しさを織った視線を落としながらまるで人形のように。

(…：宮沢賢治 『よだかの星』。)

『よだか』という名前の鳥が主人公で、優しく気弱な性格が祟って本物の鷹でもないのに『鷹』という字が名前に入っていると難癖をつけられ動物たちに苛められる。そして、救いを求めて夜空の星座に請うたが相手にされず、遂には飛ぶ力を失ってよだかは死んでしまうというのがおおまかな話。その結末の解釈については文学者によって別れたり議論されたりなどするが、別にすみれの知るところではない。本棚から手をとり、パラパラとページをめくる…：丁度、よだかが星座たちに声を届けようとするシーンで止まった。藍色の絵の具の夜に散りばめられた銀色の星が美しいが、シーンの意味合いとこのあとの展開を知っていれば残酷に思えてしまう。

——きつと、私もよだかのように落ちて、この世に呪詛を吐きながら死んでいくんでしょね。

(でも、あなたは落ちなかった。大神さん、真宮寺さん…：皆がいたからあなたは…)

彼女は孤独だった…：でも、すみれは当時の仲間たちなら冷たくなつた彼女の心を溶かしてもう一度、血を通わせることが出来ると信じ託した。そして、彼女は心を開き…：やがて、星児が…

——私の息子を返せえ!!

「…」

追憶の最中に過る夜叉の顔。真宮寺さくらの顔をしながら、星児の母を名乗る上級降魔…

あれを見たのは今回が初めてではない。

(きつと夜叉はまた星児を狙う。早くなんとかしなくては…手遅れになる前に…)



天才物理学者からのおくりもの。

帝国華撃団 地下ドック

ボロボロの無限が並び、それをなんとかせんと作業員やヒューマギアたちがあちこちに飛びまわっている。不破も力仕事ならばと手伝い、唯阿も令司と一緒に設計図や様々な資料とにらめっこをしていた。テーブルやかべなど貼りつけられたそれらから現状を打開できる案がないかと互いに技術者として意見を交換するも、答はそう簡単に見いだせない。

「唯阿ちゃん、それは技術的に無理だ。令和の世界なら出来ても、こつちの世界じゃ不可能なことだってある。」

「それもか。歯痒いな…」

特に技術的な認識の差がこのふたりでは問題があつた。いくら霊子機関や蒸気機関といった独自技術が発展しても、太正世界は仮面ライダーたちの世界に重ねた場合、昭和の時代でヒューマギアは愚か唯阿が当たり前と思う認識や技術すらまだ産声をあげていなかったりする。勿論、エンジンアとして彼女が役にたたないわけではないが、令士ら太正のメカニックにとっては無茶なものが数多い。

（ヒューマギアのラーニングも間に合うかが要か…。せめて、機材さえまだマシンなものがあれば…）

「…」

埒があかない…。ここで、令士は決めた…残酷な決断を下すことに。

「華撃団大戦には隊長機の参加は必須…そして、僚機が2機いれば良

い。だが、このままでは予備パーツを全部引っ張り出しても3機は無理だ、間に合わない……あとは自分たちで都合するしか。」

「それが出来たら苦労は……まで、まさか？」

彼が見据えるのはドッグの奥にあるフレームを剥き出しにした組み立て途中の無限……まだ浮いたままの装甲は『桜色』。つまり……

「待て！今、天宮さくらの無限を解体すれば彼女の戦う力は無くなる！光武もまた動けるかはわからん上に、今の彼女からそれらを取り上げてしまったら……！」

「わかってるさ……だが、このままじゃ俺達は土俵にすら立てないまま終わる。全部の苦労が無駄になる……！」

さくらの機体は組み立て途中……言い方をかえれば、新品の部品の塊だ。故に解体してパーツを他の無限の修理に宛がうということ……そうすれば、予備パーツのストックをあわせてぎりぎり参加条件を満たすだけの機体の頭数は揃えられる令士の目算。されど、これは完全にさくらを事実上の戦力外通告とも等しい非情な策だ。

今の傷心の彼女にこの仕打ちは……と反対しようとした唯阿だったが、その肩をいつの間にか聞き耳を立てていた不破が掴む。

「よせ、刃。逆にお前が華撃団の立場だったらどうだ？ 戦えない人間に大事な武器と仲間を預けられるか？」

「……」

「お前の気持ちもわかる。だが、立てない人間にかける余裕は無い。」

悔しいがその通り。今の天宮さくらを無限に乗せたとして足手まとい以外に何もならないのは明白……ならば、せめて言い出した責任と『俺が神山に進言する』と令士。唯阿と不破も今は頷くしか……

「おお、すつげえ！ここ帝国華撃団のドッグ!?これが無限、アイゼン  
イエーガーとどう違うんだコレ！ヒョー！」

「うるせえよ、戦兎！　つか、ここも油くせえな。プロテインに臭い  
が移っちまう。」

あれ、何か騒がしい奴等がシリアスを殴り殺して入ってきたぞ？

戦兎と万丈だ。戦兎は無限に興奮している様子で万丈は持っている  
バレル缶のプロテインを気にしている…何故、持ってきた？

「差し入れ。」

ああ、そう…バカじゃねえの？

……（筋肉）バカだったわ。

プロテインは困惑する不破が受け取って、唯阿と令士が戦兎と応対  
する。一応、彼等は仮面ライダーとはいえ、ベルリン側の人間なのだ  
から。

「確かベルリンの仮面ライダー…ビルドとクローズだったな。何をし  
てきた？」

「そんな怖い顔しないでって。別に冷やかしてきたわけじゃない…う  
ちの隊長からの秘密のお願いがあつてさ。色々と届けにきた。」

すると、次々と地下ドックに運びこまれるコンテナの山。この中身  
に気が付き、令士は目を丸くする。

「これ…霊子戦闘機の部品か!?　しかも、こんなに沢山…。いや、待て

待て…こんなことしたらプレジデントGから大目玉だぞ！」

「ま、隊長も思うところがあつたみたいでね、帝国華撃団には、『敵に塩をおくる』というよりは、『せめてもの親孝行』ってところ。あと、これは俺と『魔王さま』からのおくりもの。」

そして、唯阿へ折り畳んだ設計図とおぼしきものを渡す戦兎。これを見るなり、思わず彼女は驚嘆の声を洩らす…。令士も目を通すたり度肝を抜かれた顔をし、この紙が如何に重要なものかは雰囲気では不破と万丈は察する。

「設計に必要な機材も搬入してある。さ、俺達も作業を手伝うぞー！」  
「待て！ ベルリンの仮面ライダーのあなたたちが何故、こうまでして助けるのだ？ まるで、わけがわからん…」

そのまま、平然と手伝おうとするし混乱する唯阿…すると、戦兎はクシヤツと笑いながら告げる。

「例え、活躍する世界も時代も違つても…仮面ライダーは助けあいだろ？」

このあと、『俺達、殴り合いしてたほうが多くね？』とボヤいた万丈が戦兎に『黙ってなさいよ！』とド突かれた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

それから、目まぐるしく忙しい日々が数日と続けばあつという間に華撃団大戦の試合当日。襲撃があつたことが嘘のようにグラウンドも観客席も整備されているが、開会式に比べれば幾分か人が少ないような気がする。それでも、歓声は華撃団の選手たちの霊子戦闘機格納エリアまで届くほど大きい。

アイゼンイエーガーと黒い無限：並ぶベルリン華撃団の機体の中でパイロットたちは来たるべき決戦の時を待っていた。そんな中、コックピットで口を開いたのはマルガレーテ：

「初戦の相手は帝国華撃団：まあ、相手にすらならないでしょうが。しかし、初戦で、子に親の首をとらせようとは…演出にしても悪趣味。神崎すみれ女史の子である彼と、かつての旧・帝国華撃団の手で産まれたと言っても他言でもないベルリン華撃団…。狙っているのでしょうかね：どう思いますエリス？」

「…さあな。取り敢えず、親の『死装束』ぐらいは用意するのは子の役目だろう？あとは、あちらでちゃんと着こなせるかだが…」

死装束など随分と穏やかではない話をするエリス。一方、黒い無限の中にいる星児に反応は無い…まあ、仕方ないだろう、かつての仲間たちに刃を向けて場合によってはその未来を閉ざす役割を担うかもしれないのだから。

(…もうあわせる顔が無いな。)

この華撃団大戦が終われば、もう自分は二度とかつての仲間たちに会うことはないだろう。戦いの果てに生き残ったにしても、命が燃え尽きたとしても…

「エリス隊長、行こうぜ。」

「…良いんだな？」

「覚悟は出来てる。」

操縦桿を強く握る…すると、呼応して起動する霊子戦闘機たち。星児の無限には腰に刀、背中に折り畳んだ槍にライフル等々が積まれ、重武装にされていた…恐らく積載量オーバーのギリギリのラインだろう。

彼の無限を後ろにエリスとマルガレーテのアイゼンイエーガーは芝生の敷き詰められた会場へとアクセル全開で飛び出す。その途端、会場の熱気は高まりアナウンスが彼女たちを讃えるアナウンスを流す…。

「ベルリン華撃団、入場です！ まさに王者の風格、目指すは世界華撃団大戦の悲願の三連覇…！ 今回の戦いはまずその第一歩となるでしょう！」

(帝国華撃団が勝つとは微塵とも思っていないか。)

まあ、仕方ないだろうなと思いつつも憤りを覚える星児。実際のこのシチュエーションは実績ありの『最強』と出来たてはやはやの目下『最弱』で、戦いは実践形式の直接対決…誰もジャイアントキリングなんて期待していないだろう。

歓声を浴びながら、ベルリン華撃団は中央の待機位置につく。既に戦兎と万丈は待機しているが…帝国華撃団の姿は無い。

(間に合わなかったか…)

エリスは目を伏せる。実際、賭けみたいなものだったが、どうやら帝国華撃団はチャンスを活かすことが出来なかったらしい…。アナウンスマも姿を現さない対戦相手に不穏な言葉を洩らしはじめる。

「これはどうしたことでしょう？帝国華撃団の姿がありません。試合開始は間もなくのはずですが…間に合わない場合はプレジデントGの判断により棄権と見做され、自動的に敗退が決まります。その場合、即刻解体の処分が待っていますが…どうして姿を現さない？」

観客たちも歓声から不安などよめきをはじめ。やがて、専用のVIPルームから見下ろしていたプレジデントGもフンツとつまらなげに鼻を鳴らしていた。

「堕ちたな帝国華撃団。まさか、ここまで情けないとは夢にも思わなかったぞ。」

敵前逃亡なんぞもう嘲笑う気すら起きない。折角、色々とお膳立てしたシチュエーションだがまあ良いだろう…時間は惜しい。

「帝国華撃団を不戦敗とし、この試合はベルリン華撃団の…」

——ちよつと、待ったああ！！！！

その時、会場の空に影がかかる。青空を泳ぐ鯨のようなシルエット……帝国華撃団の翔鯨丸だ。そこから、カタパルトのハッチが開いて、無限3機が飛び出してきて芝生の上に着地する。神山機、クラリス機、あざみ機のようなのだが、その色はどういうわけか皆統一された鋼色である。まるで、ゼロワンのメタルクラスタホッパーのような……

「すみません、遅くなりました！」

「あ……いや……その機体は？」

初手、神山の謝罪。焦っていたのかだいぶ息がきれている……遅刻は由々しき問題だが、エリスとマルガレーテは異様な姿になった無限に絶句していた。『死装束』とは例えたが、明らかに自分たちが予想していたそれより斜め上をいく姿になっている……補修とかそういう次元じゃない、最早バージョンアップの領域である。

誰がこんなことを……？

「最ツ高だ！最高でしょ?! 名付けて『靈子戦闘機 無限・飛電改装型』！ フレームや装甲にゼロワンと同じ飛電メタルを組込んで補強と改造をすることで耐久性を含めて性能が格段にアップ！やっぱり、俺って天才だわ！」

「……」

お前か。

興奮する桐生戦兔を驚愕の眼で見るマルガレーテ……誰がそこまでしろと言った？



「エリス、この自称・天才をシバく許可を。」

「落ち着け、マルガレーテ。取り敢えず、銃はしまえ。」

このままでは、銃殺事件が起きかねないのでなだめるエリス。気持ちにはわかるが、この会場を血に染めるわけにはいかない…

一方、騒がしい彼女たちと対照的に帝国華撃団と静かに相對する黒い無限。

「兄さん…」

「星児…」

星児と神山。運命を担う者と夢を追う者…

避けられない戦いが幕を開ける。

## 誠を受け継ぐ者 I

———どうということだ？

VIPルームから一部始終を見ていたプレジデントGは己の目を疑った。確かに、ベルリン華撃団から帝国華撃団への援助を許可はしたが、誰があそこまでやれと言った？ 自分はただボロ雑巾のような機体で完膚なきまで蹂躪される奴等を見たかっただけなのに…

(失格扱いにするか？ いや、しかし…)

ここで門前払いなんてしようものなら、盛り上がっている観客からブーイングが巻き起こって不満の矛先がこちらに向くだろう。おまけに、世界に自分が帝国華撃団へ冷遇していることが晒されてしまう…それは避けたい。

(ええい、ベルリン華撃団…！何が死装束だ!? 万一でも負けようものなら、すぐに塵にしてやる！)

自分に大見得をきったエリスに怒りを覚えながら、プレジデントGは戦いの行く末を見守ることにした。

☆☆☆☆

「すみれ様…」

「ええ、大丈夫よカオル。」

時を同じく、翔鯨丸の艦橋からカオルと共に様子を見守るすみれ。

この組み合わせは実に残酷なものだろう…花組が勝てねば、帝国華撃団に未来は無いがそれは、星児がプレジデントGの顔に泥を塗ることになり、我が子の将来は閉ざされるだろう。しかし、ベルリン華撃団が勝てば親子で追いかけてきた帝国華撃団再建の夢は泡のように消えて無くなる。

どちらが勝つても、大事な物を失う。張り裂けそうな痛みが尚も胸にあるが、だからこそ目を背けてはいけないのだと。

(星児のことを頼みますわ、神山くん。)

— PPP!!

「！ 通信です…坊っちゃんから!」

「…繋いで頂戴。」

突然、星児からの通信。開戦までの僅かな時間…すみれは我が子の声を聴くことにした。

「…。 おふくろ、皆…聞こえてるか?」

「星児…。」

「こんな試合の前に言うことじゃないのはわかってる。でも、謝らせて欲しい…あんな酷いことを言ったことを。」

暗い声の謝罪。開会式後のやり取りについてだろう…もうあれが本心と事情を隠すための狂言だったことは誰もが解っていた。しかし、刃を交える前に彼なりに落とし前をつけなければならない。

「…傷つけた、おふくろも皆も。もう帝国華撃団にも戻れないし、こんなことを言う資格が無いのも解ってる。『ダナンの愛』、マジですげえと思った…。本当に驚いたし、感動した。あれが本当にヘツポコだったアイツらだったのかって。もしかしたら、昔の花組みたいに輝ける

んじゃないかって。

その時、理解したよ…仲間を信じようとすらしなかった…あまつさえ、見捨てようとした俺に隊長の資格は無い。」

吐露する己の心の内…。実は、ベルリン華撃団に参加してから後の『ダナンの愛』の公演を見ていた星児…そして、悟る。結局、自分は帝国華撃団を建て直すと口にしたながら仲間も、前すらも見ようとしていなかった。全てを過去に置き去りにしていた。

もつとはやく気がつけば、誰も傷つかなくて済んだかもしれないと。

「ゴメン、皆を傷つけて。そして、ありがとう…もう一度、帝劇で夢を見させてくれて…」

謝罪と感謝を連ねた言葉… 嘘偽りはないだろう。なら、こちらも胸の内を伝えようではないかと神山は口を開…

「……しかし、だ！——俺にも意地があるツ!!」

「『一』」

その時、風の流れが変わる。黒い無限が背中に折り畳まれていた槍を引き抜き、ブンツと振るう！ また左手には刀を握り切っ先を花組の無限たちへ向けたと同時に頭部に捻れた双角のパーツが起き上がる…。

——左には、追憶に尚も息づく敬愛した華の一太刀

——右には、敬愛する母の型を真似た槍

——構えは、背中を追った群れを率いる誇り高い銀狼如き双刃

二刀流…しかも、槍と刀の組み合わせた星児独自のもの。かつて、帝劇の英雄たちは彼に決して技の真髄に至るまでを教えるはくれなかった…。元々教える気は無かったか、或いは機会が無かったは誰もわからない。だからこそ、彼は彼なりに浅いながらも先駆者から伝えられた全てを組み合わせ、思考錯誤と鍛錬を重ねて編み出した己の戦いの型。それは、星児の全てでもある。

「華撃団はな…歌劇が美しいだけじゃ駄目だ。人を笑顔にする華であり、そして…人を守る盾となり、邪悪を祓う剣。だから、俺は十年前からずっと研鑽を重ねてきた！ 蔑まれ、地べたを這っても今日、この日まで走ってきた！

だから、お前たちに未来を担う強さと意志があるのなら…！ 俺を

超えてみせるッ！ 帝国華撃団!!」

牙を剥き、唸るかつての栄光の遺児。

呼応するように紫の揺らめく霊力が黒い無限に纏わりつく：強い心の在り方というより、まるで『怨念』のような陽炎後退るクラリス機とあざみ機…。

しかし、神山だけはコックピット越しにそれを真っ直ぐと見据えていた。

…脳裏には試合に向かう直前のすみれとの会話が過る。

—— 神山くん、私は後悔しているの。十年前、無理矢理でもあの子を黒潮の家の父親に預けていれば、帝国華撃団再建なんて重荷を背負わずに済んだんじゃないかって。

—— 子を守るべき親でありながら結局、私は何も出来なかった。そして、私ではどうにも出来ないものまであの子は背負ってしまった。

—— 救えるのは恐らく、あなただけです神山くん。帝国華撃団の支配人として命じます、必ずこの戦いに勝ってきなさい。

—— そして、情けない母親として頼みます…。あの子を夢から変わってしまった呪縛から解放してあげて。

「…」

帝国華撃団を統べる者としての使命と母としての願い。

操縦桿を握りしめる神山は思う。どうして、この親子はこんな形ですれ違ってしまったのだろうか…目指すところが同じはずなのに。夢見た舞台上で刃を交わることになるなんて悲しすぎる。

でも、自分がすべきことは嘆くことではない。

「…わかった。お前の思いに全力で受けて立つッ!!」

——斬る。

立ちはだかる壁を。呪いへと歪んだ夢を。

全てをはじめめるために。全てを終わらせるために。

「おい、盛り上がってるところ悪いが俺達のこと忘れてないか？」

…あ。つい空気に流されて置き去りになっていた無限の足許で不破が声をあげ、ショットライザーを持って余し弄んでいた。唯阿も空気を読まない奴めと頭を抱える素振りをしていたが、内心は『よく言っただぞ!』と自分たちが置き去りになることを危惧していたのでガッツポーズを背中隠してしていた。

この戦いは仮面ライダーが人々に仇なす存在ではないと示すという意味合いもある。今後、帝都での活動をする事を考えれば彼等にとっても重要なものになる今回。正直、無理矢理引っ張りだされてこられた上に蚊帳の外は納得がいかないだろう。それは戦鬼も同様だった。

「確かに、もう言葉はいらなかな。正直、俺もはやくその無限の性能を試してもらいたくて仕方ない。」

そう言うなり、ビルドドライバを装着する戦鬼と万丈。反応して、不破と唯阿もショットライザーを構える。既に戦いの火蓋はきられようとしていた…。それを更に盛り上げようとアナウンスが捲し

たてる。

【さあ、ついにはじまる禁断の直接対決ッ！ 『最強』対『目下最弱』、私達が目にするのは揺るがぬ王者の圧倒的風格か!?それともッ、誰も予想だにしないミラクルか!? 今ここに、ベルリン華撃団対新生・帝国華撃団…開戦だアア!!】

☆ ☆ ☆ ☆

「はじまったか…」

歓声があがる観客席に紛れるように試合の様子を窺っていたハヤト。その隣にはアーサーとランスロットの姿もある…。アーサーは冷静に戦況を分析していた。

「帝国華撃団の無限、恐らくは急拵えの改装か。…能力は未知数だが、付け焼き刃で追いつけるほどベルリン華撃団は甘くは無い。付け入る隙があるとすれば…」

飛電改装がどんなものかは知る由もない…だが、圧倒的に個人や連携といった実力は間違いなくベルリンが上。現に、開戦早々にアイゼンイエーガーの射撃の嵐がクラリスとあざみの無限を追い込みはじめている…。仮面ライダー同士の戦いはアサルトウルフへと変身したバルカン対クローズにバルキリー対ビルドという組み合わせでこ



ちらは互角の戦いだが、霊子戦闘機の戦いによってはどうなるかわからない。

(興味深い戦いだが、残念ながら観ている暇はないか…)

取り敢えず、今は自分たちの用事にあたらなくては。

しかし、ランスロットは星児の機体を複雑な表情で見据えていた。

「剣に槍…あんな構え、アタシには一度も見せなかった。」

自分と戦う時はいつも刀の二刀流だった。槍…正確には薙刀は母親であるすみれの得物なので、技術を習得していても不思議ではないが…ロンドンに居た時にそんな素振りなど一度も見せていなかった。その事情はハヤトが知っている。

「ああ、奴は帝国華撃団を出る時に母親から教わった槍だけは封印すると決めていた。自分の不義へのけじめとしてな。」

夢から逃げた自分への戒め。母を残した自分への罰。

それだけ、弱い自分を許せなかったのだろう。

再び槍をとるのは、自らが帝国華撃団に戻る日と母から赦される時と決めていた…。そんな彼が、己の誓いを破ってまで相對するとはこの戦いにそれだけ本気ということか、或いは神山がそれだけ力を賭けなければ勝てない相手ということか。…いや、どちらもか。

「…(この戦いが運命を変える…か。)」

弟子の晴れ舞台…曲がりなりにも師匠として見届けるべきだろうが今の自分たちにはやるべきことがある。

「ガヴェイン卿、ランスロット……。悪いが、観戦している暇はない。事は予定通り進める。」

アーサーの呼び掛けに空気が引き締まる。ハヤトは無言のまま、ランスロットは頷いて応えると彼は告げた……

「……プレジデントG、奴を玉座から引きずり降ろす。」

## 誠を受け継ぐ者 Ⅱ

「変身!!」

「ショットライズ! アサルトウルフ!!」

「ショットライズ! ラッシンググチーター!!」

「オーバーフロー!!紅のスピーディージャンパー! ラビッツ!!  
ラビッツ!! ヤベーイ! ハエイ!!」

「ウエイクアップ・バーニング!! クローズドラゴン! Yea  
h!!」

変身音からエフェクトまで煩くて、ダブって何言ってるかわからないのはご愛嬌。開戦の狼煙と同時に変身を終えた仮面ライダーたちがぶつかり合い、華撃団同士も戦闘態勢となる。神山は隊長機同士の戦いになるとエリスのアイゼンイエーガーと対峙しようとする無限を…

「俺が相手だ!」

「…星児!」

その時、強引に星児機が神山の無限を僚機2機の輪から押し出し、ゴリゴリと距離を離していく。エリスも咎める様子もなく、マルガレーテも特に気に留めずに残されたクラリスとあざみを挟撃するようになり、フォーメーションを組みだす。星児の単独行動ではなく、そもそもこれも勘定に入れた作戦だったのか…!

「いくぞ、マルガレーテ!」

「62秒間でカタをつけます。敵ライダーの相手は予定通り任せますよ、桐生戦兎…あとプロテインバカ。」

「了解!」

「ああ!? 筋肉つけろよ、せめて!」

指揮官が奪われ動揺する帝国華撃団に問答無用で襲いかかるアイゼンイエーガーからの弾丸の嵐。あざみは無限の左手に装着された巨大なガントレットで防ぎ、クラリスも重魔導の魔法陣で護りを堅める。神山はいないが、狼狽している暇はない。

「か、神山隊長……！」

「クラリス、こっちに集中して！」

しかし、急拵えの護りは脆く、穴を突くべくビルドとクローズが迫る……！ されど……ッ！

「させるか！」

それを阻むはバルカンとバルキリー。

バルカンはクローズを……バルキリーはビルドを押さえ、付け入らせまいと戦闘へと入る。ここまでは、マルガレーテの読み通り。

「エリス！」

「ああ、分断する！」

「!?」

アイゼンイエーガー2機は銃撃をしたまま体当たりを仕掛け、分断。エリスはクラリスに、マルガレーテはあざみに取り付き各個撃破へとシフト……連携を許さない。無論、これはベルリン側も選択肢に連携を失う側面を持つものの、そもそもが個人の技量も経験も上回る彼女たちに比較して圧倒的に帝国華撃団側のほうが悪条件だ。

神山もなんとか戻ろうするも、やはり星児が立ちはだかり壁となる。

「星児……！」

「言っただろ？お前の相手は俺だ！ さあ、テメエの全てをみせろ：  
いくぞッ、神山ア!!」

☆☆☆☆

望月あざみ 対 マルガレーテ

仮面ライダーバルキリー 対 仮面ライダービルド

こちらはちびっ子対決と技術者ライダー同士の対決。素早い動きで攪乱しながらクナイを投げ続けるあざみ機に防御の姿勢で耐え忍ぶマルガレーテのアイゼンイエーガー……。四方八方から次々と旋風のように迫り、削りにかかるクナイの群れ……。しかし、マルガレーテは最低限の動きで機体をずらしたり、堅牢なアイゼンイエーガーの装甲で弾きながら銃撃で牽制しつつ反撃の隙を窺うが……

「ほう、これがジャパニーズNINJA。中々、興味深い動きをしますね。」

「…くっ！」

防戦だが余裕のマルガレーテ…対照的に焦りだすあざみ。全力の攻めだが、決定打どころかろくにダメージを与えられずこちらが消耗するばかり。ならばと踏み込もうと詰めた途端、銃口がぴつたりと向

けられ咄嗟に避けるのも今回で2回目：脳裏に過る作戦会議の時に指示された神山の作戦。

——あざみ、君にはマルガレーテさんを集中的に狙いながら連携を妨害してくれ。彼女がベルリンの戦術プランを考える頭脳だ。君の変幻自在の忍術なら彼女の思考を鈍らせることも出来ると思う。

——そして、俺とあざみで牽制しつつ、クラリスの重魔導で纏めて吹き飛ばす。これが、今回の作戦だ。

(でも、これじゃ……！)

ベルリンの最大の特徴は連携とアイゼンイエーガーによる重火力を駆使した緻密な戦術にある：そして、彼女たちに馴染みの無い忍術による対策の組み立てはまあ間違いでは無かっただろう。更にこちらの個性を組み合わせた攻めでなら届きうるとあざみも思っていた：まさか、相手が自分たちの肝である『連携』を捨てて『分断』に走ったことで見事に台無しになったのだが。

一方のバルキリー対ビルド：技術者ライダー同士の対決。バルキリーの基本形態であるラッシンググチーターの獣脚独特の加速を組み合わせた射撃や格闘に圧されるように見えるビルド：如何せん、フルボトルバスターの取り回しが目に見えてショットライザーに劣るために砲撃がろくに当たらない。

「参ったなこりゃ。お姉さん、ただの技術者じゃないとは思ってたけど……！ここまでとはね！」

「そう言う貴様もただの学者程度では無いだろう？」

「……まー！ お互い、仮面ライダーやってるぐらいだしね！」

軽口を叩きあいながらも、接近してきたタイミングでフルボトルバ

スターを大剣形態に切り替えるとカウンターの斬り上げを斬　ツと決めるビルド。首周りの装甲へ綺麗にヒットし火花を散らしながら芝生へ転がるバルキリー…その隙にとビルドはフルフルボトルをベルトから外して軽く振ると再装填、ビルドドライバーのレバーをグルグルと回す。

「タンク　&　amp;　タンク!!」

「君にはこっちのほうが良さそうだ。」

【ガタガタゴットン！　ズツタンズタン…！　A　r　e　y　o　u　e　a　d　y?】

「ビルドアップ!」

【オーバーフロー!　鋼鉄のブルーウォーリア!　タンクタンク!!　ヤ　ベ　ー　ー!　ツ　エ　ー　ー!】

突然、真紅の装甲が弾け飛び素体の黒いハザードフォームが顕になったかと思えば、ドドン!と何処からともなく砲撃をしながら現れる青い戦車部隊。バルキリーを更に怯ませ行動を抑えると本来の機能である追加アーマーとしてビルドへと装着される。

「仮面ライダービルド・タンクタンクフォーム…。チーターの相手は兎より戦車でしょ。」

「…過剰だろ。」

「かもな。さ、実験を続けようか…!」

戦いは更に熾烈を極めていく……

☆☆☆☆

帝劇・天宮さくらの自室……

時を同じく、

「…」

…されど、部屋の主はそこにいた。

力無く、虚ろなままベッドに踞っている…。

（歌劇は無くなり… 光武も動かない… 無限も解体されちゃった…。尊敬していた人は敵になり刃を向けてくる…。私は…いつたいなんのために…）

メンタルも回復せず、戦う手段すら無い彼女はずっと部屋にとじ籠もっていた…。神山も華撃団大戦の試合開幕までケアのため訪れたが効果は無く、結果的に彼女は置いていかれてしまったのである。

今、帝劇に残っているのは売店のこまちとまだ華撃団大戦会場に近づくことが憚られる或人とその秘書であるイズくらいだ。演劇も無ければ一般客も来ないので、帝劇の中は静寂に満たされている…。これが、かえって様々な思考を過ぎらせるのだが…

何より辛いのは、かつて真宮寺さくらに助けられた幼き日の記憶に



夜叉の姿が重なるようになったこと。

自分を助けたのは本当に真宮寺さくらなのか？ 真宮寺さくらが夜叉となってしまったのか？ 本当に彼女は星児の母親なのか？ そんなグルグルとする疑問よりも、かつて降魔を退け、自分に向けてくれた優しい笑顔があああの仮面の不気味な微笑みに被さることが何よりも苦痛だった。

「…私って、こんなに脆いんだ。」

憧れで走ってきた今までの自分…。もうそれだけじゃないと思っ  
ていたけれど、やっぱり突き動かす根幹はそれ以外、何者でもない。  
投げ出してしまう自分が情けない…時にはクラリスや初穂に散々叱  
咤して強引にでも奮い立たせようとしたこともあるのに、いざ我が身  
となればこの始末。

「…どうしたら良いの…」

——白秋さ… え？ ちょっと、その人誰!?

——社長、悪いが通らせてもらう。時間が無い。

「？」

何やら外が騒がしい。或人と白秋の声…。すると、カツカツと歩いてくる音がしたと思ったらガタンツと乱暴に開け放たれるドア。颯爽といった雰囲気、白秋に恐らくは止めようとしていた或人…あ

とそれと、見知らぬ男性がひとり。

「……師匠に社長？ ……あと…誰…？」

「やあ、さくら。情けない弟子に言っただけでやりたいことは山程あるが、まずは彼の話を聞くんだ。」

どうやら、白秋の知り合いらしい。『…やれやれ、もう少しエレガントにエンカウントしたかったんだが。』と男性は前になる…細見でひょうひょうとした雰囲気です。太正では決して珍しくない袴だが、頭には丸くて可愛いシルクハットが鎮座していた。後目につくのはT字の奇妙なステッキだろう…年齢はすみれと変わらないくらいでとても軽やかな足取りから必要そうには見えないのだが…

「やあ、はじめまして。正確には違うけど、覚えてないだろうからね…僕は『黒潮 虎月』。色々すみれさんから話は聞いてるよ。」

——黒潮？

その名前は何処かで聞いたような

「えと…あなたは…？」

「ああ、こう言ったほうが解りやすいか？」

——僕が星児の『父親』だよ。」

間の抜けた笑顔が告げる。

「…はい？」

あつげらかと話されたそれにさくらはただ目を丸くするしかなかった。

## 誠を受け継ぐ者 Ⅲ

…黒潮 虎月

突然、現れた星児の父親に面食らったさくら…。『それじゃ、すみれさんに言われてるから。』と優しい笑顔のまま、静かに威圧すると四の五の言わせずに彼女を帝劇の正面に停めていた黒くモダンな愛車まで引きずっていき放り込んだ。無論、止めようとした或人だったが白秋は『気にすることはない』と一蹴：取り敢えず、こっちもバイクで追うことに。

さて、見知らぬ男と隣り合わせになったさくら。車はエンジンを蒸してすぐに発進：もう逃げれそうにない。

「あ、あの……」

「手荒な真似ですまない。だが君がウジウジしている時間も惜しい：すぐに華撃団大戦会場に向かう。仮にも花組なら、君は今回の戦いを見届ける義務がある。」

「っ！ いきなり何を!? あなたは一体……」

「星児の父親と言ったはずだ。あと何なんだと言いたいのはこちらのほうだ。明暗を分ける大事な試合を見もしない：それで、真宮寺さくらに憧れているなど片腹痛い。」

「…あなたに何がわかるんですか!!」

「解らないね。…だが、君の疑問を少しは晴らすことが出来る。会場まではまだ時間がある：この際だ、訊きたいことはないかい？ 例えば『夜叉』と名乗る降魔についてとか……?」

まさか、この男は知っているのか……? 自分の憧れの人と同じ顔をした彼女の正体を……?

「あの上級降魔、実は確認されたのは今回がはじめてじゃない。十年前以上前に2回…その頃は旧・帝国華撃団に真宮寺さくらもまだ存在していた。そして、僕はある人からの依頼を受けてずっと、彼女を追っていたんだよ。まあ、十年間も足取りが掴めず、結局はこうして帝都に戻る羽目にはなつたけどね…」

苦々しく嘲笑う虎月の横顔…落ち着いた雰囲気のせいかな、あまり星児と似ているようには思えない。まあ、さくら自身も全く父親似な顔ではないのでとやかく言えた筋ではないが。

「夜叉は…何者なんですか？」

「少なくとも、真宮寺さくらじゃない。でも、彼女も君に負けず劣らず真宮寺さくらファンだったのは確か…愛するあまり、顔まで変えた行き過ぎた熱烈なシンパだ。それに、星児の母親つても出鱈目。本当なら僕は華麗な独身貴族なんてやってないさ。」

…彼の情報を纏めると夜叉は真宮寺さくらとは別人、もしくは象つただけの降魔で既に旧・花組が健在だった頃には存在していた。本当だというのなら夜叉別人説も有利になる。すみれと星児もこのことを知っていたのなら、彼女を見て動じなかったのも頷けるというもの。しかし…

「夜叉は…真宮寺さくらさんじゃない…。でも、彼女は真宮寺さくらさんの技を使いました。同じ顔で同じ奥義を持つ…それで、別人なんて…」

さくらの中で強く主張するこの根拠。決定的だ、どう覆す？どう説明すると胸の中で膨らむそれを『フン。』と虎月は一蹴する。

「それこそ、星児だつて使えるだろう？　まあ…あの子は色々と特殊な諸々があるんだけど。夜叉の『桜花剣征・破邪放神』…あれは名前

だけとって形を似せた偽物・贋作の奥義だ。本物には遠く及ばないし、その刀に技の真髄は無い。ただ目の前にある全てを斬り伏せるだけの血に飢えた牙だ。見様見真似の星児の我流より尚、質が悪い。」

名前だけとつただけの偽物。本質は全くの別物。

真宮寺さくらの顔を被った『誰か』……それが、夜叉。

「君が帝国華撃団なら、決して彼女を許すな。絶対に。僕もまだわからないことが多いが、これからも夜叉は災禍をこの帝都にばら撒こうとするはず…。」

だから、斬るべきだ…彼女が元々が何者であっても。」

——それが君の宿命だ。

☆☆☆☆

クラリツサ・スノーフレイク 対 エリス

仮面ライダーバルカン 対 仮面ライダークローズ

——ガガガガガガガガガガガガガガガッ!!!

「ぐっ！ うう!!」

激しい銃撃に耐えるクラリス機。重魔導による防御と飛電メタルによる強固な装甲のおかげで致命傷はもらっていないが、搭乗者であ

るクラリスの消耗は確実に進んでいた…。辛うじて魔力弾で抵抗を試みるも、そんな弱々しい攻撃がアイゼンイエーガーに通じるはずもなく、怯ませることすらままならない始末。

すぐ近くでバルカンとクローズも戦っている。青2号ライダー対決…こちらは技術で優れるバルカンを経験と経験とパワーとタフネスでクローズが銃撃に苦戦しつつも喰らいつく。

「クソツ！ 銃なんか捨ててかかってきやがれ！」

「…さつきから、銃相手に素手とか馬鹿だろお前。」

「ああ!? 誰がバカだ！ 俺はプロテインの貴公子、万丈りゆ……」

ズドドン!!

「おおおう!?」

「真面目にやれ（やりなさいよ）。」

ムキになったクローズにマルガレーテとビルドから注意喚起の砲撃が飛んでくる。クローズは『クソガキい!!』と悪態をつきながらも、ボクシンググローブのような変身ツールと新しいフルボトルを取り出してビルドドライバーへ装着する。

「クローズマグマ!!」

「やってやらあ!!」

迸る溶岩に翼を拡げる炎の龍…仮面ライダークローズ・マグマへと強化変身。仕切り直しとバルカンへと拳で再び立ち向かう。

その傍らで尚も弾丸の潮流に晒され続けるクラリスの無限：牙を剥く黒鉄の飛礫が機体を激しく振動させ、鼓膜を劈くような轟音に苦悶の声が洩れてしまう……。恐らく飛電メタルの装甲でなくては今頃は蜂の巣であっただろうが、このままいくとパイロットに限界が来るのは時間の問題。

……だが

「…」

—— 突然、鉄の雨が止む

エリスがアイゼンイエーガーのトリガーを押すことを止めたのだ。熱と硝煙を纏う銃身と一体化した霊子戦闘機の右腕を上げ、明らかに不満げな顔をしていた。理由は簡単…

「…何故、本気でかかってこない？」

明らかに相手に戦意の無いから。

数度、リロードやポジジョンを変える際の微かな隙など反撃を狙えるタイミングは幾つもあったのに、被弾はゼロ。こちらに向ける攻撃はほとんどが明後日の方向に飛んでいくので回避行動の必要すらない…。対し、クラリス機は回避すらろくにしない文字通りの良い的の有様だった。

「弱者としても試合の場になったなら、己の全力を持って臨むのが礼儀だろう？ 何が不満だ？」

「——私は…」

静かに怒りを滲ませる問いに、絞りだすように答えるクラリス。

「私は、誰も傷つけたくないんです…。この重魔導で誰かを、大切な人



たちを守るって決めたのに……。なんで、同じ人間と戦わなくちやいけないんですか？　こんなので、『平和の祭典』なんてバカげてます……。おかしいとは思わないんですか、貴女たちは……。下手をしたら大怪我じゃ済まないかもしれないですよ!?!」

彼女は反対だった。この歪められた名ばかりの『平和の祭典』も、自分の重魔導の力を同じ人間に向けるのも、人間同士で死ぬ可能性すらある競い合いをすることも……

「私はこんなことをするために帝国華撃団に来たんじゃない……。どうして、こんなことに……」

震えて、泣き崩れるクラリス：彼女には今の全てが重すぎた。

しかし、

「もう良いわ、黙りなさい。」

温情はかけられなかった。真逆の冷たい侮蔑が胸に突き刺さる。

「平和の祭典の意味は……『平和を守るための祭典』という意味。それすら理解しない貴女に帝国華撃団を名乗る資格すらない。……失せろ。」

無慈悲な蹴りが無限を襲い、転倒。そのまま立ち上がることは無い。エリスもそれ以上、追撃を加えない。

「帝国華撃団……その名を継ぐ者に少しは期待したのだけれど。本当に

ガツカリ。」

「…」

そして、アイゼンイエーガーは去り取り残される無限…その中のクラリス。その一部始終に気がついたバルカンとクローズも戦いの手を止める。

会場も騒然となり、実況も『一体、どうしたのでしょうか?』と言葉を流す中でプレジデントGのみがVIPルームの窓からほくそ笑む。

「所詮、クズはクズなのだ。新装備だなんだといった時は肝を冷やしたが、まあとんだコケ脅しだったな。」

——無様なり、哀れなり、帝国華撃団。かつての栄光の名を抱いまま腐りおちろ。」

☆☆☆☆

…結局、何も出来なかった。

クラリスはコックピットの中で泣き崩れおちていた。変わると誓ったのに…前に進むと誓ったのに、何も出来なかった。

情けない、逃げたい、消えてなくなりたい…。やっぱり、自分には無理だったんだ。ごめんなさい…ごめんなさい…

「なあ…あんだ。」

…?

呼びかける声に顔をあげると、霊子戦闘機越しの目の前にクロー

ズ・マグマが立っていた。戦いの意思是感じられない…ぎこちなくだが、話しかけてくる。

「なんでお前戦わねえんだ？ このままだと、棄権扱いだぞ。」

「……………アナタも私に戦えと…暴力を振りかざせというのですか？」

「あ？ …よくわかんねえけどさ、それで良いのかお前？」

良い訳がない。でも…

「私は…人を守るためにここに来たんです。私の力は、人間を傷つけるためにあるんじゃない！」

クラリスの迷いからくる悲痛な叫び…すると、クロースは『ああ…』と頭をかくと

「まあ、気持ちはわからなくも無いな。」

意外にも理解を示す。『でもな…』と彼は続ける。

「その、うまく言えねえけど…」

俺達、仮面ライダーも別に最初からこの決定を呑みこめたわけじゃない。けどな、エリスが言ったんだよ…華撃団大戦は平和の祭典…『平和を守るための祭典』だって。自分たちは強い、この力があればどんな奴が相手だろうと負けねえ、だから安心して毎日を生きろって、見てる人間たちに見せる場所こそがこの舞台なんだってな。この場から背を向ければ、俺達は誰からも信用されない。仮面ライダーは暴力の権化になっちまう。

それが、嫌だからって…同じ仲間でありたいからってエリスが必死に頭を下げてきたんだよ。だから、俺達はその想いにこたえてここにいる。」

「…」

「ここにお前が嫌う暴力を振るう奴は居ない。テメエの譲れない夢と意地をかけて互いに競ってるんだだけだ。お前は違うのか？ 仮にこれが『暴力』だとしても、その重さを一緒に背負える仲間はいないのか？ 今、戦っている奴等が目を背けていいのか？」

——！

自分が嫌う『暴力』とは何なのか。クラリスは改めて、自分に問う

…

「私は…」

己の為すべきことは…

## 誠を受け継ぐ者 IV

「ぐあっ！」

「っ!？」

ついに追い詰められるあざみとバルキリー……。バルカンも加勢したものの、損耗が少ないベルリン華撃団とビルドからしたら大した障害にもならない。このままいけば、初戦は彼女たちが涼しい顔で勝利を飾るだろう……。少なくとも、何も知らない者たちからはそう見える筈。

「終わりだ、帝国華撃団。貴方たちの底は知れた……。せめてもの慈悲、私達……ベルリン華撃団が葬ってあげましょう。」

(エリス……)

しかし、銃口を向けるエリスの顔は悲痛なものだった。

帝国華撃団再建に並々ならぬ思いがあったのは当事者だけではない。それは、敵に塩を送るで済ますにはあまりに大き過ぎるベルリン華撃団からもたらされた飛電改装といった援助からも解りうるだろう……。もし、初戦敗退でもせめて自分たちに一矢報いるくらいの活躍が出来れば全てが終わったあとに、再建の糸口になったかもしれないが……。彼等は彼女の期待には応えられなかった。

そんな胸の内を察しながらも、引き金を引こうとするエリスにあえて何も言うことはしないマルガレーテ……

そして、落ち込んでいるのは彼女だけではない。

(最悪だ。『飛電改装の真価』を発揮出来れば、まだ可能性があったかもしれないのに……。)

ビルドも落胆していた……。試作した装備の性能を見届けられない科学者の側面としても、栄光のために競い戦う戦士としても。勝った

ところで、空気は悪くなるのは間違いない上に後々にもエリスに影を落とすことになるだろう。加えて、帝国華撃団の敗退は『本来あるべきシナリオ』からかけ離れた未知数の展開になりうるのだ。そうなる、今後に起こりうるイベントの対策も滅茶苦茶になってしまう。

…そんな考えをしていた時にふと気がつく。

(あれ? 万丈は何処だ?)

「待ちなさい…」

その時、背後からの声に振り向いたベルリン華撃団。そこには、クラリスの無限が立ち上がりこちらを見据えていた…。すぐにマルガレーテが迎撃しようとするが、エリス機が制して彼女へと通信を繋ぐ。

「棄権しろ、と言ったつもりだったけど? まだ帝国華撃団の名に泥を塗りたいの?」

「そうですね…そう言われても仕方ありません。仲間に責任を押し付けて、自分は言い訳ばかりで甘えて逃げてばかりで…最低です。」

自己嫌悪…何度したかわからない。そして、そのままいつも自嘲してイジけて耳を塞いで全部が終わるのを待っていた…

それが、『今までの自分』だった。

「でも、やっと気がついたんです。それが、自分も仲間も裏切ることだって…！ 私は、したくないことをやらされるんじゃない…！ 大切な場所を守るためにッ 信じてくれた人たちのためにッ 皆の夢を叶えるためにッ 立ち向かうんだ!! 自分の意志で!!」

思い出した。もう自分の魂はスノーフレイク家の暗い書斎ではなく、この光が溢れる場所へ連れ出してくれた人達の帝都に、帝国華撃団にあるのだと。だから、自分は帝国華撃団の団員として使命を果たし、正義を示す…！

その声に反応するように彼女の無限が鋼色から光を帯びていく…

【 K A M E N R I D E R W / A B I L I T Y 】

【 A r e y o u r e a d y ? 】

「!?!」

纏うは緑と紫…それは、『仮面ライダーダブル』と同じ。

かつて、彼女にアナザーライダーとして、望まぬ力と絶望を与えたソレは今…未来を掴み取る希望として鼓動を刻もうとしていた…。

(感じる…！私の重魔導と、仮面ライダーの力がひとつになっていくのが…!! これが、飛電改装の…！)

操縦桿を握る手が凄まじいエネルギーの潮流を感じとる…これなら、ベルリン華撃団だって蹴散らすことが…

——で、また傷つけるの？ ——今ならまだ逃げられるよ？  
——痛いのは嫌でしょ？

「…」

脳裏で囁く声。ああ、わかっている…『弱い自分』だ。

アナザーダブルで暴れていた人格の彼女は、紛れもなくずっと昔から存在していた『弱い自分』。アナザーライダーの力はただのキツカケ…彼女は他ならない私自身。いつもその声に屈して流されてきたのは自分だった。今回だって折れそうになった…  
でも、もう

「私は自分の罪からも…痛みからも逃げない!!」

【 E X T R E M E 】

ギョオオツ!!とクラリスの無限から吹き荒れる靈力の嵐…

そして、その背後からは戦士の虚像が浮かび上がる。緑と黒…その真ん中に極限たる瑠璃色の輝きを宿す『仮面ライダーダブル・サイクロンジョーカーエクストリーム』…それに、呼応してか無限の本型ユニットも各種ガイアメモリに対応したエレメントを宿し、『緑』『赤』『黄色』『紫』と輝く!

一方、あまりの急変かつ激変したクラリスの無限の傍らで、クローズが『あ、これヤバいことしたかも…』とおろおろしている。しかも、ビルドに至っては…

「わ、すっげ。それどうなってんの?」

…この始末。造った本人が言ってはいけない台詞五本指に入るこ



とを平然と言い放ちマルガレーテは絶句する。

「桐生戦兎！一体、何をあの機体に積んだんですか!？」

「ゼロワンの変身ツールと同様のプログライズキーを接続したから、多分その関連かなあ。それにしても、すげえわ。さすが、俺。」

この男は…ツ!?

すぐさまこのナルシスト科学者の頭をぶち抜いてやりたい衝動に駆られたが怒りを呑み込み必死に堪える。無論、その最中にもクラリスは全てに幕を引くべく更に無限の力とダブルの力を引き出していく。

「サイクロン！ マキシマムドライブ!!」

「ヒート！ マキシマムドライブ!!」

「ルナ！ マキシマムドライブ!!」

「ジョーカー！ マキシマムドライブ!!」

「プリズム！ マキシマムドライブ!!」

「これが、私の全身全霊!!」

本型ユニットに重魔導のエネルギーが…呼応するようにダブルエクストリームの幻影がプリズムビツカーを向ける。その時、ビルドも流石にふざけている場合ではないと、缶サイズのアイテムを取り出してクローズへ叫ぶ。

「万丈ー」

「それ…!? 仕方ねえか!」

すぐに、ビルドたちの元へ反転して跳んでいくクローズ…それとほぼ同時にクラリスは必殺技を放つ！

「クラリスツ!!プリズム・エクストリーム!!」

ゴオオオ!!と吹き荒れる虹色の光線。無限とダブル・エクストリーム側の二門から放たれるビームの乱反射はベルリンを呑み込む寸前、一瞬だけはやく回りこんだクローズがビルドと重なり『1人』になると身を呈して防御の姿勢をとり、あざみ機もバルカンとバルキリーを覆い被さって庇う。

次の瞬間、目が眩むほどの閃光と大爆発が起きあまりの爆風に観客席からも悲鳴があがる…。

「こ、これは…」

想定外の事態に高見の見物を決め込んでいたプレジデントGも息を呑む…

やがて、煙が晴れていき…全てが明らかになった。

「…はは、やっぱサイコーでしょ。俺の発明はさ!」

「ふざけんじゃ…ねえぞ…戦兎…!」

変身解除されながらも、何処か嬉しげに膝をつく戦兎と万丈に…

「マルガレーテ、どうだ…?」

「駄目です、全システムダウン。戦闘続行は不可能です。」

腕を破壊されボロボロのアイゼンイエーガーが2機…かなめの重火器を破壊され木偶の坊と化したそれらの片割れから、『そうか…』とエリスの声。つまり、それが意味することは…

「勝った…?…? 勝った…! やりました! 皆さん、わたしやります」

したよ…」

——ボスン！

「え…？」

歓喜の声を主があげると同時に無限も音をあげて、煙をあげた…エ  
ラー表示の数々、戦闘続行は無理だろう。レバーを引いても何も反応  
が無い。一発本番の試作装備…やはり、調整が不十分だったにせよ戦  
果は十分だろう。

「無限、ありがとうございます。今は休んで。

そうだ…神山隊長は…！」

そう、ここは片ついても神山はまだ星見と戦っているはず…。

慌て、見回すがふたりは自分たちより離れた場所で試合をしている  
様子でこちらからは見えない。されど、霊力が炸裂しているでろう光  
の強い明滅と観客のどよめきが何が起こっているかを物語る…。

「神山隊長…。」

自分の出番は悔しいがここまで…。舞台の行く末は意地と未来を  
かけて死合う男たちに委ねられた。

## 誠を受け継ぐ者 V

…時は10年前

ひとりの男が大帝国劇場を去ろうとしていた…。

荷物を纏めて、英雄たちを失った舞台に一礼をするとバックを背に下げ出口へ向かおうと…しかし、それをまだ当時の幼い星児が裾を掴み引き留める。

「なんで行っちゃうんだよ、本郷さん！」

「星児くん…」

男…本郷猛は申し訳なさそうにすぎる少年を見据える。涙をためる瞳に罪悪感が胸に刺さるが、彼には解っていた…もうここに自分がいるべきではないのだと。

「…すみれさんにも話をした。俺は真宮寺くんや大神くんたち…そして、俺の仲間たちを捜しに行かなくてはならない。それに、ここに俺が居ても出来ることは何もないんだ。」

「でも！ 母さんが… 俺達は…」

降魔大戦は花組…そして、本郷以外の昭和ライダーたちを次元の彼方へ飛ばしてしまった。もう歌劇も防人としての務めを果たすことすら難しい事実上の帝国華撃団壊滅。本来、生き残りとして精神的支柱を果たすべきなのだろうが、言ってしまう元よりこの太正世界で本郷自身には『その場に居る』ことしか出来ない…故に、蜘蛛の糸のようにか細い可能性でも並行世界を渡ることに賭けてみることにしたのである。

それでも…！ と食い下がる星児に膝を折り目線をあわせる本郷は持っていた二振りの刀を星児に手渡す。

「…この刀を君に託す。いつか、君が『運命』と向かい合う時が来れば道を切り拓いてくれるだろう。」

—— 一振りには『桜』の花の唾が金色装飾された輝く華やかな『赤』

—— 一振りには『蓮』の花の唾に鈍く銀があらわれた禍々しい

『黒』

この刀が何だったのかは解らない。ただ、すみれが『ここに今はあ  
るべきじゃない』と何処かへやってしまった…。そして、目まぐるし  
く帝都と帝国華撃団再建への日々には忙殺され、星児もいつの間にか忘  
れてしまった。

まあ、実際そんなものが役立つことは無かったのだから仕方ない。  
それから、星児は勉学や鍛錬に幼いながらも励んだ。母であるすみれ  
も合間を縫って指導してくれたし、気の向いた時に白秋も手ほどきし  
てくれた…。他にも書庫の本を片っ端から読み漁り、花組の皆が教え  
てくれた様々なことを自分流に再現してみようと努力も重ね数年…

努力は実らなかった。

新たに立ち上げられた世界華撃団連盟W・L・O・F…正確に  
は統括者であり創設者のプレジデントGは帝国華撃団再建に前向き  
では無かったのだ。理由を問い詰めても『今更、旧い形をしたソレを  
新しい仕組みに組込むのは人材も時間もコストがかかり過ぎる』の一  
点張り…それは建前で今更、旧・華撃団の連中がしゃしゃり出てこら  
れても目障りなのだろう。

それでも、諦めなかった。かつての光を取り戻してみせる…自分が  
新しい花組隊長として……！

——なあ、聞いたか？ 帝国華撃団再建の話…つつぱねられたんだってさ。

——ま、そうだよなあ。今更、いらないだろ。上海華撃団だっているんだし…

——今の支配人、神崎すみれだろ？ 女優としては凄かったが… 経営者としては、今の古ぼけた劇場みてるとなあ。

——帝国華撃団は…過去の綺麗な思い出であってほしいわ。

「…」

陰口… 侮蔑… 哀れみ…

全てが屈辱だった。

…！  
歯を食いしばっ食いしばって、食いしばって…それでも、それでも

「——お前に何が出来る？」

そんな時に、あの人は現れた。サー・ガヴェインⅡ号ライダーのあの人と同じ名前と同じ形をした力を持つ全くの別人…ロンドンから来た一文字ハヤト。いずれ、師匠になる男。

「お前は華撃団の忘れ形見だろうが、所詮は無駄に大層な看板を引つ提げただけのガキだ。お前自身には何の力も無い…。だから、お前を哀れんだり、蔑んだりしても、誰も手を貸さない。…自分も、何もかもを変えたいならロンドンに來い。俺が直々なシゴいてやる。」

悔しいが全てが言うとおりであった。忘れ形見という看板を振り回すも自分は中身が伴わなく幼い：おふくろの腰巾着。変わらなくては：もつと、強くならなくちゃ。平和のために身を捧げた『あの人たち』のように。何よりも、手を伸ばしてくれたおふくろのために。

だけど、薄々解っていた。多分、この男がやってきたのは裏でおふくろが手を回したんだろう：このまま帝劇にいても腐ることを危惧して：。

そんな思いを確かめることも怖くて飛び出して： まだ花組に入隊したての初穂すら置き去りにして逃げて： 甘えて： ロンドンからも逃げて： 帰ってきて： 逃げて： 傷つけて：

俺は： 俺は： 俺は何をすればいいんだ？

俺は：何処を目指せば良い？

誰か： 誰か：……

苦しい： 寒い： 暗い：

誰か： 誰か：

「神山アアア!!!」  
「星児イイ!!!」

ギャアアン!と金属音鳴らしてぶつかり合う槍と刀。舞い上がる火花と有り余るほどの熱気と蒸気…。戦士と戦士が魂の底から雄叫びをあげ、刃を交わす。

実力は互角、パワーは星児機の『鬼・無限』が上回り、防御力と操縦者の技術なら神山機の無限が上回り拮抗する。

数秒後、刃が弾け間合いをとる両者。試合…否、最早、命を賭けた死合い。一撃一撃が下手をすれば霊子戦闘機だろうとバラバラにしかねない威力で喰らいあうような武の乱舞は続く。

「なんと…。これ程の霊力を持つとは…」

そんな様子を穏やかではない思いを胸に秘めながら見守っていたプレジデントG。まさか、帝国華撃団があんな隠し玉をもっていて、あろうことかベルリン華撃団が負けるのは想定外だったが、まあ良い…あんなものは『W. L. O. F. が認可していない』だのなんだの言い掛かりをつければこちらで接取出来る問題ない。ただ、ベルリンの元祖メンバーはリタイアして残るは帝国華撃団隊長と旧・華撃団忘れ形見の一騎打ち…正直、こんな展開は不安を覚えずにはいられない。

この戦いぶりを見るにわざと負けることはなさそうだが…

「ふむ。そういえば、夜叉の奴はアレを息子と言っていたな…。どうも洗脳が甘くなっている節があったが、最近の奴は何かと薄気味悪い。」

真宮寺さくらに子供がいた記録は無いが…それにしても、あの最初期の霊子戦闘機にも匹敵しうる霊力をバカ食いするマシンをあの



ように操る程のキャパシティ…。

…いや、まさか。まあ今度、調べてみるか。洗脳の再調整もしくてはならないし丁度良いだろう。」

何にせよ…万一、負けようものなら母親ごと八つ裂きにしてやるまで。無論、人間のほうの母親だ。

不気味にほくそ笑むプレジデントG…

——その背後から音も無く、刀に手をかけ忍び寄る黒い影にも気が付かずに

☆☆☆☆

「俺はツ!! ずっと、背負って生きてきたツ!!」

鬼・無限の怒涛の攻め。霊力を圧縮した斬撃が神山の無限の装甲を抉るとる! しかし、飛電メタルの装甲はすぐさま弾けとんだ状態から元の状態へと戻りダメージを修復するが、搭乗している神山自身へ

の消耗はそう簡単にいかない。一撃一撃を受け流すにも、防ぐにも体力・霊力がゴリゴリ削られる…機体よりも先に神山自身が駄目になりそうな勢いだ。

「…ぐっ!?!」

「俺は、夢がある！ 絶対に叶えなくちゃいけない夢がッ 取り戻さないといけない夢がッ!! お前には俺と同じ覚悟はあるのか!!」

頭上から迫りくる槍の切っ先。咄嗟に身を引き、刃は地面に突き刺さった上に神山機に踏みつけられ深々と地面にめり込み引き抜けなくなる。致命的な隙を神山は逃さない。

「背負っているのは、お前だけじゃないッ!」

慌て槍を放して飛び退いた鬼・無限の懐へ一気に踏み込み薙ぎ払い。その一閃は黒い装甲を掠めるが、ダメージらしいダメージを与えられず距離をとった彼は背中の中のホルダーから取り出した霊子ライフルの銃口を向ける。牽制のつもりだろうが、神山は恐れない。更に、踏み込み一閃…霊力の光を灯した銃身を斬り上げて両断。圧縮されていた霊力が炸裂し、鬼・無限は大きく後ろへよろけ星児の苦悶の声が洩れる…。

「ぬぐううアッ、アッ、アッ…!! まだだッ! まだだ、神山ア!!」

されど、退くことはない。星児はコックピットのスイッチを操作し、霊子タービンの出力を限界まで上げるよう操作。すると、ゴオオ!と呻くように紫色の霊力の炎が全身から噴き出し、鬼…否、幽鬼かもしくは悪魔のような霊力のオーラを纏ってみせる。

同時に、機体はその力を維持すべく操縦桿を握る者の命を吸い上げ、一気にかかる負担は鼻血や血涙…牙を深々と突き立てられるような激痛となり星児を襲う。

その異常さ、すぐに神山は気が付き攻め手を止めた。

「星児、お前…!？」

「……これが、俺の死ぬ気の覚悟だ……。さあ、神山ア…かかってこいよ！ 死力を尽くしてなア!!」

死ぬ気になればとはよく言う言葉…

この意味、正確には死を選ぶほどの覚悟があるなら、何だって出来るということ指すらしい。

だが… 星児の場合は…

## 誠を受け継ぐ者 VI

——まるで、悲鳴だ。

雄叫びが如く燃え滾る星児の霊力と苛烈なまでの戦いぶりに、さくらは不思議とそう感じてしまった。

会場に着いた彼女と虎月：一足遅れて、或人もイズも観客席に到着し試合の行く末を覗いていた。神山と星児は全員が戦闘不能になり、あの意味で身内同士の一騎打ちとなった今回。虎月は眼を細めながら  
呟く…

「星児にとつてもう『夢』という言葉は『呪い』に等しいのかもしれない…」

「夢が…呪い？」

「…何かもを背負ってきすぎたんだ。ずっと独りで、期待も夢も…孤独に痛みも絶望も… 投げ出せない全てをずっとあの子は10年間絡めとられてきた。人を重みで殺す夢なんて、正しく『呪い』さ。」

もし、星児がクラリスや初穂のようにあくまで完全な他所からの人間だったら、とつくに逃げ出していたであろう数々の過去。しかし、星児はどんなに腐つても『忘れ形見』という肩書から切り離すように周囲は見ない。そして、何よりも…今は思い出になつてしまった英雄たちの幻が、残された者たちの心を尚も奮い立たせる。そんな無理が重なるに重なり、ついに『忘れ形見』はその心が捻れて行き着くべき場所すら忘れ見えなくなっている…。

「もう限界だよ。彼は夢を抱いたまま燃え尽きる。」

——むしろ、これで良かったのかもしれない。このほうがあの子にも幸せだろう…」

夢に殉じていけるのなら、そうきつと…

「それは違う!」

否!

諦観するような虎月を否定したのは或人。

「夢は人を殺すものじゃない、叶えるものだ! そして、星児くんの『夢』は彼独りのものじゃない…花組もすみれさんも皆同じものを目指してここにいる!ひとりじゃ、重すぎても仲間となら立ち上がれる…星児くんだって!」

「…っ。手遅れさ。今更、何が出来る…」

「出来るさ…! 神山隊長なら…!」



「…はあ! …はあ!」

息を荒くする神山…。飛電改装を施した無限でさえ、既に限界を迎

えつつあった。

星児の戦い方は霊力の爆発的な消耗を物ともしないパワーファイトのスタイルに神山は持久戦で挑もうとした…それが間違いだった。必殺技クラスの霊力放出した斬撃を湯水の如く使っても全くバテないスタミナ…本来、男性は女性より霊力のキャパシティは少ない傾向にあるのが常識だが、しかし星児の霊力量は完全に常人どころか人間離れしている。

旧・花組はそれぞれが自分たちの持つ技術の手解きを星児にしたが、手解き以上のことはしなかった。理由は星児自身にもわからない…だが、生まれ持ったの霊力量とスタミナという一見にはわからない切札が彼にはあり、神山は一番選んではいけない手を選んでしまったのである。

「……神山…せめてもの手向けの花だ。受けるがいい…」

眼を閉じ…意を決し見開く星児は刀を頭上に交差させ霊力を圧縮させる…放つは形だけの出来損ないの我流なれど、その威力はトドメを刺すには充分な『我流／桜花剣征・破邪放神』。帝国華撃団と仲間…母に叩きつける決別の華。

「——咲け、鉄の華…。——決して散らぬ鐵の花…。」

「くっっ！…星児！」

駄目だ。ここで負ければ、星児は本当に取り返しがつかない場所まで行ってしまう…それなのに、己の身体も無限も軋んで動かない。神山は眼を瞑る…やはり、自分では届かないのか。やっと手に入れた新しい夢を再会した友を…この手から溢して…

「——あきらめないで！ 神山隊長！」

「！」

その時、観客席からさくらの声が響く。  
頬を涙を流し… 精一杯の叫びに願いを託して…

（ああ、そうだ… 何を俺はまた諦めようとしていたんだ…！）

決めたじゃないか。覚悟を改めた時に、隊長の役を本気で背負うと  
決めた時に… もう何も諦めないと！

（立て！ 神山誠十郎！ 俺はッ…！）

「…!?!」

神山の想いに呼応するように、無限は地を蹴り再び動き出す。大技  
を出すためにがら空きになった相手の懐目掛けて全力で踏み込み、星  
児も面食らい隙が出来てしまう。

「まだだ…ッ!!」

「なっ…!? 我流・破邪…」

させるか…! 刀の片割れを投げつけ、必殺技の発動を阻止。そのまま、踏み込んで一太刀で鬼・無限の双刃を一太刀でへし折る神山機。されど、即座に鬼・無限は身を振らせ避けると地面に突き刺さっていた愛槍へ飛びつき、これを引き抜くとジャッ!!と切っ先を向け構える。

——次の一手で全てが決まるのだ。

「神山アアア!!!」

「星児…!!!」

両者、踏み込み そして…

——ギャン!!

★  
★  
★  
★  
★  
★



どうして、こんなことになってしまったのか……  
目指す夢も場所も同じはずなのに……

戦いながらも、そのことが頭を離れなかったと神山自身が自覚している。はじまりの幼い日の記憶を忘れていたからか……それとも、懸けてきた年月の想いの違いのせいなのか。何でこうもすれ違って、果ては刃を交えることになってしまったのだ……

不幸か、策略のせいか……いや、ちがう

——…迷惑をかけたぶん、取り返す機会をくれないか。

そう、最初に和解したあの時にこう言うべきだった。

「お前の夢も…痛みも、苦しみも…一緒に背負うから！俺達と共に前に進もう……！ だから、帰ってこい！ もう全部独りで背負いこむな……！」

神山機の刃が槍をすり抜け鬼・無限の腹に喰い込んで火花を散らしている……。同時に折れた矛先と角が地面に突き刺さった……勝敗は決したのだ。

やがて、事切れたように項垂れた鬼・無限。パイロットである星児は……血と涙が混ざったものを頬に伝わせていながらも……静かに笑っていた。

「……やっぱり、強えな。兄さんは……」

同時にコックピット内で、機器類が弾けて火が付き始め……鬼・無限もガタガタと不可思議な挙動と随所で装甲やパーツが弾けとびはじ

める。明らかな異常に神山はギョツとした…

「星児…!?!」

「早く離れてくれ兄さん…。靈子タービンに負荷をかけ過ぎたみたいだ。強引に扱ったせいで、脱出機能も…いや、それはそもそももつけて無えか。もう時期、コイツは爆発する。俺のことは放っておけ。」

「そんなこと出来るか…!」

「良いよ…。もう兄さんたちがいれば、華撃団再興は叶うさ。俺は…もう満足だ。」

星児の機体は最新鋭とはいえ、無理な扱いに限界を迎えていたのだ。特に心臓部である靈子タービンは文字通りにタガが外れたように赤熱し、内部で激しく暴れまわる靈力を炸裂させんとしている。その影響か脱出機構も作動しない…このままいけば、間もなく爆発に巻き込まれて星児諸共機体は木っ端微塵になってしまうだろう。

されど、星児は不思議と迫る死すら穏やかに受け入れていた…。もう自分のやれることはやった。全力でぶつかり負けた。

もう大丈夫だ。自分の夢は大切な人たちが引き継いで…必ず叶えてくれると。

後悔は…まあある。色々

未練も…やっぱり、あるけれど

「俺はここまでだ。最後の最後まで迷惑かけてばっかで、ごめんな。」  
「ふざけんな! 諦めるなよ、まだこれからだろ! 帝国華撃団再建をお前が一番に見なくてどうする!?! 努力してきたんだろ、お前のおふくろさんと!!」

「兄さん、それは違う。最初から俺はただ甘えてただけだ。そうしてらうちに過去に魂を置き忘れた我儘なガキだ。そんな奴に未来はもういない。」

ああ、やっぱり何も出来なかった。  
何も残せなかった……。でも、もう良い。……疲れたよ。

「じゃあな……。」

次の瞬間、激しい衝撃と共に星児の視界は暗転した……。

君の帰る場所。

——色々あった。でも、悪くない人生だったと思う。

同じ団員の息子というだけで、家族にも帰る場所にも恵まれて…  
血は繋がっていなくても我が子同然に厳しくも愛を注いでくれた母もいた。

友にも恵まれた。…本当に人に恵まれていた人生だった。

「——！——ッ！——！！」

だから、少しでも誰かの役に立ちたかった。

誰かの支えになりたかった。誰かに認めてほしかった。

結局、迷惑をかけてばかりだったけども…

「——！——目を——さい！！——！」

このまま生きているよりは良いだろう。せめて、これ以上な邪魔にならないように死んだほうが…

「目を覚ませ！—— 神崎星兎！！」

——！？

聞こえるはずのない声に朦朧としていた意識が覚醒する。

「姉ちゃん…？？」

天宮さくら…間違いない、コックピットから装甲を隔てた先にいる…！？彼女はアタッシユカリバーを装甲の合間に突き刺してハッチをこじ開けようとしているのだ。更にゼロワン・シャイニングスチーム

ホッパーが苦悶の声を上げながらも、両手を打ち付けて靈力を吸い上げていてではないか。神山の無限も離れずハッチを剥がそうと限界のボディに鞭打っている。

「そんな… どうして。駄目だ！このままじゃ、巻き込まれる…！俺のことなんて放っておけよ！」

「そうやって、逃げるつもり!? 死んで楽になろうなんて卑怯！それが、全力であなたに向かいあってきた人たちに対する答えか、神崎星児！ それでも、花組の忘れ形見か！」

「…じゃあ、どうしろって言うんだよ！ やること為すこと裏目に出て、嘲笑われて、迷惑かけて…もう、生きていたくなんかねえよ。もう死なせてくれ…放っておいてくれよ!!」

さくらの叱咤に思わず弱音が洩れてくる…それが、傷だらけの少年の素顔だった。苦しみに遂に折れた哀れな独りぼっち…泣きじゃくる顔はずっと心の奥底で隠し続けてきた弱りきった自分。それでも！とさくらは叫び続ける。

「情けなくなっただっていい！嘲笑われてたって、転んだって…！生きなさい!! どんな時でも、あなたの帰りを待っている人はいるでしょ!!」

帰りを待つ人…過る母の顔。花組、ロンドン…

続けて叫ぶゼロワン。

「星児くん、君の夢は死ぬことなんかじゃないだろ!! …それで君は満足できるのか？ 花組の皆や君のお母さんは胸を張れるのか!!」

——夢。

自分の本当にしたいことは、描く未来はこんなことだったか？

「星児、お前の夢はなんだ…!？」

夢… 本当の願いは… 夢見た先の景色は…

「帝国華撃団を…復興させること…! 兄さんや姉ちゃんたち…おふくろやさくら姐さんたち皆と一緒に輝く大帝国劇場の舞台を観たい…っ!」

その時だった。ガコン!と音がなり、ハッチがこじ開けられる…目の前にはさくらにゼロワン、神山の無限。3人が手を伸ばしている。

「手をツ…はやくツ!!」

気がついたら無意識に掴んでいたさくらの手。

そのまま、引きずり出されると同時に鬼・無限は爆発四散…神山機とゼロワンはギリギリで離脱したのであった。



「神山隊長! 星児さん!」

クラリスは愛機を降りて、神山機に駆け寄る…。

初穂やあざみにアナスタシア…更にはすみれも続き、皆が安否を確かめんと急ぐ。そして、目にしたのは愛機から降りた神山にさくらと星児が息をきらして座り込んでいた…どうやら、全員無事のようにあ

る。

「マジかよ…本当に兄さんも姉ちゃんも、滅茶苦茶だぜ。」

「無茶でも滅茶苦茶でもやるさ、俺達は仲間で家族だろ？」

「華撃団は決して、仲間を見捨てない…でも、もう勘弁してくださいよ？」

疲労が滲む乾いた笑いのやりとり。こんなように話すのなんて実にいつ以来か…再会してからは笑ったことなんて一度もなかったのに、今は幼き日々が戻ってきたようだ。

されど、すみれが近くに居るのに気づくと星児は明りが消えたように顔に暗い影を落とす…。

「星児…」

「おふくろ…ごめん。結局、なにも出来なかった。独りよがりした挙げ句にこんなザマだ。トップスタアの息子が情けねえ…」

「そんなことあるのですか！」

自嘲する我が子をすみれは優しく抱きしめる。

「あなたは、立派に戦い抜いた…恥じることなど何一つありません。誰がなんと言おうと、帝国華撃団の一員でわたくしの自慢の息子ですわ。」

「おふくろ…」

それから、少年は声をあげて泣いた。

母に抱かれなくなきなど、それこそ幼子の解き以来だ…。同時に、観客席から勇士たちの奮闘を讃える拍車が響きはじめ。それは、星児が生まれてはじめて舞台上で浴びる祝福の喝采にして、彼の縛る鎖が砕けていく音…。そして、帝国華撃団再建の大きな一歩の足音だった。

「よかった。本当によかった…」

一方、或人も疲労困憊になりながらも満足げに芝に腰を降ろし笑っていた。

星児の手は今度こそ『家族』と繋がれた…もう独りよがり迷うこともないだろう。花組の彼等に血のつながりは無い…でも、確かにそこには決して絶ち切れない絆がある。そう、それは人間とヒューマギアのような…

「——よくやったな、或人。」

「父さん？」

ふと、父親の声が聞こえた気がしてゼロワンドライバーを取り出すと…：どういわけか眩い霊力の光を発しているではないか！『ええ!?!』と戸惑う或人だったが、次の瞬間に光がゼロワンドライバーのシルエットを象つて分離…やがて、新しいドライバーへと形を変え魂が吹き込まれる。

ゼロワンドライバーをベースに帝国華撃団のシンボルである桜を意匠にした飛電型霊子ユニットが搭載された新しいベルト…。太正と令和が交わるこの世界その在り方を示し、世界を救い『太正の1号』へと至らせるためのカギ…その名は

「それが、『ニューエイジドライバー』…太正の1号のベルトさ。実験は成功だな。」

「…」

タイミングを計ったように現れる戦兎。…万丈は戦兎の代わりにマルガレーテにシバかれて『俺は関係ねえ!?!』と悲鳴をあげていたが、心配する或人の視線も相棒の窮地も無視して話を続けていく。

「成功はした…が、かなり大詰めは危ないところだった。咄嗟の判断



で君が暴走する無限から霊力を吸い出してくれなきや、花組も神崎星児も木っ端微塵だった。感謝する。」

「あの、実験って…」

「ああ、飛電改装はドライバーと霊力リンクを円滑にするための準備に過ぎない。まあ…色々調子に乗って試合は負けたけど。終わり良ければ全て良しってね！」

——良いわけあるかア!!

「うわあ!?!こっち来た!?!」

多分この人も後々でマルガレーテにシバき倒されるんだろうなあと思いつつ、再び新しいベルトへと視線を移す或人。戦兎は終わりと言ったが、まだ終わりじゃない…いいや、彼等はまだスタート地点に経ったばかりなのだから。

喜びも苦難も…全てがここから始まるんだ。

## 幕間 私はさくら

★ ★ ★ ★ ★

「やれやれ、本当に勝っちゃうなんてね。」

観客席に残っていた虎月は驚いたと頭に手を当てた……

いくらイレギュラーな展開とはいえ、ベルリン華撃団を破るだけではなく星児まで救ってみせるとは。持ち直してきたまだおちこぼれの華撃団……そんな認識を改めるべきかもしれない。奇跡に均しくとも、その結果は彼・彼女らが己の力で勝ち取ったもの……そう、次の時代を担うあの子たちなら……

「血塗られた運命だって……断ち切れるかもしれない。」

淡い希望が胸に灯る。今は……信じてみたい。

「さて、あとはあの子たちを苦しめた分、プレジデントGにお灸を据えるだけだ。」

残るは散々息子や友人であるすみれと彼女の華撃団へ散々、煮え湯を飲ましてきた悪の親玉に鉄槌を下してやろう。別にこの十年余りを会社を立ち上げ、大人しく船乗りをしてきたわけじゃない。

旧華撃団勢力への冷遇に不信感を持った日からずっと、あの男の周囲を洗ってきた。そして、集めた……『不正取引』『パワハラ』『不当人事』『資金横領』『特定の企業との癒着』『自分に不利な証拠隠滅』など……その大半が最近になってのことばかりなのが気になったが、何にせよ首根を掴み締め上げるには充分過ぎるだろう。

「あとは渡した証拠でロンドンと上海が彼を抑えてくれれば……」



華撃団大戦会場VIPルーム：

ロンドン華撃団と上海華撃団が踏み込み、プレジデントGが取り押さえられる……。はずだった…。

「どうなってるんだこれは!？」

驚くランスロット：部屋は滅茶苦茶に斬り刻まれ、おびただしい血痕までついている様子は平和の祭典に全くをもつて不相応だろう。この部屋にいたであろうプレジデントGの気配は既に無く、まさかとは思いたくないが：最悪の事態が頭を過る。

「勘付かれて逃げた…ってかんじじゃねえよな、こりや。外には普通に見張りがいたし、こんだけ派手にやってたら気がつかねえわけが…」

シャオロンは落ち着いて現場を観察：ユイは惨状に若干ながら冷静さを失いかけ、アーサーも当初の予定から崩れどうするべきか悩む…。そんな中、矢車が壁の刀傷に興味を示していることに気がついたウオズ。手をあててみたりと随分と気にしているようだが…？

「矢車想、君は何かわかったのかい？」

「…夜叉だ。奴の刀だ。この刀傷からは奴の地獄を感じる。」

…地獄？　そこは意味不明だが、夜叉の仕業と断念する矢車は部屋

を歩いてこの部屋で起きた事件を推察する。

「最初、外を覗いていた奴の背中に一撃……」

窓には血の手形……不意に受けた背中 of 傷に触りながら触れてしまったのだろうか。ベタベタとつく紋様は生々しい……

「そして、逃げる奴の急所を外しながら一太刀……更に這いずり回る奴にまた一太刀……」

今度は床の血の跡を追う矢車。真っ赤な鉄臭い絨毯の先……壁には丁度、刀の幅ほどの穴が空いているが……不自然にそこで血の跡が途切れていた。トドメを刺されるところを間一髪逃げた……？なら、見張りのエージェントが黙っているはずが無い。ならば……

「……連れ去られたか。」

導き出される結論に皆が震える……されど、アーサーのみは疑問を唱えた。

「待ってくれ。何故、夜叉と断定できる？」

「わからないか？アイツは俺と同じ光から叩き落とされ『地獄』を見た人間の目をして……仮面越しでも判るくらいにな。」

地獄……その意味は蔑まれ、嘲笑われ、真っ暗な暗闇の地べたを這いずり回った者にしか解らない。でも確かに……矢車は感じとってた。

あの女は自分と『同類』だと。



…何処で齒車が狂ったのか？

「はぁ…はぁ…いひいい、ひいい！」

痛みと怒りでグチャグチャになる頭で思考しながら、プレジデント Gは華撃団大戦会場近くの薄暗い裏道を息をきらし走っていた…。身体にはおびただしい数の刀傷、トレードマークのサングラスは無惨にひしゃげてヒビ割れている始末…

見よ、この情けない様を。組織の頂点に立ちながら、人を嘲り策謀を巡らし、踏み躪ってきた男の末路を…！猫から逃げる瀕死のドブ鼠のようじゃないか！

「何故だア、何故ダア!! 私が…こんな！」

「しぶといことですね。まあ、もう少し苦しんでもらいたいところですが…」

笑みを浮かべて追うのは仮面ライダー夜叉…マスクだけ解除して、真宮寺さくらの顔にべったりと返り血をつけている。サツと刀をはらいながら払いながら、切先へと妖力を這わせていく…さあ、トドメ

を…

が、その前にアナザーゼロワン…レクスが立ちはだかった。

『やめなさい、夜叉！ 彼には滅亡迅雷を担ってもらう必要があるわ！今、彼に死なれたら…』

「退きなさい。私には我が子と友を傷つけられた分と、10年分の怨みを晴らす権利がある！」

制止を振り切り、プレジデントGの前に躍り出る夜叉。既にろくな力など残っていない哀れな男はべちゃべちゃと水溜りに腰をつけ、後退りするくらいしか出来ない…あとは精々睨むくらいが限界だ。そんな眉間に刃を突きつけると彼女は静かに問う。

「最後に言い遺すことはありますか…プレジデントG？ いいえ、『幻庵葬轍』！」

「おのれ… おのれ…！ 洗脳が解けたのか、真宮寺さくらア…！  
あの時、貴様を殺していれば…」

増悪、後悔、持ちうる全てを吐き出すプレジデントG…  
しかし、

「ああ、あなた…結局、気が付かなかったんですね？10年も手駒としておきながら…。はははははははは…!!」

な、なに…？

戸惑うプレジデントGに夜叉はアイマスクと共に『真宮寺さくらという仮面』を外す。露わになったのは素顔…異形のそれでもない確かな人の顔。プレジデントGとて見覚えがあるその顔は…

「! …馬鹿な、貴様は!」

天宮… さくら…!?!」

涙線に傷痕があれど、間違いなく天宮さくらだ。

だが、おかしい。夜叉と天宮さくらは同じタイミングで華撃団大戦会場にいたはず!?! 同一人物はずがない!?! なら、この女は…10年以上『真宮寺さくら』と信じて疑わず手駒としてきたこの女は一体…!?!

「貴様、お前は…誰だ!!」

「私は…さくらですよ。」

直後、刃は振り下ろされてプレジデントGの姿は両断され霞となつて消え去つた…。呆気ないものだど刀を鞘におさめる夜叉。溜まり重なつた積年の怨みの結末がこうも味気なく終わるなんて…虚しさを隠すように天宮さくらの顔のままアイマスクをつけ直すと、呆れ声のアナザーゼロワンが嗜める。

『夜叉…』

「問題ありません。滅亡迅雷の代わりにアテならありますよ。」

アテ…? 彼女の真意を察することは出来ないが、今はいざこぎを

これ以上起こすべきではないだろう…頭を抱えながら、人目につかないうちにこの場を去ることにした。

取り敢えず、プレジデントGがいなくなった以上は特別に気をつかう必要もないことだけはプラスだ。

『それじゃあ、ゆつくり代替案はきかせてもらおうかしら…』

——カナタちゃん。』



正しき力 刃の心 編

乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！ I

…こんな穏やかな朝はいつ以来だろう

大帝國劇場の屋根で帝都を見渡しながら、あざみは『ふう…』と息を洩らした…。

忍者である彼女の朝は早い。早朝のまだ日の出のうちに起床・布団を畳んで着替えて誰よりも先に朝食を済ませます。朝食に関しては厨房がまだ仕込中ということもあり、神山がおにぎりを用意してくれている。時に、隊長職と一緒に夜遅くまで事務仕事をしているのに幼いながらあざみとしても申し訳なく思う。

「…はむ。そのうち、支配人に神山にお休みをあげるように頼んでみようかな。」

そんなありがたい朝食のおにぎりを頬張りながら、彼女の1日は静かに幕を開ける…

「ぎゃあゝあゝあゝ ああああああああああ!!!?」

「んぷっ!？」

え、なに今の悲鳴!？ あの独特のガラガラとした周波の悲鳴は或人か…!

「ごっくん! …正面のほう!」

喉に詰まらせかけたおにぎりを強引に腹へ呑みこみ、素早く飛び出して正面玄関へ向かう。すると、そこには腰を抜かした或人と寄り添うイズ…これに相對するように白い職人を思わせる服を着た阿修羅が如き人相の大男がひとり。

「何奴!」

「あ、いや…そのだな…」

腰に帯刀もしている、別に太正世界では軍人などでは珍しくないが朝からそんな見ず知らずの人間がやってくるなんて穏やかではない。ただ、客人は随分と困っている様子。

そこへ、入口から続いてやってきたのは星児。

「オジキ! あーもう、気持ちわかるけどいきなり入ったら! …って、遅かったか。」

叔父貴…? 知り合いなんだろうか?

なんて思っていると、まだ寝癖を直しきれしていないさくらが木刀片手に飛び出して来る。

「何の騒ぎ… えっ!? おとうさん!？」

「えっ!」

思いもよらない言葉に或人とあざみは戸惑わずにはいられない。この眼の前の厳しい大男、どう見たってさくらに似ても似つかない：それなのに、『急にどうしたの？』と駆け寄っていく様は娘のそれ。困惑を極めるふたりに更に新たな来訪者が現れる。

「さーくーらー！」

「！お母さん！！」

「!?!」

今度はお母さん!? しかし、やってきたのはさくらに似ているが齡をすみれのように重ねた大人の女性：こっちは説得力がある。さくらも勢い良く抱きつき、女性も嬉しそうに微笑んでいる：一方、親父さんは『あれ？喜び方ちがくない？』と寂しげにしていたが。とにかく、これはどういふことなのか：？



「えっ」

クラリスとアナスタシアまでもが訝しんだ：

来客はさくらの両親：即ち、天宮夫妻であることは騒ぎを聞きつけてやってきたすみれと送迎を担当していたらしい星児の言葉から説

明を受けた。…妻『天宮ひなた』に関してはまあ良いとして、夫『天宮鉄幹』の毛の先ほども似ていない大熊のような男が可憐な少女であるさくらの父とはとてもだが、領けない。

無論、口には出さないが…目は口程になんとやら、刺さる視線に鉄幹は顔を暗くしていた…やめてさしあげろ。

これはよろしく無い…すかさず、フオローを入れる神山と初穂。

「鉄幹さん、お久しぶりです。神山です、覚えていますか？」

「よ、ようおじさん！初穂ちゃんだぜ！ほら、昔うちの神社に刀を奉納してくれたたりしてただろ？覚えてるぜ！」

「君達は…セイボンに東雲神社のところのお嬢さんか。君達のことはさくらから手紙で知ったが…いや、立派になったもんだ。…感慨深いな。」

どちらもさくらの幼なじみなだけあり、鉄幹とは顔を知る仲…と言つても今回で幾年かぶりの再会なのだが。取り敢えず、気持ちが悪くは持ち直したようであった。

少しバタバタしたものの、改めてすみれが咳払いして挨拶をしないでおす。

「ごほん。ようこそ、おいでくださいました鉄幹さんにひなたさん。こうして顔をあわせるのは…」

「うちのさくらを貴方がスカウトしに来た時、以来ですな…。」

「本当に久しぶりですね、すみれさんも息災そうで何より。うちのさくらがお世話になっております。」

そして、はじまる大人の会話…こうなつてしまえば花組の面々が入る余地などなく、或人は両親の来訪に喜びと戸惑いに浮足立つさくらに話しかけた。

「ねえ、さくらちゃんのご両親つてすみれさんと付き合い長いの？」

「ええ、元々親交はあったと聞きましたよ。確か、わたしの伯母さんが帝国華撃団に縁があったとかなんかで…詳しくは知らないんですけど。それにしても、なんで来たんだろ？ 何も聞いてない…」

「…それはズバリ、『お見合い話』では!？」

「お見合い!？」

不意に話に割り込んできた星児。ズビツと指差しポーズを決めているが、お見合い話とは早合点し過ぎでは…なんてお思いになる方もいるだろうが、太正は令和の時間軸からみれば100年前に相当するのだから別に時代錯誤な発想というほどでもない。それに…

「ありえない話じゃないぜ？ おふくろも…そして、姐さんもお見合いの話には一悶着あったからなあ…ある意味、お約束とも因縁とも言える。それに姉ちゃんだって年頃の乙女、悪い虫に引つ掛かるより先に良い男を見繕うつてのも親心なんじゃねえかなあ？」  
「なんで俺を見る星児?」

神山にジーと視線を向ける…この意味合い、別に神山を『悪い虫』扱いでいるわけではない。さっさとしないと、余計なことが増えるぞという星児なりのさくらへ対しての忠告である。実際、神山を巡る恋のレースは本人の預かり知らぬところで競争者が増えつつあるので、急いだが良いのも間違っていない。

さくらにとっては余計なお世話この上ないが…

「お見合いかあ…さくらのお見合いか。花嫁衣装着たら似合うんだろ  
うなあ。」

「お？兄さん、乗り気？」

「お嫁にいくさくらを想像しただけで、涙が…（おとうさん視点）」  
「…違う、そうじゃない。」

「なに、勝手にヒトをダシに盛り上がってるんですか！」

当の本人を差し置いて盛り上がる男たちにぶんすか！とさくら。  
それに苦笑するクラリスとアナスタシアという光景…本当に立て直  
しがはじまったばかりの頃に比べれば見違えるようであるが…そん  
な中、顔を俯かせる寂しげな顔がひとり

「さくらのおとうさんに…お母さん…」

「？…あざみちゃん？」

或人だけがその異変に気がついて覗き込んだが、『なんでもない！』  
と旋風のように逃げられてしまうのであった…



廃工場 降魔のアジト…首魁である幻庵葬轍がいなくなった後も残された者は息を潜めて牙を砥いでいる。

隴もまた次なる戦いのために愛機である荒吐の整備を行っている最中…巨大な拳を反対向きにあわせたような巨大な機体を浮かばせ、小型の魔操機兵たちを操り溶接など整備をさせていた。妖力で淀む空気…意外にも彼は真面目な顔をしている。

「やはり、ここでしたか…隴。」

「…夜叉か。…その顔は…まあ、良いや。」

背後から夜叉が話かける…すると、いつものように裂けるような笑みを見せた。今、彼女は『天宮さくら』の顔でアイマスクをつけているが、特別に隴は言及はしない。付き合いはそこそこの長さになる両者だが特別に諍いが無いのは間合いをお互いに詰めようとせず、必要ない干渉をしてこなかったからだろう。故に、彼女の顔が変わっていないように隴はあえて突かない。

それは、夜叉にとっても都合だった。

「幻庵が消えました…。あなたはどうします?。」

「どうするも何も、奴の下僕じゃねえしな…俺は俺で好きにやる。あと幻庵の野郎は死んでねえ…アイストールの奴がまだここに来ない…ってことは何処かで惨めに生き延びてるんだらうよ。」

「…」

「ああ、俺はレクスの手足になるつもりは無い…ただ、足並みは揃えねえと帝国華撃団やら仮面ライダーどもは倒せない。それに、戦力の

拡充も必要だな。」

ほう…ただの狂暴な輩かと思っていたが、意外に考えているのかと裏で関心する夜叉。確かに、レクスのタイムジャッカーの能力にアナザーライダーの力に加えて自分たち降魔とあわさればかなりの勢力になりうる…だが、慢心は出来ない。各華撃団の傘下にいる仮面ライダーたちにベルリン戦で見せた無限の飛電改装。このままいけば、真っ向から殴り合うのは難しくなる一方…

「新しい仲間が必要ですか…」

「実は、既にひとり確保してある。なあ、先生！」

その時、暗がりからゆらりと現れるアナザーライダー…髑髏の仮面にまさに落ちぶれた忍者といった雰囲気の化物『アナザーシノビ』だ。足音を全くさせぬ歩み方に隙無き佇まい…アナザーライダーとしての能力もさることながら、変身者である人物の実力も相当なものだろう。全くいつの間にも手を回していたのやら…

ただ…

『…！』

「？…（私に怯えている？）」

夜叉の姿を確認するなり、本人は隠しているつもりだろうが僅かに硬直するのを見逃さなかった…もしかして、『先生』なる変身者は自分と顔見知りなのだろうか？…しかし、自分の記憶に該当する人物はいない。

そして、まだ終わりではないと続ける臃…

「実は、目をつけている奴はもうひとりいる。」

「…クラリツサ・スノーフレイクですか？」



「いいや、アイツはもう駄目だ。別だよ別……俺の狙いは……」

——望月あざみちゃんさ。

## 乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！ Ⅱ

「——この本によれば、新生・帝国華撃団は帝都に迫りくる魔の手を討ち祓い世界を救う未来が待っていた…。しかし、ネオ・タイムジャツカーⅡレクスの手によりそのシナリオは消え、夜叉と呼ばれた存在は本来とは全く別人へとすり替わっていた。この物語の行く末は今はいかに誰にも…」

「ねえ、なにしてるの…?」

あざみはサロンにて、誰に説明しているかわからない…いや、デカイ独り言(?)を喋っているウオズに遭遇していた。顔見知りの不審者とかどうしたものだろうか…はつきり言えば今は相手をしたくない。一応、仮面ライダーなので邪険には扱えないが…

「ああ、君か！ 例のニューエイジドライバーを見に来たんだ。魔王様にもちゃんと報告しないといけないからね。何処にあるか知らないかい？」

「どらいばー…? ああ、新しい星児のベルトのこと？ それなら、唯阿さんが色々調べるとか言ってたから地下のドッグにあるんじゃないかな。言伝はしておくよ。いくら、仮面ライダーだからって部外者はいきなり入れないから。」

「そうかい。なら、改めようか…」

「あざみちゃん！」

「…社長とイズ？」

ウオズに何とかお引取りをしてもらったのと入れ代わりで、話かけてきたのは或人。イズも一緒に、こっちは一体何の用なのか…

「あのさ、神山隊長が頼みがあるから来てくれって。」

「隊長が？ …わかった、今いく。」

用があるのは神山のほうか。来客の対応もあつて手が離せないのだろう…仕方ない、行ってあげよう。そう思っていた時、イズが不思議そうに首を傾げていた。何かな？

『あざみさん、あなたはだれと話していたんですか？』

「誰って、ロンドンの…あれ？」

…振り向けば、誰も居なかった。

おかしい。確かに自分はウオズと話していたはずなのに。気配も影も形も無くあの男は消え去っていた…。仮にも忍である自分に気取らることなく立ち去るなんて…

「あざみちゃん？」

「ううん、なんでもない。行こう。」

こうして、或人たちとあざみはその場を後にする…

その姿を曲がり角の陰から確認し、不敵に微笑むウオズの姿が。しかし、いつもとは何処か様子が違う…嬉々とする感情が滲む足取りで誰もいなくなった廊下を歩いていき、神山の部屋の前へ。そのまま、ドアノブに手をかけると中へ入り…クローゼットへと目を向けた。

「不用心だね、『泥棒』に入られるよ隊長さん。さて、流石にこの格好じゃ『お宝』の場所に行くのは無理があるか。」

ウオズはフンツと笑うと自らの姿を脱ぎ捨てる…

そこに、誰も知らない金髪の青年がひとり。白いジャケットを着こなすクールな雰囲気とは対象的に表情は幼子のように無邪気…やがて、彼はクローゼットから神山の着替を取り出す。

新たなる波乱の種が…静かに根を下ろしはじめていた…



「いやあ、悪いね。あざみに社長も…」

申し訳ないと苦笑する神山に連れられて、帝都の街を歩くあざみに或人とイズの3人。唐突な呼び出しの理由は買い出しに付き合っただけで欲しいとのこと…なんでも、天宮夫妻は暫く帝都に居座ることになったらしく、長期滞在に必要なものあれやこれやと必要な物を買う必要が出たからだとか。別に或人とイズとしても吝かではない…戦闘とヒューマギアの貸出以外は特に何もしていないし、(或人に至っては

歌劇の前座に出るためネタを練る無駄な足掻きをするくらいしかないので）むしろ大歓迎である。

一方、あざみは不服な様子で俯いており：気がついた神山が覗き込む。

「あざみ、嫌だったか？」

すると、不機嫌な上目遣いで彼女は神山を見返す。

「……神山、あざみに気を使ったでしょ。」

「…バレてたか。」

『?』

気を遣う？イズは理解出来ない：神山は自分の仕事をあざみに手伝わせているのに？むしろ、気を遣っているのは彼女のほう：そんな不思議がつている一方で、話は進んでいく。

「あざみはそんなに子供じゃないんだから、気にしなくていいよ。独りには…もう慣れてるから。」

「そうか。それじゃ、宜しく頼むぞ。で、買い出しが一通り終わったら…ひろみさんの菓子処に寄ろうか。」

「……………神山、きいてた？ あざみは忍者だから、子供扱いは…」

「人の厚意は素直に受け取るのも、大人の一步だぞ。」

むう…とむくれるあざみ。

可愛らしい表情と余裕の足取りの神山はまるで、歳の離れた兄弟のよう。微笑ましいが、一行はふと…進行上に見覚えがある人物たちがいることに気がつき、足を止めた。

「あれは…シャオロンたちだ。ユイさんに矢車さんも一緒だ。」

「お？ 神山じゃねえか、ちょうど劇場まで行こうと思ってた。」

シャオロンとユイ…矢車の上海華撃団の面々。大帝国劇場に向かうとしていたらしいが何の用だろうか？ ところなしか、ユイの顔も暗いし…矢車もいつも以上に不機嫌そうだ。

「シャオロン、何か用事があったのか？」

「ああ、まずはすみれ支配人に…つてのが筋だが…。まあ、お前たちに先に話しても良いか。どうせ、すぐに分かることだしよ。」

あまり、良いニュースではなさそうだ。

シャオロンもいつもの勢いが無い…。先に話しても良い…と言いながら、何かを口にするのを拒んでいる様子。これを見かねて、ユイが意を決して話す。

「——上海華撃団は…！ ……帝都を撤退することになったの…。」

★  
★  
★  
★  
★

「不戦敗!？」

神山たちが驚くシヤオロンからの説明はこうだった。

レクスと夜叉によるアナザライダー襲撃が起きた華撃団大戦の開会式：上海華撃団も無論、戦ったが装備をはじめとした損耗があまりにも激しく本国へ物資と人員の補填を打診した。このままでは試合に出ることすら厳しい：それに、帝都を護るため他の華撃団の補給分も含めて……

しかし

——上海華撃団、帝都防衛ノ任ヲ解ク。本国へ帰還セヨ。

本国政府からの回答は求めたものとは全く違った。渦中の帝都から離れるということ：華撃団大戦も神龍軒も何もかもを放り出して本拠地である上海へ帰国せよと冷たく言い放たれたのだ。無論、シヤオロンとて喰い下がった：これでは、上海華撃団が臆病風に吹かれて逃げ出したように見えてならないだろう。今こそ、降魔どもや民衆に守り手としての偉大さを見せるときだと！

それに対して、政府は……

——帝都ハ本来、帝国華撃団ガ護ル場所。既ニ建直シノ目処ガ立ツタ以上ハ、コレ以上ノ介入ノ必要ハ認メラレナイ。コレヲ持ツテ帝都防衛ノ任ハ滿了トスル。

反論が出来なかった……。あくまで、上海華撃団が帝都にいた理由は旧・帝国華撃団の『代わり』でしかないのだから。

実際、歌劇もアナスタシアを看板に持ち直し、戦闘は無限が隊員分配備されて人員の問題も解消しつつある。また、星児の件でいざこざはあったものの、既に数回は降魔を退けた上に（飛電改装というイレ

ギユラーがあれど）最強のベルリン華撃団を初出場で打ち破ったのだから一人前の華撃団として申し分ない。

「……別に、お前らが悪いとは思ってねえよ。むしろ、誇らしいぐらいだ。あんなヘツポコどもが、ここまで這い上がってきた……いつちよ前に帝都を護れるようになった。それが、本来あるべき姿なんだ。親を気取るつもりじゃねえが、——『ひとり立ち』するべきだろ？」

「シャオロン……」

彼の言う『ひとり立ち』とは……帝国華撃団がもう上海を頼らないで自力で活動していくという意味合いか。それとも、自分たちが帝都を去るという意味合いなのか……正解は本人の胸の内には無い。ただ、語る背中はいささか小さく……寂しく映る。

そんな姿は傍らで聞くあざみにとつても、強烈だった。シャオロンからはまだ再建がままならない時は、かなりのキツイ言葉を何度も何度もかけられてきたのは忘れられそうにないくらいだが……あまつさえ、自分たちを認めて帝都を去ろうとするこの男が同一人物なのだろうか。

「ユイさんはそれで良いの？」

一方、或人も上海の隊員であるユイの気持ちを訊ねる……すると、彼女は苦笑しながら応える。

「私はシャオロンがそう決めたなら従うよ。それに、このままいけばさ……帝国華撃団とはいずれ衝突することになると思う。それは避けたいんだ……さくらのことは好きだし、帝都も故郷も同然だと思ってる。争いたくないし……だから、ここは私達が引くべきなんだ。」

本当は辛いだろう、悔しいだろう……しかし、無理して彼女は笑顔を見せている。活躍の場も、何もかもを根こそぎ奪われる痛みなど身



を引き裂かれるような想いだろう…されど、華撃団は国の一組織である以上は政治に振り回されるのは仕方ない。

「ああ、でもさ…帰るのはすぐじゃないよ！あの降魔やらタイムなんちゃらをぶっ飛ばしてアイツらの首を土産にしてやるんだから！それまで、ゴネて限界まで踏みとどまってやる！」

まあ、ただで終わるつもりはないらしい。立つ鳥跡を濁さずとは言っただが、盛大に引っかけ傷を遺すつもり満々だ。

落ち込むばかりではない流石、上海華撃団……

「悪いが、そこを退いてくれたまえ!!」

「「「!?!」」」

その時、突如として桜色の無限が一行の頭上を飛び越えていった。続いて、三色光武が『私の無限をかえしなさい!』と爆走し後を追う。

何かと把握する前に、アナスタシア機が神山の前へと停まる。

「アナスタシアか！ どうした!？」

「キャプテン、大変よ…」

—— さくらの無限と新型ドライバーが盗まれたわ! ——

つづく.

## 乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！ Ⅲ

…時間を少し巻き戻す。

場所は帝国華撃団の司令室。

天宮夫妻の対応にさくらすみれがあたっている間、他の者たちもそれぞれの仕事にあたっている。司令室にいるのは唯阿と不破…星児と令士だった。あと作業内容が気になったアナスタシアの姿もある。

司令室のモニターに映し出されているのは新しいベルトニューエイジドライバーをスキャンしたデータだ。これを星児へ解説していく唯阿…

「桐生戦鬼によれば、このニューエイジドライバーは靈力をスチームグリップによってゼロワンドライバーを多次元的に加圧…負荷をかけて出来た影をこちらの次元に押し出してきたものなのだ…らしい。そもそも、シャイニングスチーム・ホッパー自体がこのベルトを産み出すための形態で、こんな質量保存の法則を捻じ曲げた理屈は言っている私でもサッパリだが、とにかく…この世界に最適化されたベルトが産み出されたということ…のようだ。」

「…つまり、それが『太正の1号』を産み出すのに必要ってわけなら、さつさと坊ちゃんに使わせてやれば晴れて任務完了だろ？」

そう簡単な話なら、いちいち説明はしないのだが…。話してる本人も某・天才物理学者からの受け売りなので語尾に自信の無さが滲む始末。

短絡な疑問をだす不破に頭を抱える唯阿に代わって、今度は令士が説明をバトンタッチしてキーボードでモニターを操作していくと無限のデータが浮かび上がる。

「このドライバーは既に霊子戦闘機である無限のライダーモデルのデータを既に内包している…一応、『霊子ライダーモデル』と言っておこうか。つまり、ライダーシステムから更に、小型化した無限をパワードスーツのように重ね着するような形態になることが予想される…されるんだがなあ…。」

頭をポリポリとかく… 同じタイピングでゼロワンやバルカン、バルキリーといった仮面ライダーのデータがモニタリングされるが、ニューエイジドライバーと関連付けされると『×』と警告表示が出してしまう。

「…既存のプログラブズキーじゃ、全部が無限の霊子ライダーモデルと相性が悪くて変身が出来ない。キーそのものを新造するしかないなこりゃ。」

出来るか…は別問題になるが。つまり、ライダーシステムとして完成にはまだまだ時間がかかるということだ。残念ながら、目標達成までの道程はまだまだかかる様子…しかも、この機材も人材も十分には満たない太正世界で0から適応する未知のキーを創るなんて骨が折れるだろう。唯阿も遠い目をしている…。

「せめて、まだ相性が少しでもマシなキーさえ見つければ…。」

——プログラブズキーが無理なら、ゼツメライズキーを使えば…

「は？」

「え？」

今、なんて言った？ ギュルンと視線が眩いた星児に向いた…

「あ、いや…何か急に頭に浮かんで口が……。かんでもないって、気にしないでくれ。」

「いや、そうでもないぞ。」

何かに気がついた唯阿はスチームグリップを手に取り、端末とコードで繋ぐ…すると、『ロッキングホッパー』のライダーモデルのデータがモニタリングされた。

「このグリップは元々が特殊なゼツメライズキーの変質したものだと言った。つまり、この中にはライダーモデルのデータが入っている…これをベースにキーを新造すれば……」

——光が見えた。

そうスチームグリップは元々がロッキングホッパーゼツメライズキー…即ち、ゼロワン世界のはじまりである仮面ライダー一型のキーであり、ニューエイジドライバーの建造に用いられたもの故に適合するキーを創れる可能性が高い。

早速と作業にとりかかるべく機材を弄りだす唯阿と令士。

そんな様子を神秘的な顔でアナスタシアはすまあとろんを片手に見ている…。すまあとろんに映し出されているメッセージはふたつ。

「――身の振り方を考えなさい。誰につくかは明白なはず。」  
「――裏切りは相応の仕打ちが待つぞ。お前には私しかないのだからな！」

差出人こそは不明になっているが、前後は別人それぞれからのメッセージ：正直なところ、前者は未知数で後者は船底に穴が空いた元々の雇い主：ハッキリ言っただちらも博打なので頭を抱えずにはいられない。

「参ったわね……」

「何がそんなに参ったんだい？」

「ひゃっ!？」

突然、ぬうつと後ろあら伸びてきた顔に柄でもない乙女な声が飛び出してしまった。一体

誰かと思えばニコニコとした神山が立っており、やれやれと溜息をつく。全く、レディの背後に立つに飽き足らずに密着寸前まで詰めてくるなんて……時折、デリカシーが無いとは思ってはいたが。まあ、彼ならメッセージが万一目に入っただとしても大した問題にはならないはず。

「キャプテン！　いくらなんでも、レディに大して……」

「やあ、みんなご苦労さま。このベルト、凄いいじゃないか？」

「ちよつと……？」

溜息ひとつとして軽く怒ろうとしたアナスタシア……しかし、神山は軽く無視するとテーブルに置いてあったニューエイジドライバーを手

に取り『中々のお宝だね。』と感嘆する……キラキラさせる眼が子供のようだが、いつもの彼とは違う姿はあまりに不気味だ。戸惑いながらも、どうしたのかと問うたのは同期である令士。

「おい、どうした神山？ 悪いものでも食ったか？」

「ニューエイジドライバーか……。太正の1号の力、お宝として申し分ないかな。思わぬ掘出し物、お目当ての『帝鍵』とは違うけど、それは君に任せようか……」

……アイスドール？」

「！」

咄嗟にピストルを抜こうとしたアナスタシア……しかし、脚のホルダーは空……代わりに神山の掌でクルクルと弄ばれている。直後、彼はパン！と天井の蛍光灯を撃ち抜き視界が暗闇に包まれると一瞬で視界が奪われる。すぐに非常灯に切り替わる神山の姿は無い。

「な、なにがいったい……神山はどうしたんだ？」

「あれはキャプテンじゃないわ！とにかく、すぐに追いましょー！」

すぐに司令室を飛び出した一行。

一方、神山・偽はエレベーターで正面玄関……ではなく、地下の格納庫へ。

そこは丁度、愛機の調整にやってきていた初穂とクラリスがおり鉢合わせする形になった。上の騒ぎなど露と知らぬふたりは急ぐ様子の彼にさして疑問を抱くはずもない。

「お、神山？ お前たしかあざみたちと……」

「やあ、これをあげるよ。」

ポイツと投げられたのはアナスタシアの銃。『うおっ!?ちよ…!?』と慌てキヤツチした初穂の横を神山・偽はすり抜け不幸にも搬入中だったワイヤーで吊るされてコックピットのハッチが開いたままの桜色の無限に飛び乗った。無論、このパーソナルカラーはさくらの新たな愛機である。

「へえ、中々の玩具じゃないか。」

「神山隊長!? それは、さくらさんの機体で一体、なにを…!?」

そのまま、クラリスの制止も聞かず発進用の地下トンネルに突撃し消えていく桜色の無限。あまりの事態に呆然とするばかりの彼女たちにアナスタシアたちが追いつく。そして、この場で起きた一部始終を察するのだった。

「あ、アナスタシアさん…神山隊長が…」

「クラリス、あれはキャプテンじゃないわ。とにかく、出撃して後を追うわよ!」



そして、現在…

「つまり、俺の偽物が新型ドライバーを盗んでさくらの無限で逃げ回ってるってことか!？」

「要約するとそういうことになりますね! あの時、わたしが早く気



がついていれば…」

神山は上海華撃団とは分かれる形でクラリス機に抱かれる形で追跡に参加をしている。今、帝都各所には令士の根回しで避難は進んでいるが尚も盗人の足は留まることを知らない。さくらとアナスタシアが追撃の先頭に立つが逃走に使われている機体が待望していたさくらの新しい霊子戦闘機だけあつて今一つ強気に出れずにいた。

そんな彼女たちを嘲笑うように速度を更にあげていこうとする盗まれた無限…しかし、その前にズンツ！とふたつの影が立ち塞がり反射的に逃走劇はブレーキをかけられた。

「上海華撃団、参上！」

立ち塞がるは2機の王龍。シャオロンとユイ、帝都を護るもうひとつの盾…上海華撃団である。無論、いくら華撃団大戦で不戦敗という結果を叩きつけられたとしてもこんな暴拳を見過ごすほど落ちぶれてはいないのである。

盟友に泥を被せ、帝都を荒らす不屈き者には龍の怒りが牙をむく…

！

「やい、テメエ。凶太い根性してるがここまでだ！」

「さくらの無限とドライバーは返してもらおうよ！」

帝国華撃団にとってはなんとも心強い増援だろう……

「やれやれ、誰かと思えば負け犬華撃団じゃないか。」

——最も、やれやれとハツチを開けた神山・偽だった男にははらう蚊が増えた程度の問題だったが。

箱型のシアンの銃をクルリと取り出すなり、デイケイドと同様のカードを装填し銃身をスライドさせる。その動作にシャオロンは悪の可能性を予感した…

「お前…ッ!?! まさか…!」

【 K A M E N    R I D E … 】

「そのままかさ…変身!」

【 D E — E N D !! 】

## 乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！！ IV

「KAMEN RIDE… DIEND!!」

神山に変装していた青年が引き金を引くと銃口から幾枚のライドプレートが飛びだし、色とりどりの残像が踊る。派手な変身フェーズは牽制にもなり、容易く上海華撃団たちを怯ませると残像が男に重なりスーツを形成してシアンに輝いたライドプレートが頭にバーコードのように刺さって並ぶ。

この太正世界にて現れた新たな仮面ライダー…  
デイクイドと同じく並行世界を移動する旅人…

…そして、世界の価値あるお宝を盗む『怪盗』。

『仮面ライダーディエンド』：海東大樹。以後、お見知りおきをつてね。」

「そんな…！仮面ライダーがどうして…!?!」

さくらをはじめ華撃団たちに動揺が拡がる。この太正世界に來訪した仮面ライダーは今まで自分たちの味方をしてくれたというのに一体、何故?! そんなリアクションに対し、ディエンドはやれやれと溜息をついた。

「仮面ライダーなら味方だなんて認識が甘すぎるよ？オーマジオウの意思と別に、自由に動く仮面ライダーだっているのさ。——この世界の行く末とかどうでも良いけど、今回は色々とカンに触るんだよねッ！」

「ATTACK RIDE BLAST!!」

そして、無慈悲に乗り捨てたさくらの無限をシアンの弾丸で撃ち抜

く。

「私の無限ッ!？」

「テメエー!」

デイエンドにとっては霊子戦闘機などただの玩具…なれど、さくらにとっては新しい希望を容易く砕く様に怒りを剥き出しに飛びかかる上海華撃団。しかし、デイエンドは仮面の下で不敵に笑うと、デイエンドライダーをブンツと振るうと同時にさくら機を喰い破ってシアンの弾丸が雨霰と次々と空中の王龍の装甲を穿つ。そのまま、上海の龍は容易く振り伏せられてしまった。

「ん、この…!」

「王龍…動いてよ!」

強い。そして、対人だろうと全く躊躇いが無い。

役立たずになった機体の中でもがくシャオロンとユイを尻目に、余裕を見せる足取りで帝国華撃団に近づいていくデイエンド…そして、バイクで追ってきた或人と対峙する。

「そのドライバーを返せ…それが無いと世界が滅びるんだぞ! わかっているのか…!？」

ゼロワンドライダーを装着し、臨戦体勢へと入る或人…それに対し、急にデイエンドは軽快な足を止めた。『はあ…』と小さく溜息をつくとニューエイジドライバーを片手でポンポンと投げ遊びはじめる。

「…!」 『わかっているのか?』 そっくり、そのまま返すよゼロワン。

仮面ライダーとして生きるということは、決して人間として死ぬという意味じゃない。

君たちは何も理解していないのさ：神崎星児を太正の1号にするのはどういう意味を持つか：彼にどんなおぞましい運命があるか：何も知らされていないんだろ？」

「なに？」

「どうということだ：？ 星児を仮面ライダーにすれば、全てが丸くおさまるのではないのか？」

確かに、オーマジオウもデイケイドも1号オルタも『世界を救うには太正の1号を見つければ良い』としか言わなかった。しかし、どうして星児が太正の1号になり得るかは誰ひとりとして話そうとしなかった：。振り返れば、令和世界の産物であるフォースライザーを使えたり、時に夜叉から我が子と呼ばれ執着されたりと謎が多い。いくら、元・帝国華撃

団団員の忘れ形見とはいえ不自然な点に平成ライダーたちは誰も疑問すら持つ素振りさええない。

確かに不可思議と言えばそのような気もする。

「都合の悪いことは何も話さないのさ。他の仮面ライダーも： 神崎すみれもね：？」

「！」

「戯言をッ！」

その時、虚空を裂いて飛んできたあざみのクナイ。反射的にデイエンドはそれを銃撃で迎撃すると、素早く背後に滑り込むあざみが盗人の手許からニューエイジドライバーを奪い返してふわりと或人の横に降り立った。

一方、奪いかえされたデイエンドは『へえ：？』と特に悔しがる様

子も無く獲物を失った掌を握ったり開いたりしていた。

「やるじゃないか。その身のこなし…忍者かな、お嬢ちゃんは？」

「おとなしく縛につけ！もう逃げ場はない！」

光武と無限がデイエンドの周囲を固める…一見すると、もう袋の鼠といったところだろう。しかし、彼は余裕を崩さない…こんな程度は危機のうちにも入らない。

新たにカードを取り出し、ネオデイエンドライダーにセットすると引き金を引く。

「数の優位か…そんなもの、僕に通用するわけないだろ？」

「 K A M E N     R I D E …     K A I Z A !! 」

「!?!」

すると、再びカラフルな幻影が舞い新しい仮面ライダーが現れる。丸い紫複眼を『X』と分割されオレンジ色のラインが全身に走るそのライダーは完全にデイエンドとは別世界の産物。『仮面ライダーカイザ』が召喚されたのだ。

そう、デイエンドの能力はデイケイドの能力とはある意味反対…別世界の仮面ライダーの召喚・使役こそが彼の真骨頂である。

「それと、出血大サービスさ！」

加え、指輪パッチンをする空に銀色のオーロラが現れ落ちてきたのは3機ギーカー…ハッキングされたのか、着地すりなり帝国華撃団へ向けジリジリと距離を詰めてはじめる。何が大サービスだ、大迷惑この上ない。

「それじゃ、これは頂いていくよ！」  
「え？」

そして、ニューエイジドライバーを手に揚々と逃げていくデイエンド。『何!?!』とあざみが自らの手許を見れば袋とじされた干しナマコが握られている…まさか、奪い返す刹那にすり替えられたのか！

すぐに追おうとするもカイザとギーガーが立ちはだかり、行く手を阻む。

このままじゃ…地団駄を踏む彼女だったが、それをズイツと後ろに押しやり或人が前に出る。

「ここは俺がなんとかする！あざみちゃんはその仮面ライダーを…！」

「社長…。わかった。」

無限が無い以上、殴り合いは分が悪い…なら、ここは追跡に徹するべきだろう。あざみが離脱するのを支援すべく或人はゼロワンドライバーを装着…キーを起動する。

「 JUMP!! 」

「変身！」

「プログライズ！ライジングホッパー!! 」

飛蝗のライダーモデルがカイザとデルタを牽制…そのうちにデイエンドを追いかけにまわるあざみ。ゼロワンに変身した或人はアタッシユカリバーを片手にカイザへ立ち向かうのだった。



「はああ…！」

さくらは怒り心頭だった。

盗みに入った泥棒に念願の新しい愛機は破壊され、よりにもよって両親が訪れている時に恥をかかされた。頭に血が昇った彼女は昂る感情のまま刀を振るいギーガーに立ち向かうも勢いに光武が追いつかない。元より旧式な上に騙し騙しの補修で繋いできた機体が随所から火花を散らし、いよいよ限界を迎えようとしていた…。

「蒼天に咲く花よ、敵を討て…！」

「待て、さくら！ 光武がもうもたない!!」

神山の制止もきかず、悲鳴をあげる機体に鞭打ち必殺技を放つべく刃を掲げる光武…

しかし、それをただ見ているギーガーではなく、機体からワイヤーが飛びだし光武に喰らいつくと高圧電流を走らせ中のさくらにまで凄まじい激痛のダメージを与える。

「きゃあああああああ?!?!」

「さくら!?! クソ、俺の無限は…！」

この状況、一向に到着しない神山の無限。それもそのはず、海東は逃げる際にしれっと霊子戦闘機の移送システムのパネルを破壊してきたため、有人だったクラリス機とアナスタシア機からまだしも、無人の無限をすぐに届けられる状況に無かったのである。



もう一方、クラリスとアナスタシアは連携で中・遠距離向き同士の特性を活かし、射撃で牽制しつつギーガー2機を削っていた。近寄せなければ怖いものはない。

「アナスタシアさん、飛電改装の力を使います！」  
「わかったわ。」

一気に流れをこちらに寄せるべく飛電改装の力を開放しようとするクラリス…

「いけないなあ、そういうのは…？」  
「！」

…だったが、ゼロワンを蹴飛ばしたカイザがベルトからカイザフオンを外して『3821』と入力、同時に何処からともなく巨大な鉄の塊が彼女の無限を弾きとばした。

襲ったのはバイク…否、球体の前輪に放射状に備わるおぞましい数のブースターと無限をも超えるサイズ迫力は最早、ロケットか何かに近いと言っても良いだろう。カイザが2号ライダーである仮面ライダーファイズの世界は令和世界に比較してもインチキ地味た科学の産物がある…その中で指折りに入るのがこのモンスターマシン『ジェットスライカー』である。

「な、何なんですかあれ!？」

御尤もだ。太正世界もそこそこ異端な技術はあるが、あそこまでスタイリッシュに殺意が全開なものは早々無い。そんな驚愕する彼女にミサイル弾がズラリと並ぶミサイルポッドを展開し見せつけると『ひっ!?!』と悲鳴をあげるタイミングで無慈悲に雪崩のようなミサイルが襲いかかり、アナスタシア機巻き込んで大爆発を起こす。

「きゃあああああああ?!?!」

「うツツ!?!」

「クラリスちゃん、アナスタシアさん!?!」

助けに入ろうとするゼロワンだが、その前にカイザが立つ。焦るゼロワンを見下すように高圧さを出しながら間合いを詰めていく。

「別にね、君達を殺したいわけじゃないんだ。俺には何のメリットも無いし……ここは大人しく退いてくれないかな?」

「黙れ!なら、そこを退け!」

「ブレイキングマンモス!!」

ふぎけるな!カイザの挑発にブレイキングマンモスで応じるゼロワン。ギーガーと同じ機体が時空を歪め現れ、それに搭乗するとカイザを蹴飛ばして次にジェットスライカーに飛びつき殴りつけて破壊。続けて光武に放電するギーガーを殴り飛ばして、倒れていたさくら機を庇いにかかる……だが……

「そっか……じゃあ、死んでもらおうかなあ?」

「なっ!?!」

残っていたギーガーが今度はブレイキングマンモスに組みつき動きを封じる。それを確認すると右脚に専用のデジタル双眼鏡カイザポインターを装着……続けてカイザフォンのエンタースイッチを押すとベルトから右足へエネルギーが充填されていく……トドメを刺す気だ。

【 Exceed Charge 】

「はあっ！」

飛び上がるカイザ：突き出さる右足のカイザポインターから黄色く鋭い槍のようなマーカ―が放たれブレイキングマンモスを釘付けにし、同時にゼロワンの脱出を封じる。このままいけば、必殺技・ゴルドスマッシュでゼロワンは或人諸共粉碎されてしまうだろう。けれど、暴れるも拘束は固く未動きひとつろくにとれない…

「くそ！くそお！ 動けええ!!!」

——ガッ!!



「な…」

あと少し：実に文字通りにあと一歩が届かなかった。カイザのゴルドスマッシュは割り込んできた紅き炎の鉄槌に阻まれ不発に終わる。

「悪い、遅くなったぜ社長！」

「！ その声は…!!」

カイザを薙ぎ払い、音撃鉄槌・灼熱御神楽ハンマーを肩にかつぐは紅の無限。搭乗するは勿論、初穂…しかし、彼女の愛機はより輝きを増した装甲と戦鬼を思わせるラインが施された姿になっている。その名も…

「コイツがアタシの新しい力だ！ 『飛電改装・音撃響鬼・紅』…さあ、悪い子は何処だ？」

## 乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！！ V

飛電改装とは…

天才物理学者・仮面ライダービルド⇨桐生戦兎と令和世界のエンジニアである仮面ライダーバルキリー⇨刃唯阿の手によって完成させられた霊子戦闘機の改装案のひとつ。機体の中にレジエンドライダープログライズキーを組み込み、装甲や内部フレームの一部を飛電メタル製に置き換えることで、基本性能の底上げや防御力の格段の強化に加えて、キーに相応した兵装の性質変化をもたらすことが出来る。

そして、プログライズキーと飛電改装自体も相性があり…ドラミングビビキは魔を討ち祓う炎の戦鬼である仮面ライダー響鬼の力が宿っている。陰陽師としての側面を持つのは華撃団と同じ…そして、初穂の固有能力である炎とも重なるのだ。

…つまり、

「これが飛電改装、随分とご機嫌だぜえ！」

この飛電改装音撃響鬼・紅と初穂の相性は『最高』といっても差し支えない。御神楽ハンマーは音撃棒を思わせる鬼の頭を彷彿させる音撃御神楽ハンマーへと姿を変え、邪悪を滅却する焰が洩れてだす…。初穂自身も強い高揚感と文字通りに燃え滾る霊力が彼女のくちびるを不敵に吊り上げる。

「初穂ちゃん！」

「おっと、待たせたな社長さん！今、コイツらぶつ飛ばしてやるからよ！」

軽快な返事をするなり、ブン！ブン！とハンマーが唸り、ブレイキングマンモスもろともギーガーを殴り飛ばして粉碎する。勢いでゼ

ロワンもブレイキングマンモスから叩き出されてしまったが…

「いたた… 初穂ちゃん!？」

「あ、わりい、わりい。あ、そうだ。」

ニカツと平謝りしながら、無限のコックピットハッチを開けると何かをゼロワンに投げ渡す初穂。プログライズキーだが大きい…そして、見覚えがある。これは、メタルクラスタホッパーのプログライズキーだ…!

「刃さんが調整して、暴走しないようにしたんだと。」

「そうなのか…よし!」

「Everybody Jump!! オーバーライズ!」

本来、令和世界で手に入れるべき最強のゼロワンの力が太正にて本来の形とは違えど、起動する。キーをゼロワンにセットし、メタルライザーを折りたためば軽快でリズミカルな変身音声が鳴り響き青白いクラスタセルの嵐が噴き上がり飛電メタルの装甲を創り上げていく…!

「メタルライズ! Secret materials 飛電

メタル! メタルクラスタホッパー

「It's high quality.」

「はあっ!」

メタルクラスタホッパー…太正versionとでも言うべきか。本来、制御に使うプログライズブレードは存在しないが、そもそもがタイムジャッカー製の別物なので『人間の悪意のデータ』に対する対

策は不要。後は害意があるプログラムは唯阿が書き換えたので暴走の危険性は皆無…純粋な強化形態として鋼の飛蝗は君臨したのだ。た。

「生意気だな君たちは…！」

これに対し、カイザは自身のバイクが二足歩行ロボットに変形したサイドバツシャーで迎え撃つ。両腕からミサイルを展開し、フルバーストに加え弾丸の掃射…死を齎す大波が迫るが、ゼロワンは動じない。

「はあっ！」

無限の前に立ち、装甲からクラスターセルを分離させると防壁のように展開。ミサイルも弾丸も飛電メタルの壁の前に阻まれ届かず、虚しく炸裂して終わるのみ。これには、流石のカイザも焦りを覚えた。

「なにっ!？」

「初穂ちゃん！」

「応ッ！」

もうすでに、流れはカイザには無かった。ゼロワンのクラスターセルが壁から渦を描き空を舞い、無限が音撃御神楽ハンマーに一層強い焔を宿す…。

まずい。カイザはすぐに半壊したギアガンをサイドバツシャーで持ち上げ盾にする。

「天罰観面！ 音撃御神楽ツハンマー!!!」

「はあああ!!」

「メタル・ライジングインパクト !!」

「くっ!?」

振り下ろされた鉄槌は焰の竜巻を巻き起こし、クラスターセルはそれを纏うようにゼロワンの分身を形成してギーガーを貫く…!身代わりにされたギーガーは爆発し、寸前でカイザはサイドバツシャーごと跳躍して離脱…『もうこれ以上、足止めはいらないか。』とそのまま召喚解除し消えてしまった。

これで敵を退けた初穂は満足げに無限の肩に音撃御神楽ハンマーを乗せる。

「よっしゃあ!流石、飛電改装!今の初穂ちゃんには敵なしだぜ!!」

「初穂! それよりもあざみを…!」

余裕の笑みをする彼女に対し、焦りを見せる神山。そう、あざみはデイエンドを生身で追っているのである…。この場の被害も帝国華撃団と上海華撃団を含めて散々な有様だが、優先すべきはあちらだろう。しかし、初穂は…

「あー、それなら大丈夫さ。あっちには…」





「でえええやアア!!」

「!」

銀座方面に逃げたデイエンドにクナイの雨が降り注ぎ、盗人は慌てその足を止める。目の前には飛電改装が施された黄色い無限：主がないはずの機体が立ちはだかり、デイエンドどころかあざみすらも驚かすにはいられない。

「あざみの無限?! なんで…!」

「悪いな、あざみちゃん! ちよつと借りてるぜ!」

「星児!」

あざみ機を操っていたのはまさかの星児。そう、緊急事態につき拝借して出撃してきたのである。無論、こんな限りでなくてはするような行動ではないのだが：勝手に自分の愛機を乗り回されたあざみは憤慨していた。

「あざみの無限、勝手に乗らないで!」

「ま、そんな起こるなって。今回だけだ。」

何にせよ、あざみと星児による挟み撃ちは逃げ道を完全に塞いだ：しかし、デイエンドは尚も焦るところか『へえ?』と余裕すら見せる。彼の興味は星児へと向かっていた。

「君が神崎星児か。君が真つ当な仮面ライダーになりうる存在にはとても思えないなあ。」

…泥棒に言われる筋合いは無いのだが。

いくら周囲に迷惑をかけてきた身である星児とはいえ、嬉々と盗みを働く輩に仮面ライダーとしての物差しを当てられるなどたまつた

ものではない。

「ぐちやぐちやうるせえ！ さつさと、ドライバーを返しやがれえ！」

盗まれたものを取り返すべく、無限を駆る…

「返すよ、ほら。」

——え？ ——え！！？

しかし、なんと呆気なく、ニューエイジドライバーを無限に向かつて投げ渡すデイエンド。完全に面食らった星児は『うわツツ!?』と慌てコックピットのハッチを開けてキャッチ…間一髪で落とさずに済む。

あまりの想定外の行動…わざわざ逃げ回ってまで欲しがっていたものを何故？ あざみも真意を計りかねる。

「一体、なんのつもり？」

「言っただろ、色々と気に食わないって。だから…少し、君達には真実を知ってもらおう。」

真実…？ その首を傾げるとほぼ同時だった。

ふたりがデイエンドもろとも、突如として発生した邪悪な暗闇に呑まれていったのは…



「……、コイツは魔幻空間!？」

いち早く気がついた星児……。辺りの景色は銀座から闇色の空気に泥濘んだ瘴気と毒の湿地帯……。自分たちが魔幻空間に呑み込まれたと察す。

「ディエンドの仕業か……。いや、このタイプの魔幻空間は何処かで見覚えが……」

「うっ……」

「あざみ! 大丈夫か!？」

「星児……。うしろ!!」

膝をつくあざみに気がついた……。とほぼ同じタイミングでスウ……。と抜身の細い刃が頬と隣り合う。全身を駆け巡る揺さぶられるような悪寒、妖しい息遣いを感じるような近さ……

「——会いたかったですよ、『シンジロウ』」

聞き覚えがある声で、知らぬ名前で自分を呼ぶ女の声。

「夜叉……!」

上級降魔・夜叉……。真宮寺さくらの姿をし、母を騙る邪悪な存在。帝国華撃団の、何よりも星児にとっては旧・花組の名を穢す仇敵に今、背後から間合いに入られ自分の命を握られていた。

これで、やっと察した。自分たちは追い込んだのではなく、まんまと誘き出されたのだと……

「最初から狙いは俺か、この姐さんの偽物が…！」

「ふふ、あなただけではありませんよ。『あの娘』もですよ？」

——なに？ いや、まさか…！

「あざみ、逃げ…！」

「——もう遅いよ？」

星児が叫んだ時には…もう遅かった。

あざみはすでに、もうひとりの上級降魔・臙の凶刃により右腕で腹を貫かれ…汚濁の曇天に掲げられていたのだ。

「…っ…っ…っ…」

「あ、あざみいいいいいいいい！！！！」

っづっく…

乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！ VI

「てえめエエ!!」

「ははは…!」

星児の怒りと隴の嘲笑いが魔幻空間に響き渡る…。貫かれたあざみから隴は短刀を抜き取ると、ニタリと裂けるような口元を星児に向けた。

「そう騒ぐなって。死んじやいねえよ。」

その時、あざみの姿がボブン！と煙に包まれ丸太と置き換わる…。変わり身の術だ！直後、隴の頭上に少女の影が飛びだしクナイを脳天目掛け振り下ろす…!」

「やああ…ツ!」

「ブン。」

しかし、不意を突くはずの切っ先はノールックで隴に握られ止められた。握る右腕からドクドクと血が流れはじめが全くお構いなし…すぐに危険と判断したあざみはクナイを捨て、距離をとる。流石、幼くとも忍…その颯の如き身軽さと素早さは花組で随一だ。

一方の隴…握りしめていたクナイを遊び、滴る自分の血液をペロリ…。反撃されても全く動じない。

「やるじゃないの〜? 流石、忍者というだけあるじゃん。イイね、イイねえ…『合格』だ。」

「…?」

合格? 隴の真意が読めない…何を測り、何に大しての合格? それは隴本人の口から語られる。

「喜べ、諸君！君達は俺達、ネオ・タイムジャッカーに降る権利を獲た……！上級降魔の一員としてお前達を迎え入れよう!!」

……コイツは何を言ってるんだ？

何をどう考えたら、勧誘という発想に至るのか。戸惑いと驚愕で頭がフリーズしかける星児とあぎみだが、言い出した彼は大袈裟な口調とは裏腹に至って真面目のようである。

「ああ、そうだよなあ？コイツは何を言ってるんだ……そう思うだろうとも。だがな、俺はお前達を不憫に思っているんだぞ。恵まれた力を持ちながら、誰とも知らぬ赤の他人のために戦うよう強いられる……ヒデエ話だ。」

「戯言をツ!! 俺達は選んで帝国華撃団にいる!」

「あざみたちの想いをお前達なんか計られる筋合いは無い!」

無論、怒りを剥き出しに突っ跳ねるふたりだが……そんなことなど承知の上。悪魔は尚嘲笑い問う……

「……じゃあ、お前達が華撃団として護ろうとする人間にそんな価値はあるのか？ 散々、護ってもらいながら人間たちは何をした？」

神崎星児、お前は特にわかってるよな……？ 帝国華撃団が潰れた時に手を差し出そうとした人間はいたか？ 居たとしても、片手で足りるくらいだよなあ?? ……呆気なく、後からやってきた上海華撃団に鞍替えしただろ……どいつもこいつも。それから、アナスタシア・パルマが来るまで見向きすらしなかった……それどころか、石ころまでぶん投げたような浅はかな連中に護る価値はあるのか?」

「!」

……違う! そう叫びたかったが、過ぎってしまう建て直す最中の帝

国華撃団へ向けた人々の扱い。

歌劇は未熟な団員を笑いにきた人間が一握り：ガラガラ劇場。『上海華撃団がいるからもういらぬ』『落ちこぼれ華撃団』などと心無い言葉、再建のために手を貸してほしいと懇願しても冷たく振り払った人間たち…。脳裏を過ぎってしまう非情な顔が……

あざみも動揺しており、その様子に満悦な表情を浮かべる隴…：さあ、もうひと押し。

「強き者は弱き者を助ける…それは弱者の都合の良い押し付け、偽善だ。弱いものはつけあがる！身の程をわきまえず、何処までも！

そんな奴等に力を振るって何が悪い？

奪ったから、それがどうした？

弱い奴が強者の養分になるのは自然の摂理だ、ろ！——お前達は強者だ！こちら側にくるべきだ！俺と共に弱者を捻り潰す側だ!!」

「黙れッ！」

完全に隴の演説を聞くに耐えなくなり、再度飛びかかるあざみ…：しかし、寸前で首を捕まれ宙ぶらりにされてしまう。成人男性と少女の身体の差となれば、手も本人には届かず精々クナイで腕をザクザクと突き刺すぐらいが精一杯だ。

それでも、隴は離さない…：ただ、その顔からフツと吊り上がるあの笑みが消える。

「あざみちゃん…お前は昔の俺とそっくりだ。俺も昔は『人間を護る側』だった…。でもな、呆気なく捨てられたんだ、護ってきたはずの人間に。お前もいつか裏切られて捨てられる…断言する。なら、裏切られる前に裏切れ。」

「皆は裏切ったりしない！」

裏切りを唆す声にさらなる怒りを燃やし、今度は手裏剣を取り出す

あざみ…狙うはこの畜生顔面……だったが…

「—そうかなア？ あざみちゃん、心の中ではわかってるんじゃないのかア…ホラア？」

「…え？」

★ ★ ★ ★ ★

どうして？

…あざみは己の目を疑った。

「…神山？」

臆に促されて向けた視線の先には神山が立っている…確か、ディエンドの残してきたカイザやギーガーの足留めを受けていたはず。しかし、魔幻空間にぼう…と浮かぶように立つのは間違いなく彼だ。優しく微笑みながら彼は告げる…

『あざみ…君はもう要らない。』

「か、神山…なにを？」

『忍者なんて時代遅れだ。君に代わる人間はいくらでもいるんだよ。さくらに初穂…クラリスは重魔導だつて使える。舞台にはアナスタシアもいるし…忍者としても半人前の君は役立たずだ。』

「…どうして、そんなこと…言う…の…？」



頭が追いつかない。一体、何が…何もかもが唐突で頭の思考が鈍く

…  
——！ 精神支配の幻術!!)

ハツと我に返ったあざみはすぐに勢いよく合掌し自我を強く保たんと集中する。このタイプの幻術は空間に作用するそれとは異なる個人を集中的に攻撃するものだ。術により、脳を支配されることで見せられる幻聴・幻覚は攻撃対象の精神と思考能力をゴリゴリと削り蝕むのである。

普通の人間ならあつという間に術中だが、生憎ながらあざみは忍者…この手合いの幻術に対抗する技術も身に着けていた。

「…解ッ！」

次の瞬間、幻覚がボヤけて朧の姿も消え身体も開放される。 シュ  
タツと着地。 笑止…こんな程度でこの望月流忍法が阻まれるなど  
…

『だから、あなたは甘いだよ。』

——斬!!

「!？」

否、背後から勢いを挫く強烈な一太刀。小さい身体に容赦なく牙を剥いた一撃に悲鳴すらあげられず、倒れ込んだ少女に容赦なく踏みつけてくるはさくらの幻… その周囲には他の花組の幻影もちらついている。

(そんな…幻術は解いたはず…)



「…あゝっ …あゝあゝっ」

「あざみ!? おい、どうした!」

現実世界…朧の足許に這いつくばるあざみは白眼を向きビクビクと痙攣していた。星児の呼び掛けにも応える様子はなく、彼女の精神は完全に術中に堕ちている…このままでは、心身共に致命的なダメージに至りかねない。

「ちっ! クソ!!」

「暴れないでください、シンジロウ。次はあなたの番なんですから。」

「うるせえ! 誰がシンジロウだ! 離しやがれ…!」

星児も助けたいのは山々だが、夜叉に押さえつけられ無限の操作どころか、コックピットから降りることすらかなわない。

そんな焦燥に駆られる星児を尻目に朧は真面目な顔をしたままあざみに囁く…

「なあ、こっちに来いよあざみちゃん。辛いだろ、他人のために力を使って、使い潰されるだけなんてよ。お前は俺達側にいるべきなんだ。」

「あゝ… あざみ…は…」

「あざみ、しっかりしろ!! おい!」

徐々にあざみの肉体を闇が呑み込むように浸食していく…こ

のまま意識を取り戻さなければ、数分後には邪悪の化身に成り果ててしまうだろう。しかし、打つ手は何もない。万事休す……

その時

「——あ、バレちゃったか。」

ふと、呟いたデイエンド……夜叉が違和感を覚え顔をあげた先……空間が歪み、銀色のオーロラが現れる。そして、

「海東オ!!」

「!」

魔幻空間に突撃してきたのは怒り心頭のデイケイド率いるロンдон華撃団とベルリン華撃団。異次元な乱入者に今度は降魔側が不意を突かれ、アイゼンイエーガーの銃撃で牽制、ブリドヴェンの剣が臍を追いはらい、あざみを救出。星児も怯んだ夜叉の隙を突き、無限の操縦桿を握って振り落とすと仕返しと彼女を蹴とばして離脱。

形勢は一気に逆転、そんな様子を『あーあ。』と他人事のようにデイエンドは傍観していた……無論、デイケイドが見逃すわけもない。

「やあ、土。好きにやらせてもらってるよ。」

「見ればわかる。全く、プレジデントGの仕事の代わりを請け負って忙しいってのに……。これ以上、面倒を増やす前にお前を拘束させてもらうぞ。」

いつもなら、軽くじゃれ合うくらいで済ますところだが、世界の命運がかかると事態を余計に引っ掻き回されてなるものか……。デイエンドの背に1号オルタと2号オルタも迫り、彼の本気具合も窺える……しかし、あいも変わらず青い愉快犯は余裕を崩さず、カードをデイエン

ドライバーに装填した。

「ふうん？ 残念だけど、僕を掴まえるには彼等だけじゃ無理かな！」

「KAMEN RIDE SHINOBI!!」

「！・！」

直後、唸るように凄まじい竜巻が巻き起こり3人のライダーたちを  
目眩ましさせた僅かな合間に怪盗は姿を消した…。

「…逃したか。」

「参ったね。デイエンド、まさかここまでの問題児だったなんて。」

「奴め、余計なことを吹き込む前に俺が抑える。」

「し、シンジロウ…！」

「今は退くぞ！ クソが！おぼえている、人間ども！」

一方、隴も尚星児に執着する夜叉を引きずる形で撤退…魔幻空間も  
消え去り、元の街並みが戻って来ると霊子戦闘機やライダーたちは臨  
戦態勢を解除…2号オルタのみはデイエンドを追いかけて離脱して  
いったが、この場は一段落。

そのタイミングに一呼吸遅れながら、ゼロワンと帝国華撃団・上海  
華撃団が到着し…そんな彼等をアイゼンイエーガーから降りたマル  
ガレーテが冷たく一瞥する。

「帝国華撃団と上海華撃団は何をしていたんですか！ 連絡を受けて駆けつけてみれば、この有様…仮にもあなたたちのホームグラウンドでしょう！」

「やめろ、マルガレーテ。今は叱責をしている時ではない。」

協力感謝の声を入れる間もない勢いだったが、エリスに嗜められなんとか制止。実際、かなりの失態だったのは反論の余地もない事実なのだから…隊長である神山とシャオロンも落ち込みが目に見えるて……

「神山隊長！ あざみさんが…！」

その時、クラリスの悲鳴に全員が振り向く。見れば、クラリスにだき抱えられているあざみが未だに失神状態のまま意識を取り戻す気配がなく、『みんな…あざみを置いていかないで…』と讒言を呟いて白眼を向いている。

「あざみ、一体どうしたんだ!？」

「朧の幻術でしょうか。妖力を感じますが…何かまた別のような…。とにかく、解呪を試みます…！」

この異常はどんな原因にしろ、すぐに魔導書を開いて対処しようとしたクラリス…だったが

「——その必要は無い。」

「！」

彼女のその行動は新たな人物が割り込んできたことにより遮られる。

現れたのは粗末な着物を着たサングラスの小柄な老人…威圧的な空気を纏いながらあざみの許に近づくとバンツ！と合掌し『解ツ！』と唱えるなり、あつという間にあざみの異常は消え…朦朧ながら意識を取り戻す。

そして、彼女はボヤける意識の中…眼の前の人物へ口を開いた…。

「…頭領？」

「ああ、そうじゃ。…ふむ、危惧はしておったが…やはり、まだ任務を任せるには早かったようじゃの…。」

——里へ帰るぞ、あざみ。

## 乱舞！嵐を呼ぶあざみ忍法帖！ VII

…これまでのあらすじ

華撃団大戦・ベルリン戦を乗り越えた帝国華撃団の前に現れた仮面ライダーディエンド。海東大樹はニューエイジドライバーを盗みだす。それを追うあざみと星児だったが、ディエンドと結託していた上級降魔・朧の罠にハマってしまう。

絶対絶命の危機を助けに来たディケイド率いるロンドン華撃団とベルリン華撃団で退けるが、更に忍者とおぼき謎の老人が現れて衰弱するあざみへ帰郷を命令し…!?

「たく、何なんだあの爺さんは！ いきなり現れて、あざみを連れ出そうとしたり何考えてやがる!?! こっちはあのドロボーライダーのせいであつてんやわんやだつてのに!?!」

帝国華撃団・地下ドックに初穂の悪態が響く…。

先のディエンド騒動から各華撃団はこの場に集合し、互いにすみれへ報告に向かった各隊長と消耗して医務室行きになったあざみと星児の以外は見知る顔同士が揃っていた…最も和気藹々なんて程遠い空気だが。

「取り敢えず、今は待つしかないわね。…クラリス?」  
「…(なんだろう…あの時は私は何が引つかかったの?)」

取り敢えず、下手にこの場が悪化しないように釘を刺すアナスタシア…その傍らではクラリスが何やら考え事をしている様子。あざみが幻術に堕ちていた時の『何か』が彼女の琴線に触れたらしいが…その正体が何か掴めずにいた。

一方、さくらは中破した自らの愛機になるはずの無限の前に佇んでいる…。悲壮な表情に或人が気が付き、話しかける。

「さくらちゃん…大丈夫?」

「社長…。ええ、わたしは平気です。ただ、自分が情けなくて…」

平気…というのは嘘だろう。

先延ばしされ、やっと完成した新しい愛機は盗人に乗り回された挙げ句に破壊されたことに加え、運悪く両親が訪れたタイミングと重なり、よりにもよって両親の前で恥をかかされたのだ…。俯く顔からして、かなり精神的にも堪えているのは間違いない。

「自分を責めちゃ駄目だ。悪いのはあの青い仮面ライダーだし、無限は令士さんやヒューマギアたちが直してくれるよ。」

「…ありがとうございます。」

気休めばかりのフォローを入れる或人…無いよりはマシだ。

それとほぼ時を同じくして、エレベーターから神山を筆頭とした隊長陣が降りてくる…。その顔はやはり、険しいものだった。

「皆、待たせたな。今回の件について情報を共有する。落ち着いて聞いてくれ。」

そして、神山は支配人室ですみれと仮面ライダーディケイドⅡ士と



共有した情報について報告する。

まず、今回の件でやりたい放題を働いたあの青いライダーは仮面ライダーディエンドⅡ海東大樹であること。並行世界を渡り歩く力を持ち、独自の価値観で動きまわり、『トレジャーハンター』とは名ばかりの盗人』を自称する問題児であるらしい。無論、こんな輩を華撃団とライダー勢力のバックにつくオーマジオウは協力を仰ぐことなどしなかったが、何処で嗅ぎつけたのか太正世界にやってきて降魔に取り入ったと思われるとのこと。

そして、彼の狙いは太正の1号を産みだすニューエイジドライバーと思われる…

一方で、もうひとつ気になることを訊ねる初穂。

「神山、あざみと星児は…?」

「ああ、そっちは大丈夫だ。ドクターオミゴトの検診によれば、命に別状はなく、ふたりとも療養すればいずれ回復するらしい。ただ、あざみの消耗がかなり激しい…少し時間がかかるかもということだ。」

なら、よかった。と胸を撫で下ろす…生身で瘴気と猛毒で構成された魔幻空間に居たふたり、命に関わらないに越したことはない。

ただ、まだ問題はある。

「もうひとつ伝えたいことがある。俺達の前に現れたご老人は『望月八丹斎』、あざみの師匠だ。普段は田舎で農家をしているんだが、たまにあざみの様子を見に帝都へやってくるんだ。俺も何度か顔合わせしたことはあって、その時は飄々とした優しいお爺さんって雰囲気だったんだけど……。」

望月八丹斎…忍の師範。その肩書きとは裏腹に、神山の初対面の印象は弟子想いな優しい老人だった。しかし、先の失態を犯したあざみへの詰め寄り方は顔見知りの神山でさえ凄まじい剣幕に息を呑み、まるで別人のようだった。

やはり、師匠というのは時に厳しい者なのだろうか…

「今、あざみの処遇に関してはすみれ支配人が何とか説得している。華撃団の人事はそう一個人でどうこう出来るものじゃないしな…心配はいらないと思う。」

その点だけわかるだけでも一安心。浮足立っていた花組もようやく落ち着きを取り戻す…。あと残るは…

(残る問題は…さくらの無限。パーツも工面はなんとかなくても、令士たちにこれ以上は無理をさせられない。しかし、光武ももう戦い続けるには…)



さて、その頃…

引っ掻くだけ引っ掻きまわして逃げおおせたディエンドは帝都の人気の少ない廃工場で変身を解除すると、自分に付き従うひとりの『仮面ライダー』に礼を述べる。それは手裏剣の鉄仮面にシンプルな忍者のデザインをした仮面ライダー…その名も『仮面ライダーシノビ』。令和が存在しなかった並行世界の未来のライダーである。

「やあ、助かったよ。もう君に用は無いんだが…」

彼はディエンドの召喚ライダーである…だが、主の意思に従う素振りを見せずムスツと佇むばかり。何か思うところがあるようだが…

海東は少し考えるとフン…と溜息をついて手のひらを振った。

「わかった、好きにするといいよ。だけど、くれぐれも僕の邪魔はしないでくれ。これから歌のレッスンがあるんだ。」

「…承知。」

そのまま、海東は去っていき…残されたシノビは虚空を見つめ…いや、来るべき戦いの未来を見据え静かに呟く。

「——力を誤った使い方をする者がいる…」



「…では、大変お騒がせいたしました。では、また。」

八丹齋は神山とすみれに見送られて帝劇を後にする。飄々とした田舎者のジジイの調子は忍者だと言われても知らない人間は誰も信じはしないだろう。普通に玄関から出ていく後ろ姿は失態を犯したあざみに圧をかけるように現れた先と比べ、別人である。

さて、一先ずお引取りは頂いたが…

「諦めていませんよ、アレ…?」

「ええ。いずれ、里に連れ返して修行を施し直すという意見を曲げま

せんでした。あそこまで、意固地な方ではなかったと思っただけですが……困りましたわね。プレジデントGの不在で混乱している華撃団大戦はともかく、今後の公演にも支障をきたしかねません……」

頭を抱えるすみれ。問題が増えるばかりで、解決しない……。ここで、隊員が欠けるなんて事態は帝国華撃団そのものに影響がでかねない……。無限が揃って、歌劇の花形をアナスタシアに据えているとはいえ団員が減ればその分だけやれる演目も限られていく。おまけに、さくくも精神的に摩耗しているのだからどうしたものか……

……けれど、俯いてばかりはいられない。隊長として神山は自らを奮い立たせる。

「……支配人、少し時間をください。俺は俺で出来ることをします。」

「神山くん……。いつも、苦勞をかけますわね。頼みましたわ。」

……一方、その頃、

「……イズ、なんとかならないかな。」

『メンタルケアはドクターオミゴトに任せ、セキュリティもマモルを巡回からエレベーター周辺の警護を中心としたローテーションに変更。これで可能な限りの対処にはなります。』

食堂にて或人ら令和ライダー組も神山たちとは別に何か出来ないかを考えてはいたが……残念ながら、これといって打開策が浮かばない。帝国華撃団の根幹の組織運営に関わらない彼等としては仕方ないことであるが、元凶が同じ仮面ライダーである以上はやるせないが……尚更、ライダーで決着をつけるべきだろう。

まず、不破の取る行動は……

「俺は他の華撃団のライダーたちと一緒にあのドロボー野郎の足取り

を追う。恐らく、まだ帝都の何処かにいるはずだ。」

足取りの捜査…確かに彼にはうってつけか。

一方の唯阿は…

「私はメカニックたちの支援に注力する。天宮さくらの無限の修理に集中出来るように、飛電改装した無限とニューエイジドライバーを一括で私が面倒を見る。」

メカニックとして、一層の裏方へ支援。本業がそつちなだけに令士も大いに助かるだろう…ただ、戦闘要員が削られるデメリットはあるが。

さて、残る或人はどうするか…

「俺は……」

「——やあやあ、随分と『オムナイス』とは言い難い顔しているじゃないか君たち。」

「！」

この空気を読まないダジャレは!? ふらりと現れたのはさくらの師匠でもある白秋…どういうわけか、盆栽を片手の彼女はインパクトは凄い。何もかもが空気を読まないどころか、ぶち壊しにかかっている。

「見事な盆栽が出来たのだから、すみれ支配人にあげようと思ったの

だが。…君達の様子から見ると、また厄介事かな？」

…しかし、すぐに何事かをあつたかを覚る。

流石、さくらに師匠と呼ばれるだけあると関心しつつも或人が『実は…』今迄に起こったことを伝えていく。あざみと師匠のこと…さくらが落ち込んでいること…そして、カクカクシカジカを聞いた白秋は頷く。

「…事情は大体わかった。だが、あまり私に力になれそうにはないな…あざみくんと師匠の関係はこちらは部外者だし。さくらに関しては、過剰に気を使い過ぎるのはかえって毒だろう。だけど、これくらいで折れるあの娘じゃない…きつと悔しさを糧に力を出せる時が来るさ。神山くんあたりが気分転換をさせてくれれば一発だと思うが…」

直接の力にはなれないが、アドバイスはくれた…流石、師匠。優しい。

「私が言えることはこれくらいだ。ところで、難だが…君達、盆栽に興味は…」

「ありがとうございます！ 不破さん、唯阿さん行きましょう！」  
「あ…」

今度はこちらの話を…と思つたが、あつという間に或人たちはその場を後にしてしまった。やれやれ、忙しいことだと取り残された白秋は『まれやれ…』とテーブルの席に座ると盆栽を置いて、好物のオムライスを注文する。

そこへ、入れ代わりによつてきたのはさくらの父である鉄幹だった。

「やあ、鉄幹さん久しぶりだね。顔をあわせるのはいつ以来か…。急

に呼び出してすまない。」

「いいえ、娘も世話になつていますから礼を言わなければならないのはこちらですよ。…それで、その盆栽は？」

「ああ、一見すると中々見事なものだろう？ 既に根は腐っているがね。」

彼女が指で軽く枝を弾くと、あっという間に精気を抜かれたように枯れていく盆栽…月日が一瞬で経ってしまったような有様だったが鉄幹はこの現象を驚く素振りはない。ただ、白秋が何を伝えようとしているか察しかねるということが彼には問題だった…。

「白秋さん…？」

「時が与えるのは成長だけではない。一見、どんなに取り繕ったとしても、変化を受け入れられなくては歪み、腐り、やがて朽ちる。」

…人の業もまた然り。」